

征海魔王

カンジョー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は十六世紀、室町時代。東北の地に、倭寇と呼ばれる海賊団があった。

海人はその副船長。

生身で鬼の如き力を持つ彼は、やがて神を殺して羅刹へと至る。

目次

第一章 十和田湖の蛇

一話、青の世界 1

二話、父親 5

三話、湊の姫 12

四話、海賊業 21

五話、告白 28

六話、真実 36

七話、滅亡 43

八話、御神体 50

九話、まつろわぬ神 56

十話、出会い 63

十一話、独白 70

十二話、七頭の竜 75

十三話、到着 82

十四話、脆弱 92

十五話、不死 99

十六話、終滅 106

十七話、輪廻転生 114

第二章 大河の女神

十八話、神殺し 119

十九話、波乱 125

二十話、十三湊 134

二十一話、拐引 143

二十二話、恐山 153

二十三話、まつろわぬ水天

二十四話、海の王

第三章 墓場の歌姫

二十五話、餓鬼

二十六話、修行

二十七話、未知の大陸

二十八話、船の墓場

二十九話、まつろわぬセイレーン

三十話、一人

第四章 侵略の海王

三十一話、デルピノス

三十二話、アトランティス

三十三話、まつろわぬポセイドン

三十四話、まつろわぬポセイドン(2)

三十五話、崩壊

三十六話、得失

三十七話、月日は流れて

第五章 神殺しの同胞

三十八話、魔術師の王

三十九話、邂逅

四十話、化物

幕間、魔教教主／洞窟の女王

第六章 帰郷と再会

四十一話、秋田

四十二話、再会

162

173

178

186

191

197

204

212

220

227

234

241

248

256

263

274

280

289

298

307

315

四十三話、一途	323
ぎっくりとした設定	331
第七章 安東と発覚	
四十四話、三竦み	344
四十五話、発覚	352
四十六話、交渉	360
第八章 一面六臂の破壊神	
四十七話、教団	368
四十八話、殺戮	374
四十九話、生と死	379
第九章 同胞と仇敵	
五十話、先触れ	386
五十一話、遊戯	394
五十二話、腹積もり	402
五十三話、待人	409
五十四話、風	416
五十五話、決着	424
五十六話、平穩	434

第一章 十和田湖の蛇 一話、青の世界

青、青、青。視界一面が青。

遙か彼方まで飛んでいけそうな水色と、どこまでも沈んでいけそうな深い蒼。太陽が照りつける水平線を挟んで、雲ひとつない空とコバルトブルーの海が広がっていた。

この光景を眺めているのは、『海人』^{かいと}という少年だ。

巨大な帆船の甲板の上で、手すりに肘をつき、頬杖をついて体をもたれ掛かせて眺めていた。マストが潮風を受けてたなびき、船が進んでも、その景色は一向に変わり映えがしなかったが、海人には飽きが出なかった。

あの水平線の向こう側には、一体どんな世界が広がっているのだろう。未発見の陸に、親交のない民族や美しい建築様式、見たこともない奇妙な生物まで。海人の頭の中では尽きることなく、どんどんイメージが膨らんでいた。

「兄様」

海人の背中に、誰かの影と声がかかる。

首だけ後ろに回して見ると、見慣れた顔が目に入る。背を伸ばして立った海人の、胸あたりに頭が来る小柄な少女だった。少女は、腰に両手を当ててこちらを見つめており、その表情はやや不機嫌そうだった。

「おう、『仁実』^{ひとみ}。何か用か？」

「呑気にしていないで、そのだらしない格好をどうかしてください。私たちは国の正式な交易船の、正式な役人なのですから、それらしい身なりに整えてください」

「いいじゃねえか、いちいち袖を通さなくても。『あの国の人間はそういう文化を持っている』とでも誤解させときゃいい」

「それは妹としても国に住む人としても不本意なのでやめてください」

仁実は何を目を細めて、ますます不機嫌を露にした。

だが海人は気に留めた様子もない。仁実が細かいことで海人を小言を言うのはいつものことだ。

海人は仁実から目を逸らすと、また海を眺めだした。

「まあ落ち着けて。もう少ししたら着替えるさ」

「……まだ海を覗いているつもりですか。飽きませんか？」

「ああ、まったく飽きないな。あの向こうに何かあるのか想像するだけで、ずっと覗いてられる」

「本当に、子供みたいな人ですね」

「はははは！ 十三のお前には言わちやおしまいだな！」

海人は振り返ると、ぐりぐりと仁実の頭を撫で付けた。

「ツ……。……。や、やめてくださいッ！ 子供あつかいしないでくださいッ！」

二秒ほどなすがままだった仁実だが、すぐに海人の手を振り払った。顔が少し赤くなっているが、海人は微笑ましい気持ちで見なかったことにした。

「事実、子供だろうか」

「兄様よりは字も書けるし、頭も良いです！ それともお兄様が私の仕事できるのですか？」

「あたたつ。痛いところを突かれちゃったな」

海人は字を書くことができなかった。生活に必要な字は読むことができるのだが、書くことに関してはゼロとっていいほど能がなかった。

覚える必要のない環境で育ったというのが一番の理由である。平民として育った海人は、読み書きの力よりも労働力のほうが必要だったからだ。

そう、仁実は海人のことを「兄様」と呼んではいるが、実の兄弟ではない。海人は、仁実の父親によって引き取られた養子なのだ。

「でも、だからこそ感謝してんだ。お前がいなかったら『こんなこと』はできなかった。ありがとう、仁実」

そう海人は日頃の感謝を素直に述べると、また仁実の頭に手を乗せ

て撫でた。

さつきとは違いやさしく大切そうに撫でる。仁実は今度は海人の手から逃れずに、目を細めて気持ちよさそうに受け入れていた。

「ん……。で、ですから、子供扱いしないでと……」

「仁実は一人前だ。大人にだってこうやって褒めてほしい時があるんだ。恥ずかしいことじゃないさ」

「本当ですか？」

「おう。褒めなきゃ人間は育たないからな」

ひとまずは納得したのか、仁実はそれ以上何も口にしなかった。

そこで海人はふと気がつく。

「ところで仁実。なんで俺のところに来た？ 何か伝えたいことでもあったか？」

「！ え、えと……。その……」

そこで仁実は何故か口ごもる。

海人に用件があれば、すぐに言葉に出るはずだ。ど忘れしたというよりは、本当のことを言いずらそうであった。

「もしかしたら、ただ俺と喋りに来ただけとか」

「そんなばかな」

「なぜ片言になった」

「……そ、そうでした！ もうすぐ明が見えるはずですよ。そのことを伝えにきました」

「そうでした？」

「……では！」

そう言い残すと、仁実は脱兎の如く海人から逃げていった。

あの様子だと目的地が近いことを伝えに来たのは建前で、本当の目的は俺と話すためだったのだろう。そう察すると、海人は周囲に言い放った。

「てめえら！ コソコソしてる暇があったら、自分達の仕事に集中しろ！ 手が止まってるぞ！」

『へい、若頭！』

途端に周囲から快活な返事があがり、聞き耳を立てていた乗組員た

ちが蜂の巣を叩いたように持ち場に戻っていく。

隠れている者達がいるのは気づいていたが、「全員いるのでは？」と疑うほど出てくる。ここまできるとは思っていなかった海人は面くらい、すばやく洗練された動きだと逆に関心してしまった。

海人と仁実の仲を邪推して聞き耳を立てる。この船ではよくある光景なのだ。

「おっ。着いたな」

船首に立った海人の目の先には、目的地の陸があった。

陸の上に栄える国の名前は、明^{みん}。

十四世紀の後半から十七世紀の前半まで大陸を支配した、中国の王朝である。



時は十六世紀中ごろ。

いまだ足利将軍が世を統べ、だが将軍の権威も明らかに弱体してゆく時代。

応仁の乱鎮まり、しかし幕府崩壊の前触れと、下克上の機運が高まる、不安定な政治体制。

そんな時、大名国が軒並み連なり、にらみを効かせる東北の地を拠点とした、ならず者の集団がいた。

明から『倭寇』と呼ばれる海賊団のひとつが、日の本本土の最北の地にあった。

二話、父親

海人は海賊である。日々の生きる糧を得るために、海人たちは海賊行為を行っている。

だが海賊行為といっても、船を大砲で攻撃しながら、船で体当たりをして相手の船に乗り込んで、乗組員を殺して積荷を奪っていく。今回は、そんな野蛮な略奪を行うわけではない。あくまで今回は、だが。今回海人たちは「正式な貿易船」と偽って港にもぐりこみ、貿易品を騙し取るという、詐欺まがいの行為をするために来たのだ。

そこで普通は当たり前前の疑問が生じるだろう。「不審に思われて、偽装船だと悟られるのではないか」と。

だが海人たちは嗅ぎつかれることなく、とどこおりなく貿易品を受け取り、港を後にした。

どのような方法で明の役人を欺いたのか？

明はその頃「倭寇」による被害が特に大きかった。被害を少しでも減らすため、国は『勘合貿易』を編み出した。勘合貿易が主流だった当時、正式な貿易船だと証明するには、明が発行した『勘合符』が必要だった。

なぜ嘘を見破られなかったのだろうか。

それはこの海賊団の背後に、「国」という巨大な後ろ盾ができたからである。



海人たち海賊団は、現在の秋田県の能代市にある城下町を拠点としている。

港に船を停泊させた海人は、積荷の降ろし作業を下っ端乗組員たちに任せた。自分と仁実は『海賊団の船長』に、無事何事も問題なく帰ってきたことを報告するため、真っ先に宿屋に向かった。

しかし、いつも寝泊りしている宿屋に船長の姿はない。

「親父はどこにいるって？」

「それが……。お父様は今、旧知の友人が会いに来たと言って、飲みに行ってしまったと……」

「あのクソ親父……」

こんな日差しが強い真昼間だというのに、酒か。海人はあきれた。海人も酒はたしなむ程度には飲む。だが父は暇さえあれば酒をまるで水であるかの如く飲み下し、まったく酔わないのだ。

「いつもの店まで客人を連れて行ったようです」

「いつものって、親父が行き着けの酒屋か？ そりや珍しいな」

仁実も驚きを隠せないようだった。

父は誰かと食事をしたり、酒を飲み交わすことは良くある。だが行き着けの酒屋にだけは、人を連れていくことはない。考え事をしながらじつくりと飲みたいらしい。

例外は、海人と仁実だった。つまり今回の客人は、家族と同じくらい親しい友人ということだ。海人たちの父親はどうやって知り合ったかわからない広い交友を持っているが、逆に特に親しくしている者はいなかった。

「まったく、兄様もお父様も、どうして酒なんかを浴びるように飲むのか。私には考えられません！」

「おいおい、俺を引き合いに出すなよ。親父はシヨンベンが酒で出来ているようなザルだぞ」

「汚い例えをしないでください。それに私から見れば兄様もお父様も変わりありません」

「まあ仕方ねえか。猪口一杯で顔赤くして倒れちまう餓鬼のようじゃ、酒の良さはわからねえよな」

「餓鬼扱いしないでください！ お酒ぐらい飲めます！」

そういえば酒類は身長が伸びなくなるらしいなー、とどこか呟くように聞かせると、仁実は目を点にして、うろたえ始める。

そのようにじゃれあいながら歩いていたため、仁実は前方への注意が散漫になってしまった。仁実は家屋の角から出てきた男性に気づかず、ぶつかってしまふ。

「きゃっー」

「おっと」

海人は突き飛ばされた仁実の体を受け止める。

「ほいっと。……すまねえな、妹が不注意で。あんたも大丈夫か？」

「ええ。お嬢さんもお怪我はありませんか？」

「は、はい。ありません」

「それは良かった。今度からはお気をつけて」

体の細い糸目の男性は、そう言うとも二もなく歩き去って、人ごみの中に消えてしまう。

仁実が海人に向き直ると、いちやもんをつけはじめた。

「もう、兄様がお酒を飲むと背が縮むなどと言うから！ ……兄様？」

「……ん？ なんだ？」

「聞いていなかったんですか？」

「ああ、ちと考え事をだな」

「考え事!？」

仁実はずつとんきような声を上げた。

「なんだその意外だ、という反応は。俺だって考え事はするし、お前は俺を一体なんだと思ってる」

「大雑把でほとんど本能だけで生きている人だと」

「そんな印象はきれいさっぱり捨てて、もつと清らかな目で俺を見る。俺は未来を生きる男だ」

「的を射ていると思うんですけどねえ……」

仁実が、海人に疑いの目を向ける。そんな仁実に律儀に突つかかっているうちに、海人は考え事のことさっぱり忘れてしまった。

男性の後ろ姿が、海人と仁実の父親そっくりであることも。



酒屋の暖簾をくぐると、父親はすぐに見つかった。カウンターにうつ伏せで寝ており、台の上には一升瓶が三つも転がっていた。どれも安い酒が五本は買える高級酒だ。

「起きろ親父」

「父様、起きてください」

仁実が体を揺らすと、父親——『重蔵』が顔を上げる。

がっしりとした体躯に鍛え上げられたに筋肉、ぼうぼうに伸びた髭に酒臭いこの男こそ、海人と仁実の父親だった。

「……ああ、海人か」

「帰ってきたつつうのに、なに飲んだ暮れてんだ。客人はどうした？」

そう問いかけると、重蔵は背を伸ばして起き上がり、まぶたをはつきりと見開いた。

するとおもむろに一升瓶を持ち、漆器の盃に日本酒を注ぎ、それを口に近づけ——。

「なにごく自然に飲もうとしてんだ！ 起きた途端に飲もうとしやがって」

「これ以上飲んだら死んじやいますよ！」

「うるせー！ その客のせいで飲まずにやいらねえんだ！ 奴め、昔は進めればちよつとは口つけたんだが、『娘が生まれてから酒はやめた』とか抜かしやがったんだ！ 茶の一杯だけで帰つちまったよ！」

俺の酒が飲めねえってのかー！ と姿のない知人に憤る重蔵と、それをなだめる仁実の構図。

話からすると、客人は既に帰ってしまったらしい。冷静に推測した海人は父の横の席に座ると、目の前で行われる光景に構わず、重蔵に成果を伝えた。

「親父、湊と取引されるはずだった貿易品はすべて騙し取ってきた。連中も最初は船が少ないことに不思議がってたが、勘合符を出したら簡単に嘘に騙された。血も流れねえし弾も飛び交わねえ、退屈な仕事だったぜ」

「……ッはあ。まさか湊の勘合符そのものが盗まれるとは誰も想像してないだろうな。初めての試みだったが、まあ上手くいったよかつた」

「俺からしてみれば、全然良くねえ」

「何が不満だ？」

「お国様の命令に、淡々と従っていることがだよ。何故俺達が内部争いに関わらなきゃならねえんだ。親父はもう縁を切ったんだろう？」
海人は大変不服だと父親に意見した。明に出発する前にも、海人は重蔵にさんざん不満を漏らしていた。重蔵は帰ってきたら聞いてやると、出発前は聞く耳を持たなかったのだ。

海人たち海賊団が拠点とする東北の陸奥国と出羽国の北端——現在の青森県と秋田県——では、『ひやまあんどうけ檜山安東家』と『みなとあんどうけ湊安東家』が争いを繰り返していた。

元は両家とも同じ『安東氏』であり、同様の祖先を持った一族であり、同じ血の通った家族だったはずなのだ。

だがどうい理由か安東氏は内部分裂し、陸奥国の北端に建つ『檜山城』に檜山安東家、出羽国の北端に建つ『湊城』に湊安東家が拠を構えている。

今海人たちがいる城下町は、檜山城を中心として栄えている。法政を布いているのは檜山安東家である。

そんな檜山安東家からの直接の依頼。それが今回の明への船出だったのである。

「手形も渡されて報酬も弾んで、いい取引だったと思う。だが、俺たちは傭兵でもなけりや奴らの手駒でもねえ、海賊だ！」

海人が拳で台を叩く。大きく派手な音が鳴り、店にいた他の客が何だ何だと注目しはじめた。

「役人の奴ら、俺達が金で動くと思って助長してくるぞ。俺達がいない間、奴らはなんて言ってた？」

「今度は直接、湊の船を襲ってくれ、とき」

「やっぱり舐められてやがる！ 城に籠ってのうのうと眺めることしかできない連中の言う事だ。親父、そんな仕事断つちまえ！」

「海人」

重蔵は大きいため息を吐くと、海人に向かって説くように言った。

「この辺りでは十数年前から凶作が続きに続き、野菜や米がまともに食えない。さらにそこに流行り病のせいではあったばつたと死んで、餓死する奴が出てきたから結成されたんだ。商人たちもぱつたりと来

なくなり、活気のなくなった下町に、初代の船長は奪ってきた食糧を民に撒いて回った。いわば義賊だった。感謝された民からは見逃され、今回の依頼を受ければ国からも黙認してもらえるんだ。野郎共の生活を考えたら、この機会を逃すわけがなかった。こうやって」

重蔵は盃を傾ける。器の酒を飲み干すと、満足そうに息を吐いた。「腹いっぱい飯が食えて、酒も飲める。これだけで最高の幸せだ。これだけあれば、俺達は必要ないんだ」

「犬に成り下がろうって言うのか」

「いざとなつたらとんずらすりやいい。というか海人、お前難しい言葉で誤魔化そうとしてるが」

重蔵は一拍おくと、海人の核心を突いた。

「単に暴れたいだけじゃないか」

「ぐっ」

海人がうめく。まるで仁実に字が書けないことを指摘された時のような顔だった。

「凶星か。まあお前に計画とか策略とかいう言葉は似合わないとは思っていたがよ、もうちよつと隠す努力をしろよ。どうせそれも仁実からの受け売りだろ?」

「ぐう」

海人に反論の余地はなかった。まるで心の中が見えているかの如く指摘してくる。

そう、海人は海賊団の未来を憂えているのではなく、ただ単に行動が縛られて、自由に船出ができなくなることを嫌がっていたのだ。

「だが実際にそうだろう。此処いらで親父の名を聞けば、船乗りの誰もが恐れる海賊団だ。それが国に取り込まれちゃったら、海賊じゃねえ!」

「だからそれでいいのさ。近辺に隠してある戦船およそ百隻、水軍と認めてもらおうか」

「ああくそっ! 親父には断る気もねえし、俺が口で勝てねえのもよくわかったよ!」

海人は跳ねるように立ち上がると、邪魔したなツ! と捨て台詞を

吐いて暖簾をくぐった。

重蔵は出直してこーいと饒舌な口で海人を挑発した。そこで今まで重蔵の体に隠れておとなしくしていた仁実が、声を上げた。

「兄様、どちらにー」

日課だ、と最後に言い残すと、海人は酒屋から出て行つた。

重蔵はまた酒に手を出し始めた。仁実は止めようとはしない。酒の飲みすぎが体に悪いと知ったずいぶん前から、説得は諦めているのだ。

それよりも、仁実は海人が居ては聞けなかつた疑問を、父親に尋ねた。

「どうして本当のことを言わないのですか？　いくら兄様が後先考えないで突つ走る性格だったとしても、隠すべきことは隠せる人だと、私は信じています」

「まあ俺も、猪突猛進で二つの事を同時に処理できない鈍い頭だつてのはわかつてる。だがあいつは多分逃げる。海人は鎖に束縛されることを何よりも嫌うからな。それまでしつかりと罫を張っておくさ」

「……私はまだ納得していませんからね、その話」

「はっはっは。あちらを立てればこちらが立たずか。……安心しろ、二度と家族が離れることはない。絶対にだ」

「それは、つい先ほどまでいたお客様も含まれるのですか？」

重蔵は一瞬だけ驚くが、すぐ元に戻ると滑らかに口にした。

「奴は遠くに行くらしい。俺が手を伸ばしても届かないような遙か彼方にだ。……兄弟みたいな奴だったよ」

そうしみじみと語る重蔵の顔は、仁実からしてとても、苦々しい表情に見えた。

三話、湊の姫

この辺り、檜山城の城下町周辺の平野には、作物がまったく育たなかった。

それも一時的な凶作ということではない。何十年、何世代も前から、養分の乏しい不毛の土地であった。じゃがいもやネギ等、他の土地であつたら放置しても植えた本人が困るほど育つ野菜であつても、受け付けることはなかった。じゃがいもはか細く実り、ネギは折れそうに弱々しく直立する。

だが町を囲んでそびえる山林には、春には花を咲かせ、夏には葉を青々と茂らせ、秋には真っ赤な紅葉と、野菜に行くはずの養分を奪われているのではないかと考えてしまうほど、樹木がその成長振りを見せ付けていた。

植物が育たない荒れ果てた荒野ではないのだ。だが野菜だけは育たない。そのため食卓に上がるのは、海で獲れた魚か海藻類がほとんどで、野菜は保存の効く干物か漬物でしか出会えなかった。民は海の幸に感謝して、日々を食いつないでいたのだ。

そんな人々に追い討ちをかけるように五年前、この町では風土病が蔓延する。

病にかかった者は三日ともたずに死に至る、恐ろしい病だった。それが町中全土に広がって、民衆はパニックに陥ったのだ。

すぐに感染源が特定された。しかし瞬く間に民衆に広がった感染源は、なんと魚。栄養源の魚類が、病原菌を持っていてというのだ。混乱はさらに加速し、呪いだ何だと狂って叫ぶ者もいれば、檜山を捨てて北の湊に逃げる者も少なくはなかった。

お国の対応も悪かった。この未曾有の疫災において、何も政策を立てなかったのである。

ただ一言だけ、『国の金庫にそのような余裕はない』と発表した。

それを受けた人々の感情は、怒りを抱くより先に、失望と落胆を覚えたのだ。

金銭の余裕がないという布告を、民衆は事実であることを知ってい

た。なぜなら風土病が流行りはじめるつい直前に、お国は湊へと大規模な侵略攻撃を行ったからだ。

しかし侵攻部隊は国の境を踏む前に、山岳を進行途中で何故か壊滅。何の成果も持ち帰らずに逃げてきており、まさに無駄骨であった。

数千分人の食料が水の泡となったのだ。その食料で何百人の命が救えたのか、民衆たちに国の役人たちへの強い失望を抱かせた。それでも町に留まる人々がいたのは、小さくない愛着を持っていたか、まだここにいたほうが安心だ、と国の軍事力を信じていたからだろう。

そんな風土病に感染して命を落とした平民の中には、海人の血のつながった両親も含まれていた。

十五歳で天涯孤独の身となった海人だが、重蔵に拾われたことで命をつないだのである。



そんなあまりにも突然に親をなくした海人だが、思い出のほかにも、父親から託されたものがあった。

町のはずれの、人通りの多い街道や他所から町に入るための山道からも外れた、林の中。

細い獣道を抜けると、開けた場所がある。そこには祠が淋しげにひとつだけ建っていた。

「……お？」

祠といっても、小さくはなく、むしろ大きくて立派だった。屋根は海人の身長のご二倍程はあり、瓦で覆われていた。縁の下もあり、頑丈で雨宿りもできるつくりであった。

海人がそんな祠を視界に入れて、不思議そうに声をこぼした。祠の柱にもたれかかって、肩を上下させて、すーすーと小さく寝息を立てる少女がいたからだ。

海人は少女の前に立ち、上から覗き込んだ。

何度見ても、整った美しい顔だ。

そう海人は思った。年は海人と同じ十九、肩まで伸びた長髪に、その寝姿からはお淑やかな大和撫子を思わせた。

海人は、その少女を知っていた。海人は少女の肩に手をかけると、揺らして声を張り上げた。

「起きろ、愛代」

「……ん。……海人……？」

「おう、海人様だぞ。このねぼすけめ」

少女は目元をこすると、んーと伸びをして目を覚ました。まだ寝ぼけているようで、どこか上の空だ。

彼女の姓は安東、名は愛代。安東の姓が示すとおり、彼女は安東一族であり、檜山の対立相手——湊のお姫様だった。

「ずっと此処にいたのか？ ……たしかに、昼寝には丁度いい日差しではあるな」

「……そうでしょ」

「だが、ここ」

海人は自分の口元を指した。

「よだれの跡がついてるぞ」

「——！」

愛代は驚いてぱつちりと目を覚ますと、恥ずかしそうに口元を服の裾で拭った。

「こんなところで眠りこけて、一国の姫がはしたない」

「……ここにいと、不思議と気が緩んじやうのよ」

「なら、また掃除を手伝ってくれ。埃を落とせば、気持ちがいい。此処に来たのも、どうせまた何時もの勧誘だろう？」

羞恥で赤くなる愛代に気づかないふりをして、海人は続けた。

寝るにしても喋るにしても、何日も放置しておいたから、蜘蛛の巣や埃が溜まってる場所だ。何かをするには汚かった。

「手伝ってくれたなら、耳を傾けてやらんでもないぞ」

「……分かったわ、手伝ってあげる」

お前は蜘蛛の巣を払ってくれ、と持って来たはたきを差し出す海

人。

愛代は渡されたはたきを興味深そうに観察する。

「……掃除できないとか言わないよな」

「そ、そんなわけないじゃない」

「昔、雑巾がけの仕方を教えてもらったのは、どこの誰だったかなあ？」

「う……」

愛代は言葉に詰まり、今にも泣き出しそうに顔を歪ませた。

さすがにいじり過ぎたかと、海人は素直に教えることにした。

「……まあいいさ。教えてやるからついて来い」

「あ、ありがとう」

海人は片手をあげて返答し、二人は無言で裏手に回った。



この祠、謎が多い。海人が知らないことだらけだった。

こうして清掃を日頃のように行っているが、この祠も土地も海人のものではなかった。

海人の財産であれば食うのに困って、とつくに売りに出しているところだ。

それはともかく、この祠には謎が多い。見るからに立派に立てられており、風雨も凌げるので、そこらの家屋よりも堅牢に建てられているかもしれない。

だが何時建てられたかも、これだけ立派に建てられておいて参拝客が一切合切皆無なのかも、どんな神様が祭られているのかも承知していなかった。

『ここで神様に祈りながら鍛錬を積めば、きつとご利益がある』

とは言っても、手がかりがないわけではない。幼少の頃、実父にここに連れてこられて、そう言われたのを海人は覚えている。

父の言葉から推測されるのは、ここに祭られている神様は、武に縁のある神様だということ。推測を裏付ける証拠として、屋内の神棚に

置かれているご神体は『脇差』であった。

……と、なんやかんやと言葉を並べてはいるが、謎が多いことに変わりはない。

いかにせん情報が少なすぎて、推理する以前の問題である。

書物でも残っていればいいのだが、そう都合よく残っているはずもなく。それに残っていたとしても、海人本人に問題があった。

そう、海人は生活に支障がない程度の字が読めるだけで、小難しい歴史書を読み解いて回答を導く教養を持っていないのである。

このような理由で、海人は誰に依頼するでもなく、早々に解明することを諦めていた。

「おーい、終わったかー」

「ちよつと、まって、いま、いい、ところッ！」

自分の分量の仕事を終わらせた海人は、愛代の様子を確認しに来た。

愛代は掃除に熱中していた。ぴんと爪先立ちになり、高い位置にある蜘蛛の巣に向けて懸命にはたきを伸ばしていた。愛代は頭が悪いわけではなく、飲み込みが早い。要領を掴めば、海人より素早く仕事を片付けてしまう。

「お前の身長じゃ届かねえよ。台持ってきて使え、台」

「台なんか、なくても、できるッ」

ただし頭が固く、非常に頑固なところがあつた。一度自分でやると決めたことは、意地でもやり通すところなど。

海人は肩をすくめると、表に戻って、愛代が終えるまで日課を行うことにした。

日課とは、槍の鍛錬だ。幼少の頃から、海人はこの場所で実父から指導されてきた。形に残る物はすべて食いつなぐために売り払ってしまったので、この日課は、父の肩身であり、父がいた証でもあるのだ。

海人は穂先の刃の部分にかぶせてある布を取って、槍の鍛錬を始めた。

突いて、引く。

槍を構えてから、この単純作業を何千、何万回と繰り返し、意識しなくてもできるまで行う。無意識にできるようになるまで行う、それが今は亡き父からの課題だ。

血と汗がにじみても、気の遠くなるような時間の中、海人はこの行為を何年間も繰り返してきた。

父のことを忘れないためだけに、一心不乱に続けてきた鍛錬であった。だがこの努力も実り、海賊行為の際には真っ先に飛び出して、槍を手足の様に扱って敵をなぎ倒していた。

想像の相手に五百回目の突きを繰り返したところで海人は、先ほど居眠りをしていた場所に座り、じっと眺めてくる愛代に気がついた。「おっと。もう終わったのか」

「とつくにね。声かけても気づかなかったんだもん」

「そりゃ悪いことをしたな。待たせてすまん」

「別にいいよ。見ていて退屈しなかったから。海人はなんと言うか、うまくて完成している、とでも言えればいいかな」

「はっはっは。世辞を言っても出るもんはねえぞ。何も持ってきてないしな」

「じゃあ私が出しちゃおう。……はい、お饅頭。おしぼりも持ってきたから、手を拭いて食べてね」

愛代がふろしきを開くと、重箱に詰められた饅頭が姿を見せる。

「おっ、うまそうだな。……だが、足りないものがあるんじゃないかな？」

「それは一体？」

「お茶がない」

「あー。ごめんね。次は持ってくるよ」

「おう、頼んだぞ。……疑問に思ったのだが、ちと準備が良すぎるんじゃないか？ しばらくいいないとは言ったが、今日帰ってくるとは言っていないぞ」

「あなたのお仲間達に聞いたのよ。快く教えてくれたわよ」

「いつのまに仲良くなったんだ。一応、檜山と湊は憎み争う敵同士なんだがな」

海人は饅頭を挟んで愛代の隣に腰掛けた。

ここ檜山と湊はここ数十年家督争いが続いている。

現在は五年前の大戦から、小康状態が続いている。大きな衝突は起きていない。

「いいのいいの。近いうちに湊と檜山は仲直りして、手を取り合って進むんだから」

「そうならばいいがな」

「そうなるように、私は頑張ってるんじゃない」

やる気に燃えている愛代を傍目に、海人はおしぼりで汗で汚れた手を拭いて、饅頭に手を伸ばした。

愛代は、湊のお姫様だ。

彼女の出生は特別で、母親は湊系の人間だったらしいが、父親は昔出家した檜山系の人間だと言う。

政略結婚として娘を敵対勢力の大家に嫁がせることはあるが、檜山の人間はそのことを誰も知らないらしい。なので政治的に重要な位置にいるようだが。

海人はそう聞いていた。

「だけど私の力だけじゃ駄目みたい。……私の夢のために、力を貸してくれない、海人？」

愛代は首をかしげて、そう潤んだ瞳で海人を見つめてくる。愛代は故意にやっているわけではないだろうが、かなりあざとかった。

はじまったな。いつもの勧誘だ。

そのしぐさはなかなか可愛らしかったが、海人はその無意識の誘惑に慣れきっていた。

彼女は、湊で愛情をもって育てられたのだろう。その些細な仕草からは育ちの良さが窺え、どこか気品があった。性格は天真爛漫、その場を暖かく照らすような明るい気性であった。

愛代はその特別な生まれから、同じ血を引くもの同士、仲良くできないはずがないと考えているのだ。

父親と母親が愛し合うことができたのだから、みんなだつてできる。そう信じて疑わず、彼女は檜山と湊の仲を取り持とうとしてい

る。

ここ檜山には湊側の使者として何度も来ており、両安東家を行ったり来たり、日夜奔走している。

だがいつも門前払い。湊の使者だと面会を許されても、愛代を子供だと思つて軽く見て、真摯に受け取つてはもらえないと、ここで愚痴を溢すのだ。

海人をこうして誘つてくるのも、父親——重蔵が元安東姓だから、少しでも力を貸してくれればという、安易で具体性のない思考から来ているのだろう。

「そうだな。考えておくよ」

「なにその冷めた態度。そう言つていつも考えてくれないじゃない」

愛代は拗ねてそっぽを向いてしまふ。

「そうは言うがな。俺は槍を振り回すぐらいしか出来ないし、親父はもう安東じゃない。もう関係ないから巻き込まなくて話だ」

「いいじゃない。同じ檜山から抜けた者同士で手を組んだつて」

「親父も檜山に恨みを抱いちゃいならしいぞ。これ以上交渉しても無駄だ無駄。俺は協力しないぞ」

「むー」

そして海人とは反対方向を向くと、完全に押し黙つてしまふ。

こうなるともう、時間が解決してくれるしかない。海人は饅頭の最後の欠片を飲み込むと、槍の鍛錬の続きをするために立ち上がった。

その時、突然海人は服の端を引っ張られた。

立ち上がる直前だった海人はバランスを崩してしまい、背中から倒れこむ。海人は文句を言おうとするが、引っ込む。服を引っ張つた愛代が、倒れた海人の上に乗るかかかってきたのだ。

「海人……」

愛代の服がはだけて、染みひとつない綺麗な肩口が露になる。胸が大きく鳴り、海人の目が釘付けになる。

「あなたが協力してくれて、湊と檜山が仲直りしたら……私、どんなことでもしてあげる……」

「お、おい……」

とろけたような声を出しながら、愛代は海人の体をよじ登る。態度が豹変した愛代に驚いて、海人は動揺して動けなかった。

「ね、おねがい……。私にできることなら……。なんでも……」

仰向けで倒れた海人の顔の横に、愛代は手をつく。至近距離で、海人と愛代は見つめあう。

体の虚弱な愛代を無理やりどかすわけにもいかない海人は、なんとか冷静に心を落ち着かせながら、愛代のアクションを待つのだが……。

愛代は海人を見つめたまま、固まってしまった。

「……まさかお前、次何をすればいいか知らないってことは……」

愛代から反応はなかった。かわりに海人は、彼女の頬を伝う冷や汗を幻視した。

海人の心がすつと冷える。

「生娘が粹がるんじゃねえよ！　まったく動揺させやがって……」

「だ、だってこうすれば男はみんな言いなりだって本に……。あ、あれ？　今なんて……」

「生娘が粹がるな。その貧弱な体力と軽い頭をどうにかしろ。と言った」

「そんなこと言っていない！　しかも酷い！　私だって体力は、ま、まあ海人には負けるけど……。だけど頭は海人なんかには引けをとらないよ！　海人なんかには！」

「なんかとはなんだ、馬鹿にしてんのか！　何度も言うが俺は頭は悪くねえ！」

「何度も……？　みんなから言われてるんじやない！　事実なのよ、私以外からも言われるぐらいに！　バーカバーカ！」

「この貧弱！」

「馬鹿！」

「貧弱！」

この後ずっと、子供のような罵り合いが続いて、喧嘩別れになる。だがまた数日が過ぎて、愛代がまた檜山を訪れば、何事もなかったかのように落ち合い、他愛もない話に興じるのだった。

四話、海賊業

「ひ……ひいいいいー！」

甲板に赤い飛沫が上がり、頭部を無くした人であったものが崩れ落ちる。

つい今しがたまで言葉を交わしていた同僚が突然この世の者ではなくなり、恐怖で腰が砕けた兵士が悲鳴を上げる。

そんな弱者には目もくれず、槍を伝う血を振り払った海人は、武器を構えて取り囲む兵士達に向かつて、声を張り上げた。

「俺こそが重蔵海賊団副船長、海人だ！ 俺の首を獲りたい、蛮勇のある奴からかかって来い！」

海人が敵船に乗り込んでからの、第一声がそれだった。

重蔵率いる海賊団は今、貿易船に襲撃をかけていた。

湊の領土は、海を挟んでアイヌ——北海道に接しており、明など海外の国との貿易が盛んであった。

その中でも『十三湊』しゅうさんみなとという港町は、ひとつに纏まっていた時の安東家の本拠地であり、現在の湊の拠点である湊城の城下町でもある。湊は檜山とは違い、周辺諸国に表面上は友好的であった。民からの税金で軍備を強化し、他国を牽制する檜山とは少し違っていた。

十三湊は海外の国との重要な貿易拠点であり、通行税を支払わせることで、諸国に港を開放していた。貿易と税金で得た莫大な資金のもと、十三湊は大きな発展をとげていた。

今現在、海人たちはアイヌへの貿易品を届ける、湊の船を襲撃していた。

檜山からの情報の機密漏えいがあったおかげで、船の針路から運搬する時間帯まですべてが重蔵たちに露見していたのだ。

そうとは知らない湊の貿易船は、予定どおりの進路を航行。待ち伏せしていた海人たち海賊団に、完全に嵌められていた。

「何をしている。相手は若造ひとり、さっさと始末してしまえー！」

「し、しかし、奴はあの海賊団の副船長と」

「この人数差で、何を恐れることがあるか！」

その言葉に背中を押されて、鬨の声を上げながら、兵士たちが一斉に海人へとなだれ込む。

しかしその数の暴力を前にしても、海人は槍を泰然と構えていた。「せえやッ！」

刀の間合いに入る前に、海人は兵士の腹に槍を突き刺した。その兵士は痛みで得物を取り落とす。

兵士の腹から槍を引きぬくと、海人はその兵士を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた兵士は後続の兵士を巻き込み、重なり合って倒れた。

「死ねえッ！」

その間に、海人の背後には兵士が接近していた。振り下ろされた刀を、海人は後ろに目がついているように危なげなく避け、そのまま槍の柄で相手の胴を殴りつけた。

声にならない叫び声を上げながら兵士は吹き飛び、壁にぶつかって止まった。

大の大人を吹き飛ばすほどの怪力。それが線の細い小柄な青年から発揮されたことに、兵士たちに動揺が走る。

兵士たちの足が遅くなっても、海人の猛攻が途切れることはなかった。

海人は槍を突き、時には刃で切りつけて牽制し、柄の部分で打ちつけたり、果てには握った拳で殴りつけた。突きの挙動は洗礼されているのだが、それ以外は豪快で荒々しく、力まかせに戦場を立ち回る。まるでルール無用の喧嘩をしているようであった。

「くそッ！ 何故あのような粗雑な戦い方をする奴に、誰も致命傷ひとつ付けられないのだ！」

湊側の指揮官が悪態をつく。海人は腕や足にかすり傷がついて血で汚れているものの、動きに支障が出る傷は全く負っていないかった。彼は先天的な勘で、四方八方からの攻撃を紙一重でかわしていた。

「……………ふふふふ」

死んだことすら自覚しないまま、海人に顔面を突き上げられ、兵士の一人が倒れる。

ついに海人たった一人で、船の戦闘兵半数が、殺されるか気絶させ

られるかで戦闘続行不能にさせられてしまう。

海人は輪になって倒れ伏す兵士たちの中心で、狂ったように嘲笑した。

「遅い、軽い、ぬるい！ どうした、その程度か。ぬるすぎて疼きが収まらねえぞ。どいつか俺を殺そうって奴はいねえのか！」

目を血走らせる海人に怯み、じりじりと周囲を取り囲みながら慎重になる兵士達。それに混じって、なにやら長い鉄の筒を海人に向ける者がいた。

パアンと鋭い火薬の爆発音が響く。

海人が顔を大きく反らした。兵士たちに突撃を命じた指揮官が、火縄銃を発射した音だった。海人が激しく反らしたことで命中を確信したその指揮官だったが、次の瞬間には表情を驚愕に塗りつぶされた。

「……なんだ、面白えもん持ってるじゃねえか」

指揮官の顔がさーつと青ざめる。

「きつ、貴様！ まさか、鉄砲を避けた、いや、そんなはずはない！ どうして鉛弾を受けて平然としていられるんだ！」

「今の飛んできたやつか？ だったら当たってないぞ」

「そつ、そんな馬鹿なことがあるか！」

「あー、うつせうつせ。そんなに信じられないなら、もつと近くによれ。そんな遠くじゃ、傷口も見れねえだろうが。まあ——」

海人が軽く足を一步、前に踏み出す。その瞬間、海人から押しつぶされそうな重厚なプレッシャーが吹き上がる。指揮官は本能で、言葉に出来ない底知れぬ恐怖を覚えて、火縄銃を落としてしまう。

「確認する前に、お前の頭が潰れてなけりやの話だけどなッ！ 覚悟しろ、ここからは全力で蹂躪させてもらおう！」

その時、海人の威圧に？ まれた兵士の一人が、震え声で小さくつぶやいた。

「やはり、あの俗言は法螺ではなかった……。重蔵率いる海賊団の副船長は、血に飢えた鬼の子だと……！」

その場にいたすべての者が海人に、顎を開く獣の姿を幻視した。

◆

仁実と重蔵が迎えに来ると、海人が乗り込んだ護衛船の中は惨憺たる光景であった。

二人もただ突っ立っていたわけではない。いくつもある海賊団が強奪、もとい所有している船を統率して、他の湊の護衛船を無力化していたのだ。

仁実と重蔵は数人の構成員を連れて押し入ると、血と死体が散らばる地獄絵図の中、ひとつの死体を椅子にして腰掛ける海人を見つけた。その手には火縄銃があった。

火縄銃を全方位からじつくりと吟味していた海人に、仁実は話し掛けた。

「兄様、気は済みましたか？」

「おう、仁実か。こんなところに来るもんじゃねえ。お前には刺激が強すぎる」

海人は返答するが、視線は火縄銃からはずさなかつた。海人の興味は手に持つ火縄銃に集中していた。

「血を見ることぐらい、すでに慣れました。それよりどうです、これだけ暴れて気は晴れましたか？ と聞いています」

それを聞いた海人はぎろりと仁実を睨むと、だんと音をたてて勢いよく立ち上がった。

「ぜんつつつぜん足らん！ なんだこいつ等は。本当に湊の水軍か？ ひとりひとりが弱つちいが、特に指揮官がひどかった。こいつ、突撃しろと命じるだけ命じて、形勢が悪くなったら部下を置いて一人海に逃げようとしやがった。無能はこの船だけか!？」

海人は鋭い剣幕で勢いよくまくし立てた。仁実と重蔵はやっぱりか、と諦めたように諦観した様子で、冷静に答えを返した。

海人の戦狂いは今に始まったことではない。海人は焦りはないようだが、命のかけひきがあるごとに何かと戦果を上げようとするのだ。

「この船だけみたいです。不利と見るや小船で撤退、もしくは即時降伏。戦況を客観的に見て取れ、武勲よりも人命をとる、優秀な指揮官だけですよ」

「まさか襲撃されるとは思わなかっただろうし、偉いところのおぼっちゃんでも乗っていたんじゃないか。血生臭い戦を知らない、温室育ちの甘ったれがよ。残念だったな、海人」

「くそつ、外れかよ。……過ぎちまったもんは仕方ねえ。親父、その無能な指揮官が面白いもん持ってたぜ」

海人は悪態をつくくと、持っていた火縄銃を重蔵に投げ渡した。重蔵はそれをキャッチすると、回したりして注意深く観察した。

「それで小石みてえな小さな鉄塊を飛ばしてきやがった。鉄筒が精巧に作られている。売れば相当な値打ち物になりそうだけ」

海人は物を見る目があつた。美しい芸術品から緻密に作られた工芸品まで、海賊業で高価な物と触れる機会が多いため、目が肥えていた。略奪してもすべては持っていけないため、海賊には必須のスキルだった。

「ああ……。他の船でも持つてる兵を見かけた。捕虜から聞き出したら、『銃』という飛び道具らしい。船から射られて、仲間が何人かやられた」

「そうか。特注品じゃねえか。なら、湊にはこんなすげえ物を作れる鍛冶師がいるってのかわ？」

「それは違う。この銃は、外国から貿易で大量に揃えたらしい。今は本隊に配備されていると聞き出した」

「本隊？」

仁実と重蔵はお互いに顔を見合わせると、今度は口に出して言った。

「やっぱり、気づいていなかった、と。」

「なんだ二人して、まるで俺の思っていることなぞ簡単に予想できるかのような口ぶりだ」

「兄様は少し察してください。なんと言うか、兄様は表面しか見えない気がします。槍を持つとさらに周りが見えなくなっています。」

どうしてその様なことに発展したのか、相手の思惑を察して、裏のとまで考えて」

「あー！ やめろ、面倒くさい。仁実、結論を言え結論を」
「つまりだな……」

説教が始まりそうになる仁実をさえぎり、海人は本題をせかした。話を重蔵が引き継ぎ、なにやら神妙な口調で海人に問いかけた。

「船と兵の数が少ないことに気づかなかったのか？ と仁実は言っているんだ。どうせお前、暴れるだけ暴れて、数なんてまったく頭になかっただろ」

「ぐ……。そ、それが何だってんだよ」

「戦力を出し渋っている。こんな重要な任務に出し渋るなど、湊は相当に兵を失いたくはないと見える」

重蔵はちらりと見やると、訳のわからないと言った海人に向けて、自分の推測を告げた。

「おそらく、大規模な戦を仕掛けてくる。それも五年前に檜山が仕掛けたような、大戦だ」

「檜山側も動いていたのなら、父様の仮説も濃厚になります。急いで檜山に戻りましょう」

「お、おう」

重蔵は、先に船内に価値のあるものがないか探させていた手下達に、呼びかけた。

「お前等！ 船内に人も金になりそうな物も、何もなかったか!？」

『すつからかんでしたぜ、船長!』

「ならさつさと撤収だ！ 船は燃やせ！ 早く逃げねえと、焼け死んでも知らねえぞ!」

『応！ 火をつけろ！ さつさと逃げろ!』

気合の入った号令がいきわたり、息のあった行動で、海賊団は素早く撤収していった。



檜山へと戻った海人たち海賊団一向。船を部下達に任せて、先に町に入った安東家の三人を迎えたのは、何かに群がる人ばかりであった。

「あんた、ちよつといいか？」

「おや、これはこれは、重蔵様」

重蔵が近くに居た名も知らぬ庶民に声をかける。相手は重蔵を見ると、敬語で返答した。

重蔵が海賊を名乗っていることは民衆にも周知されていた。海賊であつてもしかし、重蔵は排斥はされず、むしろ民衆には歓迎されていた。

「これはいったい何目当てで群がっているんだ？」

「実は、上の役人様が立て札を立てていきまして。重要なことだからと、必ず目を通すようにと沙汰が下されたのです」

海人はそれを聞くと、背中から聞こえる仁実の精子も聞かずに、群衆の波にと突っ込んでいった。

人の波を掻き分けて、群衆の最前列に出る。

息を整えるのもほどほどに、立て札を見た。

『徴兵』

その二文字が、立て札の左上に、赤字でデカデカと書かれていた。

五話、告白

檜山は、民衆に重い税を課している。その税が軍備の強化に当てられていることは、税を渡している民達も知るところであった。

檜山安東家の強大な軍事力は、民衆が汗水垂らして働いた血税の上にてできている。庶民は重い税を払うかわりに、安全な生活を保障されているのだ。絶対はない。だが政治に関わりのない一般人は、檜山のおかげで戦火に巻き込まれることを気にせず、日々を暮らせているのだ。

そのことは、国境が接する他国からも知られている。国境付近で小さな小競り合いはまれにあるものの、本格的な侵攻はなかった。檜山と湊の関係が劣悪なのは周知の事実であり、湊との争いにかまけて、檜山側から攻撃してくることはないと確信しているからだ。

一番の根拠としては、軍事的に見ても特に重要な場所ではないことと、作物が育たない土地であることだ。檜山の周囲は高い山で囲われており、天然の要塞だ。そこを突破して侵略したとしても、報酬が苦勞に見合わなければ、だれも手を出すことはなかった。

このような理由により、檜山は背後を気にすることなく、湊との戦いに専念できる。それに檜山の城下町は、他と比べて割かし治安が良かった。衛兵の熟練度がよく、暴漢や盗人をひつとらえてくれるからだ。

そんな檜山が、兵を徴収しようとしている。

強制ではない。だが無視できない、由々しき事態である。

五年前の大戦の前と比べても、檜山の軍隊は引けをとらないほど立て直している。兵農分離も行われて、さらに大して訓練もされている農民まで駆り出そうというのだ。



次の戦は、総力戦となる。

五年前の大戦とは比べ物にならないほど大規模な決戦。檜山は湊

と長い争乱に終止符を打つつもりなのだろう、と重蔵は推測を述べた。彼もこのおふれ書きには驚きを隠せないようで、寝耳に水だったのであろう。

育て親からそんな概要を聞いた海人は、仁実の制止を無視して、あの小さな祠に向かった。

愛代なら、湊のお姫様である愛代なら、今起こっていることを詳しく知っていると買ったからだ。



「愛代ー」

しかし、海人が祠に到着したときには、愛代の姿は見えなかった。当然だ。海人は愛代と今日この時間に、ここで会う約束などしていなかった。会えるはずがなかった。

そういえば、愛代に自分から会いに行くなんてことは今までになかった。あいつが勝手に来て、知らず知らずに話すようになって。

海人は今更そのことに気づき、彼女のいない祠がひどく静かに感じられた。意識し始めると、気になって仕方がなかった。

自分が焦っても、愛代とは話せない。槍でも振ってしよう。

逸る気持ちを抑えて、海人はここまで走ってきて上がっていた息を整えた。そして心を落ち着かせるため、いつもの日課をはじめた。

槍を抜く。こんなときでも、海人は自分の得物を手放さなかった。

ただただ無心に、突く、引くの繰り返し。それでも海人の頭は冷静にはなつたが、愛代のこととは頭から抜けることはなかった。

海人から見て、愛代はどこまでも純粹で、そして何より感情に鈍感だった。個人の気持ちなど考えたことなどないのだろう。彼女は何度も愚痴で、海人にこぼしていた。

どうしてこんな無益な争いを続けているのだろう、と。

海人はその言葉が、愛代の心の底からの本音だと理解してしまった。そう言ったときの彼女のきよとした顔は、とても嘘を言っているように思えなかった。

愛代は、悪意という概念を全く理解していないのだ。だから戦争が起きるのが不思議でならないし、同じ一族だからなおさらだ。

海人の中では、国の役人は金に汚いイメージがあった。金や名誉のためなら汚いことを平気でする、そんな先入観が。そんな大人たちに愛代が説得しても、大人たちからは綺麗ごとには聞こえるので、耳を傾けてくれない。だから海人は、愛代の仲介は成功しないのだと思っていた。

愛代との仲は親密だ。下世話な冗談も交わせるほどに。

いつでも、そんなことじゃ成功しない、と教えることはできた。海人はそれをしなかった。しなかった訳は――。

「海人？」

「うおッ！」

「うわッ！」

そこまで考えたところで海人は、自分の顔を間近で覗き込んでくる愛代に驚いた。上の空だった海人は、近すぎる顔と顔の距離に、一歩後ずさつてしまう。

対する愛代も海人のリアクションに驚いて、短い叫び声を上げた。

「びっくりしたな。いきなり現れるんじゃないやねえよ」

「こ、こつちこそ、驚かせないですよ。……いつもは槍を振ってばかりの海人が、どこかを見て呆けているから、何事かと思って」

「ん？ ……あ、ああ。そうだったのか。悪かったな、心配かけて。考えごとをしててな」

海人は、槍を振るう鍛錬を止めていることに、愛代に指摘されてようやく気づいた。

「……ふーん。やっぱり何処か悪いんじゃないの？ 海人が考え事するなんてさ」

「だからお前は俺のことを」

「それに！ 槍を振る手を止めるなんて、海人らしくないよ。どうしちゃったの？」

海人は言葉に詰まった。それについては海人自身も驚いていた。こんなことは、槍の鍛錬を始めてから一度もなかったことだった。

どうして手が止まった？ 海人は考える。そう、こうなったのはつい先ほどから――。

「……愛代のことを考えていたから？」
「ッ!？」

海人は思わず考えていることを漏らしてしまい、それを聞いた愛代はびつくりして赤くなった。

「なっ、どっ、どういうこと、それ!？」

「あー、口に出てたか？ お前に聞きたいことがあつたんだよ」
「……聞きたいこと？」

声のトーンを落として、とても残念そうな様子を見せる愛代に、海人は構わず尋ねた。

「今起こっている、兵の徴兵についてだ。檜山と湊が同時に軍備を整えている。両者は一世一代の決戦に挑むかもしれないと、親父が言っていた」

それを聞いた愛代の反応は、驚愕。それも特大の、頭を強く打たれたように、ポカンと口を開けて驚きを露にした。一瞬、我に返った愛代は、それでも動揺を隠せずに、海人に詰め寄った。

「海人のお父様ってことは、安東家の人だったんでしょ？ 聞いてないの？」

「だから……。昔から何度も言っているだろう。親父は檜山から抜けた、関係はないから今の檜山の現状を何も知らないってな」

「そんな……。じゃあ、本当に何も知らないの？ 山の神様のことも!？」

「神様？ なんの話だ」

愛代は腕を組み、ブツブツと独り言をつぶやく。「まつろわぬ神」「征伐」などの言葉が途切れ途切れで聞き取れたが、それだけでは海人には推測がつかなかった。

やがて納得したように頷いた愛代に、海人はイライラしながら問いかけた。

「おい。いい加減、どうなっているか説明してくれ」
「……やだ」

「は!？」

「話せない理由ができました」

「ひとりで納得してないで、俺にも教えろ」

「だめでーす。国家機密でーす」

「てめえ。……さつきまで、俺が知っていても問題ない口ぶりだっただろう。何故駄目になった」

かたくなに口を割ろうとしない愛代に対して、海人は切り口を変えて問いたです。

愛代は仲間であつた者がそうではなかった、そんな複雑な心境を表すさびしげな表情をしていた。

「湊と檜山、ふたつの安東家の問題だから。知らなければ、あなたに火種が飛ぶこともないでしょうし。……それにしても、本当に檜山安東家とは関係なかったみたいね」

「当たり前だ。俺は嘘を言った覚えはない、ずっと本当のことを言い続けていたぞ」

「ふふ、そうね。海人は嘘をつけないもんね」

「おい、誰が単純馬鹿だつて?」

「そんなこと言つてない」

そうして、どちらから先でもなく海人と愛代は笑い始める。

ふと、愛代が空を見上げると、彼女は何かを思い出したように顔色をはっと変えた。海人もつられて上を向く。海人が鍛錬を始めた時は東にあつた太陽が、ほぼ真上に昇っていた。ずいぶんと時間が経っていた。

「そうだ。私、駕籠を待たせているんだつた」

愛代は、人を待たせていることを思い出したようだ。海人が時間を忘れて鍛錬に集中することはよくあるが、愛代がそうなるのは珍しかった。海人は手を払って、どうでもよさげに突き放した。

「そうか……。なら、俺となんか話してないで、さつきと用事を済ませてください」

「何言っているの。海人が、私の用事なんだよ」

「は?」

まだ理解が追いつかない海人に、愛代は同じ言葉を繰り返す。

「海人が、私の用事なの。海人がそう言うなら、さっさと用事を済ませちやうね。時間も無いし。……私、しばらくここに来れなくなってしまうから、それを海人に報告しに来たの」

「はっ、その言い方じゃまるで、俺達が恋人同士みてえだな」

茶化して笑い飛ばす海人に、愛代はにつこりと笑みを返す。慌てて否定もしない愛代に、海人は二の口がつけなくなった。いつもなら真っ赤になって否定してくるはずなのに、余裕を見せる彼女に、海人は目を奪われていた。

「恋人ね。たしかに違うけれど。でも、海人が許可してくれれば、いつでも成る覚悟はできてる。……ねえ、私の気持ち、知っているでしょ」
覚悟を決めた顔でそう言った彼女に、海人は冗談を切り出すことができなかつた。



忘れるはずがない。忘れられるわけがない。決心して、凜とした佇まい、澄み渡る雰囲気を出す愛代に、海人の目は釘付けだった。

手を伸ばせば届きそうな距離で、じつと見詰め合う海人と愛代。海人は、愛代から目を離すことができなかつた。そうすれば、なぜか負けた気分になりそうだったからだ。

「ずっと昔、私があなたに言ったこと、覚えてる？」

「……覚えている。お前が俺に惚れているという話だろう」

愛代に問いかけられ、突き動かされて海人はそれだけを何とか口にした。

両者ともに小さい頃、海人は愛代から告白を受けていた。『結婚を前提に、お付き合いをしてください』と、一国の姫から申し込まれていたのだ。海人は自分が幼いことを自覚しており、両親もまだ健在だった時だ。

好きか嫌いかなど考えたこともなかつた海人は、返答の保留を提案した。愛代はそれを了承して、海人の返事をずっと待ってくれた。

それ以来、愛代からその話が出たことはない。だが愛代は、恋慕していると思わせる仕草をしている。海人は何度も気づいていないふりをしたり、難聴であるかのように振舞ったりしていた。

「よかった。……今、その時の答えを聞かせてくれない？」

「どうして今になって。その話だって、お互い年端も行かぬ餓鬼の頃のことじゃねえか」

「私はずっと本気だよ。それに、その気持ちは今も変わってない」

愛代の喋る言葉の一つ一つに、力強い意志が感じられた。目を張り、笑って誤魔化すな、と訴えてきた。

「聞かせて、海人。私の湊安東家に婿に入って、家族になつてくれない？」

「俺は……」

海人は一瞬躊躇したが、幼い頃からずっと考えていた答えを出した。

「愛代とは一緒に行けねえ。……今までこうして対等に会話していること自体が奇跡のようなものだ。俺とお前の立場は、平民と一国の姫なんだ。身分が違う」

「……それが答え？ 海人の気持ちを聞いてない。海人、あなたは私をどう思っているの？」

普段の間抜けな行動からは想像できない、勢いよく詰め掛ける愛代に、海人はついに目を逸らしてしまった。

「お前のことは、どうとも思ってたねえ。元々勝手に此処に来て、いつのまにか居なくなるやつだったろうが。……俺達の関係なんて、いつか立ち消える程度の弱いものなんだよ」

「……私のこと、嫌い？」

懇願するような撫で声に、海人は愛代に背を向けて言い放った。

「ああ……。嫌いだ」

規制だ規制だとわめく、お偉いさんは。

海人は心の中でつぶやいた。そうしてそのまま、目の前の現実から目を背けるように、海人は止めていた槍の鍛錬を再開した。海人の思考は、先ほどとは違って完全にクリアだった。

「……じゃあね、海人。……さようなら」

鍛錬に没頭する海人を端目に、愛代はひっそりと立ち去った。海人からしてみれば、いつのまにか、消えていることになるだろうが。

いつも別れを見送っていたのなら気づいただろうが、海人は聞こえていなかった。

愛代のその、海人に向かって初めて口にした、『さようなら』という別れの言葉を。

六話、真実

今日も今日とて、海人は槍を振るう。いつものように、日課をこなす。

だが、そこには何か足りなかった。

海人は常なら一心不乱に続けて、体が沸騰するほど熱を出すまで鍛錬を、数分で止めてしまう。槍を下ろして、彼は周囲を見渡した。しかし、そこに彼女はいない。風で草木が揺れる音と、小鳥のさえずりが聞こえるのみである。

なんの問題もないはずだ。これでいい、元に戻ったのだ。そう自分に言い聞かせた海人は、また槍を構えて鍛錬を再開した。

しかし、それも長くは続かず、すぐに気持ちいが乱れて槍から力が抜けてしまう。海人はそれを何度も何度も繰り返すのだった。



愛代と最後に会ってから数日が経ち、城下町では戦の用意が進んでいた。

準備には優秀な武器や防具、錬度の高い兵士に優秀な軍師、特にここでは兵糧が重要になる。戦において食料は重要だ。兵士の動力源がなければ、どんな大軍勢も動く木偶人形になってしまう。

元々草木が生えにくいこの檜山では、兵糧の確保が最優先事項にあった。幸いと言っていいのか、お国からの搾取はなかった。日頃から住民より税を搾り取っているからだ。役人たちはここぞとばかりに、蓄えを放出して、戦に備えていた。

戦に向かない女子供、高齢者はいつもの日々を送っている。だが若い男衆は、戦へと駆り出されていた。愛する家族を守るため、自ら武器を持つことを決めた者達だ。皆この戦で長き争いに決着がつくことを願い、檜山を信じて参加したのだ。

そんな城下町全体が目の前に迫る戦に、ピリピリと緊迫した空気を生み出す中。

海賊団の長である重蔵はというと、そんなことはお構いなしに、真昼間から飲んだくれていた。

「ういー。……クウヘエツ」

「また昼間から飲んで。父様、だらしないですよ」

「いいじゃねえか、こんなときぐらい。皆戦が近いからって、常連の奴等も飲みにきやしない。ここは俺が奴等のぶんまで飲んで、この店に献上しないと」

「いつもこの倍は飲んでいるじゃないですか！」

カウンターのの上に並ぶ酒瓶を指して、仁実が父親をしかりつけた。

檜山と湊がぶつかかる大戦の話が出てから、重蔵は連日のようにここに通いつめていた。

ほぼ毎日、頻度が増したのだ。仁実が酔っていない父親を見るのは、二日酔いになっていない時を除く、朝ぐらいだった。

「それより、海賊達が船に食料を積んでいます。……出航の予定もないのに、腐るだけです。どうしてその様な命令をしたのか、説明してください！」

仁実は父親の横に座って、注文を聞く店主に、玄米茶を頼んだ。

ここ最近、海で海賊行為を行えそうにない。仁実も注意をせずに放っておいたのだが、部下達のある行動に気づいて、こうして問い詰めに来たのだ。

いま商船を襲っても、得られるものは少ないといていたのは重蔵のはずなのだ。

「……食料難に備えてだ。『負けて』帰ってきた兵たちに、撒いて回るんだ。我ら海賊団は巷では義賊で通っているのだな」

「船に積まなくてもいいでしょう。非常時に船を動かさせませんし、海が荒れたら流される可能性があります」

「船は唯一の財産だ。それに見張りもいる。そんな有るか無いかを考えても仕方ないぞ」

あくまでもとぼけようとする重蔵に、仁実は言い逃れできない証拠を突きつけた。

「では何故、父様は『安東が負ける』前提で、準備をしているのですか

？」

「どんと大きな音をたてて、重蔵は持っている酒瓶を叩きつけるように置いた。その音にひるまず、触れられては困る部分だと確信した仁実は、強気に父親を問い詰めた。

「大敗を喫したあの戦から、五年も経っています。風土病が流行って傷口に塩を塗られることがあっても、檜山はくじけることなく再興しました。……檜山と湊の両軍勢は、前の戦よりも倍以上に成っています。両家あわせれば、かつて北の地全土を支配した安東家の再来とまで言われています」

重蔵の酒瓶を掴む手の力が、ぐっと強くなる。

「獣風情を追い立てるのにあの数、決して逃すはずがありません！」

「もうなにも言うな、仁実」

大きくはなかった。しかし重蔵の言葉に強く込められた凄みを感じて、仁実は閉口した。

娘は自分の言葉を聞いて、素直に押し黙った。その姿に拍子抜けした重蔵は、高ぶる感情が極端に冷えるのを感じて、大きなため息をついた。

「余計な知識をつけやがって」

酔いが醒めてまった、と重蔵は呟き、店主にお冷を頼んだ。

「教えてくれたのは、父様です」

「そうだったな。大名家の直子として、それに恥じない礼儀作法を教えたのは俺だったな」

「そんなことは教えられていません」

「はっはっは、はつきり言うな。……だがまあ、年不相応に知識があったところで、やっぱりお前は餓鬼だな」

重蔵は、娘の頭をくしやりと撫でた。

「人生経験が、見てきたものが違う。この世の中には、触れてはいけなものがある。好奇心で首をつっこみ、知らなければ幸せでいれた。そんな出来事が星の数ほど存在するんだ。……安東家の先祖が触れたのも、そのひとつ、逆らってはならぬものの逆鱗だった」

仁実はそこで、父親の盃を持つ手が、小刻みに震えていることに気

がついた。

唾然とした。仁実から見た重蔵は、大雑把そうに見えながら緻密に計画を運ぶ、どんなときも余裕を崩さない人物だった。そんな父親が取り繕うことも忘れて、こうして恐怖を露にしていることに、仁実は今日一番の驚きを覚えた。

「逆らってはならぬもの……」

「そうだ。言いにくいことを言うようだが、安東は負ける。勝つことなどありえない」

重蔵は断言する。その言葉には対象への畏怖から来る確信あった。

「そんな……！ 檜山だけでも、本隊は五千に届きます！」

「数の差などあつて無きに等しい。その姿を直に見てきた俺にならわかる。山を切り崩すことだつて、平気でやってみせるだろう」

「一体なんなんですか、それは……。そんな生物が、この世に存在するんですか!?!」

仁実がヒステリッククギみに叫ぶ。重蔵は先ほど受け取っていたお冷を飲んで、頭をクリアにしてから言った。

「それについては、檜山よりも湊の連中の方が実態を知っている。湊が呼び始めてから、檜山もそれに倣い呼び始めた。……『まつろわぬ神』と」

重蔵と仁実、店長しかいない店内に、不思議とその言葉はよく響いて残った。



太陽が水平線に指しかかり、日が暮れはじめた頃。

そろそろ帰ろうと仕度をしていた海人の元に、ひとりの客人が現れた。

あいにくその人物は海人が待ち望んでいた少女ではなかった。祠の広場に入ってきたのは、どこかで見たことがある男性だった。

「やあ、はじめまして。君が海人君、かな？」

「どうしてここに……」

海人は不審者をにらみつけた。

この場所は、海人と愛代しか知らなかった。仁実にも場所は教えていない。街のはじっこにぼつんと建っており、偶然迷い込みでもしなにかぎり、見つからない場所にあった。

愛代も道に迷ってここを見つけて、疲れて休憩していた時に海人と知り合ったのだ。しかし目の前の男は、海人の名前を知っていた。意図してこの場所を訪れたのだ。

海人は、警戒の色を隠そうともしなかった。

「そんな顔をしないでください。……私は『安東舜季』きよすえといいます。そして湊の者です」

「……愛代の親族か」

「ええ。父親です」

にこにこ笑顔を向けてくる、愛代の父親だという男性に、海人は少しだけ警戒を緩めた。

誰にも教えるなど言っておいたのに。愛代に心の中で悪態をつく。だけでも、父親だというなら一応納得だ。約束というのも、お互い小さな頃に一度言ったきりなので、愛代が憶えているかも分からない。むしろ自分が未練がましいのだ。

そう海人は自分に言い聞かせて、笑顔が胡散臭い男性に訊ねた。

「それで、愛代の父親が俺に何の用だ？」

「ええ。実は、愛代さんの代理として、あなたにお別れの挨拶をしに来ました」

「……冗談のつもりか？ だとしたら笑えないな。串刺しにされたいか？」

一瞬で冷静さは吹き飛び、海人の頭は怒りでいっぱいになる。

冗談でもそんなことを、しかも他人に口を出されることに、海人は我慢がならなかった。

「とつとと帰れ。そしてあいつに、自分の口で言えって伝えろ」

「無理です。代役だと言ったでしょう。愛代は今、思うとおりに動けない立場にいるのです。だからこうして、わざわざ伝えに来た」

「今まであいつを放置していたのはお前たちだろう。それが今更、父

親面してあいつを束縛して、どういっつもりだ！」

愛代は、湊からここまで、一人で訪れていると聞いていた。

中途半端に知識を教えて、野盗や山賊の怖さを教えもせず、愛代へ自由な外出を許可する。親としての義務も果たさずに、あたかも自分が育てたと言いたげに大きな態度をとる。海人は目の前の男に怒りを通り越して、殺意さえ抱いた。

それと同時に、海人はわずかな疑問も覚えた。愛代がなにか不祥事を起こしたのか。それとも戦が近いこのときに、監禁される理由ができたのか。しかしそれも、次に舜季が軽く放った言葉で消し飛んだ。「そういう約束だったからです。五年前のあの日から、安東家の繁栄のため『生贄』にされるまで、愛代を自由にさせるとね」

「生贄だと？」

「おや、その様子からすると、娘から聞いてはいないのでですね。まあ聞いていれば、私がここに来る必要はないですけど。……愛代は十和田湖に住まう『まつろわぬ神』に、供物として捧げられるのです」

海人は、舜季に槍を突きつけた。

これ以上問いただしても、まともに話す気がないと理解し、脅して吐かせる方向に変えたからだ。

「だいたい何だ、神だ神だと、俺を混乱させて有耶無耶にするつもりか？　ちゃんとわかるように説明してもらおうか」

「……あなたの父親は重蔵でしょう？　彼に聞けばいい。およその全貌を知っています」

「親父は安東と縁を切った！　何も知らねえ！」

「知っています」

舜季は海人の反論をばっさり切り捨てて、そう断言した。

「なぜなら五年前のあの大敗した戦、総指揮を任されていたのは、他でもない重蔵ですから」

「ッ！　……そ、そんなはずはねえ！　そもそも親父が指揮を執っていたなんて、なぜ言い切れる。あんたは湊の人間だろう？」

「この目で見てきましたから。私は元々檜山で生まれた人間。そして重蔵とは、血を分けた兄弟なのですから」

海人は一瞬、目の前の舜季の言っていることが理解できなかった。舜季が言っていることが本当ならば、重蔵は今まで、海人に真実を隠していたことになる。

両親に替わり、海人が今最も信頼できる人物は、自分を信用してはいなかった。その疑心が生じて、茫然自失となった海人に、背後から回り込む影があった。

「動くな」

海人の右耳に、くぐもった男の声が入る。首元に短刀があてられ、海人は体を硬直させた。

想定外の事実を驚いて、隙を晒してしまった。海人はゆっくりと、首を後ろに向けようとする。

「動くなど言った。槍を捨てて、そのまま舜季様の方を向いている」
仕方なく、海人は槍を捨てて、舜季に視線を向ける。

まったく気配を感じなかった。足音たてずに背後に忍び寄ったことから優秀であることはわかるし、この男を倒しても他にも近辺に潜んでいるかもしれない。

海人はひとまず、大人しく指示に従うことにした。それになによりも、海人の頭に浮かぶ疑念を解消するには丁度いい機会だった。

「海人くん、昔話をしましょう。……かれこれおおよそ百年前の話です。日の本の北、そのほぼ全域に根を張り、幕府の命を受けて、『蝦夷管領』として支配していた安東家。しかし家督争いによって、安東家は檜山と湊、両家に別れてしまう。それこそ、大きな間違い。安東家が仕組んだ謀略なのです。安東両家は二家に分かれてから今日まで、一度も戦を起こしてはいません」

笑顔が胡散臭く、裏に得体の知れないものを隠しているような舜季の語りは、そうした前口上から始まった。

七話、滅亡

「今起こっているすべての物事を明かすには、あなたの常識を改めねばなりません。そもそも、檜山と湊の両安東家は争つてなどいません。思想の違いにより安東は二つに分かれましたが、刃を交えたことは一度もないのです」

舜季は、大衆に向かって演説をするかのようにな舌をふるいはじめた。真実が知りたい海人は、男から短刀を喉元にあてられながらも、ピクリとも動かずその語りに耳を傾けていた。

「事の起こりは、安東家がかつて治めていたここ奥羽の地に、魔物が住み着いたことから始まります。魔物は安東家に、己に伏するよう、奥羽の地を明け渡すように脅してきました。無論、安東はおとなく従うはずがありません。当然のように兵をまとめ、魔物の討伐へと山の奥地へと踏み込みました。しかし……」

舜季は横に首を振った。

「誰一人として、帰ってくる者はいませんでした」

山に住み着いた魔物は、討伐に出向いたおよそ一万にもなる大軍を、たったひとりで迎え撃った。そして、誰一人として逃さず、すべてを喰らい尽くしたのだ。

大将の首晒しは必要なかった。つい数日前に意気揚々と出征した家族が、帰らぬ人となった。霞の如くこの世から消え去った兵たちがその証拠であり、安東は前もって出された服従勧告が、去勢でもハツタリでもないことを身をもって知った。

「安東はようやく悟りました。彼の魔物は人の力など意に介さない。人智の及ばぬ、まさしく『神』と呼ぶにふさわしい存在だと。降伏する旨の書状を渡して、その神の姿を直接見た伝令兵は、『神話で語られる神の体現』と畏れを以って話したそうです」

七つの頭を持ち、全体軀は山をも超えて、開いた顎は村すら人？みにする。

神話の上でしか語られることのない強大すぎる力を顕示し、人々に災いをもたらす禍つ神。勝機すら見えない安東は、わずかでも生き残

る希望を見出し、安東は服従という道を選んだのだ。

「しかし、愚かにも神に逆らった代償は大きかった……。安東家を滅ぼさない条件として、安東家一族の若い娘を五年ごとに生贄として差し出すことを命じてきたのです」

その要求を受け入れたとき、安東家はゆるやかな滅亡を迎えることになる。怪物の出した条件を？むか否かは、滅亡の時期が早くなるか遅くなるかを決めるだけでしかなかったのだ。

議論は紛糾した。おとなしく従うか、最期に滅びるまで抵抗するか。論争の規模は拡大して、ついには家を二つに分ける戦争にまで発展したのだ。

湊に残った者達は、安東家の女子を生贄に捧げ、しかし反逆の機を窺った。

檜山に移った者達は、檜山に堅牢な城を築き、徹底抗戦へと臨んだ。事実、檜山と湊の間で戦をすると見せかけはするが、戦闘は一度も行われてはいない。両安東家は神を『共通の敵』とみなして、裏では協力して神を倒せないかどうか画策していたのだ。

『安東家を後世の世まで残す』。

人間は、共通の敵がいれば手を取り合い、団結することができる。両安東家はそれぞれの主張によって二つに別れたがしかし、真の目的は一致していた。家を分けて、城すら二つ作れども、争っている場合ではないと理解していた。

「そしてついに五年前、檜山は神の討伐に挑みました。湊は何十年何世代と耐え抜き、神の名と、酒に弱いという弱点を見つけました。湊側から檜山に情報が流れ、湊が捧げた献上品の酒で眠っている間に、檜山の兵たちが袋叩きにする。そういう手筈でした」

「だが……結果は散々なものだった」

沈黙を貫いていた海人が、口を開く。忍の男が耳元で小声で警告するが、舜季がそれを手で制す。舜季は過去を憂うように、海人尾の言葉を引き継いだ。

「討伐軍は、壊滅しました。檜山は湊に一言も告げず、独断で遠征軍を出しました。……わずかに残った兵士たちも、崇りに触ってしまった

と、おびえて何が起こったか頑なに語ろうとはしません。ただひとつ確実なことは、神は死んではない。むしろ龍の逆鱗に触る行為をしてしまったのです」

どんな恐れや畏怖も、時が経てば風化するものだ。ましてやこの時代の人間は現代人よりも短命であり、事を直接見て聞いた者が生きているはずがなかった。何よりも早急な建て直しが図られた軍備は、その頃よりもずっと精強になっている。

先祖ができなかったことを、自分たちの代で成し遂げられる。そうと見込んで討伐へと踏み切ったのだが、見事に返り討ちにあったのだ。

「そして今、我々は最後の賭けに出ます。二つの安東家の総力をもって、神に抗う。今度の戦で神に致命傷を与えることができなければ、安東家は滅亡です。愛代には、罨を張った場所におびき寄せるための、罨になってもらいます」

海人は目を瞑って、記憶を整理した。

大まかには理解した。その神という存在は、強大な力を持っている。倒さなければ、一生その脅威に怯え続けて、みじめな生活をしなければならぬことも。神の注意をひきつける、罨役が必要であることも。

だが海人は、まだ肝心の話を聞いていなかった。

「……まだ、初めの質問に答えていないぞ。どうして愛代が生贄になる必要がある！ あいつは俺と同じ、成人の儀は済ませている。だが、まだ二十にもなっていない」

他に候補者はいなかったのか。当然ながら、誰も死なないうようにできるのなら、そうしたほうがいい。海人は声高には叫べなかった。

けれども目の前の男が『罨になってもらう』と言ったときの顔。それは怒りでも悲しみでもなく、仕方ないといった『諦め』の感情が色濃く出ていた。

「その顔が気に入らなねえ。何故愛代を生贄にする命令を、唯々諾々と受けた。お前の娘だぞ！ 子供を守るのは、親の義務だ。お前のやっていることは、娘を死地に赴かせる行為だ！」

海人の実の父親は、鍛えた槍の腕を振るう場所が与えられずに、妻ともども流行病で亡くなった。幼き頃の海人に、『この槍で家族を守る』と聞かせてやまなかった。

そのため海人は、力がありながら娘一人を守ろうともしない舜季に、激しい怒りを抱いたのだった。

「動くな。聞いていれば貴様、舜季様になんと無礼な口を」

「邪魔だッ！」

「ッ！」

口を動かすことに気をとられ、忍びの男は注意を逸らした。その隙を突いて、海人は左に体をひねって脱出。そのいまま勢いを殺さずに、左肘を鳩尾へと叩き込んだ。

呼吸が一瞬止まり、痛みで動けなくなった男。海人は頭を両手で掴んで、その呆けた顔面に膝蹴りをお見舞いした。

「があッ！」

強烈な一撃を鼻にくらい、名も知らぬ男は鼻血を出す。最後に悶絶する男の顎に、海人は痛打を与えて、意識を刈り取った。

脳震盪を起こして倒れ伏し、海人はその男の襟首を掴むと、舜季の側に放り投げた。

「ほらよ、返すぜ」

倒れた部下を見ても、舜季は顔に嫌悪感を催す笑みを貼り付けたままだった。

「海人君、君は湊の現状を知らないからこそ、そのようなことが言えるのです。今湊の福山城に住んでいる人間で、安東の血を引いている者が何人いるかご存知ですか？」

「知るかよ。その中に平気で子孫を見殺しにするような、鬼の心の持ち主がいることだけは知っているぜ」

海人は足元に転がる愛槍を拾った。

「三人です」

「……は？」

耳に入った言葉が信じられず、海人はポカンと口を開けて呆然自失とした。

「福山城には、今や私と愛代、そして義父の三名しかいません。あとは泊り込みの侍女が数名、近衛兵が警備をしているだけ。……私は檜山の城で生まれた、れつきとした檜山の人間です。ですが湊に婿入りしまして、檜山生まれの私と湊生まれの妻との間にできたのが、愛代あいの娘です。つまり、湊の血を引く女子は、愛代で最後なのです。……これだけ言えば、安東がどれほど追い詰められているのか、お分かりですよね？」

「……あなたは、お家存続のための種馬だったということか」

「返す言葉ありません。安東は外部にこのことが漏れないようにすることで必死でしたから。土地を追われ、日の本の端に追いやられ、あぐくの果てには血脈すらも神に奪われました」

舜季は自棄になったようにまくし立てた。

「先祖代々受け継がれてきた、屈辱と怨念。安東はもはや、簡単に止まりませんよ。ですから愛代の犠牲は、神をおびき寄せるには仕方ないことです。どうしてもやめて欲しいのであれば、愛代の代役となれる者を差し出すことです」

「代役？ そんな奴は……ッ！」

安東の一族であり、女性。海人は、舜季の言わんとしている人物が誰なのか理解する。そして溜まりに溜まった怒りを爆発させた。

「愛代を生贄にさせたくないのであれば、あなたの大切にしている義妹を差し出すことです。仁実さん、随分と大きくなっていましたね。愛代の次に若い女性は彼女しかいません。愛する人をとるか、可愛がっている義妹をとるか、あなたが決めてくれて構いませんよ」

「てめえッ！」

頭に血が上って、思考が真っ白になっている海人は、舜季が言っていることはもはや聞いていなかった。

二人の間を一足飛びで一気に詰めて、海人は胴体を狙って槍を突き入れた。しかし舜季は大胆に横に飛び退き、海人の突きをよけた。

「来るとわかっていれば避けることなど容易——ぐはあッ！」

したり顔で巧拙をたれる舜季に腹に、海人は蹴りを入れた。舜季は飛び退いたときに地面に倒れ込んでいたので、蹴りを入れやすい丁度

いい位置にいたのだ。

海人はうめく舜季の首元の襟をつかんで、片手で大人男性ひとり吊り上げた。

「あんたには福山城に入るための通行証になってもらおうか」

「く、串刺しにしてから引きずっていくつもりだったのですか？ まあどちらにしてもかかないませんがね」

首をかしげた海人は、次の瞬間には膝をついていた。何が起こったか海人地震もわかつていなかったが、突如襲われた眠気に、海人の意識は抵抗する暇も無く落ちていった。

「ふう……。ようやく効きましたか、随分と時間稼ぎをさせてくれましたね。ですがこれで、起きたときには戦は終わっているでしょう」腹を撫でながら立ち上がる舜季を端目に、海人の体は地面に倒れていった。朦朧とした意識の中で、耳打つ声を理解する力はなかった。



「……寝たか。よし、もういいぞ、出て来い」

舜季が声をかけると、林の中から三人の男が現れた。全身を黒で統一して、真つ先に倒れた忍びの男と同じ服装をしていた。舜季の雇っている忍びの部下達だった。

「仲間を介抱してあげなさい」

「その男はどうしましょうか」

そう言った男の視線の先には、海人がいた。目を閉じて、ぐっすりと眠っている。

海人が突然眠ってしまった理由には、舜季が仕掛けた術があった。空気に毒を撒く呪術であり、今使った催眠効果の毒や致死毒まで、さまざまな毒を造れた。

しかし毒が回るには時間がかかり、毒が撒かれていると感覚が鋭い者ならば気づかれる可能性があった。そのため舜季は海人の注意をそらすため、一芝居打って出たのだ。

見事海人は周囲のことなど気に止める余裕なく怒り狂い、こうして

眠りこけてしまった。

「そうですね、では」

舜季は庶民の家屋より立派にできた、祠を指した。

「あの祠の中で、柱か何かに縛り付けておきなさい」

舜季は術の修行を始めてから、五年ばかりしか経っていない。それまでは呪術などとは一切触れたことが無かった。チラリと一瞥した祠から、微細な神力が立ち上っていることなどは、感知することができなかつた。

八話、御神体

朝日が顔にかかり、海人は目を覚ました。ぐっすりと深く眠っていたようで、目を開けるのがおっくうだった。

どうやら、丸い柱のようなものに縄でくくりつけられているようだ。海人は今、背中で柱を抱くように胴を縄でぐるぐる巻きにされ、手首を後ろで縛られていた。無理な体勢で寝ていたせいで、体が悲鳴を上げていた。

何度も瞬きをして、しよぼしよぼする目を慣らす。ようやく現実世界に戻ってきた。

そこは、祠の中だった。

何か重大なことを忘れているような気がしたが、寝起きの頭で思い出せない。

とりあえず縄を解こうとする海人。しかし、ぐっと体に入力してはいない。胴を何周か巻いただけの、子供でもでおる巻き方だ。それなのにほどけるどころか、『凍ったかのように』たわむことさえなかった。本当に藁で編まれているのか、鉄の糸で編まれているのではないかと疑ってしまうほど固かった。

「……ッ！ ……ッ！」

力いっぱいもがくが、縄は破れない。

そんな四苦八苦する海人に、不意に声がかけられた。

『いくらやっても無駄だ。術がかけられている』
「……は!？」

突然響いた声に、海人はすつとんきような声をあげて驚いた。声の主を探すが、祠の中には海人以外の人間の気配がなかった。そもそも物が少なかった。

自然に、海人の視線は目の前に置かれた『御神体』である短刀に吸い寄せられていった。

「まさか……」

『ようやく気づいたか、遅い。話しかけたら即座に応えろ』

それは野太い、三十代ぐらいの男の声だった。

「無茶な。刀が喋るなど聞いたことがない。あつたとしても自分の頭を疑う。……俺は正気か？」

『目はぼつちり冴えていると思うぜ』

「正気を疑う原因に言われてもな」

脳の容量を超えて無理に考えたせいか、思考回路がショートし、頭が痛くなってきた。手を頭に当てようとしたが、手を縛られていると思いついた。

何年もここに通っている海人でさえ、刀が喋れることを初めて知った。

深く考えても理解できそうにない、頭が痛くなるだけだ。そう判断した海人は、喋る刀に問いかけた。

「なぜ刀が口をきけるんだ？ どういう仕掛けだ？」

『俺が刀というわけではない。刀は俺を封じているものだ』

海人は訳がわからず、頭に疑問符を浮かべる。刀は前置きをするのと、自らのことを静かに語りだした。

『俺は昔、ここらで悪さをしていてな。それにほとほと困った村人たちは、偶然通りかかった呪術師に、俺を封じ込めるように頼み込んだんだ。俺は呪術師の罠にあっさりと捕まり、ここに封じ込められたつて訳だ』

海人は刀から聞こえる声に、じつと耳を傾けていた。声は封じこめられたことを悔しそうには語らず、むしろ一本とられたと爽やかに語っていた。

声の張本人は、ここにはいない。もつと遠い、別の世界にいると言

う。『幽世。俺はそこにいる。その短刀は現世と幽世をつなぐ橋であり、俺をこの祠に封ずる楔であり、俺を幽世から出さないための門だ』だが完璧に現世と隔離されているわけではないらしい。この祠とぼつかりと開いた広場、周りに広がる林こそが結界であり、短刀を通じて現世から届いた声を聞き取ったり、逆に幽世にいる男の声を届けることができる。

『ここから聞こえていたぜ。お前の父親との会話や、陽気な女子との談笑。そして呪術師の男との剣呑な会話も。随分と物騒なことに巻き込まれているじゃないか』

そう言われて、海人はようやく思い出した。頭にかかっていたもやが消えて、綺麗さっぱり晴れた。

「そうだ。喋る刀を見たせいで頭から消し飛んでいた！　こうして悠長にしている場合ではなかった！」

「いったい、どれ程眠っていた？　海人はまた無理やりに縄を引き千切ろうと、もがいて暴れだした。

『無理だ、力だけではその縄は千切れん。落ち着け』

「落ち着けだと？　これが落ち着いていられるか！　お前も聞いていたならわかるだろう？　愛代が危ないんだ、今から急げば奴等に追いつけるかもしれない」

『だから落ち着けと言っているだろう。お前が寝てから幾日経ったと思っている』

「幾日？　一晩だろう？」

『三日だ。無理な体勢で寝ていたせいかわいそうに、変なびきをかいて寝ていたわ。それを三日三晩昼も夜も、近くで聞かされたこっちの身にもなってみろ』

「三日！　そんなに俺は寝ていたのか！」

海人は驚きを隠せなかった。いや、そもそも何故俺は眠っていた？　催眠の術を掛けられていたからな。意識が飛ぶ直前のことをよく想起してみよ』

言われて、海人は眠る前のことを思い返す。舜季という男に、あと一步のところまで槍を向けて、そこからの記憶がなかった。

『あの騒々しい場で眠りこけるなどあるわけがない。お前は意図的に眠らされたのだ。そしてその縄も、同じ造りでできている。見えないから確証はないが、おそらく停滞の術。縄だけが世界の理から外れ、外力の作用を受けない。効力が切れるまでそのままだろう』

「その停滞の術とやらを解かないといけないってことか」

『理解が早いじゃねえか。そうだ、散々あの娘に脳筋だ言われてるが、

飲み込みが早い』

「そんなことはどうでもいい。どうにかしてこの縄を解けないか？」

こうしている間にも、愛代に死が近づいていると思うと、居ても立ってもいられなかった。焦燥だけが募っていく。

海人の焦りを察していないのか、刀の声の主は尋ねた。

『解いて、どうする気だ？ 呪術師の男には追いつけぬぞ』

「……ならば、湊に行き、福島城に直接乗り込む！ 愛代に生贄なんて馬鹿な真似を止めさせるんだ」

『だが山奥に棲むまつろわぬ神は、生贄を捧げないと怒りを静めないぞ？』

「そんなもの、俺が殺してしまえば万事解決だ！」

海人はやけくそで叫び、男にあたった。海人は焦りから、質問してくる男に苛立ちを覚えて、大声をぶつけたのだ。

『あの舜季という男に勝てなかったお前が？ 呪術師一人に傷ひとつつけられなかったお前が、神を利逆しようなど奇跡が起ころうとも能わない』

だが男は冷静に海人の声を受け流し、反論した。

人事だから言えるのだ。その様子に、海人は傍から見ている分にはどうとでも言えると、ますます怒りがわいた。

「神などと大仰なことを言っても、あれは奴の惑わす妄言だ。崇りなんぞあり得ない！」

加えて、海人は舜季の言う『まつろわぬ神』という生き物を信じてはいなかった。

敵の言葉を簡単に信じるわけがなかったし、海人は大げさな演説で、人に生贄が必要だと信じ込ませる文句だと思っていた。そして海人は、娘だという愛代を『物』が如くのたまうの舜季が、何よりも気に入らなかつた。

海人はこのときまで、『まつろわぬ神』という存在を、頑なに信じようとはしなかつた。

『神はいる。大仰ではない、あの呪術師の男はありのままを話していた。神が息を吹きかけるだけで、何千何万の兵が蹴散らされる』

「まるで見てきたような言い分だな？ 俺の生まれる前からここに封じられているんじゃないのか？」

刀からする声がそう言うと、たちまち海人はうさんくさいと疑念を抱いた。

舜季の手先の者ではないかと一瞬疑ったりもした。

「なんせ俺自身が神だからな」

表情は見えなくとも、海人は男がドヤ顔をしていると幻視した。

自分は神であると自称する刀の声に、さらに疑いの目を向ける。その空気を察したのか、声は神が本当に実在することを証明するといってきた。

『短刀をとれ。そうすれば幽世と現世の境界が曖昧になり、その柱まで俺の力を及ぼすことができる。ついでに縄も解いてやろう。……そうだ。ついでだ、神の力であの娘がいる場所まで一瞬で飛ばしてやろう』

なんと自称神は、縄をほどこいてくれるという。さらに太っ腹なことに、摩訶不思議な力で愛代のいる十三湊まで海人を運んでくれるという。確かに三日も寝ていたとすれば、檜山の軍が侵攻を始めるまで期間の猶予がない。そんな力があるとすれば、とてもありがたい申し出だ。そんな力があれば、だが。

だが刀からする声は、肝心なことを忘れていた。

「そうかそうか。どうもお前は記憶力も確かだから言っておくが、俺は縄で胴と手を縛られているんだ！ ご丁寧に縄には術というものを掛けられて！ 動くことができない。だから短刀を手に取ることもできないんだよ！」

『刀をこの位置からずらせればいい。手が動かなくても、動くものがあるだろ？』

そう言われて、海人は思い至る。それだけでいいのなら、足を使えば刀を自分の近くまで寄せれるかもしれない。

海人はぴんと足を張って、刀に足を伸ばした。しかし、あとちよつとのところで刀に足が届かない。諦めて息を整えた海人に、声は助言をした。

縄は動かないかもしれないが、お前の体は動く。間接が外れても足を伸ばせば届くはずだ、と。

海人は正気を疑ったが、自分を神だと称する奴だと思い出し、声を飲み込んだ。かわりに、海人は刀の声の主にこんなことを訊いた。

「俺がそこまでして、実はできませんでは済まないぞ。本当に縄を解くことができるんだろうな？」

『お前にできるのは、このままあの娘が身を捧げるまで時が流れるのを待つ。それか俺の言葉を信じて、俺に賭けてみるかだ。どうする？』

「……乗ってやるさ。俺は絶対に愛代を止めてみせる」

そうして海人は短刀へと手——ではなく足を伸ばした。

全身が悲鳴を上げながら、なんとか間接が外れることなく、だが全身を痛めながら短刀を床へと転がした。

するとどうだろうか。海人は一瞬だけ目を離れた隙に、短刀のあった場所は、黒い闇に包まれていた。

『久方ぶりだな。現世の空気は。そのまま真っ直ぐに進んでこい』

「だから縄が……おっ」

海人が手元に目を落とすと、あれだけ力を加えてもびくともしなかつた縄が、はらりと落ちていた。

自分の力にだけは自身を持っていた海人は、てこずっていただけに、あっさりとは解かれたことに言葉を失った。

『ほら、どうした。ぼうっとしてないで、さっさと来い』

納得がいかなかったが、海人は声にせかされて立ち上がった。そして目の前に広がる暗闇の中へと、ゆつくりと体を沈みこませた。

九話、まつろわぬ神

意を決して暗闇の中へと潜った海人であったが、入り込んだ先は真つ暗闇に覆われて光がまったく無かった。

まさに一寸先は闇。地面は硬い鉄や金属に似たもので舗装されているが、先が見えないこの場所で歩みを進めるのは、不安でしかなかった。

足をつく場所はあるが、方角がわからない。海人はあたりをぐるりと見回して言った。

「ここが……。幽世つてところか？」

独り言として呟いた言葉だったが、思わぬ返答があった。

「いや、違うな。生と不死の境界とを結ぶ回廊、現世と幽世の境目だ」
不意に海人の耳を、聞き覚えのある声が貫く。

進むか進むまいか迷っていると、海人の傍に何の予兆もなく一人の男が現れた。

「人の姿を見るのはひさしぶりだ。お前が海人か？」

「ということは、あんたが短刀から聞こえた声の男か」

闇から染み出るように現れたのは、百八十はあろう巨軀を誇る青年だった。

海人は一瞬だけ身構えた。単に驚いたという理由もあるが、海人は筆舌に尽くしがたい恐怖に襲われた。現れた青年の体は太いというよりもスマートに引き締まり、ボロボロ布きれを一枚着ていたこともあり、より精強に見せていた。それ以上に目を引くのは、頭には生えた一本の大角。海人は男に未知から来る恐怖と、生物の根源的恐怖を覚えた。

「どうだ、俺を見て。何か思うところはないか？ 神を信じる気にはなったか」

「角、か。たしかに人ではないようだな。だが神とは大仰すぎるんじゃないか？」

「……やはりな。海人、お前は呪力に対する抵抗力が強い。呪術に鈍感で、それに強情だ。意識せずともはじいてしまうほどにな」

鬼は腕を組み、うんうんとうなずいた。

何も感じなかったわけではない。表に出さなかったただけだ。ひとりで勝手に納得されて、海人は話についていけなかった。

「しかしこうして己の目で見て取ると、感慨深いものがある。貴様の父親の幼き頃とそっくりだ。くははははっ！ 生意気な小僧めっ！」
「や、やめろっ！ 手をはなせっ！」

鬼は海人のかき乱すように撫でてくる。気恥ずかしくて海人は男の手から逃れると、髪を手櫛で整えていった。

海人は鬼の喋っていた言葉の中に、父親と言っていたのを聞き逃さなかった。

「父さんを知っているのか!？」

「ああ、お前と同じぐらいの歳のころ、俺の話し相手だった。人から見たその時の世界を語って、俺には思いのほか新鮮だったぜ。俺の暇つぶしぐらいにはなった」

男の鬼が言うには、海人の父親をここに招待したことがあるらしい。その時の父親の姿が今の海人にそっくりであったため、懐かしく思い返されたという。

「その時はまだお前が生まれていなかったからな。この祠を尋ねてきたのは奴ただ一人だけだった。だから奴の妻に命が宿り、真つ先に報告に来たときは、俺も自分のことのように喜んだものだ」

鬼は海人をわが子のように見つめてくる。海人もそのような目を見られるのは、亡くなった両親以外からは経験がなかった。居心地の悪そうに体をくねらせながら、海人は質問した。

「父さんしかいなかった？ 他に誰も来る者はいなかったのか？」

「はて……。お前とお前の父親以外には、記憶にある限りでは、八十年前に老婆が参りに来たので最後だったか」

八十年。途方もない年月だ。その数字と鬼の外見との齟齬に、怖いもの見たさで海人は問いただした。

「あんた……一体、何歳なんだ？」

二十代だと名乗れば十分通用する若い顔立ちで、しかし額に存在を誇張する一本角と鋭く冴えた目つきで、人外の男はニヤリと笑った。

「三百から先は数えていない。人生の先達は敬えよ、小僧」



「元々、我等神々には名はなかった。神は己が意志でのみ行動し、時に大地に恵みを、気まぐれに人々に禍いをもたらした。元始の時代、神を縛るものはなかった」

男の鬼はその場にあぐらをかいて座り込んだ。海人も倣ってその場に座る。足元は暗闇で、手でさわり、石橋を叩いてから座った。

男の鬼のその手には、いつのまにかお猪口と酒が握られていた。

「人は天や地に、漠然とした神の姿を見出した。家を吹き飛ばす大嵐、曇天より落ちる雷、すべてが震える地揺れ、それらを神の怒りだと畏れた」

酒を一献傾けると、男の鬼は語りを続ける。

やがて人は神へと名を与え、神話を紡いだ。神話を紡ぐこと、それは人が神の脅威に対抗するための儀式であった。

豊穡をもたらす大地の神、あまねく明かりを照らす太陽の神、相反する月の神、嵐を呼ぶ風の神、津波を引き起こす海の神。

すべて人間が創り出した神話だ。

「人は神話という枠組みを、神に与えた。そうすることで神は枠を超えることはなくなり、己の役割に基づいて行動する。人は神の怒りへの対抗策を身につけた」

だがもし、自らの役割を超えて、力を振るおうとする神が現れたら。元始の時代、まだ神話の制約が弱く、思うがままに動ける頃に回帰しようとする神がいるとしたら。

「与えられた役割を超えて、現世に顕現した神を、人は『まつろわぬ神』と呼んだ。まつろわぬ神は神話に背き、顕れた地を放浪する」

まつろわぬ神は天災である。まつろわぬ神の故意か心となくかの意志にかかわらず、歩くだけ、ただその場にいるだけで、民に災いをもたらすのだ。

まつろわぬ神は人の考えの及ばず、ふとしたきっかけで顕れる。凡

人にできることは自分の身を隠し、じつと通り過ぎることを祈ることだけである。

「まつろわぬ神はそこに居るだけで、人に災いをもたらす。人型を成した嵐だ」

「……そのまつろわぬ神がすごく強いってのはわかった。じゃあ、一体どうやったら倒せるんだ？」

「倒せるわけがないだろう」

阿呆を見るような目を向けられた。

おかしいなことは何一つ言っていない。海人は理不尽を感じて、力チンときた。

「俺が人に傷つけられると思っっているのか？ 俺は鬼だ。武を極めた達人が何十人がかりでも、腕力だけで力づくで返り討ちにできるぞ」「ならなんでここに封印されているんだ？」

「俺は倒されてねえ。地上を何十何百、数えるのを忘れるほどにさ迷い歩き、歩くことすら飽きた頃に、この辺りで俺を封じた呪術師と会った。俺はここに望んで入っているんだ。……ここは酒も底しらずだしな」

また男の鬼は、お猪口をぐいっと傾けた。

「だが、お前のお姫様が生贄に捧げられるまつろわぬ神、そいつはこの土地に深い縁があるようだな。ここに執着する訳があるのだろう。そしておそらく、冥府の神だ」

「どうしてそこまでわかるんだ？」

「いつだったか、十年ほど前、病が流行ったことがあつただろう。突然苦しみだし、ふいにコロツと死ぬ病、あれはまつろわぬ神が原因であろう。わずがに神力の跡が残っていたからな」

「なんだと!？」

海人は驚愕し、思わず立ち上がった。

十年前に流行った病といえはひとつしかない。それは、海人の父親と母親がかかり、死んだ病だった。

流行り病で何百人も死んだことはただ運が悪かったのではなく、神の行いが関わっていたのだ。

「この辺りで凶作が百年昔から続いているのも、まつろわぬ神の所為だろう。豊作を嘆願しに訪れた人の子もいたが、あいにく俺は武の神である。実が結ばないとわかると、ぱったりと途絶えたよ」

「まつろわぬ神は、そんなことまで出来るのか……」

「ああ、だから倒そうなどは考えるな。実際に、何千という兵を引き連れた軍が玉砕したのだろう。まつろわぬ神には人が何人たかろうとも、人にとつての五月の蠅に等しいのだから。故に、お前を縛りつけた男が計画しているように、神格を封じることが考えたほうがいいだろう」

「封じる、か……」

海人は男の鬼の言う、『お前を縛りつけた男』に少し遅れて気づいた。

「俺を縛りつけたってことは、舜季きよすえっていう愛代の父親のことを言っているのか」

まつろわぬ神のことを狂信的に語ったあの男が、封じようとしている？ 簡単に鵜呑みには出来なかった。

「お前を柱に縛りつけたら、影の忍びと話し合っ出て行った。封じるとはその際に耳に入れた。まつろわぬ神を崇拜していたのも見せかけ、演技だったようだ」

「封印する機会を窺っているってことか」

「そこまではわからん。あとは、お前の養父に聞くといい」

なぜこの話の流れで重蔵が出てくるのかと、海人は不思議に思った。だが、また舜季のことを思い出した。

あの男は、重蔵が真実をすべて知っていると云っていた。

「安東の一族だと常に話していたではないか」

「……親父が、関わっているって言うのか」

「呪術師の言葉を信じるならばな。そもそも、そのお前の育て親には俺は顔すら見たことが無い」

何年も祠から出ていないのだったか。すべてを見透かしたように話すので、うっかり忘れていた。

「あの呪術師を逆に利用する。奴を出し抜くための力を貸してやる」

男の鬼は持っていたお猪口を足元に置くと、両手を宙にかざした。すると男の鬼の両手には突如として、一揃いの太刀と短刀が現れたのだ。

右手に現れた短刀には見覚えがあった。祠に御神体として祀られていた、海人が封印を解くために蹴り飛ばした刀だった。

左手に現れた太刀は、見たことが無かった。だがよく目を凝らすと、一揃いの刀は長さが違うだけで、意匠がそっくりであった。

「短い刀は小通連、長い刀は大通連。持って行け。必ずお前の力となるだろう」

「いや、俺には俺の槍が」

「持ってけ！ ただの鉄尻の槍が、まつろわぬ神の体に刺さると思っ
ているのか。撫でるだけで精一杯だ。持って行け。あ、でも娘を助け
出したら、ちゃんと返してもらおうぞ」

海人は刀を有無を言わず押し付けられた。しかも使ったら返せ
という。

だがこれは有難いことだ。自称神が持っていたのだから、見ただけ
の刀ではないはずだ。

人が敵わないのならば、どんな準備も無駄にならない。海人は貴重
なものとして借りることにした。

「本当に借りてもいいのか？ 大切なものなのか？」

「ああ。俺の愛した者の形見だ」

「そんなに大切なものだったのか!？」

海人は軽く放たれた言葉に度肝を抜かれた。

「気に病むことではない。お前が生きて帰るにはそれが必要だ」

「……わかった。だがこれだけは教えてくれ。どうしてお前は、そこ
まで俺に肩入れしてくれる？ 今初めて顔を見た俺に、恋人の形見を
譲ってまで」

「くれてはいない、貸しただけだ。お前に協力した訳は、海人と愛代が
俺がそこまでするほど大切なものだからだ」

男の鬼は、その刀を腰に差してはいても、地上に顕現してからは一
度も使っていないという。使うほどの外敵と遭遇しなかったため

もあるし、鬼が本気で脅威を排除しようとするなら、迷わず拳を選択するからでもあった。

「俺の中ではお前らのいる日々が、換えのきかない意義のあるものだ。どちらかが欠けてもいけない、その刀を預けるに値するな。無垢な人を斬り血で汚すよりも、民を苦しめる巨悪を討つことのほうが、あいつの為になる」

鬼にとって、海人と愛代が外界に触れる唯一の手段であり、一番の娯楽であった。それに海人には祠を修理や清掃してもらった恩があった。一度や二度来ただけの者は気にも留めないが、海人は別だった。時が流れて参拝客が来なくなっただ今でも来てくれる二人の内の一人で、海人が訪れない週はなかった。

手を貸す筋は十分に通っていた。

「そこを通れば、まつろわぬ神が潜む山の近くに出る」

「……いや、待ってくれ。義妹や義父が心配しているかもしれん。港の近くに出してくれ」

「そうか。……出来たぞ。必ず愛代を連れて帰って来い」

「ああ。初めからそのつもりだ」

鬼の指す方向に手をかざすと、波紋が広がり、手が沈む場所があった。

海人はためらい無く半身を沈めると、鬼のほうを振り返った。

「ありがとな。えーっと……名は、なんて言ったっけな？」

「言っただけだったか。俺のことは、アテルイと呼んでくれ」

男の鬼——あてるいはニタリとあくどい笑みを浮かべた。

海人はそれを聞くと、ずぶりと全身を沈めて、現世へと戻っていった。

十話、出会い

彼女がそこに迷い込んだのは、今思えば偶然の出来事ではなかった。彼女はそこに誰かに故意にそこに誘い込まれた。

運命といつてもいい。

安藤愛代がその場所に何者かによって意図されて誘い込まれて、海人に出会った。

海人との出会いは、彼を英雄に奉らせて、いずれ魔王として畏れ敬われる物語のほんのきっかけ。

神殺し、羅刹王。そう呼ばれるようになる海人の、はじまりだった。



彼女が生まれたのは、安東家。

日ノ本の北の端、アイヌの地とを結ぶ、奥羽地方の武家の一族。奥羽がまだ蛮族の縄張りだと思われて、開拓されていなかった時代から、代々奥羽の地を支配してきた。鎌倉幕府から守護大名に任命されて、奥羽の地を統治してきた、由緒ある家柄。

安東愛代はその直系、安東湊系の長女として生まれてきたのだ。

しかしその頃にはもう、安東家は滅亡の危機に瀕していた。

奥羽に安東の名を知らぬ者などいない。強大な軍事力を持つ。そんな安東はもうない。

あるのは領土の半分以上を侵略されて、その残った領土も跡目争いで二つに分割された、湊安東氏と檜山安東氏だ。

大名として名乗るだけの石高や軍事力は、分裂したことで両家ともわずかに有しておらず、安東氏全盛期の面影はどこにもない。

世はまさに戦国時代。下克上の風潮が高まっていた。周辺諸国は、両家は潰しあつていずれ勝手に自滅するか、下克上により成り代わられる。内紛で弱りきつたところを狙おう、とそう考えていた。

しかし安東両家は一向に弱る気配を見せなかった。内偵を放つて内情を調査していたのだが、檜山安東氏は大敗を喫して一万以上の兵

を失った。だがどこから沸いたのかわからない兵たちによって、軍備は補充されたという。

突如として現れたことから、安東氏の率いる兵達はすべて怨霊の類、黄泉の国から這い出てきたのではないかと噂されたこともあったほどだ。

こちらから攻めようにも、檜山安東氏の治める出羽国あたりは起伏が激しい。陸奥国と出羽国の境には高い山が連なり、歩道が細い天然の要塞となっていた。攻め入るということは、自軍にも相応の被害を覚悟しなければならなかった。

周辺諸国は、判断を見送り、様子見を続けることにした。

それこそが、安東氏の策であった。

安東家は家を二分してはいたが、その理由は跡目争いなどではなく、役割分担のためだった。

檜山は、強大な軍事力で、外敵を威嚇して牽制する。

湊は、いい顔をして媚びてへつらい、窓となって資金を稼ぐ。

両家は表向きは険悪な仲であると見せ付けて、水面下では手を取りあつて、強大な敵の打倒を使命に掲げていた。

強大な敵とは、まつろわぬ神のことである。

まつろわぬ神とは、人が紡いだ神話に背き、自由気ままに地上をさまいり歩く神々である。当てなく顕現した世界を放浪し、行く先々で禍いを引き起こす、まさに天災である。

歳もとらず老いもない肉体をもち、ただの鉄や木でできた武具では傷ひとつつかない。そして神の最大の特徴として、その神の神話由来の力、権能を持っている。

争いを司る戦神であれば、人類が到達できる以上の武技を扱う。

大地を司る女神であれば、殺しても蘇る不死の権能を持つ。

太陽を司る太陽神であれば、炎を吹き荒らして灼熱地獄をつくりだす。

そして冥府の管理者である神が顕現すれば、病原菌を撒き散らし、土壌に染み付き、生命が一切生活できない死の大地ができるのだ。まつろわぬ神は遥か南から来襲し、奥羽と奥州の境に連なる山脈、

その頂上にあるカルデラ湖に住み着いていた。

その当時に東北のほぼすべてを牛耳っていた安東氏は、討伐隊を派遣したが、何の戦果も得られずに返り討ちにあった。

だから、安東家は二分割された。まつろわぬ神に供物を捧げて服従する者達と、あくまでも徹底抗戦の構えをとる者達とに。

できるだけの時間を稼ぐ。

その間に、まつろわぬ神を殺す方法を発見する。ここにかけは、安東家の思いはひとつであった。

だが、神を殺すというのは、それこそが奇跡。起こらない故の奇跡である。人がいくら努力したとしても、実力だけではどうにもならない、それが『神殺し』という大罪だ。

まつろわぬ神を殺せる存在は、同じ神。それとも――。

そして安東氏には、滅亡へのカウントダウンが、着々と時計の針を進めていた。時間稼ぎも、限界を迎えようとしていたのだ。



海人君と出会ったのは、私をはじめて檜山に訪れた時だった。

過保護な両親であり、他の国へ行くことを止めて、湊から外に出ることを許さなかった。外出するにしても、大勢のお傍付きを同行させられた。

私の立場を考えれば当たり前のことで、立場をわきまえた私も文句は言わなかった。広大な城に住み、十分な食事を与えられ、きれいな衣服が着られて、両親から愛を注がれる。欲が少なかった私は、とても幸せだった。

私が笑うと、時折父や母、女中さんの悲しそうな視線を向けられることがあった。まだ何も知らない私は、理解ができなかった。

檜山に行きたいと言いつ出したのも、私の数少ない欲から来たものだった。

私はその頃、安東家の統一を夢見ていた。湊城の城下町では、安東家は百年以上も前から南北に分かれ、跡目を争っているということに

なっていた。後に私は真実を知ることになるのだが、このとき私は町人から教えられたこのことを信じきっていた。

家族は三人だけだと思っていた私は、大変に喜んでいたら覚えていゝる。同時に、なぜ家族で争うのか、心底理解できなかつた。みんなで居たほうが楽しいに決まっている。あの湊城の数ある部屋で賑やかにできれば良い。

父——名を舜季きよすえと言つた——に、檜山に行きたいと申し出たのだ。

私は、湊の使者となつた父に同行を許されて、檜山に向かう一団に加えられた。

そして檜山に赴き、城下町へと着いた。

第一印象は、やせ細つた土地だということ。日光は当たっているはずなのに、木々が栄養を十分に受けていないようだった。

それでも私は、湊の外のもの珍しさに、周りが見えなくなつていた。引き寄せられるようにふらふら歩き回り、不幸な偶然が重なつて、私は父がつけてくれたお傍付きとはぐれてしまった。

私は見事に迷子になつてしまったのだ。

追いはぎに見つからなかつたことだけは幸運だったかもしれない。私はあてもなくさ迷い歩き、そしてあの祠の広場まで迷い込んだのだ。

酷使した足を休めるために、祠の縁側に腰掛けた私は、心地良い風と丁度良い日差しに誘われて、不覚にも眠つてしまった。体を揺らされて目覚めると、背丈以上の槍を持った、自分と同じぐらいの少年がいた。

これが、海人君と初めての出会いだった。

知らない男の子に寝顔を見られるという経験したことのない事態に、動揺する。畳み掛けるように、空腹でお腹がぐーと鳴つてしまう。恥ずかしさで顔が真っ赤になるのがわかつてしまった。

すると海人君は、手に持っていた包みを開いて私にくれたのだ。中には団子が四つ入っていた。

やるよ、と差し出してくる海人君だったが、私は悪いと一度は断つた。

ひとつもいらないう意味で断つたのだが、海人君は二本の団子を取って、もう一度差し出した。

一緒に食べればおいしい。そう言って私に押し付けるように渡すと、串を両手に持って団子を頼張った。

そのときのありふれた団子は、ほっぺが落ちそうな美味しさだった。

そのあと、私は海人君に案内されて、無事に父の下へと帰ることができた。

◆ 檜山への使節団が向かうことになる、また私は同行させてもらうように頼んだ。

団子をくれたお礼に、あの男の子に美味しいものをあげようと思ったからだ。湊は貿易が盛んで、いろいろな海外からの珍しい貿易品であふれていた。選ぶのには事欠がなく、私は金平糖を持っていった。

その時、私は海人君に言われたことを思い出した。この場所は秘密にしておいてくれと言っていたことを。

私は行き先を知られないため、お傍付きを撒いてから、あの広場に向かった。

◆ それから私は何度も使節団に同行して、海人君のもとに通いつめた。

海人君の触れて、彼について知ったこと。彼は集中しはじめると、周りの声が聞こえなくなるほどに熱中する。暇があればここに来て、父親から槍術を教えてもらっている。大の大人に圧勝するほどの力持ちだ。

いつしか私が檜山に行った際には、菓子折りを持って海人君のところに行くことが目的となっていた。

いつのまにか目的が逆転して、海人君と会うことが一番の楽しみと
なっていたのだ。

「私、海人君と結婚する！」

彼という時だけは、自分の立場を忘れて、一人の女の子としていら
れた。立場を忘れた結果、口が軽くなって滑ってしまったわけだが。

だがその時の私の本心だった。海人君は珍しく慌てふためき、その
場で「大きくなったらまた言ってくれ」と答えを保留した。

海人君が私の言葉を真意に受け止めていると感じたし、彼は大きく
なったら改めて返事をする約束した。

つまり、私たちが大人になるまで一緒にいると約束したようなもの
ではないか。

海人君にそんなつもりはなかったかもしれないが、私にとっては結
婚すると肯定してくれるよりも嬉しかった。

檜山と湊、庶民と武士。この約束は、生まれも育ちも違う私達をつ
なぐ、無くてはならない絆となる。

このまま何事もなく、彼との日々が続いていけばいい。そう思っ
ていたのは、今だから言えることだ。



しかし十五歳の誕生日に、父と母からすべてが明かされた。

安東氏の巫女としての使命、つまり生贄となることを知ったのも、
このときだった。

それから私の知らなかった、たくさんの真実を告げられた。

まつろわぬ神が、どれほど恐ろしい存在かということ。

実のところ、湊は檜山と事を構えていないこと。私の努力は空回り
していたのだ。

なぜ城の広さに対して、使われていない部屋がたくさんあるのか。

それは元は安東家の者が住んでおり、今はいなくなり、使われなく
なってしまったこと。

いなくなつたと言う安東家の人、私の親族はどこに行ったのか。女

性はまつろわぬ神の怒りを静めるための生贄となったこと。男性は、その生贄となる愛する妻や娘を助けるため、兵を率いて出兵して、帰らぬ人となってしまったこと。

そして、私についても。まつろわぬ神は、安東家の女だけを生贄として欲している。安東の血を引き、なおかつ女性である人間。それは檜山と湊を合わせても、私の母、その次に私、檜山に成人してもいない者が一人だけだという。

私は二十歳にもなれないと、父と母は涙を流して、しわがれ声を絞り出していた。

私はその流れた涙が、嘘偽りの涙ではないとわかった。私はただ生贄になるだけのために生まれてきたわけではなかった。両親の愛は本物だったのだ。

それだけで、私は満足だった。



数日後、檜山軍の奮闘むなしく、母はまつろわぬ神の餌食となってしまった。母はまだ三十にも満たなかった。

私は母から巫女の任を受け継ぎ、辛く厳しい修行を課せられた。時間は忙殺され、しばらくは檜山に行くことすら出来なくなる。

十一話、独白

それまで両親には十分に甘やかされていたと自覚したのは、厳しい修行にほぼ暇なく忙殺されてからだ。母は私に立派な後継者に育てようと、厳しい修行を言い渡した。

私は自分を忘れるほどに無我夢中に修行をこなし——気がつけば最後に海人君と会ってから、一年ほど経とうとしていた。

安東氏の真実を知ってからは、檜山に訪れる理由はない。仲が良い——というわけではないが、湊と檜山はどう安東氏を後世まで存続させるか、その手段で袂を分かった。

それでも『まつろわぬ神』という強大な敵を前に、一丸となって抗っている。敵の敵は味方。私の檜山への説得は、ほとんどが無駄だった。

けれども檜山に訪れたことに、私は意味がなかったとは思わない。私はいつもどおりに、檜山への使節団改め、連絡役に同行した。そして個別行動をとると、あの祠へと向かった。

一年も音沙汰なく、海人君は私のことを覚えているか、許してくれるか心配だった。うじうじ迷っていた心も、彼を見たときには吹き飛んでいた。

海人君はいた。相も変わらず槍の鍛錬をしていた。

私は鍛錬の邪魔をしないように、そっと回り込んで祠の縁側に腰を下ろした。

私は海人君の鍛錬を観察しはじめた。一年ぶりに見る彼は、驚くほど成長していた。肩幅ががっしりと固まり、身は引き締まり、それでいて服の上から筋肉がよりついているのがわかる。体格は見違えていた。

海人君が一息つくと、こちらに気づき声をかけてくれた。私も手を振って応えると、私は心の底からほっと胸を撫で下ろした。彼は私との間には、気まずさといったものを全く感じていないように思った。一年前が懐かしく感じ、遠い昔のように思い起こされた。

海人君は変わっていない。何も知らなかったあの頃に戻れる。

そんな私の希望は、海人君が次に語った言葉によつて、早々に儂く打ち砕かれることになる。

海人君はこの私が居なかつた一年で、何があつたのかを語つた。父親が戦場に駆られて、命を散らしたこと。

そして身寄りのなくなつた自分は引き取られて、引き取られた義父の姓名をもらい、『安東』の姓を名乗るようになったことも。

海人君は、私の遠い親戚になつた。衝撃的で、しばらく言葉を失つた。彼はしてやったりという顔をしていたが、私はそれどころではなかつた。

あの頃にはもう戻れない。そう現実を突きつけられている気がして、いたたまれなかつた。海人君は一年を埋めるように積極的に話しかけてくるが、彼の内心を考えようとすると、うまく言葉が出なかつた。

安東家の一員となつたということは、安東家に執着するまつろわぬ神のことも聞かされているはずだ。そうになると、私のことも――。

時は過ぎさり、必ず訪れる。人は変わらなければいけない。

けれども私はこのとき聞くのが怖かつた。彼がそれを聞いて、どんな思いを抱いたのか。

知るのが怖かつた。



その後も私は、休暇が与えられるたびに檜山を訪れた。

ある程度自由なことをさせてもらえた私に、父は檜山に行く条件を出した。湊の巫女となる修行を優先すること。それさえ守れば檜山であろうと何処に行こうと許された。

久しぶりに海人君に会つた時、私が黙つて微妙な雰囲気の中、最初に口を切つたのは彼の方だつた。

自分は安東の姓を名乗ることになつたが、まだ安東のことは何ひとつ教えられていない、のだと。

それに自分を引き取つた義父は、檜山安東家から勘当されて、政に

は全く関わっていないという。

そんなはずがない。

勘当されたのなら安東の姓を名乗れるはずがない。即刻打ち首になるではないか。

海人君に裏を感じずにはいられなかったが、彼は必死に弁解していた。その態度からは心意に心の底から思っていることを吐き出しているようだった。

それに海人君が一年前と中身が変わっていないのだとしたら、嘘をつけるような人ではない。

私は、彼をとりあえず信じることにした。しかし頭の隅には、私が見破れないほどとぼけるのが上手いのではないかと疑念があった。

私は彼に、檜山城に行つたついでに寄っていると説明した。

もちろん嘘だ。檜山城に用事などないし、そもそも顔さえ出していない。何も知らなかった頃の自分を、澄ました表情で騙していたと思うと、顔を合わせにくかった。私は父以外の安東の人間が信用できなかった。

海人君も父と同じ例外、安東家の信用できる人に入る。ただそれも、いつ崩れるから予想できなかつた。

私は友達がない。小さな頃から大人たちに囲まれて、城の中でぬくぬくと育ち、食べることに困らない、湊のお姫様だ。

私と同年代の子供達が、遊んでくれることはなかつた。あの自分は私達とは違う、あの子は自分達とは別世界で生活している。そう思っていることだろう。

私が頼めば絶対に断らない。だがそれは自分が傷つけられるのが怖いだけであり、対等な関係ではない。私のことを『お姫様』という重い先入観で見えてしまえば、対等な友達関係など築けるはずがなかつた。

だけど海人君は私を、色眼鏡で見ることとはしなかつた。

初めて会ったときも、高価な着物を着た私を物珍しくは見ても、気遅れはしていなかつた。

私が湊の安東家の姫だと打ち明けても、彼は一言「驚いた」とだけ

言つて、接する態度を変えたりはしなかった。

それが彼に興味を持ったきっかけだったのは間違いない。

海人君は私に庶民の生活をたくさん教えてくれた。私は彼に異国のいろんな品を見せた。私達の間にはさまざまな思い出が積み重なつていく。そして海人君は、私の特別な存在になつていく。

私が家族以外に、唯一悩みを打ち明けられる人だった。私を叱つてくれる人だった。私と対等の人だった。

海人君の人柄に触れて、思い出を積み重ねていき、あるとき私はふと気がついたのだ。

私は海人君が好いている。

子を生してもいい。

この頃からはつきりと自覚し始めていた。

この胸の中の熱い鼓動は、私だけのもの。他の誰にも真似できない。

だから私は、私の事情を知られるのが嫌だった。海人君に知られて、関係が崩れるのを恐れていた。

いずれは海人君も養父から安東氏の内情を教えられ、私がどんなことをしているかを突きつけられるのだ。

知った後、海人君は私にどんな目を向けてくるのか。想像したくもなかった。



そしてついに、私の生活が劇的に変化してから、五年の歳月が過ぎ去った。

母が犠牲になつてから、五年だ。自分の番が回ってきたのだ。

未だに、海人君の口から、聞くことはできなかった。

私は、自分が思っている以上に臆病だったようだ。

生贄になることに恐れはない。それ以上に、親しい男の子に嫌われることが怖い。

いや、男の子ではないか。それに私も子供ではない。成人の儀を済

ませてから五年経っている。なのに心は子供のままだ。

海人君と会える最後の機会。檜山は軍を進める。私は父親と一緒に、山を登り、まつろわぬ神が住み着く湖へと行かなくてはならない。私は彼に尋ねた。本当に檜山との関係はない、持っていないのかと。

『神様？ なんの話だ』

海人君は、本当に何も知らなかった。

私は騙されていたわけではなかった。

「……嘘じゃなかった」

私の想像していた心配は、杞憂に終わる。だがその代わりに、秘密を墓まで持っていく様な、責任感を背負わされることになった。

まつろわぬ神の存在を、彼に教えてはいけない。

私が生贄になると言えば、軽く蹴散らしてやるよと言ってまつろわぬ神に立ち向かっていくかもしれない。

海人君が人一倍の力を持っていたとしても、人間では勝てないのだ。

最後に私は、幼い頃に約束した、先延ばしにしていた答えを尋ねた。私の中では今で色あせずに思い返される。海人君は今でも覚えていてくれるだろうか？

『……覚えている。お前が俺に惚れているという話だろう』

覚えていてくれた、これほど嬉しいことはない。

内容のほうは散々で、海人君とは喧嘩別れのようになってしまったけれど、これでよかったと私は思う。

あの約束は、私をここに縛る呪い。それに決着がつき、私は納得した。私はここで終わる。だけど彼は私よりずっと生きて、私以外の誰かと結婚して、子供を作って……。

……少し納得はしていない。だけど、後悔はしていない。

その役には、本当は私になりたかった。仕方が無いことなんだ。

「……じゃあね、海人。さようなら」

最後をわざと小さくして、私は胸の痛みを無理やり納得させた。海人には、私の分まで末永く生きて欲しい。

十二話、七頭の竜

つらい行軍だった。天に見放されているかのような悪天候だ。豪雨に暴風、いつ真上から雷が落ちてきてもおかしくない。

愛代は、まつろわぬ神の巢食う湖、十和田湖へと行くため、道を開拓しながら進んでいた。

まつろわぬ神が居座ってから百年と余年、十和田湖周辺は密林、未開の大地と言っても過言ではなかった。十和田湖から十キロは住み着いてからは住んでいる人はいない。動植物が無秩序に成長して、足の踏み場も満足にない状態だった。

安東の兵士が鉈を使って枝や雑草を刈り取っているが、同行する人数が多ければそれだけ進むのも遅くなる。愛代と舜季、二人に同行しているのは信頼のおける、最低限の兵士だけだった。

古くから建てられた、石で出来た目印を頼りに、愛代たち一向は山林の奥へと突き進む。

「愛代様、道が拓けました」

「ありがとうございます——きやつ！」

木々の隙間から、強烈な風が打ちつける。たまらず愛代の体は、ぐらりと傾いた。

「大丈夫か？」

あやうく後ろに倒れそうだった愛代の体を、舜季は受け止めた。

「ありがとうございます、お父様」

「踏ん張れよ、此処を切り抜ければ……」

続く言葉は、雨粒をのせた強い風に吹き消された。しかし愛代には、父の唇が動いたとは見えなかった。

いまだこの奥羽の地が蝦夷と呼ばれた時代、安東家のご先祖様は『蝦夷管領』という役職を賜っていたらしい。

蝦夷地と呼ばれ、奥羽がまだ開拓されていない、蛮族の住まう地だといわていた時があった。重犯罪者の流刑地としても見られていた時代から安東氏はここを支配し、先駆けとなったのだ。そう考えれば、愛代たちのしていることは蛮族を討つ行為。飛躍すれば征夷大将

軍の使命につながるのではないか。

だが愛代たちが討とうとしているのは、坂之上田村麻呂が征伐した人間ではない。気まぐれで天変地異を起こす人智を超えた存在、まつろわぬ神なのだ。

愛代は懸命に足を踏みしめ、一步一步確実に進む。

奥に立ち入るごとに、嵐は激しくなる。まるで一向をまつろわぬ神が拒絶し、追い払おうとしているかのようだった。

生い茂る茨を越えて、ついに愛代たちは嵐の壁を突破する。

「ついでで……」

あれだけ荒れ狂っていた嵐が、ぱったりと止んだ。迷いの森がなくなり、空の開けた場所に出た。

そこにあつたのは、大きな湖。遠くに見やる端がなければ、海と見紛うほどの面積を持つ、十和田湖という名の湖だった。覗き込む湖面は顔を映すほど澄んで美しく、景色はおもわず深呼吸をしてしまうほど開放的だった。

愛代たちが十和田湖の景観に思わずも見惚れる中、一度来たことがある舜季は眺めるのもそこそこに、鋭い目で周囲を見渡した。

忘れもしない五年前、舜季はまつろわぬ神を前にして、立ちすくむことしかできなかつた。ついににはうつむき、まつろわぬ神に字軍を蹂躪されるのを黙って待つことしかできなかつた。

舜季がこうして生きて、またここに立っているのは運がよかつただけでしかない。たまたま神の手を逃れ、無様に生き残ってしまったにすぎない。

ついに万の生命がおそれる、大地の支配者が顕れる。

湖面が、ゆらりと揺れる。次の瞬間、一向は、湖の中から山が現れる錯覚に陥った。

それは山岳を思わせるほどの巨躯を持つ化物だった。水が引いて現れたその姿は、びっしりと全身が苔や藻に覆われて体表が窺えない。なにより目を引くのは、八つに伸びた長い首。それぞれの頭に生える角は、絶対強者の竜の証。

愛代の前に現れたのは、八つ首という異形の姿を持つ『まつろわぬ

神』だった。

「我が寝所に無断で入りし、小さき者どもよ。雨と風の拒絶を受けてもなお、ここに立ち入ったということは、貴様等が此度の贄だな？」
八つの首のひとつが、最もまつろわぬ神に近かった愛代の目の前まで来た。

二対の眼光が、愛代を観察する。まつろわぬ神の顔の大きさは、愛代の身長よりも大きかった。愛代はその巨大な眼に射すくめられ、完全に萎縮してしまった。

「畏れながら、神よ」

一度姿を見たことがある舜季が、愛代とまつろわぬ神に割って入る。だがその声は、わずかに震えていた。

「それよりも先に、御身に捧げるため、多量の酒を運んでまいりました。大樽八つ、十分に酔える量かと。どうか胃にお納めください」

舜季は目配せすると、後ろからついてきた兵たちが酒樽をまつろわぬ神の前に並べた。ひとつの大きさは、四人がかりで運ばねばならぬほど大きかった。

「気が利くではないか。……どれ、まずは一口」

チロチロと蛇の如き細長い舌を伸ばすと、まつろわぬ神は酒を舐めた。表情は変わらないが、まつろわぬ神の前に居てかかる重圧が、心なしか軽くなったような気がする。気に入ってくれたようだ。

金縛りにあったように動かなかった愛代だが、竜に視線をはずされ、ようやく動くことが叶う。しかし恐怖はしつかり心に刻み込まれてしまった。愛代は震えながら、静かに頭を垂れた。

策は順調に進んでいた。

舜季がたてた策はこうだ。このまま酒を浴びるほどに飲ませて、まつろわぬ神を泥酔させる。頭の回転が鈍ったところで、この八つ首の竜の狙っている愛代を逃がす。

愛代が逃げる時間は、舜季たちが稼ぐ。すぐにあの巨大な顎で食い破られてしまうだろうが、同時に別の方向に向かえば逃げられる時間は増えるはずだ。

愛代が、湖の反対側で待機しているはずの檜山の本軍まで逃げ切れ

れば、愛代の命は助かる。

舜季は、自分自身が助かろうとは思っていないかった。

「ところで」

酒を舐める頭とは別の首が動き、湖の反対側を眺めやる。檜山の本軍がいる方向だ。

いやな予感がする。舜季は冬でもないのに寒気に襲われた。

「向こう岸にいる虫どものことだ。我が版図に我が物顔で入りこみ、居座っておる。贅を喰らうた後に潰してやろうと思うのだが……。はて、もしや奴等は、貴様の手駒か？」

また別の首が舜季の前に寄り、顎を開いた。口内には鋭い歯が無数に並び、鉄より硬く、岩すら噛み砕いてしまいそうだ。

この場所から反対岸の檜山の本軍が見えるあたり、このまつろわぬ神には人間では図りえない『眼』を持っているのだ。

「偽りの事実を吐いてみよ。その時は頭蓋を砕いてくれよう」

七首の竜は剣歯をちらつかせ脅してくる。人のことは微塵も理解できないまつろわぬ神だ、言ったからには人一人殺すことにためらわないだろう。

舜季は神への恐怖から顔を伏せ、声を絞り出した。

「いいえ、私めには存ぜぬことです。おそらく、私達湊の者たちではなく、檜山の軍勢でしょう」

だが舜季はそんな威圧にも耐えた。平静を取り繕い、顔を上げ、嘘を吐いた表情は努めて冷静だった。

焦りからが乱れ、心臓の鼓動が激しい。まつろわぬ神に聞かれないことをただ願った。

しばらくそのまま舜季と七首の竜の間に、沈黙が流れる。まつろわぬ神の重圧から声を発せない愛代とその他が固唾を？んで見守る中、先に動いたのはまつろわぬ神だった。

むき出しの牙をしまい、舜季の前から離れる。

舜季は安堵し、肺の空気を大きく吐き出した。

「語るに落ちるとはこのことだな、下郎が」

その言葉が耳に入った瞬間、舜季はその場から大きく飛びずさつ

た。

ほぼ直感に頼つての行動だった。それは正解で、彼の命を少しだけ延ばすことになる。

つい一瞬前まで舜季がいた場所を、地面ごと竜の首が抉り取った。すぐさま舜季は体制を立て直す。現状にようやく把握する。しかし何故攻撃されたのか飲み込めない。

「軍勢と言ったか、貴様。我は人間がいると言っただけで数は言っていないぞ」

遅すぎる得心だ。言葉を選んだつもりだったが、自分は思っていた以上に緊張し、ぼろを出してしまったのだ。

「前言は曲げぬ。我を謀ろうとした罪、此の場にいる総ての命をもつて償え」

「逃げろ、愛代！」

真っ先に浮かぶのは、愛娘の生存。呆然といまだ立ち尽くす愛代に、とっさに叫んだ。



父の声ではっと我に返り、まつろわぬ神に背を向けて、一心不乱に駆け出した。

「危ないッ！」

その時、ひととき大きく響いた声とともに、愛代の背中が押された。押したのは、酒樽をここまで運んできた男の一人だった。

愛代のすぐ後ろで、竜の牙がかみ合わさる。

押された愛代は両膝と手をつく格好となり、押した男は上半身と下半身がなき分かれた。鮮血が飛び散って、愛代の背中に熱いものがかかる。

おそるおそる後ろを振り向こうとする愛代に、父親の叫び声が背中を叩いた。

「振り返るな、走れッ！」

今度は声に押されて、あわてて立ち上がる。草木が生い茂るでこぼ

こ道を走る。愛代はわき目もふらずに、竜の首が届く範囲を走り抜けた。

「走れッ、走れッ！」

父の叫びを背中を受け、愛代は走った。枝で足を切つて血が出て、突き出た石につまづき足首をひねつても。

愛代は涙をこらえて走りつづけた。



「……ふん、不味い」

そう言つて竜の頭のひとつが、赤い何かを吐きとぼした。それは人だったもの、口の中でミンチにされ、ただの肉塊へと成り下がっていた。

六つの頭それぞれが、人間を口の中で咀嚼している。あたりには鮮血が飛び散り、野草や木の葉や枝につき、赤く染め上げていた。そこはまさに地獄絵図だった。

だがこれは地獄の端にすぎない。このまま、まつろわぬ神をのさばらせれば、もつと大きな規模で地獄が出来てしまう。斬られ、潰され、なくなり、穿たれ、喰らわれる。

五年前は、森が人の血肉の色で染まった。戦でもあれほど悲惨な光景は見ない。舜季の頭には今も忘れられずに、その光景が刻み込まれている。

死肉が臭わす異臭だ。胃からこみ上げてくるものを口を押さえて飲み込みながら、ゆつくりと迫る竜頭に立ち向かった。

あの光景をまた生み出さない、そのためには。

「神よ、なぜこのような、人を喰らうのです!? 安東家の子供は、もはやあの娘しか残っていません。どうして安東の人間だけを差し出させるのです」

「知らぬ」

「……は？」

舜季は返されたことが一瞬理解できず、呆けた顔をさらす。

「我は『女子を生贄として捧げよ』などとは一言も出しておらん。そこから言い出したことだ。よい寢床を見つけたので、この辺りの人間を追い出した。そうしたら人の子がひとりだけで、此処に現れた。それからというもの、五年ごと白装の女が現れる。……我の寢所に踏み入ったものは、何者であろうと喰らう。ただそれだけの話よ」

舜季は衝撃を受け、頭の中が真っ白になった。

それが真実なら、安東は思い違いをしていた。安東氏の先祖は生贄を送り、それ以降はまつろわぬ神による被害が無くなった。それが怒りを静めたと勘違いして、その勘違いが今の安東家まで伝わってしまったのだ。

なぜ今まで気づかなかったのだ。そう思っても後の祭りだった。

「それだけか？　ならば死ね」

さび付いた扉のようにゆっくりと顎を開く。

舜季は足元を見る。左足が、かかとかから先がなくなっていた。食べられたのだ。これでは満足に立つこともできない、走るなんて出来るはずがなかった。

仲間の血液で光った竜の口内が迫りくるのを眺めながら、祈ることは、愛娘が生きること、ただそれだけだった。

十三話、到着

「おーい、生きてるかー?」

血まみれで倒れている男は、気絶していた。海人は容赦なく冷水をぶっかけた。

あわててまぶたを開き、ぎよろりと辺りを見渡す男。名は、たしか舜季きよすえとか言ったか。愛代の父親であるはずだ。

海人は曖昧な記憶を呼び起こす。

「……愛代は?」

前に聞いたのとは随分と違う、優しい声色で弱々しく呟いた。

第一声にそれか。海人はきよとんと呆けた。

それほどに娘が大事か。アテルイの言っていた、まつろわぬ神の狂信者は見せ掛けの演技だった。この今の姿が素、我が娘の安否を心配する父親の顔こそが本性なのかもしれない。

「お前が第一生存者だ。この嵐吹き荒れる未開の森で最初に会ったのがお前だ。まだ愛代は見つけていない」

「だったら早く愛代を。……愛代は、死ぬべきじゃ」

舜季は血を吐き出した。

「おいおい喋るな、死ぬぞ。それになんて言っているか聞こえねえよ」
まつろわぬ神が引き起こす嵐は、絶えず荒れ狂っている。あの七つの頭を持つ竜に嵐を起こす気はない。嵐の神性をもつ、意識しなくとも起こってしまうのだ。あの湖は例外で、いわば台風の目だった。

海人と舜季は現在、森のどこか、木と崖に挟まれた空間で嵐の風雨を凌いでいる。

ごうごうと木々に風が打ちつける音が響いて、舜季の声を掻き消す。不自然に成長した木々は葉と枝を揺らすだけだ。嵐に相当鍛え上げられたようだ。

死ぬ前に、愛代の居場所を聞き出さなければならぬ。

海人は、舜季の全身を上から浴びて観察する。

頭、胴、両手はちゃんとしている。だが、胴体から下がなかった。服の端から見るに、何かに噛み千切られた。下半身を丸ごと食いちぎ

られたのだ。

それから上半身が、崖の上から落ちた。

下半身が食われても失血死していない。男が魔術か何かの不思議な力で血を止めて、今まで生きていられたのだろう。

海人には感知できなかったが。

「愛代はどつちに行った？」

海人は、舜季の口元に耳を寄せて問いかけた。

「湖の……反対方向。檜山の本隊がある」

それだけ聞ければ十分だ。海人は耳を離して、立ち上がる。そうして近くの木に立てかけた、愛用の槍を手に取った。

「何か言い残すことは？」

槍を、舜季の首元にあてがった。

何らかの方法で生き永らえてきた命だったが、それも尽きようとしていた。ならば一思いに頭を潰し、生の柵から開放してやる。海人からの情けだった。

舜季の唇が動いた。だが風の音で聞こえない。

仏に祈りでも済ませたのだろう。祠で顔を合わせた時はあれだけ激昂していた海人だったが、ふたたび会ってみても怒りが沸いてこない。

自分を縛り付けたことには少しだけ腹が立ったが、この男が子煩悩だと知ればこの怒りも霧散するというもの。

こうして舜季の命を掌に掴んでも、海人には何の感動もわかかなかった。

海人がまさに槍を振り下ろそうとしたその時、舜季がまた口を動かした。

「愛代を、頼む」

ちょうどその時だけ、風と雨が止み、海人には声はつきりと聞こえた。

直後、あたりに轟音が鳴り響く。落雷の音だ、かなり近い。

海人の手から、家業でよく知った感触が伝わってきた。

雷が、目の前で落ちた。重蔵は目をしばたかせて、落雷のショックから視力を回復させる。

落雷に直撃した者はいないようだ。仁実も無事だ。目の前にあつた木の上に落ちたようだった。

重蔵は焦げ屑となった木を見下ろす。この上からまた木を養分に、新しい木が生えるのだ。森の生命力は強靱で、重蔵には恐ろしくもあつた。

海人は無事だろうか。人一倍の怪力を持つ海人でも、雷が落ちれば命を落としてしまう。

重蔵は、二人で話したいと言っていた海人の元へと向かった。

「海人」

そこでは惨憺たる光景が広がっていた。

鮮血が派手に飛び散り、舜季だったものの首から上は跡形もなく消し飛んでいた。そこから先へと血が飛散しているので、首は確かにあつたのだろう。

そんな中で、身の丈はある長槍を片手に立ち尽くしていた海人は、こちらに気づくと振り向いた。

「愛代の居場所は聞き出せたぞ。悪いが手加減できず、首は残らなかった」

「そうか。なら急ぐぞ。檜山の軍でも、いつまで持ち堪えられるかわからねえ」

重蔵はちらりと視線を落としただけで、死体に踵を返した。海人も木々を掻き分けて後に続く。

埋めて埋葬してやることもできたが、あいにく時間がなかった。それに彼は檜山を裏切った身だった。他より少し親しくはあつても、重蔵が行う気にはなれなかった。

家族の絆を大事にして、他よりも優先していた。

草木を掻き分けて開けた場所、船員たちが待機している場所へと戻ってくる。

「兄様！」

仁実が海人の元に駆け寄る。海人はすり寄ってくる義妹の頭を撫でると、感情がなかった表情に笑顔がともった。海人が笑うのを見てか、仁実はしぶしぶながらもそれを受け入れた。

「お前達は逃げ道を用意しろ。できるだけ素早くこの森を抜けれるように道を作れ」

「わかりました。お頭は」

「俺は海人のお守りだ。こいつは重要なところで詰めが甘いからな」
「必要ねえよ」

海人は拗ねたように悪態をついた。重蔵は大口をあけて笑った。

「がっはっはっは。俺がいなかったらお前、どうやって此処まで来るつもりだったんだ？」

重蔵は海人の背中をバンバン叩いた。

「いたっ、いてえよ親父。それは親父に聞こうと思って……」

「俺は会ったときからずーっと『人を頼れ』って言ってきたはずだぜ」
海人は自分ひとりだけで何でもできる分、他人を頼るということを知らなかつた。自分ひとりだけで出来ることは悪いことではない。だが賢い生き方とは言えなかつた。

「人を頼るほうがずっと楽だ。たった一言、『頼む』といえれば、力を貸してやる。今更俺達に何の隠し事があるっていうんだ。俺達海賊団は家族だ。家族に力を貸してくれて言われて、貸さない訳がねえだろ。……そうだよな、お前等！」

『水臭いですが、若頭！』

「に、兄様、私も全力でお手伝いします！」

「……おう！ よろしく頼む！」

いつもの調子に戻ったのようで、重蔵は胸をなでおろした。

策とも言えない稚拙なものだったが、今回の兵法には海人とその刀が必要不可欠だった。

重蔵の掛け声により、海賊団の団員たちが森の奥に散っていく。

「海人。あの神妙あらたかな剣、なくしちやあいねえだろうな」

「ああ、ここにしつかり」

海人が懐から脇差を取り出し、腰の大小の刀を叩いた。

「肌身離さず身につけておけよ。まつろわぬ神を傷つけられるものは、それだけだ」

「分かるのか、親父には？」

「そのただならぬ気配を感じれば、そのアテルイとやらの言葉も真実味を帯びるというもの。と言うより、逆にお前は何も感じないのか？」

「私も感じます」

「そうか……」

海人は脇差を見つめ、再び懐に戻した。

「仁実、お前はついてきてもいいが、絶対に愛代と一緒に逃げるんだぞ」

「そのようなわけにはいきません！ 私だって術のひとつや二つはできます。必ずや兄様の力に」

「だめだ。……この際だ、はつきりと言わせてもらうが、お前がいると邪魔なのだ。お前はまだ大人でもなく、成長しきつてもいない。お前がいては、俺が全力で力を発揮できないんだ」

仁実が術を使えると教えられたとき、海人は驚き、そして少し頼もしさを得たものだ。しかし助けに行くのに、助ける対象を増やしては意味がないのだ。

「仁実、ここは海人の言うとおりにしてやれ。あの刀を止め処なく、思いつき振り回せるようにしてやるのが、俺たちの役目だ」

「……わかりました。兄様、必ず戻ってきてくださいね」

それでも不安な表情をする仁実に、海人は力強く答えた。

「おう、まかせとけ！ 俺が一人で行って、帰ってこなかったときがあったか？」

海人はしゃがんで仁実の目をまっすぐに受け止めた。仁実の頭に手を置き、ぐしゃりと撫でる。

「ないです。兄様はいつも、平気な顔をして帰ってきました」

「俺を信じる。絶対に、生きて帰ってくる」

今度こそ、決意した顔でうなづく仁実。海人もまた笑顔で頷くと、

仁実から手を離して立ち上がった。

「これからまつろわぬ神を倒す」

「無理だと感じたら迷わず逃げろ、海人。ひとりでも多くの命を救う、それが第一だ」

「わかつてるって」

その受け応えの様子を見て、重蔵もまた、海人の行く先を憂える。海人の視線の先には話にしかな聞かぬ、まだ見ぬまつろわぬ神があった。



脚のあちこちに傷をつけながらも、愛代はなんとか檜山の本軍が駐屯している場所までたどり着いた。

軍配を振るっていたのは、檜山に行ったときに何度か顔を合わせたことがある檜山安東家の男だった。

話は父親方からついていたらしく、快く保護してくれた。

愛代は安堵した。

根拠のない信頼が、心を緩ませた。

だが、それもほんの一時の希望にすぎなかった。

大丈夫、安心してくれ。もう怯える心配はない。魔物は私達が倒す。男性はそう言ってくれた。大人の余裕と経験から来る威厳を感じさせる男だった。

だがそれも、ついさつきまでの話。まつろわぬ神の姿を目にすると怯み、なんとか全軍を鼓舞して突撃させるも、片っ端から宙を舞う自軍の兵を見て、焦りを感じているのが丸分かりだった。

一万以上の兵を纏め上げるその能力は本物だったろう。戦場に出れば稀代の名将と名が響いただろう。だが相手が悪かった。相手は、疲れの知らないまつろわぬ神だ。

あの七頭の竜にとって、人を殺すなど徒労に入らないのかもしれない。例えるなら人が蟻を踏みつけるが如く、それほど容易いことなのだ。

物量に任せた策は、疲れを覚える生物になら有効だ。休む暇も与えずに攻撃し続けなければならない。だがまつろわぬ神には生物の範疇に収まっているのか。はなはだ疑問だ。

愛代は目の前で繰り広げられる地獄絵図を、本でも読むかのように、第三者の視点で眺めていた。

どうしてそんなことができるのか。それはまつろわぬ神は倒せないと理解してしまったか、目の先で人が肉塊に変わるのを見て脳が現実を拒否してしまったか、逃げられないと悟り諦めてしまったからか。

総軍の指揮を執っていた男は、愛代の眼前で死んだ。いろんな液体で顔を汚しながら背を向けて逃げ帰り、後ろから迫ったまつろわぬ神に喰われて果てた。胃袋の中だ。馬に乗っていたので、背中を抉り取られた馬だけが倒れて残っている。

呆然と立ち尽くし、ずりずりと体を地面に擦り付けながら迫る異形の怪物を、愛代はじっと眺めていた。

「どうした、人の子よ。逃げないのか」

七対の瞳が愛代を見据える。まつろわぬ神に射すくめられて、今にも恐怖で体が震えそうだった。

愛代は震えそうになる体を抑え、気丈に振舞った。竜の視線を真っ向から受け止めて、声を張り上げる。

「私が狙いなのでしよう。私はもう逃げません。その替わり、何の罪もない人を襲うことはやめなさい」

その時、まつろわぬ神の頭のひとつから、口から直線状になにかが放たれた。

愛代の足元に当たり、地面を盛大に抉り、大きな穴を開けた。愛代は反射的に腕でかばうが、飛散したなにかを浴びてしまう。

それは水だった。水は土と交じり合って、愛代は泥水を被ってしまった。

「礼儀も弁えぬ小娘が！ 何故貴様ごときの頼みを聞いてやらねばならん。我より搾取されるだけの存在が、その罪、私の腹の中で省みることがいい！」

異形の獣はそう言うのと幾百人もの血でまみれた牙をむき出しにし、愛代に迫る。

それを聞いて愛代は、その場で額を地面にこすり付けた。竜の吐き出した水が土と混ざってぐちゃぐちゃになっているが、それでもお構いなし。土下座の姿勢で必死に頭を下げた。

「どうか、気をお静め下さい！ 私の身はどうなっても構いません。ですがどうか、これ以上何の罪もない無垢な民を殺すことは、おやめ下さい！」

愛代は決死の思いで頼み込んだ。

先祖代々伝わる忠告を疑わず、素直に受け入れるべきだったのだ。それも後の祭りで、たくさん命を散らしてしまった。ここで自分の命は潰えてしまうが、領主として一人でも多くの命を救うべきだ。

だがそれも、まつろわぬ神には届かなかった。

「ならん、ここで死ぬ」

ついにまつろわぬ神は首が届く距離に到達すると、自分の一人を差し向けた。

時世の句も読ませてくれない遠慮のなさ。もはやここまでと目を瞑った。

その時、愛代の脳裏には現在までに経験してきた人生が、走馬灯のように流れていった。海人と遊んだ良い思い出も、両親に叱られた辛い思い出も、瞼の裏に浮かんでは消えていった。

そして最後には、海人の顔が思い浮かんだ。

「……………え？」

最後は思い人のことを考えて果てよう。そうしてその時を待っていた愛代だが、一向にその時が訪れない。

もう既にここは黄泉の国で、痛みを感じる暇もなく死んでしまったのか。おそろおそろ瞼を開けると、そこには横に倒れた世界が広がっていた。

いや、違う。世界が倒れているのではない。私気がつかないうちに、地面に倒れていたのだ。

足元には竜の首が土を食べていた。愛代は咄嗟に竜の首を避けて、

一息に右横に飛んで倒れたと、ようやく脳の理解が追いついた。

「……解せぬな。なぜ我が牙を逃れた、死すべき運命の子よ。死ぬ覚悟はできたと言っておきながら、何故足掻く」

七つの竜が不快に呟く。

愛代自身にも分からなかった。海人の顔を睨に浮かべていたら、ひとりでに脚が動いていたのだ。

海人の槍を鍛錬している真剣な顔、私に外の世界を話す得意げな顔、ふとしたときに零す笑った顔。

何度も自問するうちに、愛代はようやく気づいた。

自分は海人が好きで、好きで仕方がなくて、まだ一緒にいたい。一緒にこの先も歩みたい。婚姻を結んで、やがて子供ができて、幸せな家庭を築いて、子供が大きくなって独り立ちして、どちらかの寿命が尽きるまで、ずっと一緒にいたい。

生きたい。

まつろわぬ神の言うとおりで。口では死ぬ覚悟ができたといっても、生きたい。やりのこしたこと、この世の未練がやり切れないほどにたくさんあるのだ。

愛代は立ち上がろうと脚に力を入れる。激痛が走った。竜の頭を避ける時に捻ってしまったのだろうか。立つことができずに、また地面に倒れこむ。

それでも諦めずに、今度は両腕を使って地面を這う。

愛代の姿は、泥と赤い血でぐちゃぐちゃの酷い有様だった。それでも必死に腕を動かし、七首の竜から距離をとる。

愛代は死んでしまう最後の時まで、生きることが諦めなかった。

「そこまで無様を晒しておいて、なお死にたくはないと死を恐れるか。……醜いな、人の子よ。いずれは訪れる結末、遅いか早いかの違いではないか。私の住む世界に、醜き虫は不要だ。山を下り、檜山の集落を洗い流すでしょう」

まつろわぬ神は既に愛代を殺した後のことを考えていた。確かにこの状況で愛代が生き残ることは絶望的で無きに等しい。

竜の首がずるりと動き、愛代を捉える。

それでも、私は、生きることが諦めない…ッ！ 命の危機を直感で感じ取っても、後ろを振り向かない。愛代は前へ前へと前進し続ける。

竜の頭が大口を開け、首が伸びる。ついに食べられてしまう。

その時だった。硬いものと硬いもの、金属が強く打ち合ったかのような甲高い大きな音が、森に鳴り響いた。

「……………え？」

予想外の音に、愛代は思わず振り返る。そこには、槍をつつかえ棒の如く上下の歯にひっかけ、竜の頭を抑える人の姿があった。

間違えるはずがない。それは今までずっと愛代が思ってた止まない、脳裏に描いていた人物その人だったからだ。

どうしてここにいるの？

「海人……………」

「間一髪。遅くなったな、愛代」

夢でも見ているのだろうか。とうてい信じられない海人の姿に、今度は天国で、かつこいい海人の姿を幻視しているのだと愛代は思い込んでいる。

「何……………？ 何者だ、小僧？」

首を引っ込めるまつろわぬ神に向かって、海人は言い放った。

「重蔵海賊団副船長、安東海人。だが今は、でっけえ蛇を退治するため陸を越えてやってきた、唯のひとりの人間よ」

十四話、脆弱

ついに対峙した、海人とまつろわぬ神。

まつろわぬ神の方は突然湧いた障害だ。だが海人にとっては願ってやまない、父から教えられ必死に鍛えた槍の腕を振るえる、かつてない敵だった。

ついでに背中の愛代を助ければ、不幸を被る者はいなくなる。海人は背中後ろに隠した愛代に向かって、軽く声をかけた。

「よう愛代、しばらく会わないうちに随分化粧が濃くなったな。すっぴんのほうが俺は好きだったかな」

「す、好きだなんて、そんな軽々しく……!」

「つつかかることはそこじゃねえだろ。ともかく何事もなくてよかつた」

「この姿を見て、本気でそう思ってる?」

海人は後ろをちらりと振り向くと、愛代の全身を眺めた。泥と返り血で顔が汚れて、下町の貧民よりも酷い有様となっていた。

「随分とやつれた顔になったと思ってるさ。そんなに俺に断られたのが衝撃で、そこまで性根が腐っちゃまったのか?」

「そんなことは——きやッ!」

言い終わる前に、海人は愛代を抱きかかえてその場から飛びずさった。一足違いで竜の頭が二つ、元いた場所を通過した。獲物を見失い空を切った竜頭が、地面を食う。

愛代を抱えて飛び上がった海人は、竜の首が届かない場所に一飛びで降りた。

「か、海人……」

海人の腕に収まった愛代が、気遣うように海人に声をかける。

「大丈夫だ。……取り込み中だ。神のくせに、場の空気すら読めないのか?」

「私の威光を目にしておきながらその蛮行、許しておけぬ」

「つまり無視されて怒ってるのか? 神様つてのは気が短いんだな」

「黙れ!」

七頭の竜は激昂し、ドンと体を打ちつけ地を揺るがした。

「我が手心を加えていなければ、あつけなく散るだけの存在が……どこまで我をコケにする！」

「じゃあその本気とやら、見せてもらおうか。ミミズ」

海人が挑発する。それが引き金となり、ついに七頭の竜は理性の欠片もない、獣の如き声で咆哮した。

思わず愛代は耳をふさぐ。海人はまつろわぬ神に背を向け、わき目も振らずに全速力で走り始めた。

さつきの七頭の竜の前で見せた威勢はなんだったのか。あつけに取られる愛代だが、自分を追ってきた時よりも何倍も速く迫る竜に、恐怖で言葉を封じられてしまう。

海人は右へ左へ時には大きく跳躍し、森の障害物を避けなければならぬ。対してまつろわぬ神は木だろろうが大きな岩だろろうが構わず壊して突き進んでくる。愛代は海人にしがみつき、必死に恐怖に耐えた。

竜頭のひとつが、大きく顎を開いた。

「海人危ないッ！」

「ッ！」

愛代が海人の耳元で叫ぶ。海人は即座に右に飛び退いた。次の瞬間、竜の口から水鉄砲が飛び、海人が立っていた大岩を砕いた。

愛代が警告しなければ、海人は愛代もろともお陀仏だった。

「助かった、愛代。後ろが見えない、そのまま頼む」

「頼むって！ 危ないッ、今度は二つ!!」

物申しようにも、次から次へと水鉄砲が飛び、封じられてしまう。海人は山の複雑な地形を生かし、まるで自分の庭のようにこれを避けた。猿のように木から木に飛び移り、人一人抱えながら森を駆け抜ける。

不意に、海人は愛代の耳元で大声で囁いた。

「愛代、そのまま聞いてくれ。俺がお前と結婚してくれたら、どんな事でもしてくれるって話、覚えてるよな？」

「ッ!? げ、ごほっ！ み、右！ 右からくる！」

緊張して溜まった唾を飲み込んだちようどその時、海人からそんな話をふっかけられた。唐突なことで気管に詰まって、愛代はむせてしまう。

海人は危なげなく水鉄砲をかわし、愛代は横目で恨めしそうに睨んだ。

「前に返した答えを、取り消させてほしいんだが。愛代、俺と結婚してくれ」

「どうして、今になって」

「愛代が居なくなつた時の喪失感と、お前が生贄にされる、そう舜季に教えられた時の怒りでようやく気づいたよ。——俺はお前が好きだ。結婚してくれ」

「違うわよ！　今はそんなことを言っている場合じゃないでしょ！」

「違わない、今のこの状況に十分関係ある話だ。答えなきや逃げ回り続けなきやならん。……で、どうだ？　俺の女になるのか、ならないのか」

愛代は声をつまらせた。雰囲気も何もあつたものじゃない。もつとこう、想像では結婚の申し出は甘い空間で行われるものだ。貿易で仕入れた西洋の春本で読んだ。こんな命の駆け引きをしている状況で行われるものではないはずだ。

これではまるで、未練ではないか。

高鳴る心の臓を落ち着かせながら、いつか使いたいと心に留めておいた言葉を吐露した。

「わたしも好きよ、海人と結婚したい。……どう？　これでどうなるの？」

「よっしゃ、言質とつた！　愛代愛してる！」

直球すぎる愛の告白に、愛代はキツと海人をにらみつけた。こんな状況で言わないでという抗議と嘆願だったろうが、顔が真っ赤に染まり、本意ではないのは誰から見ても明らかだった。

「隙ありッ！」

そんな愛代がまつろわぬ神から目を離し、海人の方を向いた一瞬の隙を突いて、自分の唇をこちらを睨む可愛らしい顔の唇と重ねた。

いわゆる接吻である。やわらかい感触。

ほんの一瞬だけの接触で、海人は唇を離した。まるで何事も起きてないとはかりに前に向き直った。

ぱくぱくと口を開閉させて爆発寸前の愛代だったが、目の前に現れた光景を見て、さーつと顔を青ざめた。顔色が赤から青に変わっていき様は海人にはとても面白かったのだが、愛代には冗談にできなかった。

前方では切り立った崖が大きく口を開いていた。広がる景色からは、人が落ちたら五体満足ではいられないことが容易く想像がつく。

道を逸れるか減速しなければいけないが、後ろからはまつろわぬ神が巨体で地を滑って迫る。トラックに跳ね飛ばされるほどの衝撃を受けてしまうだろう。

だから海人は愛代の想像を超えるかのように、減速するどころか更に加速した。

「しっかりと捕まってる！」

海人の脚が地面から離れて、二人は崖から飛び出した。

愛代はぎゅつと目をつぶる。頭の中では地面に激突する未来が浮かんだが、まず来たのはぐいと後ろに引っ張られる感覚だった。自由落下のときに感じる、無重力状態での内臓が引っ張られる感覚ではない。

直後に感じたのは、背中からドンと押される感覚。これはまつろわぬ神が水鉄砲を放って、地面に落ちた衝撃だとわかった。だが投げ出される感覚はしても、引っ張られる感覚も健在だった。

それもそのはず。海人の手には、いつの間にか持ったのか、密林に生えるような長い蔦が握られていた。

ぐるりと大きく円を描き、右の崖に海人は着地した。

愛代が目を開けたときには、崖の下からまつろわぬ神の断末魔が聞こえていた。



海人と愛代の元に、遅れて重蔵と仁実が駆けつける。

海人は、抱きかかえていた愛代を脚から降ろす。愛代は、同じ安東生まれの二人に駆け寄った。愛代は二人のことを知ってはいたが、そこまで深い仲ではなかった。最後に顔を合わせたのは、五年前の討伐隊が編成される前。挨拶程度はしたものの、こうして会話するのは初めてだった。

「……重蔵さん、仁実さん」

「よっ、おめでとさん。生きてるってことは、そういうことなんだろう？」

「……」

仁実はまだ半目で愛代をじとつと睨みつけた。

仁実はまだ納得しておらず、自分是不機嫌だぞと全身で示していた。義兄の前では意識の外にできたのだが、事の元凶が目の前に現れては面の皮もはがれてしまった。

「おら、挨拶しろ仁実」

「うう……お久しぶりです、愛代さん」

重蔵はお構いなしに、仁美の頭を掴んで頭を下げさせた。仁実は身内にはとことん弱かった。重蔵よりも若いとはいえ、彼女は湊安東家の姫様である。そうなれば重蔵の最初の一声も許されるものではないのだが。

とはいえ、ついさつきで状況は変わった。愛代は海人と夫婦の契りを交わしたことで、先ほど起こったことすべてが二人に伝わっていると悟った。

「ちよつと海人！……あれ？」

暴露したであろう海人に文句を言おうとした愛代だったが、その張本人がいらないことに気づく。後ろを振り向いても崖からの景色が見えるだけだ。

するとつい今までへらへらとしまりない顔で笑っていた重蔵が、急に締まった真剣な顔で言った。

「海人はもう行った、そういう手はずになっている。俺たちはいち早くここを離れて、山を下る。姫さんも行くぞ」

「不本意ですが、あなたを生かして連れて帰れと兄様からのお達しです」

仁実としては海人の力になりたかったが、今の自分は足手まといになるだけ。拳を握って我慢していた。

「ちよ、ちよつと待つてください！ 海人はどうなるんですか!?!」

愛代は尋ねたが、海人がどこに行ったか分かっていた。一緒に逃げないのならば、まつろわぬ神の元に向かったに決まっている。二人の表情で確信した。

「助けに、行かないのですか?」

「俺たちがいても邪魔になる。それに無策ではない、竜も倒せる手段はある。心配しなくても、海人は必ず帰ってくるさ」

重蔵が説き伏せようと言った。だがまつろわぬ神の恐怖を目の当たりにしてきた愛代には、それが甘い憶測だとは思えなかった。

「そんな……。重蔵さんは、まつろわぬ神を、あの化け物を直に見えないから、そんな憶測で言えるんです！ まつろわぬ神を倒せる手段があつたとしても、海人が対峙して平常でいられるわけがありません！」

「姫様、あなたは海人と一番付き合いが長い。海人について、俺と仁実には知らないことも多いでしょう。ですがあなたは海人の『海賊としての顔』を知らない。海人は自ら先頭に立ち、兵をばっさばっさとなぎ倒す。まさに一騎当千の働きをします。海人ならば必ずや成し遂げてくれるでしょう——神殺しという偉業を」

「いいえ、違います」

重蔵の駄々っ子をあやすような声色を、愛代はばっさりと一刀両断した。愛代にはそう断言できるだけの明白な根拠があつた。

それは自分が海人に抱きかかえられた時のこと、海人とこの身が触れて感じた変化だ。

「海人は確かに、わずかに震えていました。表には出さなくても、恐怖でまともな思考などできません！」

それを聞いた重蔵は、考えるそぶりでいかばかりか間を開けて、こ
う答えた。

「そうだとしたら、海人は冷静ではいられないでしょうね」

十五話、不死

海人は、七つの頭をうごめかせる竜の元へ舞い戻ってきた。竜の様子が、なにやら急いでいるのは気のせいではないはずだ。

さんざん振り回された原因が自ら目の前に現れ、まつろわぬ神は溜まった感情を爆発させた。

「そちらから命を捧げに来るとは、手間が省けるといふもの。だが、ただでは殺さん！ あらゆる苦痛でなぶり殺し、一族郎党皆殺しにしてくれる。たとえ逃げようとも、地の果てまで追い詰め胃の中に収めてやる」

七頭の竜から発せられる、目に見えぬ威圧感が高まった。

海人は槍を構えた。だが海人は、アテルイに単なる鉄の槍ではまつろわぬ神を傷つけられぬ、という忠告を思い出した。

海人は仕方なく槍をそこらに放り投げ、腰の大きい方の刀、『大通連』を抜いた。

その時、竜の頭のひとつが、放り投げられた槍の方に注意を向けた。他の六つは自身を向いたままだが、その視線は海人よりは刀に向いていた。海人はチャンスと思い切り、地を蹴った。

六つの頭がばらばらのタイミングで水鉄砲を、海人へと一直線に吐き出した。自身に向けて撃たれたものだけのため、軌道が読みやすい。海人はこれを難なくかわして、あつという間に竜の懐に飛び込んだ。

自分に当たるかもしれないため、まつろわぬ神は水鉄砲が撃てない。だが七頭の竜の表皮は硬い、単なる鉄尻では貫けないほどに。

それ故か相手がただの人間だからか、竜は心を乱すことなく、槍に注意を向けていた頭を差し向けた。

刀を見たとき、直感が騒いだのも忘れて。

「わざわざ餌になりに来たか！」

「余裕でいられるのも今のうちだ！」

海人はぎりぎりまで引きつけて大きく上に跳び、噛み付く直前で獲物を見失った竜頭は勢いで地面に埋まってしまう。

竜頭が、再び空を見ることにはならなかった。跳びあがった海人は重力も味方につけて、竜頭に思いつきり刀を振り下ろした。

グアアアアアアアアッ!

その時の獣じみた七頭の竜の咆哮は、間違いなく苦悶の絶叫だった。頭のひとつを落とされたのだから当たり前だ。もしまつろわぬ神として顕現して、痛みを受けたのが初めてだったとしたのなら、その苦痛は計り知れない。

頭が本体から離れて、地面に埋まったままになる。本体とつながる首の断面からは、血が盛大に噴出して、やがて止まった。

「貴様……!」

痛みが引いてきたのか、怒りのこもった低い声でうなる七頭の竜。

いや、もう六頭の竜か。海人は頭を一つ失った竜に向けて、見下した視線で高説垂れた。

「どうだ蛇、蟻に噛み付かれる気分は。どうせ自分を傷つけることはできないからと、いい気になっているから、そんな目を見るんだ。神といつても、悪霊よりは怖かねえ」

海人は大通連を構え直した。かつてない強大な敵を前にして、海人の体は震えていた。こんなに震えるのは、海賊となって初めて人を殺した時以来だった。

相手の一頭一足がひとつでも当たれば、簡単に死んでしまう。海人が攻撃を見誤り、脚が動かなければそこでおしまいだ。海人が渴望して止まなかった、命の駆け引きだ。

これは怯えから来る震えではない。緊張と勝ちたいと思う気持ちから来る武者震いだ。

海人は相手の懐に入り込んで、残る首を落とさねばならない。

「なんせ刀を振るえば斬れるし、拳を振るえば殴れるもんなあ! さあ、残るは六つ、まだまだ終わらないぜ!」

「……なにか匂うと思えばその刀、同胞、それも忌まわしき鋼の気配……ふふ」

滝のように出ていた血は止まり、海人に斬られた首は断面を晒していた。

竜は激昂するでもなく、笑い声をかすかに漏らした。

「人間の子供であると高をくくり、気を抜いていたことは認めよう。……蟻、たしかに人は我にはその程度のものよ。意識せねば認知することも叶わぬ、矮小な存在……。それは貴様であっても同じこと！ 噛まれたとしても、我が生を脅かすほどの力ではない。そんな鋼を持つとうとも、我を殺すには足りん！」

六つの頭は地を轟かせる声で吼えた。すると海人が斬りおとした首の断面に、なにやら動きがあった。

断面が気泡ができるようにぶくぶく盛り上がり、やがてそれは次々に膨らみ、細胞の泡は首一つ分の大きさまで膨張したのだ。

次の瞬間、泡が破裂して散った。その後には、なんと落としたはずの首が戻っていた。

「どうだ小僧、これでもまだ我を倒すなどと幻想を抱けるか？」

張りぼてではない。滑らかに動くし、言葉も発した。海人が一刀の下に断ち切った首は、完璧に再生したのだ。

六つから七つとなり、再び万全の状態となった竜。七頭の竜は海人のことを、小僧と言った。まつろわぬ神は海人を脅威と認めたということ。

海人は悟った。目の前の竜は、全力でこちらを排除しようとして攻撃してくるだろう。それは海人の望むところだ。直感と身体能力、父親から教わった武術を全力で使った死闘。自分の人外の怪力を受け切ってくれる相手との戦いを、海人は今から始まる。

「ゆくぞ。我が神力の総てを以って、肉の一片も残さず滅してくれる、小僧！」

七つの首すべてが、口内に水を溜め始めた。

だが海人は今、勝ち目を見失いつつあった。海人には、首が生え替わって再生するなどとは、想像の埒外だったのだ。

話が違うぞと、既に空に上ったであろう舜季に毒突く海人。舜季が悪いのではないと理解してはいるのだが、毒を吐かずにはいられなかった。

海人は戦いに来たのであって、命を投げ捨てて来たのではない。こ

れで何度も底なしのように首が生えて替わるのであれば、神を断ち切る刀があつてもぬかに釘だ。

海人と七頭の竜の戦いは、消耗戦の様相を見せつつあった。



古代から『蛇』は、不死性を持つ神の化身として信じられてきた。蛇には毛も羽もなく、脚もない。縄のような体でありながらぐねぐね前進し、日陰や湿った土地に生息する。

そして何よりも、脱皮する。古い皮を脱ぎ棄てて、新しい姿に生まれ変わる。その理解できない奇妙な生態に、古代の人間は神秘を見出した。

蛇は、定期的に脱皮することで新しく生まれ変わる、新しい命となって再生すると信じられた。他の動物の様に年を取って老いることはない、『不死』と信じられてきたのだ。

湿った土地を好むことで、水との関係もある。さらには冬には冬眠し、春になると地中から抜け出して地上に出る。

寒気が吹きすさび、命の芽吹かない冬は、まさしく死の世界そのものの。

死から復活を果たし、転生したかのような蛇は、死の世界を司る『冥界の神』とも結びついたのだ。

「時代が下るにつれて神聖なはずの蛇は、やがて討つべき邪悪なもの、『竜蛇』となった。生と死を司るはずの女神はおとしめられ、英雄や神に討たれる邪悪な竜となり、神話に醜く描かれている。……あの七頭の竜もまず間違いなく、不死の神性を持つ竜蛇。刀が通った程度で殺しきれるとは思いません！」

「そうか、そうになると、いくら海人の馬鹿力があつても難しいかもしれないな。仁実はどう思う？ ……仁実？」

投げかけた問いに対する返答がない。愛代と重蔵は後ろを振り返ったが、そこに居るはずの仁実がいなかった。

二人の後ろをついてきているはずだったが、いつの間に居なくなっ

てしまったのだ。

「どこいった。はぐれたって訳じゃねえよな。蛇道っていうほど曲がりくねってねえしな」

「私を送ることが、そんなに嫌だったのでしょうか……」

「海人を助けに行つたんだろ。逆に足を引っ張るってわかつていながら。早く追いついて連れ戻すぞ」



「先ほどまでの威勢はどこに行つた、小僧。姿の隠し様、天敵より身を隠す弱者そのものではないか！……ほう。つまりは貴様を追つて水で撃つ遊びから、貴様を見つけ出し殺す遊びへと変えたのだな。我が巨体に押しつぶされぬよう、せいぜい逃げ回ることだな！」

海人は岩陰から、そつと見つからないように七頭の竜の様子を窺つた。

七頭の竜はせわしなく首を動かして、四方八方の方向を監視している。ゆっくりと前進しながら、背中の後ろまで首を回して見えるため、死角が物陰や自身の体の下にしかない。海人は、竜の首が自分の方向に向きそうになると、素早く岩陰に身を隠した。

海人は、まつろわぬ神に何か癖などがないか、一挙一動の挙動をじっくりと時間の限り観察した。その後、頃合いを見計らつて、隠密行動を心がけながら、まつろわぬ神と争つた場所に戻つた。愛用の槍を回収するためだった。

岩が砕け、木が倒れて、戦闘の激しさが窺われる戦場跡で、海人の愛槍は地面に突き刺さっていた。

しかしあと少し、手を伸ばせば距離まで近づいたとき、海人は身を引いた。直後、海人と槍の間を割くように、水鉄砲が地面を割つた。見ると、七頭の竜が体をこちらに向けて、頭はすぐに撃てるよう海人を狙っていた。

「馬鹿め、ただで武具を渡すと思つたか。貴様は誘い出されたのだ。刀を持った貴様の振る舞いを見れば、使い慣れた得物が刀でないこと

など、容易に見て取れるわ！」

「ちつ、くそっ！」

次々と撃たれた水鉄砲が地面を抉り、海人と槍が離される。その間に七頭のうちの一つが首を伸ばし、海人の槍を啜えた。

「……ッ……ふんッ！」

竜は一瞬だけ啜えたまま力むと、勢いをつけて彼方に放り投げた。竜の首のしなりで飛ばされた槍は、一直線に密林の中に消えてしまった。

悔しいが、まつろわぬ神の言うとおりであった。海人は槍以外の武器を使い慣れていなかった。槍は長年の鍛錬の成果により手足の如く扱えるがしかし、それ以外はからつきし。戦場で持ったことは少なかった。

もちろん刀などという高級品を、平民出の海人は持ったことが数えるほどしかなく、扱い方からそれを見破られたのだろう。

大通連を槍にくくりつけて使おうとしたのだが、七頭の竜の観察眼を甘く見ていたようだ。そこらの木で代用という手もあるが、海人は自身の怪力に耐えられるとは思わなかった。

海人はまつろわぬ神に背を向けて、全速力で駆け出した。

逃げるのではなく、体制を立て直すための撤退。海人はそう自分に言い聞かせた。

「逃がさん！」

「ッ！」

水鉄砲が放たれた。海人は間一髪で岩陰に隠れることができた。しかし隠れた岩が砕かれ、岩の破片が海人の背中を強打する。海人は水鉄砲の直撃を受けていなかったが、このような二段構えの攻撃を何度か受けていた。全身に、擦り傷や打撲で晴れ上がった箇所があった。

今のは強烈だった。痛みには耐えながら、海人は近くにあった蔦を握る。

まつろわぬ神が育てたといつていいこの森には蔦が多く、蔦渡りに事欠かなかった。ロープで船から船に移る時の要領で、海人は蔦

に体重を預けた。

その時、海人の懐からまばゆい光が放たれた。

懐を探ると、その光源を取り出す。それは現世と幽世の頸木、アテルイを封じていた脇差、『顕明連』だった。

『……海人か。声が聞けるとなると、相当切羽づまった状況なんだな？』

アテルイの声が聞こえると、海人は複雑な心持ちになった。助言がもらえるのは助かるが、自分の力で倒したことになるからだ。

十六話、終滅

仁実はもときた道を駆け戻っていた。途中から、獣道よりも荒れた道に変わる。人が通ったという度合いではない。地が割れて木々がなぎ倒されて、嵐が通り過ぎたという程の荒れ具合だった。

実のところ通り過ぎたものは、嵐よりもっと恐ろしいものだ。まつろわぬ神が前では、嵐さえ霞んでしまう。

岩の瓦礫で崩れた道を慎重に進む中、仁実は途中で地面に突き刺さった人工物を見つける。

間違えるはずがない。海人が肌身離さず持ち歩いているはずの、槍だった。

「これは、兄様の……」

仁実は毎日ように海人を見ている。当然槍も目に入れている。

槍を片手で掴むが、思うように引き抜けない。今度は両手で掴んで、ふんばって引き抜こうとする。

「ぐっ、ぐぐぐ……」

しかし抜けない。抜けているようだが、深くに刺さって槍の穂先が姿を見せない。

両手で持ってみて分かる重さ、まるで鉄塊を持っているようだ。見た目からは考えられないような重さだった。義兄はこんなに重いものを持つて戦っているのだと、仁実は驚いた。

ようやく抜けると、槍をそこらに転がす。ころんというより、どすん。そんな音が聞こえるように、地面の上に落ちた。

そう遠くないところから、木のなぎ倒される音が聞こえてくる。遠くの音に耳を済ませていた仁実は、背後から近づく人影の接近に気がつかなかった。

「あ痛ッ！」

「なに勝手に単独行動してんだ、仁実」

仁実の頭に拳骨が落とされ、頭蓋骨が鈍い音を鳴らす。痛みで涙目になりながら後ろを振り返ると、厳しい表情でこちらを見下ろす父親の姿があった。愛代は苦笑しながら、手を出しあぐねている。

「ほら、さっさと退避するぞ」

「や、待ってください。せめてこの兄様の槍も持つて」

手を引かれるのを押しとどめながら、仁実が地面に転がった鉄の重塊を指した。

「後で取りに戻るとしても、見つけるのは大変ですよ」

「それもそうだな。よしっ……ふんっ！ ……ふっ。やつぱり重いな」

仁実が持ち上げるのがやっとだった槍を、重蔵は気合を入れて両手で持った。

重蔵でも槍を振り回すことができない。改めて義兄の怪力を強く認識するとともに、槍に注意を向けている今しか機会がないと思いついた。

重蔵の横を抜き足差し足忍び足で通り抜けると、全速力で走り出した。

「あ、こちら待て仁実！ お姫様、仁実を追っかけてくれ！」

「わかりました。仁実さん、待ってください！」

待つてと言われて待つ奴がいますか！ そう心の中で言い捨てて仁実は、竜が作ったであろう木や岩の瓦礫で出来た道突き進んだ。



その頃、海人は身を隠しながら、七頭の竜を追跡していた。

追跡しているのだ。立場は逆になっているが、優位は未だにまつろわぬ神の方であった。海人は竜への決定打が見つかっていない。その決定打も、海人はアテルイとの会話でヒントを得ていた。

アテルイは言っていた。『命を何度も刈り取られて、そう簡単に蘇らせられるはずがない』と。まつろわぬ神といっても、頭を落とすということは、即ち命を落とすということ。負担がないはずがなく、有限なはずだ。

なにか、七頭の竜には不死にするカラクリがある。海人はそこに勝機を見出した。

海人を見失った七頭の竜は、一直線に湖、自分の寝床へと戻った。

その七つの頭を使った広い視野で、周囲をしきりに見渡していた。

七つの頭がこちらを向かなくなつた隙を突いて、海人は鳶を使って森の藪から飛び出し、まつろわぬ神に飛びかかった。

「ぐわっ！」

しかし刀の刃が届く前に、海人は空中で叩き落とされた。

海人を叩き落としたのは、竜の尻尾だった。海人は警戒しておらず、竜は鞭のようにこれで海人を打つたのだった。

地に這いつくばつた海人に、容赦なく竜は、水鉄砲で追撃を加える。海人はこれを転がって避ける。

口に入った泥をぺつと吐き出しながら、海人は立ち上がった。

「ついに捨て鉢となつたか、小僧」

「勝つために出てきたんだ。負けるためじゃあない」

「……何？」

いぶかしむ頭もあれば、警戒する頭もある。表情筋もないのに感情豊かに表すものだ。海人は関心した。

今からあの天狗になつた鼻をへし折つてやろうと、海人は心のうちのたくらみを明かした。

海人は持つていた大太刀『大通連』を前に差し出す。

「これをくれた、あんたの同胞に助言をもらつたんだ。あんたの不死性を支える、力の源があるつてな。聡い神様のことだ、必ずその場所に真っ先に行くと信じていたよ」

海人は湖に目をやる。

「いい場所だな。こんな雄大な景色は、そう何度もお目にかかれるものじゃない。だがひとつ、この場にふさわしくないものがある」

海人はその似つかわしくないもの、七頭の竜が背に隠すものを指差した。

その先にあつたのは、木柱だった。三メートルにもなる高い木柱が六つ、円形に並べて立てられていた。

湖の窪んだ地にあるそれは、明らかな人工物。それが竜の住みかにあるのは不自然極まりない。

事実、その木柱群は膨大な魔力を蓄えていた。

「たどり着くことができなかつたか、それとも壊すことができなかつたか。どちらにせよ、俺にならできる」

海人は手にしている大通連で、稚拙だが五行の構えをつくった。

「させると思うか」

「させてもらう。どうやら凶星のようだしな」

七つの頭から一齐に、水鉄砲が放たれた。海人めがけてではなく、海人の周囲を地盤をひっくり返すようにだ。

猪突猛進ではない。まつろわぬ神も、少しだけ知恵を使ってきた。あのような低く落ち着いた声色を出しても、内心相当に腹が立っているに違いない。人もあまりに憤激すると、一週回って逆に冷静になるものだ。

竜はこれを目くらましに、何か起こそうとしている。だがこれは、逆に機ではないか。竜が予想できない行動をすれば、意表を突くことができる。

海人はあえて水柱に飛び込んで、竜の眼前に出た。噛み付こうと首を伸ばしていた竜は、現れた海人に驚きで眼を剥いた。

「ふんっ」

出された首は、海人の一刀で縦に切り裂かれた。落としたのではなく、首の先には眼を剥いたまま二つに分かれた頭が残った。

「お前は言ったな、全力で俺を殺すと。悔しいが、お前が本気を出せば、俺なんかは歯牙にもかからない。……ならば何故、俺は生きている？ 今頃肉塊になってもおかしくないというのに」

六つの頭は口を真一文字に引き結んで、俺をにらみつけた。

竜の口から圧縮されて放たれる水鉄砲は、海人を容易く真つ二つにしてしまう。だがここに来るまでに受けた怪我は、破壊された岩の破片に当たって出来たものしかない。

そんなものを何回も放たれて、何故海人を殺しきれない？

「お前は本調子じゃあないんだ、人の俺といい勝負をしている時点でな。どうだった、お供えものの酒は。家畜を殺す気概で脅し取った酒だ、さぞや甘美な味だったろうな！」

聞くまでもない、怒りで酔いが引かないほど回っている。人を殺し

て舜季を死に追いやり、相当に興が乗っていたのだろう。

舜季達の死は無駄ではなかった。まともに思考が回らなくなつて、こうして海人が人間の身で、勝利の鍵を掴むことができた。

「ガアッー」

頭のひとつが、二つに割けた頭を切り落とす。切り跡から新しい首が生えてくる。

そのまま再生させたら、根元から顔が二つになつてしまうから、切り落としたのだろう。

「根性あるじゃねえか」

激痛で絶叫を上げなかったことに感心しながら、竜に突撃——する振りをしながら、横をすり抜けようとした。あの大木を斬ってしまったらこちらの圧倒的有利に傾く。

みすみす逃す竜ではない。巨体からは想像できない俊敏な速度で動き、首は海人に喰らいついた。

竜は水鉄砲で妨害し、隙を見ては強靱な牙で海人を噛み千切ろうとする。時には鞭のように首を打ちついたり、その巨体で海人の行く手に立ちふさがった。七対の目からなる広大な視野をもって、海人を阻んだ。

海人は持ち前の運動能力を使って回避し、避けきれない攻撃は手に持った鋼を盾にして直撃をしのぐ。これまでの無理がたたり体の隅々がきしむ音をたてるが、耐え忍びながら、抜ける隙を待った。

押しでは引くの接線が繰り広げられる。最終的に軍配が上がったのは、すべての力で勝るが完全に発揮できない七頭の竜よりも、極限状態で底力を曝け出した海人だった。

背筋がひやりとする場面があったものの、水鉄砲を間一髪の所で避ける。顎を開く頭を叩き伏せて、竜の巨体の横を抜けて、ついに海人と木柱群の間に障害はなくなる。

「もらったッー」

直前に竜は水鉄砲を撃っており、発射にはわずかに時間がかかる。撃つてない頭は海人に叩き伏せられて土を食っている。

勝利を確信した海人。木柱との間合いを跳躍で埋めて、着地した時

には大通連を振りかぶっていた。

「させるかア！」

背中から竜の絶叫が響く。もう遅い。しかしその時、海人の胴体から久しく感じたことのない激痛が走る。

海人は眼球だけを下に向ける。そこには、二つに裂けた竜の頭が、海人の胴体に噛み付いていた。海人が割いた頭が、首だけで動いたのだ。

「ぐっ、はあッ！」

胴体から伝わる痛みを耐えながら、海人は刀を振りぬいた。

木柱のひとつが横に一刀両断されて、重力に従い地面に落ちる。

一瞬の油断が命取り。海人は竜を出し抜いたと確信し、気を緩めてしまったせいで、致命的な一撃を受けてしまった。海人は刀を地につき立てて、二つに割けた牙から抜けようと、手にかけてもがく。が、あつさいと牙は体から外れた。牙を突き立てたはいいものの、そこから牙に入れる力は頭に残っていなかったのだ。

当然、自らの力の源を破壊した、そんな海人をまつろわぬ神が許すはずもなかった。もがく海人の無防備な姿に向けて、竜は喉から水鉄砲を撃った。

目標に直撃。海人は見事に吹き飛び、水しぶきを上げて湖に落ちた。

そのまま上がってくることはもうないだろう。それよりも竜には、海人よりも先に対処しなければいけない問題があった。

「くそっ、なんとということだ」

竜は思わず悪態をつく、再生したひとつを合わせた七つの頭どれも、表情筋はないが強張っていた。

木柱が竜の不死の源であったことは間違いない。この森全体が貯蔵庫であり、竜が森の周囲の大地から吸い取ったものを貯蔵し、それを竜は取り出していたのだ。

その周囲の大地には湊や安東も含まれ、安東からは特に集中的に搾取していた。故に安東の石高は極端に少なかったのだ。

木柱はここ一帯の大地の霊脈の要であった。

風水でいうところの竜脈。それが崩されたことで、大地の気のバランスが崩れてしまったのだ。

するとどうなるのか。気のバランスの崩れた証は、これ以上ない明確な形で表れた。

地震だ、地が揺れている。

はじめは小さい揺れもだんだんと大きくなり、ついには人が立つていられないほどの大きな揺れとなった。

だが変化はこれに留まらない。竜の眼前で変化は起こった。

地面が盛り上がる。重量の土を押しつけ、赤熱し流動したものが吹き上がった。

溶岩だ。ここはカルデラ湖。火山が噴火した跡に、雨水がたまって出来た湖だ。大地の気が乱されて、長年眠っていた火山が呼び起こされてしまったのだ！

「くっ」

いくらまつろわぬ神とはいえども、この大自然の猛威には逆らえない。自慢の力で地面を彫り上げると、溶岩の流れを変えた。

ここも長く居れば危険だ。離れて、またどこか、安住できる地を探さなくてはならない。

七頭の竜は長らく住んだ巢を捨てることにした。だが離れてそこを後にしようとする竜の前に、湖から上がった海人が立ちふさがった。

「行かせねえ……。お前は、俺がここで殺す」

既に満身創痍。体が引き裂かれるような衝撃を与えられて、根性で意識を保っているような状態だった。

「馬鹿が、このままであれば貴様も生きては帰れないぞ」

「あんたを逃せば、今まで以上の者が不幸を被る。それぐらいは俺でもわかるさ」

人様に迷惑しかかけなかった俺が、世に益のあることができる。俺がこの世にいた証を残せる。これ以上の誉れなし！

七頭の竜によってせき止められ、二股に分かれていた溶岩の川が、海人の後ろで合流した。これで逃げ道はない、海人と竜を取り囲むよ

うに楕円形の闘技場ができあがった。

「地獄の底まで付き合ってもらおう、七頭の竜よ！」

「馬鹿か馬鹿かと思っておれば、天井知らずの大馬鹿とはな！ 我は滅ばん、冥界に下り業火に焼かれるのは、貴様ひとりだけよ！」

互いに睨みあい、目と目で火花が散る。海人が構えて、竜の頭が蛇舌を出し威嚇する。

それも一瞬、両者同時に地をけり、中央で刀と牙をぶつけあった。



十七世紀初頭、十和田火山は歴史的な大噴火を起こす。

915年に起こった噴火の再来とも言われ、十和田火山から半径二十キロを焼き尽くす大災害となった。

しばらく噴火降下物で、東北ならず関東までも灰が空を覆う。

その噴火の背景にまつろわぬ神と只人の死闘があったのだが、それを知る者は後の世でもわらずかである。

十七話、輪廻転生

ふと気がついたとき、海人は灰色で塗りつぶされた世界にいた。そういう部屋に居るのかとも思ったが、そうでもないらしい。黒いもやがかかって遠くを望めず、地以外に手をつけられそうになかった。現世にありそうにない景色。

ならばここは、あの世か。

とすれば、目の前の女性が神様が閻魔様なのかもしれない。

「いらつしやい、生と死の境界へ。あなたは一度だけ来たことがあったのよね。アテルイさまは息災だったかしら？」

威厳も何もない、友人に話すような軽い口調だった。

女性といっても見た目は海人よりも年下、十代半ば頃であろうか。背も低く、ひと目見た印象も幼い。長い髪は横で二つに結わえられ、いわゆるツイントール。それも彼女の可愛さを立たせる要因だろう。

だが海人の抱いた印象は、見た目にそぐわず艶かしい、だった。彼女がとる動作ひとつひとつに『女』がにじみ出ており、幼い外見がさらにそれを際立たせていた。女性と言ったのはそのためだ。

跪きたくなる重圧はないが、愛らしさは伝わってくる。だが見た目と不釣り合いな中身は、やはり人間ではないのだろうと海人に思わせた。

彼女は神だ。七頭の竜と違った、真なる神だ。

では、そんな神と対面している俺は何だ？ 海人は必死に思い出そうとするが、意識を失う直前のことがまったく浮かばない。

「アテルイは……元気だった。百年以上閉じこもっていたとは思えないほどにな。それで……あんたの名前は？ 何と呼べばいい？」

「私はパンドラ。『厄災の魔女』なんて神様たちは呼ぶけれど、海人は気軽に『ママ』って呼んでいいわよ」

聞きなれない異国の言葉に、海人は疑問符を頭に浮かべた。

「ま……ままっ？」

「海人の国では、『お母さん』って意味かな。なんたって、あなたは私の息子に生まれ変わったのだもの」

生まれ変わる。その言葉を聞いた海人の頭の中に、ようやく意識を失う前のことが思い起こされる。

そうだ、確か俺は、竜の七つの頭すべてを斬り落としたあと、立ち上がる力が残っておらず、力尽きて倒れた。戦闘が激しく、周囲に気を配る余裕すらなかったが、噴火して溶岩が溢れだし、あたりの地表を覆っていたはずだ。

思い返してみれば、よくもそんな状況で争っていたものだ、と海人は自分を恥じた。同時に、そんな状況で気を失えば、自分の肉体に起こることなど簡単に想像がついた。

「パンドラ。俺は」

「まーま」

「……」

海人は大きな溜め息を吐くと、ぎこちなく言い直した。

「……かあ、さん。聞きたいことがある」

「あら、催促したけど、本当に言ってくれるとは思わなかったわ。欲を言うと、ママって言ってくればもつと嬉しかったけど」

「勘弁してくれ。それで、どうなったんだ、七岐の大蛇は？」

ママという言葉の響きが、海人にはどうしてか背中がこそばゆくなった。

「安心して、海人がここに居るということは、海人が『神殺し』という偉業を成し遂げ、私の養子にすると認めたからなの。あの方は海人に倒された。といっても、神話に還っただけで、また顕現するかもしれないけどね」

神殺し。それがどれだけ偉大な功績か海人にはわからなかったが、海人はまつろわぬ神を倒した。あの強大な力を倒したと確信が持てなかったが、ようやく実感が持てた。

それがわかると、心残りがすつと解ける感覚がした。

俺は父さんの教えを使って、竜殺しを成したのだ。海人は心の底から喜んだ。

「そうか。……よかった」

それに竜が斃れたのなら、もう罪のない人々に災いが降りかかるこ

ともない。今まで犠牲となった安東の人間の死も報われる。奥羽の大地に豊かさが行き渡る。良いことづくめだった。

愛代たちの安否を、海人は心配してはいなかった。仁実は義兄の言葉は聞き分けがいいし、愛代を素直に聞いてくれるはずだ。重蔵が二人をつれて、無事に生還しているはずだ。

海人は帰れなくなった場所に、思いをはせた。

パンドラは面白おかしく、海人の感情の移り変わりを眺めていた。

「それじゃあ母さん、俺はこれから一体どうなる？」

「海人は私の息子として、現世に産み落とされるわ。神殺しなんてことを成し遂げたのだから、人間ではいられないわよ」

「輪廻転生か。犬か猫にでも生まれ変わるのか？」

「そんな可愛いものだったらよかつたけどね。あなたは強靱な肉体を持ち、膨大な呪力を内包する、生まれながらにして魔王となる素質を秘めた存在に生まれ変わるのよ」

「人間じゃないのなら、何で呼べばいいんだ？」

「西の方では『エピメテウスの落とし子』『ラクシヤサ』なんて呼ばれているけど、海人の国だったらそうね……『羅刹王』と呼ばれているわ」

「羅刹王……」

本当に人間ではなくなるのだな、と海人は特に羅刹王という名に疑問を持たなかった。

力が人一倍強く、敵からは化け物と恐れられきてきた海人だが、本当に人外になった。

どんな種族だ、腕が四本に増えるのかと、検討外れに妄想していた。

「よしっ！ 母さん」

「あ、今度はすらすら言えたわね」

「言い慣れていなかったからな。それに心の準備もできた。いつでもいいぜー！」

物心ついた時には母親は他界しており、海人には母親の記憶がなかった。母親がいるというのが初めての体験だったのだ。

「そうね、私がここに居られる時間も少ないしね」

じゃあ最後にひとつだけ、とパンドラは眉根を寄せた真剣な表情で言った。

「海人はこれから、生前とは比べられないほどの困難な試練が待ち構えていることでしょう。神を殺し、私という魔女に見初められた者の宿命よ。行く先々で厄災に見舞われ、決して逃れることはできない。だけどその壁を乗り越えることができれば、海人が本当に欲しいものが手に入るわよ」

「予言したかのように言うんだな」

「だって私はパンドラ。ありとあらゆる絶望と、ひとにぎりの希望を与える魔女ですもの」

パンドラは神妙な面持ちからころりと一転して、にこりと眩しい笑顔を浮かべた。

「まあここで言ったことは、現世に戻ったら忘れちゃうでしょうけどね」

「だめじゃねえか！」

「まあまあ。忘れちゃったとしても、心の奥には残っているから」

悟りをひらくような者なら、ここでの事も忘れずにいられるらしいが、そもそもそんな者は神殺しにならないという。

「だがそうだな、何事もやってみなきゃわからねえからな。時と場合によつて良くもなり悪くもなる。悪い方向にばつか考えても仕方ねえ」

「そうそう、その意気だよ！ ……あつ、もうすぐ時間だ。それじゃ海人、ファイト、おー！」

「おう！」

ファイトの意がわからなかったが、海人には力強い響きを感じた。

短く同調の返事を返すと、海人の体は眩い光に包まれて、生と死の境界から消えた。

自分一人以外、誰もいない世界で、パンドラは溢した。

「さてと、次は西の方かな？ 私の息子が二人も生まれるなんて、星が落ちなければいいけど」

◆

海人が新しく生を受けたのは、広く澄みわたる、蒼の晴天の下だった。あの日海で見た、雲も高い木も障害物がなにもない、澄み渡った蒼天だ。

しかしそう思っていたのは海人だけだった。

「海人！」

「兄様……！ 本当に……良かった……！」

「つたく、一度心臓が止まった時は、本当に死んだかと思ったぞ、海人！」

そこは悉く溶岩によって焼き尽くされ、焼け野原となった密林だった。

そこに手足頭部、身体中に傷ひとつない状態で寝そべっていた海人に、取り囲んでいた愛代と仁実が感極まって抱きつく。重蔵は心底嬉しそうに海人を叩く。

「……は？」

再び日の本、奥羽の地に戻ってきた海人は、訳も分からず気の抜けた声を漏らした。

羅刹、安東の鬼として世に名を轟かす海人の、第一声がそれだった。神殺しとして第一歩を踏み出した海人。これより修羅の道を進むこととなる。

第二章 大河の女神 十八話、神殺し

海人は神殺しである。人の身では決して敵わないとされるはずの『まつろわぬ神』を刹逆し、神を神たらしめる権能を篡奪した刹逆者である。

類まれなる強運を以って奇跡を幾度も起こし、同じ神か神殺しにしか抗えないとされるまつろわぬ神を下し、その勝利の実力を厄災の魔女パンドラに認められし者。その者は王へと昇格する。

修羅より険しい道のりだ。しかしこの世には確かにその条件を乗り越え、神殺しに至れし者がいる。

人を超えた存在、尋常ならざる魔力を内包し、筋肉は強靱に骨は鉄より硬い。そして何よりの特徴が、刹逆せしまつろわぬ神より篡奪した権能を、気の向くままに振りかざすことにある。

風の神であれば嵐を巻き起こし、太陽の神であれば焰で焼き尽くし、豊穰の神であれば茨で多い尽くす。個性と程度の差はあれど、その気になってもならなくても街ひとつ程度簡単に沈めるまつろわぬ神。そんなまつろわぬ神の力の源を彼らは奪い取り、扱えるようになるのだ。

そんな神殺しを民衆は『魔王』『エピメテウスの落とし子』『墮天使』『ラークシャサ』など、時代と風土で呼び方を変えてきた。呼び方の違いはあれど、籠った畏怖と敬意の念は変わらない。

海人はそんな神殺しの最も新しい同胞だった。

しかし海人の住む日の本には、神の刹逆を成し遂げ、神に抗える存在の生れ落ちた記録がなかった。

海人は自分が人間ではない別のものになったことを自覚していた。そう言われたからだ。

誰に言われたかは海人にも思い出せなかった。一生懸命思い出そうとしても、儂い夢の如く泡沫霧散してしまい、どうしても無理だった。

しかし自分が人間を超えた別の存在になったことと、自分のような者をその誰かが何と言ったかは覚えている。

『海人が「神殺し」という偉業を成し遂げ、私に認められたからなの』『人間ではいられないわよ』『エピメテウスの落とし子』『ラークシャサ』なんて呼ばれているけど、海人の国だったらそうね……』

「羅刹王、だったか」

海人は独り言ちた。

木々の間から吹きぬけた風が、さらさらと体を撫でる。心地よい風にあたりながら、海人は木々で囲まれた青い空を、上を向いてぼんやりと眺めていた。

場所は祠、アテルイが封じられている屋根の下で、海人は涼んでいた。

ここに来るのも久しい。海人はここのところ忙しく、全く来る暇がなかったのだ。忙殺され、怒涛の如く日々が過ぎ去り、最後に来たのが一ヶ月前とは思わなかった。そもそも海人は檜山におらず、愛代について湊のほうにここいらずっと泊まっていたのだ、来れないのは当然のことだった。

今日ここに来た目的は、二つある。

ひとつは、埃取り。こまめに行い習慣になっていた掃除を一ヶ月も行っていないかったため、その分の掃除を隅から隅まで徹底的にやってしまうためだ。

これは既に完了し、今海人が涼んでいるのも休憩を兼ねたものだった。

もうひとつは、アテルイが起きているか確認するためだった。

海人は後ろに視線を向け、開け放たれた扉のその先、祭壇に戻された脇差——顕明連を見た。

ここに戻ってきたとき、海人がアテルイと会った後、元通りに飾つたものだ。



あの強敵『七岐の大蛇』討滅後、檜山に帰ってきた海人は、まず真っ先にここに向かって来た。

自分の身になにが起こったのか、その疑問に間違いなく答えられる相手がアテルイしか思い浮かばなかったからだ。

こちらから会いにいける確証はなかったが、アテルイ自ら会いに来てくれる自信はあった。まだ大通連、小通連、頭妙連の三振りの刀を返していないからだ。あれだけしつこく貸すだけだと念押しされたのだから、必ず取りに来るだろう。

それに助言をくれた礼もしたかった。あそこで反応してくれなければ、能のない海人では乗り越えられなかっただろう。

結果、アテルイは自身を閉じ込める檻と現世を繋ぐ通路を作り、海人と対面した。

『ほう、まさか成し遂げるとはな。八郎太郎を討ち滅ぼしたか』

アテルイと目を合わせた瞬間、海人は奇妙な感覚を味わった。

彼とは戦いに来たのではない。だというのに、海人の体は電流が走るが如く力がみなぎっていったのだ。体の熱の高まりようは、海人自身困惑するほどの感じたことのない高揚だった。

八郎太郎。それがあの七頭の竜の名か。

『この体の高鳴り様、知識でしか知ることのない神殺しとの、宿敵との相対か。まさか今になって味わうことになるとはな』

そして目の前に立つ鬼からは、好戦的な目を向けられた。アテルイは海人を『障害となる敵』として認識されたのだ。

神殺しという言葉に耳聴く聞き取り、どこか覚えがある海人はそのことに鋭く追及した。

『ついでだ。教えてやろう』

高まる気配を抑えぬまま、アテルイは語った。

義理を果たすついでと言っていたが、本当にそうだったのか？ アテルイは事細かに、海人の身に起きた出来事を教えてくれた。

まつろわぬ神は強大な力を持ち、只人が敵う道理はない。ただごくまれに、それこそ歴史を辿つてみても数えるほどしかない回数、人間がまつろわぬ神に打ち勝つてしまうことがある。起こらないはずの

奇跡を幾度も起こし、わずかな勝利の糸を見つけて掴み取る。海人はそれを成し遂げたのだ。

その功績をパンドラに認められし者こそ、神殺しとなる。

『小僧の人の体はパンドラの儀式で生贄となり、神殺しとなった。神殺しとはまつろわぬ神の権能を篡奪し、それを振りかざす者のこと。当然、単なる人間ではいられない。それどころか禍神が如く、嵐の目となるだろう。お前が凶らずとも、戦いの火種はあちらからやってくるぞ』

海人はアテルイからそう忠告された。

『……愛する人を守ろうと、自分で選んだ道だ。後悔はしない』

『杞憂だったか。ならばその己の道を貫き通すといい。誰かの背を追うのではなく、自ら造るのだ』

そう言うと、今度は先ほどまでの真摯な態度はなんだったのかと疑うほど、アテルイは態度を変えた。海人を厄介者のようにこの空間から追い出そうとしてきた。

『まだ父親の話とかを聞かせてほしいんだがな』

『俺はこれから寝てえんだ。……まつろわぬ神と神殺しが相對すると、体の調子が最良の状態に引き上げられる。お前が近くにいと、体が高ぶってしようがねえ』

『そうか。じゃあまた今度、酒の肴にでも聞かせてくれ。礼もかねて、いい酒持ってくるからさ』

『それはいいな、待ってるぜ』

このように酒を酌み交わす約束を取り付けた。

しかしその直後、幽世と現世をつなぐ輪が閉じる途中で、アテルイがあくび交じりに言った。

『ふわああ。そうだ、お前が日ごろ行っている鍛錬、神殺しの身ではあまり成果にならないかもしれない。特に神の権能は戦場でしか磨かれない。……だがまあ、あまり考えぬことだ。思慮深くしても無駄なことだ』

最後に思い出したかのような言葉を、海人の心にグサリと刺して、通路は閉まった。

◆
あの鍛錬は父親との思い出でもあったのだ。海人は大きなショックを受けていた。

忙しいのもあいまって、なかなか鍛錬に身が入らなかった。

手元に置いた槍を触る。

この槍、海人の乱暴な扱いに耐えられるように、特注で頑丈に作られている。時たま手入れをすればよい頑丈さだったのだが、神殺しになつてからはそれでも足りなくなつてきていた。

いっそ切れ味を犠牲にして、ひたすら耐久力を高める。鈍器として槍を扱おうかとも思慮していた。

よし、とりあえずは試してみよう。

まずは試行あるのみ、世話になつている鍛冶師の親方に頼んでみるか、と思ひ立つた時だった。

愛代が神社にやつてきた。

「やつぱりここにいた。海人、予定を繰り上げてすぐ出発するよ」

「どうした？」

あれから一ヶ月。安東家は統一された。

まつろわぬ神が討滅され、檜山と湊は家を二分する理由もなくなり、あつという間に二家はひとつにまとまつた。

湊家の人間が残りわずかだったのも理由のひとつかもしれない。

ともかく話はまとまり、檜山安東家も湊安東家も、今はただの安東家だ。

安東家の直系の重蔵、その義理の息子である海人というところ――。

「海賊の根城が見つかったんだって。逃げられても困るからできるだけ早くね。安東水軍の頭領さん」

「おう、わかった」

海人は槍を取って立ち上がった。開けっ放しになつていた扉も閉め、愛代の後に続いて林の中を駆け抜ける。

国の重鎮となつてあまりおおつぴらに動けなくなった重蔵に代わ

り、海賊衆の統率を任せられていた。

直属の上司は重蔵だ。海人たち海賊たちは安東にその武力と統率力を買われて、お国直属の軍隊となっていた。

もともと湊にあった水軍も取り込み、その規模を大きく広げて、「安東水軍」と名を変えていた。

十九話、波乱

晴天の空の下、船と船の間で弓矢が飛び交う。

そこらかしこでワーワーと掛け声と罵声上がる。時折、パンと短く火薬の爆発する音も聞こえる。火縄銃が打たれた音だ。

雨のように鉄が交差する戦場が開かれていた。

五隻の巨大な帆船が、何十隻もの複数の小舟に取り囲まれている。

五つの帆船に乗る側が安東水軍、鉄製の鎧や武器の上質な装備で身なりを統一している。貿易船を護衛している最中であり、今まさに積荷を狙って襲撃されていた。

対して襲いかかってきたのは海賊、重蔵の傘下に入っていなかった木っ端の海賊団だった。一ヶ月前までだったなら襲撃してこない小さな海賊団なのだが、ここ最近で勢力を飛躍的に広げていたらしい。二十はある小船が四方八方をとり囲んでいた。

「ちっ、あの男ですか」

水軍の帆船は高い鉄板で周りを囲っており、それで矢の鉄尻なども防いでいた。

同船していた仁実は、弓矢を射たり鉄砲を撃ち込むための狭間を、そつと覗き込んだ。仁実が覗き込んだ視線の先、少し離れた先に巨大な人力船があった。船の側面から複数の櫂が出ている、ガレー船と呼ばれる船だ。

その船首に仁実が見知った男が立っているのを見つけた。

その男は一年ほど前、重蔵の海賊団よりも大規模な海賊団の頭だった。

じわじわと着実に戦力を上げていく重蔵たちを厄介に思っており、ある時海上で突然襲撃をかけたものの、逆に返り討ちになった。

そのうちほぼ半数を海人に討ち取られて、あの男の海賊団は壊滅した。だが頭は重蔵たちの手をすり抜け、まんまと逃げられてしまったという経緯があった。

そして何の因果か、あの男はまた戻ってきた。潰したときと比べても遜色ない戦力だ。

「絶対に甲板に入れさせないで！ 頭領海人が来るまで持ちこたえなさい！」

承知！ と周囲から堅苦しい了承の返事があがる。この帆船に乗員は、いつもの重蔵直下の海賊上がりがいなかった。周辺海域の懲戒を任せていた。乗っているのは湊の水兵だけだった。

そもそも仁実は今さつきまで、海賊が襲ってくるまでは、乗り合わせた客の様なものだった。日頃の与えられた職務から解かれて、完全にオフだったのだ。

あとは兄様に合流して、ゆつくりと休日を過ごすだけだったのに……。仁実は海人に迷惑をかけてしまった自分を恥じた。

水兵たちは鉄の柵に縄をかけてよじ登ろうとする海賊を振り落とし、弓や鉄砲で応戦する。

仁実が兵士たちをてきぱきと指揮する中、ついに海賊団の頭の乗る船とは反対側に、海人の乗る舟が現れた。

「兄様！ ……全軍に通達。頭領の乗る舟を、あのひとときわ大きい船まで援護しなさい！」

しかし湊の水兵たちの間に広がるのは、躊躇の気配。水兵たちはまだ海人の戦いつぶりをその目で見ておらず、あの船を一人だけでどうにかできるとは思っていなかったのだ。

「なにをしているのですか！ 兄様があの船にいけば」

いけばこの状況を打破できる、と仁実が言葉が続けようとしたその時、帆船の後ろの方で複数人の悲鳴が聞こえた。

皆一斉にそちらに視線を向ける。すると、ひとりの海賊が甲板から見えるほど飛び上がり、重力に従って落ちていった。しばらくすると水しぶきの音が上がったので、海に落ちたのだろう。

野太い男の悲鳴や、人が海に落ちる音が立て続けに聞こえてきた。しかもその音はだんだんと移動し、あの海賊団の頭の乗る船に近づいていっている。

鉄の柵の高さで様子をうかがうことはできなかった。だが仁実には、敬愛する義兄が複数人の敵相手に鎧袖一触する光景が、頭に浮かんだ。

「あの船は頭領に任せます。私たちは船に張り付く海賊たちをはがしながら、頭領にこれ以上いかないようけん制します！」

仁実が氣を取り直して、再び命令を下す。

応！、と今度は一致した返事が上がり、水兵たちは各々の持ち場に戻っていく。

遠くからバリバリツと木が砕ける音が聞こえた。

仁実は狭間を覗く。あの海賊の頭が乗っているガレー船の側面に、大きな穴が開いていた。塞ぎようがない大きな穴で、あつという間に海水が入って沈没してしまっただろう。

海賊たちに動揺が走る。海人の立ち回りを見て既に逃走に走っている海賊もいるようだった。

それだけでもう十分な仕事をしたのだが、海人は穴があいた船から出てこない。おそらく敵の親玉をとつかまえようとしているのだ。「安東に齒向かった賊を討伐します！ 逃げる者から優先して狙い、一人残さず討ち取りなさい！」

仁実が一括すると、水兵たちが熱意のこもった声を上げた。

こんな粗暴な争いごとは早く終わらせて、檜山に帰りましょう、兄様。

仁実は、神殺しの海人が人間相手に命の危機にさらされることなど、万が一にも有り得ないと思っていた。



海人は舟から舟へと飛び移り、海賊の親玉がいるであろう大きなガレー船に近づいていった。

もちろん通り過ぎた舟にいる木っ端の海賊は、残らず倒していく。ちぎっては投げ、ちぎっては投げ、海人は槍の刃の部分は使わず、図らずも腹の部分で鈍器として扱っていた。人が飛ぶ様はボールのようであり、海人が槍で人を弾く様はバットで打つようであった。

神殺しになる前から鬼の怪力を持っていた海人だったが、神殺しとなった今では変わっておらず、しかし強くなってもいなかった。ただ

神殺しになって体が頑丈になったことで、容赦がなくなった。体に強い負担をかけて酷使し、思う存分に暴れることができるようになった。

海人は三人いた海賊のひとりの襟をつかんで盾にし、二人目をやりで打ち飛ばし、三人目を蹴って舟から突き落とした。

「次で……最後！」

次に飛び乗る舟に向けて、海賊を投げつける。狙い通りに命中し、乗っている海賊二人が狼狽している隙に舟に乗り込んだ。槍を振り回し、海賊二人を海に突き飛ばした。

海賊はなぜか、人を投げつける前から恐慌に陥っていた気がした。「聞いていないぞ」「話が違うじゃないか！」と口走っていたが、海人は話を聞きだすこともなく海に突き落とすのだった。

海人は近くでガレー船を見上げた。遠くで眺めるとそうでも大きくないガレー船は、近くの小舟から見ると甲板に飛び乗れない程度に大きかった。

だから船底を壊して進入することにした。

ここまでの道中で慣れてしまった構えで、槍が船底を打ち抜く。乱戦の中でもやけに響く破碎音を立てながら、船底が壊れる。海人は船内に進入した。

中にいた海賊は、外で戦っている海賊よりも一回り貧相な格好をしていた。突然壁が壊れて現れた海人を見て驚き怯えている。体もガリガリに痩せ細っており、ひどい扱いをされていることは容易に想像できた。

海人はそんな者達をひとまず放置し、上を目指す。階段を上り、武装した海賊をたたき伏せながら、ついに甲板にたどり着いた。

傾いた甲板の船首あたりで、腰に手をあてこちらを見下ろす海賊がいた。

ひげをぼさぼさに生やした、中年の男だった。金がちりばめられた装飾品を身につけ、悪趣味な異彩を放っている。

「ようやく来たか、待ちわびたぞ、馬鹿力の餓鬼！」

「……………どこかで会ったか？」

「忘れたとは言わせんぞ！ この海域をなわばりとして支配していた海賊団を！ なにせ貴様に潰されたようなものだからな！」

「ああ、あの海賊団の生き残りか。残らず始末したのだと思っていたが、わざわざこんな大群を連れて戻ってくるとはな……。意外とあの海賊団の頭は尊敬されていたのか？」

「私が頭だ！ 私の海賊団だ！ それを貴様が……。くそ、お前等、さっさと殺つてしまえ！」

男の号令で、あちこちに潜んでいた海賊たちが出てくる。海人はあつという間に取り囲まれてしまった。

「お前等、餓鬼だと思つて舐めるんじゃねえぞ！ 一人ずつで当たるな。取り囲んで押しつぶすように……ッ！」

男の命令が下るよりも、海人が動くほうが速かった。あつという間に、海人は男の前に踏み込む。

海人は顔めがけて槍を突き出した。男は反応できずに、体を動かすことができない。

しかし海人の槍は届かなかった。

「なにッ！」

槍は男に届く前に、見えない透明な壁に阻まれた。

穂先が弾かれ、海人は後ろに距離をとる。男はニタリとあくどい笑みを浮かべた。

うまくいった、とでも言いたげな、人を食う笑みだった。

「一体どういう」

「今だ、やれ！」

手品の仕掛けを尋ねようとした海人だったが、男の号令により遮られてしまう。

すると海人の足元が、突然開いた。

この船に仕掛けられていたからくりが、男の指示で動かされたのだった。

とつさに手を伸ばしても、端に手が届かない大穴だった。予期せぬ下からの奇襲。海人は足場を失い、地球の引力に引かれ、下へ下へと落ちていった。

「うおおおおおおおおおおお……ッ」

海人は神殺したが、空を鳥のように飛ぶことはできなかった。これまで通過してきた船の階層すべてにからくりが施されていたらしく、海人は進入した船底の大穴前まで逆戻りしてしまった。

船は沈み、腰上まで水が浸入していた。海人にとっては衝撃が吸収されて幸運だったが、それと同時に海賊頭の男も手助けすることになってしまっていた。

海人は周りを見回して気づく。あの痩せ細った海賊たちがまだここから避難していなかったのだ。

入り口ももうすぐ海面の下になってしまおうというのに。

「なにしてるんだ、さっさと逃げろ！」

「逃げるんじゃないぞ。その男を溺れるまで取り押さえろ！」
「なにを言っている！」

落とし穴の上からこちらを見下ろす男に、海人は怒鳴った。男の表情は、自分の栄光を踏み潰した海人が顔を真っ赤にして怒っているのが楽しくて仕方がない、といった愉悦でゆがんでいた。

「感謝するぞ小僧。貴様が船に大穴を開けてくれたおかげで、船を爆破して沈没させるという手順をとばし、落とし穴に嵌めることができた。あとは貴様に縛り付けておけばいい。貴様のその馬鹿力でも、流動する海を殴りつけることはできまい！」

「俺が溺れるまで、か？ 己の命をなげうってまで、そんな事をする奴はいねえ！」

「己のためならな。だが、他人のためならどうだ？ そうだな、たとえば……愛する家族のため、とかな」

男の言葉を聴いた途端、周囲にいた怯えて縮こまっていた海賊たちが、一斉に海人に飛びかかってきた。

海人は足を海水にとられて思うように動けない。海人に海賊たちが覆いかぶさるも、その貧弱な腕からは力が出せていない。

いつもの海人であったなら、容易に跳ね除けられる相手だった。

しかし海賊たちの口から漏れる、妻が、子供が、親が、愛する人たちの名前が、海人の抵抗する力を抜き去った。

「この船は貴様専用に作り上げた棺桶だ！ 己の罪を悔い、永久に海底で暮らすといい。来世は魚だといいな！ ガハハハハッ！」

「貴様あああああッ！」

男の高らかな勝利の笑い声を最後に、落とし穴が閉まる。

このままでは溺れてしまう！ 男と言葉をぶつけ合っている間にも水位はどんどん上がって、肩の辺りまで上がっていた。無数の貧弱な海賊にしがみつかれたまま、海人は脱出する方法を考えた。

こうなれば、力づくで……！

ついに海人の頭が沈む。海賊ではなく、身内を人質に取られた奴隷たちは、囚われた者達の無事を祈りながら、死を覚悟していた。

その時だった。海人を中心に取り囲むように、水面に渦が巻き起こった。



その頃海上、仁実の乗る帆船では、海人を一緒に乗せてきた愛代の帆船が合流したところだった。

奇襲された時の劣勢も巻き返し、手が空いた者は生き残った海賊を縄で巻いていた。

愛代と仁実は、船の甲板で見守っていた。はじめは何とも思わなかった二人だが、海人が入った船がだんだんと沈みゆくを見て、焦燥感を募らせていた。

愛代が耐えかねて、助けを向かわせようとした、そのときだった。半分ほど沈んだ船のまわりに、突如として渦潮が起こったのだ。かなり大きく、二人の乗る帆船も急加速がかかったように引っ張られた。

あまりに不自然な渦潮だったが、二人に気になっている余裕などなかった。断末魔のような破碎音を響かせながら、海人がまだいる船がさしたる抵抗もできずに飲み込まれていく。

「海人……」

すると渦潮の中心から何かが飛び出した。

飛び出すのを見ていた者は、そろって上を向く。しかし空に昇った

太陽のせいで黒点にしか見えない。

ふらふらと空を飛んでいた黒点は、帆船の真上に来ると、ピタリと止まってこちらに落ちてきた。

目がなれた仁実が、落ちてくるものを見て、最初に叫んだ。

「兄様ー！」

なんとそれは、海賊を団子のように重ねて背負った海人だった。二十人ほど背負って、海人の体以上の大きさだった。

大きな音をたてて海人が、愛代と仁実の近くに着地する。着地、できたのだ。あれだけの重量の荷物を背負いながら、あの高度から落下しながら、船を揺らすだけにとどまった。

背負っていた海賊が降ろされると、つみあがっていた者達はばらけて投げ出された。中には自由落下のせいで気絶している者もいた。

海人はその場にへたりこみ、大きく息を吐き出した。

「はあああああ……」

「海人、怪我はない!？」

「ああ、愛代。大丈夫だ、服がびしょぬれになっただけだ」

「ふ、服を持ってまいります、兄様」

「おお、頼んだ」

仁実が乾いた服を取りに船内に向かう。

「何があつたの、海人?」

「あとで話す。それよりも今は、俺の担いできた奴等を縄で縛っておいてくれ。いつ暴れだすかわからねえ」

海人は自分が助けた、痩せ細った奴隷達を顎で指した。

愛代はうなずくと、近くにいた水兵達に指示を下す。

「あの船から逃げた奴等がいたはずだが、どうした?」

「……いいえ、あの船から出てきたのは、海人と海人がかついできた海賊達だけよ。……あれで全員じゃないの?」

「なに? そんなはずは」

ない、と出そうとして、海人はひっかかりを覚えた。あの見えない壁だ。あれは今考えると、魔術の類なのは間違いない。

あの男は魔術師だった? だとすれば俺が想像できない手段で、あ

の船を脱出したことも有り得る。

海人は目の前にいる、自分より魔術に詳しい者に意見を聞いた。

「愛代、もしあの海賊団に魔術師が紛れているとして、気づかれずに逃げられるか？」

愛代は目を見開き驚いて、腕を組んで思案をはじめ。

「魔術は結構なんでもできるし、水の中で息をすることも、姿を消したりすることも、他の場所に転移することもだつてできる。だけどそれは何人も魔術師が呪力を合わせて、時間をかけて行うもので、簡単にはできない。それに魔術を使ったのなら、私が感知できるはず。呪力が感知できないのなら、使っていないか、人間より高位の者が隠蔽に気を使った時だけ……」

二十話、十三湊

『それで、貴様は一体、極東の蛮民族相手に何を手間取っているんだ？』

「口を慎みなさい、海の王よ。この私があなたと徒党を組んでいるのは、あなたに従属したからではありません」

「どことも知れぬ部屋の中で、二つの人影があつた。はじめに喋つた方が男、男を強く叱責した方が女性であつた。」

女性はきめ細やかな和服を身に纏い、透き通るような青の羽衣をはためかせ、その布より遙かに勝る美貌を持つていた。シミひとつない整つた顔立ち、腰まで届くかというさらさらとした長い髪。特にその整つた容貌は、この世のものではないほどの美しさを持つていた。

事実、彼女はこの世のものではない。半世紀経つたとしても、そのままでありつづける。真に生ける存在ではないのだ。

彼女は、彼女の前に立つている男も、まつろわぬ神だつた。

「我ら四神があなたに従つていると思うのなら、それは大きな誤解です。我等があなたに力を貸すのは、あくまでもあなたの欲と我等の目的が、偶然合致しただけのこと。この侵略行為が、我々の大願成就の近道だと考えているからです」

女性はその青く澄んだ瞳で、目の前の男をすつと鋭く睨みつけた。

神代——神話の時代に、たとえ従属と支配の縁にあつたとしても、まつろわぬ神として顕現したからには、関係は対等だ。

女性と、ここに居ぬ三神にとつても例に漏れず、男の前で膝を折つたと思われるのは甚だ不本意であつた。

それに彼女等が主と崇めるものは他にいた。

『わかつてゐるって。あんたら地母神の創造主を探しに行くんだろ？
その邪魔はしない。だが成果を出してもらわなきゃ意味がない』

「成果を出せぬ理由、私の手を阻むほどの障害があるとしたら？」

『なんだと？』

男の声色が低くなり、場が緊迫した雰囲気が変わる。

『まつろわぬ神を阻む壁となると、同じまつろわぬ神か、それを斃した

篡奪者以外に有り得ぬ。いるのか？」

「ええ、神殺しが」

男は腕を組むと、唇を結んで考え込みはじめた。

神殺し。それは神を神たらしめる権能を篡奪し、それを気ままに振るう、生まれながらにしての勝利者である。

まつろわぬ神から常人の身でも勝利を勝ち取るその在り方と、神の持つ聖なる力を具現した権能。本能的に敵と感じ合う、まつろわぬ神の宿敵だ。

『当代の神殺しのひとりか、まさかそのような辺境にいるとはな。勘違いではないのか？』

「つい先日魅了したばかりの海賊を走らせたわ。神の権能の一端、しつかりとこの目で確かめました。間違いなく神殺しよ」

魅了した海賊というのは、仁実の乗った貿易船を襲ったあの海賊の頭領のことだった。

女性のまつろわぬ神に手籠めにされたのはその頭領だけで、あとは金で雇われたごろつきだった。簡単な商売だと乗せられて、楽な気持ちで参加した者ばかりだった。

海賊は、女のまつろわぬ神に与えられた術でまんまと逃げ果せていたのだ。今はもう用済みとばかりにかけられた呪いも解かれて、野に放たれている。

男のまつろわぬ神はしきりに頷くと、喜色の面で言った。

『神殺しがいたのならば仕方がない。俺もそちらに行こう。お前だけでは荷が重かるう。我ら二神が力を合わせれば、神殺しのひとりなど取るに足らぬ』

仕方ないと言う割には嬉しさを抑えられていない、男のまつろわぬ神。彼はとある理由により、拠点としている場所からの外出を禁じられていたのだ。表情に抑えきれぬ感情がにじみ出していた

男のまつろわぬ神は、神殺しの出現を理由に拠点を留守にしようとしていた。しかし女性のまつろわぬ神が待ったをかけた。

「その神殺しはまだ権能の扱いに不慣れな様子。おそらくまつろわぬ神を利逆してから、それほど月日が経っていないでしょう。神殺し

「といえどまだ新芽、摘むのに私のみで十分事足ります」

女性のまつろわぬ神は武の神ではない。その華奢な体では、神殺しの強靱な体を傷つけることは敵わぬだろう。

だが彼女は地母神の系譜に連なる女神であり、地母神はほとんどが魔術に秀でていた。彼女も魔術の扱いに長けており、特に水の魔術はそれだけで神の権能に匹敵した。

『いや、しかし』

「それに、あなたは助けになりません。助けどころかむしろ場を乱しかえって邪魔です。来ないでくださいな。……それでも来ると言うのであれば、海を渡るあなたを沈めますよ?」

『……は、はははは。やれるものならばやってみるがいい! なんせ』
「なんせ、あなたの王妃に権限を頂いていますからね。あなたの愛おしい海の魔物達が、容赦なくあなたを沈めるでしょう」

女性のまつろわぬ神がにっこりと満面の笑みを浮かべる。
つい先ほどまでの喜びようはなんだったのか。一気にどん底に落とされたかのように顔を真っ青にさせて、男のまつろわぬ神は肩を落として落ち込んだ。

「吉報を持ち帰るまで、側室のご機嫌取りにでも奔走してなさい」
『……ああ』

男のまつろわぬ神は生気を感じられない返事をする。

女性のまつろわぬ神が手を大きく外に払うと、男のまつろわぬ神の姿が消えた。男のまつろわぬ神の姿は幻であり、本物ではなかったのだ。

幻が消えた部屋で、女性のまつろわぬ神は独り言ちた。

「罫を十全に施すならば、私の領地に張るのが順道。しかし張るはいが、どのようにおびき寄せせるか。神殺しが飛びつく、うまい餌はないものか……」

その独り言を聞く者は誰もいなかった。



海人たちは、十三湊に到着した。

十三湊は、安東にとつて重要な貿易拠点である。北はアイヌ、南は琉球まで、果ては朝鮮半島や中国とも公益を行っていた。北海道のアイヌと和人の間を取り持つ窓口であり、安東氏の発展に大いに貢献してきた。

安東家が二つに分かれる以前もここを中心に根を伸ばしており、二つに分かれた後は湊安東家はここを本拠地に、檜山安東家は檜山城を本拠にしていた。

十三湊の市場は活気に溢れていた。檜山も安東氏の領地の中では貿易が盛んな方だが、通行量も生氣もこちらが圧倒的に多かった。

海人が初めてここに訪れた時は、その人だかりに驚いたものだ。人口密度だけならば、音に聞く『堺』の市場にも劣らぬかもしれない。

海人は、愛代と仁実の二人を侍らせて、市場を物見遊山も兼ねて見回っていた。

愛用の槍は左手に、杖のようについて持ち歩いていた。腰に差すにも背中に背負うにも大きすぎる代物だ。人ごみの中でも少し目立っていた。

「どうですか、そのべっぴんさん方。美しい反物はいかがかね？
これなんか、お似合いだと思えますがね」

「そこのお兄さん、髪飾りなんかはどうか？ お連れの可憐な女性方に、贈ると喜ばれるよ」

そしてよく女性陣は綺麗だから、と商いをする者達に声をかけられる。

その褒め言葉に釣られて二人は、海人はしばらく動けそうになかった。

手持ち無沙汰になった海人は、自分に声を掛けてきた男の商人の前、並ぶ商品を値踏みするように眺めた。

商人の前には、ここらでは見かけない高級そうな櫛や髪飾り、簪が並んでいた。海を越えて渡ってくる物もあり、市場では多種多様な文化が溢れている。

二人が他のものに気をとられている間に、男の商人に問うた。

「あの二人、可憐だと思おうか？」

「ええ、可憐な方々だと思えますよ。あなた方はどこかの大名家のお侍様なのでしょう？ 特に彼女、美しい髪をお持ちで」

「そうだな」

二人とも百姓のようなつぎはぎを着ているわけではなく、上質な着物を着ている。髪も肌も手入れされており、農作業を行っているようには全く見えない。どちらも父親に大切に育てられたからだ。

仁実は『美しい』よりも『可愛らしい』と表現したほうがいいかもしれない。あと二年で成人であるし、海賊だったという理由もあり、美しい物を見る目はある。

ともかく声を掛けられる理由には、二人が美人だというのものもあるだろう。

「二つもらおうか。どれかおすすめてを選んでくれ」

「毎度ありがとうございます！ そうですね……」

海人はすすめられたものから二つ選び、包装してくれるよう頼んだ。

この男も、あの二人が安東家の直系だと知ったら驚くだろう。海人の前にいるこの商人は、愛代のお膝元で商売をしているのだ。さぞや驚くだろう。

愛代は長く城に引きこもっていたせいか、民に顔をあまり知られていない。

病弱とされているが、本当は活発なお姫様なのだ。

「お、海人じゃねえか。どうしたこんな所で」

交通の邪魔にならない、かつ二人が見える道の脇で待っていると。

二人が合流する前に、海人は重蔵に見つかってしまった。

「なんだ嫌そうな顔して、つれねえな。俺とお前の仲じゃねえか」

そう言つて肩を半ば無理やり組んでくる、いい年こいた中年。ぼさぼさの髭の間から、酒くさい息が吐かれる。

そりゃあ親子だからな、と心の中で返し、海人はうんざりとした表情を露骨に顔に出した。

いつものこと、日中から酔っ払うのは重蔵の日常だった。

「酒くせえぞ。それと自力で立て」

「ぐへへへへ、酔ってねえよ」

「聞いてねえし、酔っ払いこそがそう言うんだよ。頭冷やせ」

酔っ払いを引き剥がそうとしていると、買い物を終えた愛代と仁実が戻ってきた。

両手にいっぱい物を持っている。

「あら、重蔵様。ご無沙汰しております」

「おう、愛代さん」

三ヶ月前から重蔵は、愛代を娘のように扱うようになった。遠慮や怪しい敬語で壁を作らなくなったのだ。

挙式などはしていないが、海人と愛代の関係は重蔵公認のようなものだった。

愛代にとって重蔵は、最も近い親族だ。上に曾祖父がいるが、床に伏せて死を待つ状態だ。海人の義父ということもあって、世話になっている人だった。

それをよく思わないのが仁実だった。

「お父様。また昼間からお酒を飲んで、政務のお仕事はどうしたのですか？」

「いいじゃねえか、仕事の合間にちよつとぐらい。ケチケチすんな」

「お父様のちよつとは信用なりません！」

「あーうぜえ」

仁実の説教も、重蔵は右から左に聞き流した。

「とにかく、海人をもらってくぞ。いい酒出す居酒屋を見つけたんだ。たまには親子水入らずで飲むとしようぜ」

「待ってください重蔵様！ 海人は私達と市場を見て回るんですよ！」

目の前で義理の父親と内縁の妻が自身を取り合っているのぼーっと眺めながら、海人は別のことを思い出していた。

海人は重蔵の酒という言葉に、アテルイを思い浮かべた。今度いい酒を土産にするという約束を取り交わしたことを、思い出したのだ。

「……そうだった。悪いな、二人とも。いい酒は俺も欲しいと思って

いたんだ」

「そんな、兄様」

「代わりと言っちゃあ何だが、これ、やるよ」

海人は持っていた贈り物を、それぞれ愛代と仁実に渡した。

二人とも、鳩が豆鉄砲を食らった顔をした。

「んじゃ、また後で」

海人は重蔵に肩を組まれたまま、大通りから路地裏に入っていた。

海人が進行方向に顔を戻すまで、両名は信じられないものを見たかの如く、硬直したままだった。



仁実は、愛代と仲良くそろって、海人と重蔵が人ごみの中に消えるまで、呆然と立ち尽くして見送った。

あの粗暴な性格の海人が、自分達に贈り物をくれたのだ。

驚天動地の出来事だった。

「私、兄様から物をもらったのって、初めてかもしれません……」

「そうね、私も一緒に食べ物をつまんだことはあるけど、残る物をもらったことなんてないわね。……開けてみましょうか」

「はい」

市場で買ったものをひとまず置き、二人はゆっくりと包装から取り出す。

愛代が貰った物は、櫛だった。漆塗りの櫛で、梅の花が蒔絵で入っている。

「綺麗……」

仁実の貰った物は、簪だった。西洋の花であろうか？ 棒の先に、見たことのない血のように紅い花がついていた。

仁実には知りえぬことだったが、その花は西洋でアネモネと呼ばれる花だった。

「ですね。だけど……」

仁実 は自分の髪を撫でた。仁実の髪の長さは、うなじが見える程度に短く、簪を差せるほど髪が多くなかった。

せっかく兄様から頂いたのに……。仁実 は、海人に差して見せることができないのが悩ましかった。

「大丈夫。髪はまた伸びるじゃない。今度は肩に届くくらい伸ばして、海人に見せてあげましょ」

複雑な表情で簪を見つめる仁実の心を見透かすように、愛代は励ました。

その言葉に励みを感じ、仁実 は沈んだ心を浮き上がらせた。

「……そう、ですね。ありがとうございます、愛代様」

仁実 は微笑を浮かべて、愛代にお礼を言った。愛代もまた笑みを溢す。

未だ二人の仲は悪い。だが愛代の優しさに触れて、着実に仁美の心も解けていった。

二人は微妙な距離で湊城に帰路をとる。仁実にとっても湊城は家族のいる、帰るべき家になっていた。



その頃、海人は酔いから覚めた重蔵に、酒の席であることを聞かされていた。

「南部が怪しい？」

重蔵は愛用の盃に酒をつぎ、海人のお椀にもついだ。

海人は小さく頭を下げて礼をすると、それに口をつけた。

「ああ、十和田山の噴火の被害が収まっていないっていうのに、隣国を攻め滅ぼそうとしているようだ。むしろ混乱している今こそは、とあった所だろう」

南部氏は北奥羽、下北半島を掌握した大名家のことで、領地には日本三大霊山の恐山がある。

安東氏とは陸奥湾、平館海峡を挟んで向かい合っている。切ることでできない関係にあった。

溶岩で被害は及んでいないにしても、火山灰はまだ大気を漂っている。他国に進軍する余裕はないと思っていたが。

「つい最近、領主が変わってな。それが野心家で、しかも女領主だから下町でも噂されている。草を放つたら、簡単に知れた」

重蔵はそう言うのと、ぐいつと盃を傾けた。重蔵はまた酔い直すつもりだった。

だらしなさからは想像できないが、仕事はちゃんと行っているようだった。今は他国の動きを監視しているようだ。

「それよりも今は被災地の復興が最優先じゃないのか？」

「ああ、復興も平行してやっていかなきゃいけねえな。だがもつと優先することがあるぞ。お前の仕事だ」

海人は力強く背中を叩かれた。力加減ができておらず、少し痛い。

呂律は回っているが、もう酔いが回り始めたらしい。それか酔っている内に入らないのか。

「噴火で家や肉親を失った者が、賊になるかもしれないねえ。しっかり目を光らせておいてくれ」

重蔵が恐れていたのは、外敵よりも、内部の反乱だった。

海人もその重苦しい雰囲気を感じ取り、無言でぐびつとお椀をあらった。

二十一話、拐引

重蔵に、酒の席で南部氏の不審な動きを聞かされたその三日後。南部は攻めてきた。

二つの国の国境近くに密かに軍を集め、国境の砦を強襲されたのだ。

海人はその知らせを受け取ると、すぐさま兵を集めて急行、南部軍と正面からぶつかった。夏泊山地の中での衝突だった。

「はッ」

最寄りにいた敵兵を三人一気になぎ払うと、海人は周囲を見回した。

周りは敵兵のみで固められ、海人の逃げ場はない状態。それだけ見れば追い詰められているのは海人側だが、両者の表情は真逆であった。

南部兵は化け物でも見るかのような恐れと焦りの表情。対して海人は近所に散歩に行くかのような余裕の表情だった。

「恐れるな！ 鬼の如き怪力を持てど、安東海人は人の子ぞ！ 奴を休ませぬよう波状攻撃を加えれば、必ず疲れが見える。攻撃の手を止めるな！」

「かかってくるがいい。だが恐怖を忘れてくれるな。忘れた者から倒れることになるぞ」

敵の大將は優秀で、海人の包围を崩さない。海人は飛来する矢も弾き、闇雲に突撃してくる兵を斬り捌いた。

そんな時、黒のろしが上がった。

「あの方角は……」

黒のろしの上があった方角には、安東の城があつた。それに黒のろしは救援要請、または緊急事態が起きた時に焚くもの。

城には仁実がいる。

何十の兵に囲まれても焦りを見せない海人が、のろしを視界に収めて、はじめて焦りを出した。それを好機と勘違いした敵大將が、号令を下す。

「いまだ！ 一斉にかかり、首を取れッ！」

「邪魔だ、どけえッ！」

襲い掛かる兵の包囲網。海人は強靱な肉体を武器に、被刃覚悟で強引に突破した。



「親父、何があった」

「海人。……遅かったな、この遅れは高くつくぞ」

無残な姿をさらす城門をくぐり、海人は忙しく指示を出す重蔵に声をかけた。重蔵は敵の襲撃で混乱する場内の兵をなだめようと、必死に指揮を執っている。重蔵の命令が下った兵士たちが、城内のけが人を手当てしたり、壊れた城を修復したり、右往左往していた。

「疾風迅雷の奇襲だった。あつという間に城門を破壊され、目的の物のみをかつさらわれた。死人も少なくない」

ちょうど二人の横を、人が乗った担架が通り過ぎていく。ゴザの間からはみ出た手は、だらりと力なく垂れ下がり、ポタポタと水をしたたらせていた。

「おかしな事だ。傷跡もねえのに、城内の無差別な場所で、ずぶ濡れで死んでやがった。雨も降ってねえのにな」

ふと海人は違和感を感じた。

何か足りない気がする。今はこうして重蔵に状況を聞いてはいるが、いつもなら真つ先に自分に駆け寄り、教えてくれる者がいるはずだった。

仁実がいない。自分の後ろをちよこちよこ着いてくる義妹がいないのを、海人はようやく気づいた。

「親父、仁実は無事か？ それとも仕事を与えて、此処にはいないのか？」

「ようやく聞いてきたか。……仁実は連れ去られた。襲撃した者の目的はそれだったらしい」

「なにっ？」

軽く放たれた言葉を、一瞬だけ海人は飲み込めなかった。

「怪我をしたでも死んだでもなく、攫われただと？ 何故仁実が攫われなくちやならねえ!」

「知るものか。相手の迷惑なんぞ分かっておれば、むぎむぎと仁実を攫われたりなんてしねえ。何考えてるかなんてさっぱりだ」

「ちつ。くそ……。今なら追いつけるかもしれねえ。俺は行くぞ!」

「待て、海人」

踵を返し、海人は走り出そうとする。しかし重蔵に肩を掴まれて止められる。

「今から行っても無駄だ。見つかりっこねえ」

「なんでだ! 仁実が危ねえんだ、どうしてもっと早く追っ手を出さない!」

「どつちに逃げたかもわからないのに追っ手を出せるわけがない。それに見つけるのだって困難だ。城にいた奴等は、襲撃してきたのは女が一人だつてのたまいやがる」

「女が……一人!」

海人はしばらく自分の耳を疑い、振り返り破壊された城門を見て城内にいた兵士の耳を疑った。

現実起きた出来事なのだろう。通り過ぎたときは流し目で見えなかったが、注意深く観察すれば、城門は確かに不自然な壊れ方だった。

「二ヶ月前の俺なら信じなかっただろうが、神殺しとなった俺なら信用できる。そんな神の御業を行える者は、この世にいる。……親父、その襲撃してきた女は、術師の類か?」

「ああ。だが場合によっては、さらに厄介な存在かもしれん。兵士どもは、こうも言っていた。『城門が決壊し、城内に水が流れ込んだ。水が引いた後は見麗しき女子が気絶した仁実を抱えて、空の彼方に飛び去っていった』とな」

川も離れているこの山城にな、とため息交じりに言う。

重蔵は既に、女の正体に勘付いていた。勘付いたというよりは希望だが、海人が言うように神の御業、そんな事象が何度も起こせるなら

ば、戦の常識が根本的に変わってしまう。

海人は、アテルイの言葉を思い出していた。神殺しは、まつろわぬ神と互角に戦える存在。そのせいか厄介ごとを引き寄せると。

それにまつろわぬ神と神殺しは宿敵同士。頭で考えるよりも本能が敵と理解し、お互いを討滅し合うと。

「海人、迂闊に飛び込むことは危険だ。もしかしたらその女は、神殺しでも難しい相手かもしれない」

「そうだとしても、俺は戦うことを躊躇わねえ。俺達の想像通りなら、どんなに策を練り上げてても徒労に終わる可能性がある」

相手はまつろわぬ神かもしれない。

重蔵としては複雑な心境だった。その女が只の人間であれば、ぽんぽんという可能性が出てくる。そうなれば戦にならない。まつろわぬ神だとしても、周辺にどんな被害が及ぶか、想像しただけで憂鬱だった。

「十三湊に被害を与えるのだけは、やめてくれよ」

「元から南部の領地に攻め込むつもりだ。仁実を攫った女も、そのつもりだろうしな。……俺は一旦、湊の城に戻る。仁実を奴等から取り返すまで、俺抜きで持ちこたえてくれよ」

「誰に言ってる、お前が俺に物言うなんざ、百年早え。……仁実のことは頼んだ、あいつは俺の一人娘だからな」

「おう、頼まれた」

海人は重蔵と拳を突き合わせると、踵を返して馬小屋まで走った。



薄暗くじめじめと蒸した、石畳の牢獄の中、仁実はいた。

仁実が入れられた牢獄は、八畳はある広い空間だった。牢獄に小窓はなく、光源は木の格子の隙間から漏れる蠟燭の火のみ。八畳の空間にあるのは、用を足すのに使う壺だけだった。

「彼女が神殺しを釣る餌を持ってきたと聞いた俺は、興味本位で牢屋に向かった。俺は石階段を降りると、そこに君がいた。君を目に入れ

た瞬間、体に電流が走った！ 君との出会いは、運命の神が仕組んだことだったと、その時確信した！」

男は手振り羽振り大仰に語っていた。

「どうでもいいです。それよりも手伝う気があるのなら、私がここから出る方法を考えてください」

格子越しに仁実があらったのは、ただの一枚布を体に巻きつけたような独特の服装の、とても肌色が多い外国そとくにの男だった。金髪であり、服装も日の本では有り得ない、蝦夷でも大陸の方でも見たことなかった。

なにやら爽やかに男は言い放ったが、あいにく髭を生やした中年の男であった。見た目が十代ほど若ければ気障な台詞も似合ったかもしれないなかったが、仁実の父親と同じぐらいの年齢ではかみ合っていないかった。

仁実が手伝う気があるのかと聞いた理由は、牢屋の奥で伸びている衛兵があった。男が、言葉を交わす間もなく投げ飛ばしたのだが、その本人はいきなり一目惚れなどと語りだしたのだ。仁実は話半分に聞き流していたが。

それに、この木の格子、出入りする扉がついてなかった。仁実が目覚めたのは牢屋の中で、どのように自分が入ったかはわからなかった。

「しかもあなた、先ほど海を渡ってきたと言いませんでしたか？」

聞き流した言葉の中でも、やけに耳に残ったフレーズがあった。

「うむ、言ったな」

「ではあなたは……術師、なのですか？」

仁実はそうであって欲しいという願いも込めて、推測を口にした。

彼女がこの牢屋に入る前の最後の記憶は、濃艶な美貌の女性に連れ去られたところまで。女性の腕の中で急に睡魔に襲われ、目を覚ますとこの牢屋の中だった。

妖艶な気配を纏う女性は、間違いなくまつろわぬ神だった。さらにこの男もまつろわぬ神であった場合、安東は二柱の超常現象を敵に回すかもしれない。

「それは違う」

男の一言で、仁実の願望は儂く砕け散った。

ふいに男は、網目状の木の格子に右手をかけた。

「そいつ」

男の軽い掛け声で、格子はあつさりと砕け散った。男が右手を後ろに引くだけで、頑丈な格子が引きちぎられてしまったのだ。

空いた格子の穴から、男が牢屋の中に入ってくる。そして無防備に仁実に近い寄ってきた。

「見てのとおり、俺はまつろわぬ神だ。だが俺は人の子だ何だと差別はしない、女性は等しく扱う。この愛は本物だ。……俺の名はポセイドン。君の名を教えてくれ、マドモアゼル」

そう言つて男——ポセイドンは仁実の前に跪き、驚きで立ち尽くす仁実の手をとった。

和の国の人間には浸透していない文化だが、仁実は何をされそうなのか理解していた。

異国の絵本を読んだことがある。ポセイドンは、仁実の手の甲に口付けをしようとしているのだ。惚れたと言つていたのも冗談ではないらしい。

「お断りいたします」

しかし仁実は口付けをされる前に我に返ると、ポセイドンにとられた手を激しく振り払った。

狭い牢屋の中で、仁実は後ずさった。嫌悪感を露に、石壁に手がつくほどに彼女はポセイドンから距離をとった。

「私には既に愛する人がいます。私はその人を、一生支え続けると決めました。ですので誰からの恋慕も、どんな愛の言葉も受け付けていません」

仁実はポセイドンをキツと睨みつけた。

すると目の前の男はゆらりと立ち上がり、急に顔を上げる。男の目を図らずも覗いた途端、仁実は急激に寒気に襲われた。強気な態度から一転、本性を表したまつろわぬ神の気配に当てられ、仁実は背筋が凍るような恐怖に顔を青くした。

崩れそうになるのを、懐にあるお札を握り締めることで堪える。お札は簡易な結界を作ることのできる、せめてもの護身用だ。まつろわぬ神相手には心もとないが、ないよりはずっとマシだった。

「強気な女は嫌いじゃない。むしろ弱気な奴よりもずっと……燃える」

舌をちろりと出す男に、仁実^{にみ}は別の寒気を覚える。

まつろわぬ神相手に、結界もいつまで持つかわからない。ぎゅっと手に爪が食い込むほど握り締めて、仁実^{にみ}は海人の助けが来ることを、強く願った。



湊城に飛び戻った海人は、すぐさま愛代に事情を話した。いつになく真剣で切羽詰った海人の話を、愛代は口を挟まずひととおり聞き届けた。

海人から聞かされた今の状況を飲み込むと、すぐさま救出計画を立て始めた。

「ここが湊城、重蔵様が籠城している城がここ、戦場はこのあたり。そして南部氏の政の中心が……ここよ」

愛代は地図を広げた。広げた地図は陸奥湾を中心に、津軽半島と下北半島に夏泊半島、津軽海峡とその先の蝦夷の地まで描かれていた。

愛代が指し示したのは、下北半島の中心あたり。恐山という霊山がそびえる場所だ。

「どうしてこんな場所に構えている？ 公益の拠点としても重要な場所には見えないが」

「今までも真意はわかっていなかった。だけど南部の統治者がまつろわぬ神ならば、うつすらとだけど判断できるわ」

恐山は山岳信仰がされており、溶岩が固まり硫黄が噴出す恐山は、現代にある地獄の様。そのため地獄に行けば死者に会えると、古くから山岳信仰が盛んだった。

十和田湖周辺でも今現在灼熱地獄が広がっているのだが、今は置い

ておく。重要なのは、恐山では古くから宗教の信仰が盛んだということだ。

そんなことを耳にしながら、海人は愛代を見つめていた。

真剣に地図を見てひきしまった表情をする愛代は、だらしない面しか見ていない海人には新鮮に感じていた。

こんな時に何だが、とても綺麗だった。

「まつろわぬ神の力は、どれだけ名が民衆に広がっているかによって左右される、と教わりました」

愛代の発言に、海人は首をかしげた。民に信仰されるほど力が大きくなるなど、海人には初耳だった。

「だから仁実さんを攫ったまつろわぬ神は、ここの信仰をすべて奪い取り、自らを信仰するように仕向けたんじゃないかな？」

「……恐山を根城にしているのはわかった。だが愛代、信仰で力が変わるなんて、誰から教えてもらったんだ？」

愛代は言われてきよんとしていた。

「アテルイさんに決まっているじゃない。まつろわぬ神について一番知っているのは、まつろわぬ神であるアテルイさんだけだよ」

「いつ教えてもらった?! いや、それより何時の間に仲良くなったんだ!?!」

「一週間前、久しぶりに檜山に行った時だよ」

「あの時か!」

一週間前といえば、海人がひとりで祠の縁側で黄昏ており、直後に仁実の乗った貿易船が海賊に襲われた、あの時だった。

半日も経たない内に仁実はアテルイと仲良くなり、知恵を教授してもらったのか。

海人はますます怒りを湧き上がらせた。自分の知らない所で親密な仲になっていたことにも妬みを覚えるが、それよりも海人が腹を立てていることがひとつ。

「あいつ封じられているにもかかわらず、留守にして俺を待ちぼうけさせやがって。しかも愛代と歓談だと……」

海人は怒りままに勢いよく立ち上がった。

「ま、まあまあ。封じられていたのも自分の意思だつて言うし。それよりもほら、仁実さんを救出する策を考えたから、聞いてよ」

愛代になだめられ、海人はしぶしぶと座る。

「まあ、それが先だな。あいつをに会うには後にもできる。……で、どんな策なんだ？」

海人は頬杖をつきながら、ぶつきらぼうな口調で尋ねた。

「簡単に説明すると、敵軍を一方に誘導して、手薄になったところを一点突破で抜けようって策。時間もないし、できるだけ早く救出するなら、おそらくこれが一番確実だと思う。……海人は、仁実さんの救出役をお願い。陸奥湾を横断して、恐山まで行くの」

そう言つて愛代は、十三湊と恐山との間に墨で線を引いた。線は津軽半島の最北端である竜飛崎を超え、広大な海洋面積を持つ陸奥湾を通つていた。

「安東水軍の軍事力は諸国に響いている。南部も海の上に兵を相応に割いているはずだ。俺だけならまだしも、船を守つての突破は難しい」

行きだけではなく、帰りのことも考慮しなくてはいけない。船同士での戦では、海人の怪力を意味を成さない

それに船はひとりだけで動かせるわけではない。それなりの船員が必要だし、船をあちらで調達しても、乗つてくれる船員がいなければ動かせないのだ。

愛代はそれが聞きたかつた、とでも言いたげに目を輝かせた。

「そう、そんな馬鹿なことをするはずがないって、南部も思っているはずよ。だからこそ、そこに穴があるの。誰もできないような馬鹿をできる奴が、この安東にはいるじゃない」

愛代は大きく見開いた目で、にこにここと海人を凝視する。海人は暗に自分が馬鹿だと言われて、複雑な気持ちになった。

「神殺しの力は戦場では無理に使つてはいけない。重蔵様が海人に言い含めていたけど、まつろわぬ神がいるならば話は別よ。まつろわぬ神から篡奪した権能、今使わないで何時使うの！」

目を輝かせて自分に期待してくる愛代に、海人は気をとりなおし、

自信を込めて頷いた。

そして残りの問題なのだが、それは権能にあった。海人自身にも、権能の正体はつきりわかっていなかった。

何度か人気がない場所で使ってみたのだが、権能の力と思わしき事象は起きれども、そのどれもが違っていったのだ。

やはり戦場でないと上達しないか……。海人はアテルイに教えられたことを思い出した。

会って間もない鬼だったが、自分を気遣ってくる姿はまるで保護者のようだ、と海人はふと思った。

二十二話、恐山

波はとても穏やかだった。それもそのはず。海人達海賊団がいるここは陸奥湾。津軽半島、夏泊半島、下北半島と四方を陸に囲まれている、本州最北端の湾だ。海に出るには西館海峡を抜けるしかない。海人達はそこから陸奥湾に入ったのだ。

陸奥湾の中から見ると景色を楽しもうにも、空の天気はあいにくの曇り。しかしこれから行うことを思えば、海人にとっては好条件だった。

「これは……。なかなか壮観な景色じゃねえの。敵さん、これだけの水兵を隠し持っていたとはね」

海人は目の前に広がる軍勢を眺めて、つぶやいた。これからその軍勢に突撃する者とは思えない口調だった。

曇天の空の下、海人の眼前、陸奥湾に展開するのは、南部の十数隻の戦船だった。

対して海人達は一隻。愛代から貰い受けた軍艦で、海賊だった時からの乗組員だけ動かしている。

勝敗は火を見るより明らかだ。

ただし、海人という特別を加えれば、その戦況は一転も二転もする可能性があった。

「俺達が無法者だった頃だって、こんな無茶はやらなかった」

「ういッス、船長」

船首で眺めていた海人の後ろに、いつのまにか船員の一人がいた。

「その船長って呼び方、まだ慣れねえな。俺の中では『若頭』で『副船長』なんだがな」

海人は頭の後ろをかき、むず痒そうに言った。『安東水軍頭領』という新しい呼び名は慣れるのが早かったが、昔からの呼び名が変わると調子が狂った。

政に時間をとられる重蔵にかわり、海人は海賊団の船長の座を譲られていた。重蔵から一人前と認められていたのだ。

「そっすか？ 自分達からすれば、ずっと前から『頭』で『船長』にふ

さわしい。そう思っていましたかね」

「他の奴等もそう言っているのか？」

「さあ？　　だけど口で言わずとも、皆船長を認めている気がしますよ」

「そうか……。それでどうした、何か問題でもあったか？」

海人は尋ねた。こうして誰かが直接、海人に聞きに来るのは珍しい。大体のことは仁実が対処してくれるのだが……。

そうか、と思ひ至る。どうやって倒すかだけを考えていたせいで、足のことにさえ気が回っていなかった。

「海賊だった頃ならお嬢仁実に伝えたり、指示を貰えばよかったんすが……」

「ああ、そうだったな。今から助けに行くんだから、いないんだっとな。……出航が遅かったのも、そのせいかな？」

「ええ、指示がなくなるとも、海賊時代の要領で皆やれましたが、それもあるかもしれないっす」

海人にとつて仁実は、自分の後ろをちよこちよこ着いてくる、犬か猫のような存在だった。居るのがあたりまえで、海人が一度海賊船に乗れば、居ない時はなかった。

仁実がいない海賊団は、想像できなかった。だが実際に仁実がいないようになってから、初めてその大きさに気づかされたのだ。

「船長、普通に考えてあの大軍に真正面から喧嘩を挑むのは、無茶にも程があるっす。どんな作戦でいくのか、皆聞きたがってるっすよ」

船の甲板を振り返ると、海賊だった乗組員全員が揃っていた。古くから知っている顔を見下ろすと、二人を除いて揃っていた。二人とは重蔵、そして仁実だった。

「作戦か……」

それも仁実と、たまに親父が一緒になって考えていたな。海人は仁実がどれだけ大きな役割を背負っているか、知っているつもりでいた己を恥じた。

「お前等聞け！　俺達は今から仁実を助けに行く。向かうのは恐山、そこに仁実を攫ったまつろわぬ神がいるはずだ」

ざわざわと騒がしくなる。海賊達は、仁実がまつろわぬ神に連れて

かれたことを今知ったのだ。

「そのためには、まずあの大船団を突破しなくてはいけない。見ろ、鼠一匹逃さぬと網を張る南部勢の水軍を。……俺達が海賊だった頃では突破は敵わなかった。だが今この時は俺がいる。神殺しとなった俺がいる」

海人は遠目でしか見たことのない恐山を頭に浮かべた。そこに七頭の竜と同じ存在、まつろわぬ神がいると思うと振るえが走り、四肢にちからがみなぎっていく様だった。

「目的地は恐山。作戦は簡単だ。あの船団を突破し、追っ手を撒いた後、船を隠して恐山に仁実の救出に向かう。救出した後に船に戻って、南部の領土から脱出する。しかしこの作戦には、この船に乗る者全員の信頼が必要だ」

ここにいる全員、元は自分達のため、生きるために無法者となった海賊だ。それが重蔵を頭として纏まって、海賊団となった。自ら命を捨てにいくような真似はしない。

「俺がまつろわぬ神から奪った権能で、奴等を蹴散らす。神の力なんぞ信じねえって奴がいれば、近くで降ろしても構わん。俺を信じて、お前等の命、俺に今一度預けちゃくれねえか」

今の仲間がいるのも、重蔵の手腕が大きい。降りる奴もいるんじゃないかと思っていた海人だったが、予想をいい方向に裏切り、待っても名乗り出る者はいなかった。

「お前等、命が惜しくはねえのか。俺達は、胡散臭いまつろわぬ神の力に頼って、あの数に喧嘩を売ろうって言うんだぞ」

「何言ってるんですか船長、これ以上に無謀なことなんて、何度もやってきたじゃないですか。もう数え切れませんよ」

「そうそう、そんな大きな仕事のとときは近辺の海賊達を集めて襲撃を仕掛けましたけど、その時だけ無法者の海賊が纏まれたのは、重蔵元船長だけの力じゃない。海人船長の力もありました。重蔵海賊団の『鬼の海人』って名に集まった奴等だっているんですから」

「海人船長がいればどんな修羅場も乗り越えられるって、俺達は海人船長に前から命を預けてるっすよ」

海人は口から変な笑いを漏らした。仲間にも恵まれた嬉しさと、振り返ればすぐわかったはずの仲間、それに気づかなかった自分の不甲斐なさを笑ったせいだ。

「ほら、自分の言ったとおりっしょ」

近くにいた船員が自慢げな顔で言った。海人は返す言葉もなかった。

「ああ、お前の言う通りだったな」

海人は船の進行方向を向いた。その先にはもう目前に迫った南部の船団がある。

海人は右手にずっと持っていた愛用の槍を掲げて、喚起の声を上げた。た。

「まずはこの大軍勢を突破する。船速全開、一点突破で蹴散らして突き進む！ 雑魚にかまわず、立ちふさがる者はすべて突き崩す。安東水軍に弓引いたことを後悔させてやれ！」

「了解、船長。……お前等、船速全開！ 船長を信じて突き進め！」

「ははっ、それでこそ船長だ！ 真正面から叩き潰せえ！」

海人に続いて掛け声を上げた船員達は、それぞれの持ち場に戻っていく。

そして海人は仲間たちの声と応援を背に受け、決意を強めた。目を閉じて、自分の内に眠る七頭の竜の力に呼びかけた。

勝者に従ってもらうぞ、まつろわぬ神。海人のまぶたの裏には七つの頭を持った蛇の姿が、まつろわぬ神の権能がこの世から消えても抗っていた。

仁実を取り返すため、目の前の壁を打ち砕くため、力を渡せ。今からお前の所有者は俺だ！ そう宣言した瞬間、海人は身体に権能の一端を掴む感覚を覚えた。

「あ、追い風が……」

マストに大きく帆が張られると、狙い済ましたかのように船の背後から強い追い風が当たる。

「我は厄災の化身……」

ひとりでに口が動き、眩きもれる。それは聖句、権能の力を強め

る呪文だった。

「八頸の竜蛇なり。大地よ火を吹け、炎塊を降らし、大地を均せ。普く生命に禍いを齎すもの也！」

追い風が一気に強くなり、突風となって海人の服をばさばさとはためかせた。無風で穏やかだった湾に、突如として嵐が巻き起こった。陸奥湾を少しでも知っている者ならば、ありえないと目を疑う事態だ。

海人が七頭の竜——八郎太郎から奪った権能の能力。それは自然の力を味方につけ、民衆が『神の怒り』と想像する災害すべてを、気ままに操る力。それが八郎太郎の権能の正体だった。

嵐は海人が引き起こしたのだ。

「いくぞ、波に舵を取られるなよ！」



その戦は、歴史上類を見ない大番狂わせとなった。

一対十四。素人でもわかる圧倒的戦力差に、四方を陸で囲まれた湾内。勝敗は始める前から明らか、そのはずだった。しかし南部の水兵たちは、目を疑う光景に遭遇する。

海水が、天に吸い上げられている。突如として起こった竜巻。突風から顔をかばい視線を戻してみると、雷鳴轟く嵐が吹き荒れていた。

しかも竜巻はひとつだけではない。三つ、近づけば船が巻き込まれてしまいそうな竜巻は、すべて海人が生み出したものだ。

向かい風は船を押し返すかの如く強く、荒れ狂う波は一瞬でも気を抜けば転覆するほど激しい。そんな嵐の中を突っ込んでくる船、海賊船は波乗りをしているかのように接近してきた。迎撃する暇もなく手一杯な南部は、まんま懐に入るのを許してしまう。

自ら射程に入ってきてくれたと、大砲に火を入れようとした船もあった。そんな船は、逆に稲妻に撃ち据えられた。マストに落ちた雷で、感電死したのだ。

船を近づけて乗り込もうとした船もあった。その船は前触れもな

く発生したマストより高い波に吞まれて、乗員すべてが押し流されてしまった。

その狙い済ましたかのようなタイミングと、海賊船が被害を被っていない異様を見て、噂を知る南部の兵士は叫んだ。

「安東の鬼は、天候にまで恐れられるというのか!」

振るえなかった拳を握り締め、兵士は悔しがった。海賊船は既に包囲網を抜けられ、遙か後方だ。船団は嵐に舵を取られ、しばらく追えそうになかった。



南部の領地で任務に従事していた重蔵の部下に、船の見張りを任せる。海人たち海賊団は真つ先に恐山に入った。しかし入った途端、海人たちは民衆の壁に阻まれていた。住民は誰も彼もが痩せこけていた。

「いけません、この先では領主様が祈祷に入っておられます! 何者も通すなどのお達しです」

「お前等は仁実を搜索しろ。この先に行くのは俺ひとりだけで十分だ」

「聞いておられますか!?!」

引き止めてくる長らしき老人を無視して、海人は船員に命令を下した。忍の術でもまつろわぬ神の枕元では、仁実の居場所を突き止めることはできなかつたらしい。

百人以上いる民衆を掻き分けて、海賊が前進する。彼らにとっては止めなければ命にかくわるのだが、民衆も武器を持った者達を無理やり引き止めるのは、さすがに躊躇った。

「この先では領主様が雨乞いを行っておるのです! あの天を覆う白い灰を取り除き、雨を降らせてくれるようにと、神に祈っておられるのです!」

「本当にそう言ったのか?」

突然怒気をこめた声とともに睨むと、老人は驚きたじろいだ。海人はずんずんと仲間達の後に続くと、立ち入り禁止の境界線で立ち止ま

り、集まった農民たちを眺めた。

海人も、忍からこの情勢はぎつとだが耳に入れていた。不作が続いていたこの土地に、ある日この世のものとは思えない美貌の女性が現れた。彼女が天に最も近い場で祈ると恵みの雨が降り注ぎ、野は花や草に覆われ、作物がぐんぐん育った。そうしてその女性は領主となり、天の神と民草を仲介する聖職に就いているのだと。

海人は息をはくように騙す女性に嫌悪を感じ、簡単に騙される百姓たちにも腹が立った。

「だとしたら大法螺吹きだ。なんせその女が神なんだからな」

「え、それはどういう……」

老人の疑問も無視し、海人は槍を地面に向けて横に薙いだ。境界線の上から、さらに深い溝を刻んだ。

「俺の名は安東海人！ 我等の邪魔をしよう、この線踏み越えようとする者あらば、女子供であろうと容赦なく排除する！ 鬼の力、その身で味わうことになるぞ」

安東海人。いきなり現れた男の名は、敵国の安東氏の身内の者だった。それだけでも恐怖の対象として十分なのだが、相手はさらに鬼の海人と称される人物。怪力で人間を吹き飛ばし、空を飛ぶという突拍子もない噂まである危険人物だ。

海人の名を聞いた、集まっていた者達は悲鳴を上げて我先にと逃げ出した。

そんな中、海人は隣にへたり込んだ老人を見下ろした。視線を向けられてびくついた老人は、どうやら腰が抜けて動けなくなってしまう様だ。

「さっきの疑問の答えだがな」

「へ……？」

「神がいるとしたら、そいつは俺達に害しかもたらさねえ。いつだって、俺達を弄ぶんだ。……早く逃げろ、ここもいずれ戦場になるぞ」

海人に脅され、地べたを這って逃げ去っていく老人を傍目で見送り、海人は奥へと進んだ。

◆
硫黄の匂いが鼻につき、湯気が海人の視界を覆い隠す。海人の歩く右や左、温水で温泉が湧き出ているのではない、硫黄の匂いがするのは吹き出ているからで、温水はどこかから湧き出た水が地表で熱されているからだった。

まさに水の無駄使い。これだけの水があれば、民に分け与えることもできるはず。まつろわぬ神が何を考えているか海人にはわからなかった。

奥に進むことしばらく、空が見える開けた場所に出た。だがそこは、特殊な結界でも張られているのだろうか。巨大な浴場になっており、人肌程度の湯が足首の高さまで張られていた。

そこは湯気が結界のせいであれに逃げず、まるで蒸し風呂のような熱気だった。湿気に一瞬たじろくが、意を決して中に入る。

広く湯が張られた浴槽結界の中央、シミひとつない瑞々しい肌を晒し、一糸纏わぬ姿で湯に浸かる見麗しき女性の姿があった。

そしてこの全身に力が行き渡る感覚。アテルイを前にした時と同じ、重蔵の推測は合っていた。

女性、否、まつろわぬ神は海人に背を向け、華奢な背中と綺麗なうなじを無防備に見せ付けていた。

「誰？ 決して立ち入ってはならないと伝えたはずですが」

「入るに決まっているだろ。入らなきゃ、お前を殴ることさえできねえ。……まつろわぬ神、仁実を返してもらおうぞ」

「あら、この感覚は……。そうですか、もう尋ねてきたのですね。早くてもあと二、三日はかかると踏んでいましたから……。意外に気が早い、そんな男は嫌われますよ、神殺し。それとも、安東海人と呼んだほうがいいでしょうか？」

振り返ったまつろわぬ神の貌は、体つきから想像したよりも美しかった。さほど女に興味を持たない海人が見ても、息をのむほどの美しき。まさしくこの世のものとは思えない美貌だった。

だが相手はまつろわぬ神、神殺しとは宿敵同士。海人は槍を構え

た。

前を隠さずに無造作に立ち上がるまつろわぬ神。しかし海人は眉根ひとつ動かさない。海人の身は愛代に捧げ、身内を守るためにあるのだ。心が乱れる余地などなかった。

「私の裸体を見て何も反応がないとは、なんとも味気ない。どうです、殿方にこうして見せるのは初めてなのですが」

「まつろわぬ神に名を知って貰っているとは恐縮だがな……。くだらない問答をする暇があったら、さつさと仁実の居場所を吐いて、俺に殺されやがれ。仁実に手を出したお前を、俺は絶対に許さない」

海人が斃したまつろわぬ神は、七つの頭を持つ異形の怪物だ。人型のまつろわぬ神とは戦ったことがなかった。

普段は猪突猛進な海人でも、命の危機を感じれば慎重になる。海人はまつろわぬ神を集中し、出方を伺った。

「そうですか。ああ、本当から飽き飽きします。話し相手としてなら、あの男のほうがまだ面白味がある。……。ですがまあ、いいでしょう」
相手の第一手は、海人の予想外な場所から行われた。

まつろわぬ神が、手を払う。海人は四方に注意を散らすも、何も起きない。だが動こうとして、ある変化に気づいた。足が思うように動かない。

足首まで張られていた透明な湯が、まるで泥のように張り付いていた。海人は湯から足を抜くことができなかった。

「あなたはおびき出されたのです。水が豊富に流れるこの場所、私の権能が最大限に発揮できるこの庭に！」

まつろわぬ神が両手を広げ大の字となる。するとまつろわぬ神の足元の湯が泡立ち、彼女の体を包みこんだ。

泡が割れて現れたまつろわぬ神は、薄い青色の和服を着ていた。施された意匠は、河の流れを連想させる。

「我が名は水天！ この名を地獄へ送られる、あなたへの手向けといたしましょう」

まつろわぬ水天は、高らかに名乗った。

二十三話、まつろわぬ水天

まつろわぬ水天が右手を掲げる。すると海人と水天を中心とした周囲が隆起した。

水は膜となり、海人の頭上で閉じようとしている。海人が動けないのいいことに、海人を水の膜に閉じ込めようというのだ。

「くそッ、なんだこれはー」

海人は必死にもがいた。足には粘土のような質感の、透き通った水が張り付いていたのだ。

ようやく海人は足を引き抜く。しかし、周囲は風呂場、湯が張られていた。仕方なしに宙ぶらりんだ足を前に下ろすと、足にまた水が絡みつく。うじゃうじゃと絡みつく水はむず痒かった。

どうこう迷っている間に、水の膜が海人の頭上まで覆い隠し、海人は閉じ込められてしまった。

海人は、田植えをしている時の気分を思い出した。田んぼから足を引き抜いては行きたい方向に突っ込み、今度は反対の足を引き抜いたらまた突っ込む。それに似ていた。

だから海人は前に進んだ。前に進んであの優雅に舞い踊る水天の脳天に、槍を突き入れればいい。船の上でひとつでを殺す時の力加減でやれば簡単なことだ。海人は槍を握りしめた。

まつろわぬ水天は青く透けた布をはためかせ、見たこともない舞いを踊っていた。口からは歌を兼ねた聖句を紡ぎながら、見る者を魅了する踊りだ。

紡がれた聖句のとおり、水の膜の内側から水が触手のように伸びた。水が鞭のようになり、海人の背中を打ち付けた。

「ぐはっ」

死角からの攻撃の直撃を受け、たまらず海人は胃の空気を吐き出した。

一撃だけでも海人が悶絶する強かな水の鞭。水天の口から聖句が紡がれると、その指示通りに鞭が、一つずつではなく同時に、それも四方八方から襲いかかってきた。海人でもこの時は捌ききれなかった。

た。

一対多の戦闘は、海人も何度か繰り返した。水の鞭だけだったら対処できたかもしれない。しかし今は足場が最悪、体の向きを変えるだけでも一苦勞。その場で足を固定しながら、攻撃の応対しなければいけなかった。

体の至る所に赤痣を作りながら、必死に身を守る海人。

対して水天は舞い踊るばかり。まつろわぬ神の宿敵、命を脅かすであろう神殺しがいるというのに、目をつむって自分の世界に入っていた。海人のことも認識しているかすら疑わしかった。

「あいつ……」

その余裕の態度に一矢報いようと、海人の心に火がつく。一步、また一步と着実に足を進め、水場を一息に駆け抜けた。

水の膜まで近づくと、持つ槍で膜を食い破る。水の鞭からの防御は最低限、背中を多く打たれてしまった。

「こつちを……向きやがれッ！」

舞いに集中する水天の脳天に、海人は槍を突き入れた。海人の言い放った言葉に反応し、水天がようやく目を開く。

刹那、槍は狙い通り脳天を貫き、水天の顔は粉々に飛び散った。

だが海人は成果に笑みを浮かべるのではなく、啞然とした。槍を刺された水天の頭は水風船の如く破裂し、破片は海人の顔にも飛び散ったからだ。

顔に飛び散ったそれは、水滴だった。

次の瞬間、頭を失った水天の体はどろりと透明な水に溶け変わった。水は宙を移動し、水天の頭を形作ると、それが水天の頭となった。水天の頭は完璧に再生した。

再生した顔の目で水天は、啞然としている海人を見た。予想通りの反応を確認し、水天はうまくいった、としたり顔で笑みを浮かべた。突き出された槍を、水天が掴む。細腕からは想像できない強い力だ。

よく見ると手のひらと槍の間に水が挟まっている。この腕力は水を操作しての強さだった。

「叶わないというのが良く理解できたでしょう」

「何……!?!」

「私を討滅するということが可能です。あなたの槍が私に届いたとしても、かすり傷ひとつつけることはできない」

海人が必死に槍を引き離そうとするも、水天は涼しい顔をして目前で挑発を続ける。

「あの愚かな七つ頭の蛇とは違うのです。七つも考える脳があっても、脳の回転は愚鈍な獣と同じ。無尽蔵の生命力を持っていながらあなたに負ける、その程度の者だったのですよ」

「お前……ッ!?!」

ようやく手を振り払った海人は、大きく後ろに距離をとった。

岩場の上だ。また水場に戻るという間抜けな失敗はさすがに犯さなかった。

「あいつを知っているのか?」

「当たり前でしょう。あの湖は地脈の集中点、あの蛇が湖にいる限り、お互いに傷を負わせることはできない。あの七頭の竜は、目の上の人ごぶでした」

水天と七頭の竜、八郎太郎はにらみ合い、均衡を保っていた。もともと八郎太郎にとっては住処を荒らす外敵を排除していたに過ぎず、水天には目もくれていなかったのだが。

「この山まで誘い込めれば私の有利は揺らぎなかったのですが、あいにくあの蛇は湖を動きませんでした。……しかし、あなたが蛇を討滅してくれた。そのことにだけは感謝せねばなりませんね、安東海人」
水天は有難く受けて取れとばかりに言い放つ。全く感謝しているようには感じない尊大な態度だった。

「ありがとうございます。そしてさようなら。あなたのおかげで我らが大願への成就に一步を進めることができます。この島国を掌握し、私を唯一神と崇める宗教をこの地から広めましょう!」

「その大願とやらは今日ここで終わる。おれがお前をここでぶっ殺す!」

「そっくりそのままお返ししましょう、あなたの人間としての生より

短い神殺しの生がここで終わるのです。……目を見開き周囲をご覧なさい、この水の樂園を！ あなたが勝つ可能性など、一片たりともありません！」

水天が両腕を大きく大の字に開いた。海人と水天を取り囲む様に水柱が湧き上がった。

水天の言う通り、周囲は沸かされた湯でいっぱいだ。恐山の上流で溜まっており、下流には行き届いていない。

まつろわぬ神が浴びるほど水があるのに、下界の民は水を求めて雨乞いを行い、神にすがっているのだ。

「私の体は周囲の水を集めて再生します。周りに水がある限り、私の体が朽ち果てることはない。……私は神力の源である水を手に入れ、民草は水を求めて私を崇める。これらすべて、私が付近の大地から搾取したとも知らずにね！」

雨乞いをしていた民は、川が枯れた元凶を知らずに、その元凶に祈りを捧げていたのだ。

先ほどまでいた老人たちがそうだ。海人は彼らのことを考えると、腸が煮えくり返る思いだった。

水天のせいで飢餓に苦しんだ者の無念を晴らしてやりたい。だが水天の言う権能の力が真実ならば、海人は勝ち筋を失くしてしまう。

海人が傷を負わせても、水天は水を集めて傷を治してしまう。周囲を見渡せば温められた湯、水には事欠かない。

ならば水のない枯れた地に誘い出そうにも、それに水天が間抜けにも乗ることは考えられない。

水天が圧倒的有利になる戦場に誘い込まれたこと。水天の仕組んだ策で、数歩先で一足飛びで届く勝利が、一瞬で暗闇に消えていく。

だが海人に元々選択肢などなかった。仁実の安否を心配すれば、一時でも早く敵陣に飛び込まねばいかなかった。ここでまつろわぬ神を止めなければ、仁実を搜索する時間が稼げない。

何かないか!? 水天の神力を削ぎ、奴に決定的な一撃を与えられる手は!?

「いくら考えたとしても、私に勝つ手立てなどありません。私を殺す

ことなどできないのですから。大人しく尻尾を巻いて逃げるのであれば、あなたの命までではありません。その際、あなたの義妹はどうなるかは分かりませんがね」

水天の降伏勧告も右から左に聞き流し、必死に頭を回転させる海人。

干ばつにより、民が苦しめられている……？

何かに思い当たった海人は、聖句を唱えながら槍を天に掲げた。

「我は厄災。民草に禍いを齎す者也！」

すると水天の右側から突風が打ち付けた。

草木を巻き上げる強烈な風に、水天は吹かれる髪を抑えながら両目をつむる。風がやみ目を開けた時見たのは、風の鎧を身に纏う海人の姿だった。

風が轟々と音を立てて周りにある水をはじき飛ばす。張られていた湯に波紋が広がる。

その様子を見てもまだ水天は余裕の表情を崩さない。

「まだ戦うのですか？ 獣でも分が悪いと悟れば退散するということのに、引き際において神殺しは獣より愚かですね」

「うるせえ！ お前は不死身かもしれないねえが、俺はまだ死んでねえ。勝負はこれからだッ！」

◆ 確かに、勝負はこれからだ。神殺しに挑発を繰り返し、待ちに待った権能を認識し、まつろわぬ水天は警戒を強めた。

水天は試しに水の鞭を仕掛けてみるも、海人の周りを旋回する強風にはじかれ、接触した場所から水を散らされてしまう。

即興で思いついたようなのに、なかなか強固な鎧だ。突き出された槍を体をひねって避けて、水となって散らされる脇腹を見ながら思う。

だが私を滅するには至らない。まつろわぬ水天は周囲から水を呼び寄せて、己の有利を再確認した。

痛みは感じない。削り飛ばされてしまった脇腹は再生し、服も元どおりになった。

「ちっ」

「だから言ったでしょう！ あなたに私を滅することは不可能だど！」

そして私は、神殺しに死を与える手立てを持っていて。水天は大地に潜っている水も操り、海人の足元から出てくるよう指示した。

海人の風の鎧の弱点は、足元だ。海人が踏みしめなければいけない足場をさすがに削るわけにはいかないため、足元の防備は留守となっているのだ。

海人の足元から吹き出た水は海人の足を蛇のように這い上がり、海人の四肢を締め上げた。

「うっ……ぐっ……」

圧迫感に海人はうめき声を上げ、槍を握る力を弱め、ほんの一瞬だけ身を守っていた風の力も弱めてしまう。

その一瞬の隙について、水天は風がない海人の懐へと潜り込んだ。そして海人の胴体に手を当てた。

「吹き飛びなさいー！」

水天の手の平から大量の水が勢いよく発射される。海人は水天の狙い通り、岩場から水が張られた場所まで押し飛ばされてしまう。

槍は手を離れ、海人たちから少し離れた湯の中に落ちる。

盛大な水飛沫を上げて、湯に落とされる海人。当然、水天の操る水のため、湯が泥のように体中に纏わりついていく。

だがここで水天は、水の力をさらに強めた。簡単に足が抜けた時のように、力を込めただけでは引き離すことができぬように。

かくして海人は、地面に水の力で磔にされてしまったのだ。

「こつちを向いてくださいいな」

四肢を磔にされて身動きが取れなくなった海人。水天が右手を前に差し出すと、手で丸い物を掴む動作をした。海人の顔を挟み込むように水を操作し、水天は力づくで海人の顔の向きを正面固定する。

水天としては、これから何をされるか分からない、といった海人の怯えた表情を見て、優越感に浸りたかったのだ。

さぞかし絶望した表情を浮かべていると考えていたが、しかし水天

の予想外れてしまう。こんな状態になってもなお、海人は睨みつけてきたのだ。

すると背中から鎌鼬の風が襲いかかってくる。だが水天は水で壁をつくり難なく威力を削ぐ。

そよ風が吹いた。

「……いったいどうしたら、あなたは恐怖の感情を見せてくれるのでしょうかね」

「怖がるわけねえだろ。お前みたいな神もどき相手に」

水天の突き出された右手が力んで鉤の手となる。海人の顔を挟む力も思わず強くなってしまう。

「……どういう意図があったのか聞かせてもらっても？ まつろわぬ神は、神に非ずと？」

「違う。人質をとつたり、罠に誘い込んだり、小細工をするところが神らしくないっていうんだ」

「武よりも智略に秀でている神も存在します。策を弄すること決して恥などではありません！」

知らずのうちに水天の言葉にも力がこもり、感情が露わになる。神もどきという言葉は、水天の触れてほしくない逆鱗だった。

「策を立てないのは悪いことだとは思わねえ。俺も策に助けられたことがある」

海人もその点は同意した。いまこの時、場の流れは海人が握っていた。

「だがあんたは人間臭い。策を用いると楽、じゃなく、策を用いなければ勝てない、って聞こえるんだよ」

「黙れ！」

海人の指摘は凶星だった。水天は今まで使っていた丁寧な口調すらかなぐり捨てて、仰向けの海人の腹を踏みつけた。

槍が目前に迫っても余裕の態度を崩さない、優雅さを備えた美女はそこにはいない。顔の皮が暴かれて、中からは真っ赤に顔を染めて怒りに身を任せる女がいた。

「あなたに何がわかるというのですか！」

何度も何度も沸き立つ怒りのままに踏みつける。その姿に気品さはどこにも見当たらなかった。

だが海人に効いた様子はない。真顔で水天を見つめ続けている。それがまた水天の気に障った。

「私が！ どれだけの、どれだけの苦労を重ねて、ここまで力を取り戻せたと！」

水天は若干息切れしながら、しかし口から出る言葉は脈絡のないことばかり。

まつろわぬ神は、顕現した時代によって権能も容姿も大きく変える。時代が下るにつれて、神として信仰されていたものが全く信仰されなくなってしまうことがある。

そんな神はまつろわぬ神として顕現し現世に影響を及ぼすことができず、神祖という身に墮落してしまう。

水天はまさにまつろわぬ神と神祖の瀬戸際にいたのだ。

「どうやら相当な苦労があったみてえじゃねえの。人に話せば少しは楽になるかもしれねえ。どうか、ここはひとつ俺に話してみねえか？」

海人のその言葉がきつかけとなった。プツンと、水天の中で切れてはいけないものが切れる音がした。

水天は無言で足を退ける。

「……終わりにしましょうか」

「な、なに!? ちょっとまつ……ガッ、ゴボオ！ ……ゲホッ、ゲホッ……」

喋ろうとした海人の口に湯が入りむせてしまった。先ほどまで喋っていた時は問題なかったが、それもそのはず。水天が操り、海人の沈んだ浴槽は水位が明らかに上がっていた。

水天の思惑は明白で、終わりにしようと言った通りに窒息させ、海人の息の根を止めようとしているのだ。

海人は縛られた四肢を動かしてじたばたともがき、湯を飲み干しながら懸命に言葉を繋げた。

「……俺はッ、ゴホッ……こんなんじゃ、死なねえぞ！……」

「それが辞世の句ですか？　なんと素質がない……」

水天はダメ押しに水位を引き上げた。海人の頭は完全に沈み、新たに酸素を取り込むことができない。

溺死、窒息死は最も苦しみを味わう死に方だ。心臓に酸素が送られなくなり、肺に水が入り引き裂かれるような熱さを感じる。そして体の酸素もなくなり考えることもできなくなり、意識にだんだんと霧がかかって、ついには死に至るのだ。

海人の抵抗する力が、徐々に弱まっていく。激しかった手足の動きも衰えを見せており、水天は神殺しの死を確信した。

その時、事態は変化した。



脳に酸素が回らなくなり、朦朧とする意識の中、海人は最後まで諦めることはなかった。意識が途切れる寸前まで、ひとつの勝ち筋に賭けていた。どんなに低い確率でも力づくで勝ちをもぎ取る神殺しの性質が、そこには表れていた。

海人は賭けに勝った。

「ガホッ！　ゲホッ、ゲホッ……」

海人は水を吐き出し、意識を取り戻した。ゆっくりと上体を起こすと、右手で槍の感触を確かめながら辺りを見渡した。

わなわなと震える水天を傍目に見ながら。

「そ、そんな……水が……」

見渡せる光景と水天の反応を見て、海人は賭けに勝ったと実感した。何より心の音が聞こえることが、あの状況で生き残れたと伝えてくるのだ。海人は水の鞭に打たれて痛みを訴える体に喝を入れ、槍を杖がわりにしながら勢いよく立ち上がった。

海人とまつろわぬ水天の周囲の大地は一変していた。

水がない。

二人がいる巨大な浴槽に張られていた湯は姿を消し、岩盤の底が露出していた。大地を覆っていた水が、海人が窒息し失神する前に突如

として消滅してしまったのだ。

これこそ海人が、水天に唯一勝てると考えて賭けた手段だった。海人の権能は、人間が神の神罰だと恐れる自然現象を起こし、それを自在に操ること。民衆が恐れるものであれば力の限り起こせるが、民衆が恐れなければどうやっても起こせない。

海人はこの場所で、干魃を起こしたのだ。

恐山への道中で出会った民が雨乞いをしていたことから、干魃を起こせる自信はあった。だがそれでまつろわぬ水天の力を削げるかどうかは不安なところだったのだ。

だが不安は杞憂に終わった。

まつろわぬ水天は権能の大部分が水に関係するものであり、水に頼り切っていた。体を液体に変え再生することもできないし、水を自在に操って攻撃することもできない。権能のない水天は戦闘において、平均より腕力の弱いただの女性だった。

水を失ったことで力のほとんどを削がれ、今の水天はまさに陸に上がった魚も同然だった。

現実を認められずうろたえる水天に焦点を合わせ、海人はゆっくりと歩み寄る。

槍を携え近づく鬼を見て水天は、ついさっきまでの冷徹で触るだけで人を殺しそうな態度はどこに行ったのか、恐ろしいものでも見るかのように後ずさる。

「ま、待ってください。話、話し合しましょう。私達は良き隣人になります」

「そうして俺が油断したところで、背中から刺すのか」

窮地に陥ったと思えば、真っ先に命乞いをする。逆転の策を思い浮かばないのであれば理解できるが、海人は水天をますます神だとは思えなくなった。

「あいつは……八郎太郎はもつと潔かった！ 命尽きるまで足掻こうとは思わねえのか！」

「ひいひいひいッ！」

まつろわぬ水天は情けない悲鳴を上げてその場でうずくまる。

これ以上は見えていられない。水天に容赦なく槍を突き刺し、胴体を貫く。海人は念じると槍から鎌鼬の風が発されて、水天の体を切り刻む。

爆発四散し、水天は物言わぬ水滴となって飛び散った。

海人の顔にも飛び散る。その水天だった水滴は海人が拭う前に大気に溶けた。それは超常現象でもない、ただの自然現象だった。

ドクン、と海人の心臓が大きく跳ねる。

海人は己の体に、何かが流れ込む感覚を覚えた。おそらくこれが権能なのだろう。

人間のような感情を持つてはいたが、水天は確かにまつろわぬ神だった。この流れ込む権能がその証だ。それと同時に、この感覚はまつろわぬ水天が討滅された証となる。

海人ははつきりとした手応えと共に、ここに来た第一の目的を思い出す。

即ち、仁実の救出。

海人はここに来るのに通った道を、全速力で駆け戻って行った。

二十四話、海の王

麓まで戻ってきた海人を待っていたのは、慌てふためく船員たちだった。

現れた海人を認めて一人の船員が駆け寄ってくる。

「船長！ 大変っす！」

「ああ、お前か。どうした、仁実は何事か起きたのか？」

「そうっす。姉さん見つけたはいんすけど……」

すると海人から見て左の方向から、バリバリと木の碎ける破碎音と共に男衆の悲鳴が聞こえてきた。

一瞬そちらに顔を向けるも、直ぐに向き直って情報交換を行う。

「牢屋を聞き出して行って、姉さんを見つけたと思ったら先客がいて、その男が姉さんを抱えて逃げようとしてるんすよ！ 何人でかかってても手がつけられなくて、とにかく早くお願いしますっすよ、船長！」

「わかった、直ぐに行くぞ」

「あの船長、そっちのほうは……」

海人はその場にいた船員達を連れて、仁実の元に急行した。



海人がその場に到着した時、その場は死屍累々。船員たちが至る所で血を流して倒れていた。

うめいている船員達を見て、海人はまだ息があることにひとまず安堵した。それも一瞬だけ、海人は仲間をこんな目にあわせた男を捉えた。

途端に体に緊張感が走る。まつろわぬ水天との戦いで落ち着いてきた心臓がまた跳ねて、体が臨戦態勢へと叩き起こされた。

「おう、お前が神殺しか。ここに来たということは、そうか。アナーヒタは敗れたのだな」

水天と対峙した時と同じ感覚、まつろわぬ神だ。海人は警戒を強め

た。

「アナーヒタ？ 誰のことだ？」

海人は問いかけた。

「上にいただろうか？ ここでは水天と呼ばれているのだったか。奴は元々アナーヒタの名で呼ばれ、大陸で信仰されていたのだ。……人の子の生きる要である大河の女神であった奴は、創造神にも並ぶ扱いを受けていた。だが時代が下るにつれて墮落し、神祖に落ちる寸前であった。それを俺が拾い上げ、神力の一部を分け与えてやったのだ」「そういえば言っていた気もするが……。ところでお前が脇に抱えた仁実、こちらに渡してはくれないだろうか？ そいつは俺の妹なんだ」

男が脇に抱えていたのは、仁実だった。ぐったりして意識がないようだが、乱暴には扱われていないようだった。

「この娘は仁実というのか、いいことを聞いた！ これから伴侶となる女の名も知らないというのは、流星にどうかと思っていたところだ」

飛び出してきた言葉に、海人は耳を疑った。

「……どういうつもりだ？」

「俺はこの仁実に惚れた、一目惚れだ！ だから俺の島に連れて行くつもりだ。そこで我が側室として俺に尽くさせる。どうだ、光栄であろう？」

「ふざけるな！ 誰がまつろわぬ神なんぞに妹を差し出すか！」

カツと頭に血が上った海人は、まつろわぬ神に向かって駆け出していた。

まつろわぬ神の眼前まで踏み込むと槍を突き出した。しかしまつろわぬ神の体に届く直前に受け止められてしまう。

海人は目を剥いた。まつろわぬ神の右手には己の身の丈もある獲物が現れていた。獲物は先端で三つに分かれている。先端は漁戟の様に戻しがつき、鉄には見えない蒼い色をしていた。

まつろわぬ神は三叉戟で、海人の槍を片手だけの力で弾いた。あまりの腕力に驚愕する海人を側に、今度はまつろわぬ神が海人の腹に三

又戟を突き出した。

「せあッ！」

「ぐっ、おおおおおッ！」

刺し貫かれる寸前で槍での防御が間に合った海人だが、目にも止まらぬ速さで突き出された三叉戟を空中で受けて吹き飛ばされてしまふ。

海人は受身をとって態勢を立て直し、まつろわぬ神に向き直った。まつろわぬ神には全く労になっていない様だ。

「ふむ、筋のいい一撃だったな。だが少し不用心ではないか？ 俺が手加減しなければお前は今頃串刺しだぞ」

海人は愕然とした。二柱の神に通じた槍が、全く通じなかったのだ。

「その様子だと、どうやら本気だったようだな……。そうなるとお前が倒した神の中に、戦神はいなかったと見る。お前が生き残ったのは、運が良かったからか」

するとまつろわぬ神からただならぬ危険な雰囲気立ち上る。海人の肌がビリビリと逆立ち、第六感が危機を訴えてくる。

「俺の名はポセイドン。戦を生業とする戦神の武術、その身でとくと味わえ！」

ポセイドン。世界に名を響かせる海の王が、三叉戟を持ち海人に襲いかかった。



「ぐっ……ガッ……！」

そしてついに海人は地面に倒れこみ、うつ伏せで力尽きてしまう。

土の味を噛み締めながら、絶え間なく食らわされた波状攻撃で失いそうになる意識を何とか保つ。

海人を見下すポセイドンは、海人の攻撃を涼しい顔で受け流し、全く意に介していなかった。

「惜しいな。あと五十年、いや三十年あれば俺と渡り合えたかもしれ

ないが、実に惜しい」

「仁実を……返し、やがれ……！」

「ほう、まだ吠えるか。根性のある奴だ。……よし、決めた！」

ポセイドンの右手の三叉戟が消える。替わりに虚空から羅針盤が右手に現れた。ポセイドンはしゃがみこむと、それを海人の前に置いた。

「謝罪しよう、仁実がいるせいで槍が鈍っていたな。この試合の決着は、日を改めて行おうぞ。……その羅針盤は、俺の作った島を指している。それを頼りに追ってくるといい」

左腕に抱えた仁実を抱え直すと、ポセイドンは海人に背を向けた。海人は必死に手を伸ばした。

「返せ……！」

「俺に勝てたらな。いい試合になるよう、せいぜい鍛錬をこれまで以上に重ねることだ。期待しているぞ、神殺し」

そう言い残すと、ポセイドンは海の近い北東の方角へと歩き去っていった。

「船長！」「しっかりとしてください、船長！」

海人とポセイドンの戦いを見守っていた船員たちが駆け寄ってくる。

俺よりも仁実を追っかけろ……！ そう怒鳴りたかった海人だが、精神が既に限界を超えていた。ゆっくりと意識が暗闇へと沈んでいく。

船員たちが追っかけたとしても、結果は変わらなかっただろう。海人が敵わないまっろわぬ神相手に、只人の船員たちが敵う道理がなかった。海人がやつつけてくれると信じていたからこそ、肉壁となつてポセイドンの足止めができたのだ。

時間稼ぎができたこと自体が十分な戦果だった。



こうして海人はまっろわぬ水天、もといまっろわぬアナーヒタを討

滅するも、仁実を救出することが叶わなかった。

ポセイドンと名乗るまつろわぬ神に、仁実をまんまと連れ攫われてしまった。

船に戻り、十三湊まで帰ってきた海人は、出迎えてくれた愛代に合わせる顔がなかった。

仁実を救出する手がかりは、ポセイドンが置いていった羅針盤。その針は東、大陸があるかすらも分からない広大な大海を指していた。

これもすべて、家族を取り返すため。どんな困難が待ち受けていようとも、絶対に救い出す！

海人が心を固めるのに、そう時間はかからなかった。

第三章 墓場の歌姫

二十五話、餓鬼

「それじゃ、行ってくる」

そう言い残すと、海人は暖簾をくぐって酒場を出ていった。

夜半の酒場は活気に溢れており、海人が去ったカウンター席には重蔵と愛代が残された。

周囲が酒に酔った者達で熱く騒がしい中、二人の間は通夜の如く冷めた雰囲気だった。

「まったく、酔いも冷めちまった」

酒のなくなつた盃を片手に、重蔵は溢した。

酒場に集まつたのは他でもない。海人に恐山でどんなことが起こつたか、ひとつ残らず聞かされた。重蔵としては海人が仁実を奪い返し、この酒場で勝利の祝杯を上げようと思つて、先に飲んでいたので。

しかし海人の報告に、さすがの重蔵も素面にならざるをえなかつた。

仁実が別のまつろわぬ神に再び誘拐されてしまったこと。

そのまつろわぬ神は、海人を正面から正々堂々打ち負かす力があること。

このどちらにも重蔵の頭を悩ませていた。特に仁実の救出は時間との勝負であり、海を当てもなく航海しなければいけない。下克上の風潮が高まつて周辺諸国がざわつくこのご時世に、兵を軽々しく海外へ出すことはできない。

愛代もこの時また、海人の口からはじめて聞かされたのだった。

五体満足で帰還した海人の無事を喜び、その海人の隣に仁実の姿がないのを怪訝に感じた愛代。ここに来るまでの道中でも嫌な予感を感じたものの、当たつてほしくはなかったというのが本音だ。最悪の事態が過ぎ去っていないことに、愛代は顔をしかめていた。

愛代は海人が去つて空になつた席と重蔵との間に置いてある、羅針

盤に視線を向けた。

「そのまつろわぬ神、ポセイドンの話は信じられるのでしょうか？」
「信じるしかないだろうな。それしか仁実を追いかける手立てがねえ」

重蔵は大きいため息を吐きながら、視線を盃から羅針盤に移した。
ポセイドンが置いていった羅針盤は、北を指すはずのN極が東を向いていた。何らかの力が働きどこかを示しているのは間違いない。
ポセイドンの言葉を信じるならば、彼の神が造った島を指しているのだろう。

だがその島に行くのに、一体どれだけの距離を航海すればいいのだろうか？

船は一人だけでは動かせないし、長期間船の上で生活するのなら相応の食料と水が必要なのは当たり前。しかし肝心の距離がわからなければ、どれだけ積めばいいかも分からない。積めるのには限度があるし、少なくともは餓死してしまう。

それに重蔵たちが生きている時代は、下克上の機運が高まる戦国時代。

マゼランが世界一周を果たしてはいるが、極東に位置する日本には『世界が丸い』などとは一般に知られてはいなかった。ヨーロッパのある西はある程度知られていても、東には巨大な滝から海水が流れ落ちる『世界の果て』が信じられている時代だった。

仁実が連れ攫われて、さらに海人まで難破してしまえば、重蔵は己が死ぬより先に子供を二人失うことになる。

そんなことは死んでも御免だ。重蔵は羅針盤が指す東に、顎を開く龍を幻視した。

息子と船員をむぎむぎと死地へ赴かせるわけにはいかなかった。

「それに海人も心配だ」

「海人が？ たしかに落ち込んでいましたけど、すぐに立ち直ると思えますよ」

「いや、俺はそうは思わん。あいつは刀の試合で負けることはあっても、槍を使った真つ向勝負では負け知らずだった。俺と出会った当初

から、海賊団がやられても海人は負けてないなんてことは沢山あった」

重蔵が海賊をやっていた頃、挫折がないわけではなかった。段取りが合わず裏をかかれて、こっぴどく叩き潰されたこともあった。

団員を失うこともあった。そんな時も海人が獅子奮迅の働きをし、海賊団を支えてくれた。負け知らずの海人は、海賊団の精神的支柱でもあった。

海人は海賊団員として負けたことはあっても、海人という個人での負けはなかったのだが。

「だが今回は、相手も得物が槍の間答無用の殺し合い、海人の得意分野で負けた。あいつにとつては相当に痛く重い衝撃だったろうさ」

そんな海人の前に現れたのが、ポセイドン。海人が権能を使わない全力をもってしても、勝てない相手だった。

しかもポセイドンの使う武器も槍。三又に分かれているという違いはあれど、同じ土俵で戦って負けたと海人は感じるはずだ。

初めての敗北に『同じ土俵』という要素も加わり、海人の味わった衝撃は計り知れなかった。

「仁実は助けに向かう。それは決定事項だ」
たった一人の血の繋がった娘を見捨てることは、重蔵には出来なかった。

「だが情けないことだが、俺にはまつろわぬ神を倒す力がねえ。海人に頼るしかねえんだ」

息をするかのように地形を変えるまつろわぬ神相手では、覚悟も失せてしまう。己の全てを投げ打つてでも、一矢報いることさえできる気がしないからだ。

「愛代さんや、海人の面倒頼めるかい？ 俺も航海の準備に平行して、気にかけてみるからさ」

「政は、どうなさいますか？」

「それも俺が片手間で作るさ。姫さんも政の勉強はしばらく休みだ。海人にかかりつきりになつてくれや」

海人がいなければ、ただでさえ細い道が途絶える。仁実の救出は絶

望的になつてしまふ。

「……わかりました」

「よし、じゃあ景気付けに一杯飲むか！ 親父、もう一本追加で！」
酔い直そうとしている重蔵の横で、愛代はここから去った海人のことを思った。

海人は今頃、あの祠に着いているはずだ、と。



その話の渦中の人である海人は祠の前、アテルイが封じ込められていた異世界への扉の前に立っていた。

右手には瓢箪を吊り下げていた。前に会った時約束した酒が入っている。

海人は空いたもう一方の手で目の前にある顕明蓮をとった。顕明蓮は扉の門。海人の眼前にどこまでも沈んでいきそうな黒い穴が開いた。

三度目ということに慣れもあり、海人は躊躇なくその穴に体を沈めていく。一瞬の暗闇から見えた穴の先には、いつもどおりの足元がおぼつかない曖昧な空間があった。

『ん……う？ 来たか』

不意に頭にアテルイの声が響く。どうやら持っている顕明蓮から流れてきているようだった。

『そのまま先に進め。出口がある』

自分の声を届ける方法もわからない海人は、言われた通りに前進する。

何処に足場があるかはつきりと見分けられないこの空間に、出口なんてあるのか。そんな疑問を飲み込み数分、海人はアテルイを信じて歩き続けた。

すると前方に四角い穴があった。眩しい光が漏れ出ており、穴から向こう側は見えなかった。

海人は意を決して穴をくぐり抜けた。

「……いたって普通だな」

海人が見た率直な感想、第一声がそれだった。幽世と言つてはいたが、海人の出た空間に奇妙なものや違和感のあるものはなかった。

そこは道場だった。木造りの二十人は雑魚寝できそうな広い空間に、床には鎧や掛け軸が飾られ刀や槍が立てかけられていた。

そんな広い空間にぽつんと、中央に胡座をかいて座り込む一人の男がいた。いや、一鬼と言うべきだろうか。

「今通つてきた狭間と似た世界を想像したか？ 残念ながら、あんな所は住みにくくつてしようがねえ。退屈で死にそうになる」

アテルイは空になった酒器を逆さにして、一滴も残すまいと盃を睨みつけていた。

海人はアテルイの前に座ると、自分が持つてきた酒を差し出した。

「おつ、いいもん持つてるじゃねえか。どうした、これ？」

「前来た時にいい酒持つてくるつて言つただろう。それが約束の品だ」

「ほう、そりやありがたいねえ。ちょうど切らしていたんだ、味わつて頂くとしますか」

アテルイは海人の持つていた瓢箪を受け取ると、代わりに海人にどこからともなく盃を差し出した。

自分用にわざわざ出してくれたのだ。礼を言つて受け取ると、アテルイが二つの盃に酒を注いだ。

アテルイは盃に注がれた酒を一気に、見ている方も気持ちいいように飲み干した。はあー、と溜まった息を吐き出すのを見て、海人も少しだけ酒に口をつけた。

「こりゃうまい。現界はこんな酒が溢れているのか」

「日の本で作つたらしいが、製法は海を渡つてきたそうだ。……ここでも酒は飲めるのか？」

海人は隙間から青空を覗きながら、初めて会つた時から聞きたかつた疑問を投げかけた。

「ああ。全部俺が作つている。自然はあるが職人はいないからな」

だが意外な答えが返つてきて海人はきよとんとあつげにとられた。

「その顔は俺が作っているとは思わなかったって顔だな。俺にもまつろわぬ神になる前の人だった記憶もある。人は初めっから鬼じゃねえのさ」

「……それは違う。俺は生まれた時から鬼だった。こんな力を持って、他人から忌み嫌われて」

「それは理解できない力を目にした人間が、鬼と呼んで排斥したにすぎない。鬼の俺から見れば、お前は剛力を持ってはしゃいでいる餓鬼だ」

きよとんとした表情から神妙な表情、ついには顔を赤くして火を吹いた海人は、だんと大きな音をたてて立ち上がった。

感情を二転三転させる海人は、重蔵の言う通り追い詰められていた。

「餓鬼、だと……？　俺は『安東の鬼』、安東海賊団船長の海人だぞ。神様だからって調子に乗るんじゃないぞ！」

「やれやれ……。その様子だと相当尊厳を踏みにじられたようだな。だったら相手をしてやる。拳を握れ、海人」

海人の凄みを難なく受け流し、対照的にアテルイはゆっくりと立ち上がった。

そんなアテルイに苛立ちをつのらせた海人は拳を握りしめ、その身に備わった怪力を叩きつけた。



しかしまたしても、海人が見た光景は敵が倒れ伏した姿ではなく、抜けるような青い空だった。

海人はアテルイに返り討ちにあい、道場の外で仰向けで伸びていた。

道場の壁には見事に人型の穴があき、そこをくぐり抜けアテルイが外に出てきた。

「で、お前はどんな奴にやられたんだ？」

「……武神……」

「武神、か。武神は人が生涯かけて到達できる武の極致に、まつろわぬ神として顕現したその時から至っている。俺も武神の類に入っている」

アテルイは海人の頭上まで近くと、海人の胸ぐらを片手で掴んで道場の方へひきずりだした。

「くそっ、おい、離せ！」

必死に抵抗する海人をよそに、アテルイは語りを続ける。

「故に正面きつて力任せに押しきろうなどとは愚の骨頂だ。湖に巢食うあの蛇相手ならよかつたかもしれないが、お前は運が良かった。これが武神だったらお前は生きてはいなかったからな」

アテルイは海人を肩に担ぐように持ち上げた。

「神殺しは権能と丈夫な体を手に入れたというだけで、まつろわぬ神には敵わないことが多い。だからかしこく戦え。上手く立ち回り、相手の脇を突け。仮にもまつろわぬ神を討滅できたんだ、お前にできるはず、だっ！」

そして担いだ海人を道場の穴めがけて思いっきり投げ飛ばした。

「うおおおおおおおおおおおッ、がはあッ！」

狙いよく道場の穴に海人を投げ飛ばし、アテルイはひと息ついた。

「人の面倒を見るというのも中々大変だな。お前もこんな事をしていったのか」

アテルイは現世にも幽世にもいない、遠くへ旅立ってしまった者に言葉を投げかけた。

海人を一人前に育て上げる前に他界してしまった海人の父親に話しかけたのだ。

懐かしむような目をしたのも一瞬、道場の中で騒ぎ始めた海人の声で目が覚めた。仕方ないと言いたげに肩をすくめるも、アテルイはどこか嬉しそうだった。

そしてしばらく、道場の中からは海人とアテルイが取っ組み合う音が聞こえてきた。時々海人が道場の壁を突き破って出てくるのだが、直ぐに道場の中に戻って再開された。

近所迷惑にならないのが幸이었다。

時間が忘れるほどに暴れ続け、アテルイと海人の気がすむまで行われた。

二十六話、修行

一晩経っても帰ってこない海人を心配した愛代は、祠へ続く道を進んでいた。だが愛代の足取りは遅い。昨晚義父から言われた「海人を頼む」という言葉が頭をよぎり、愛代は足に錘がついている気分だった。

何を話せばいいのだろうか？ 海人は皆の先頭に立ち、危険な場所にも率先して踏み込んでいく。そんな印象を持っていた。愛代は海人の落ち込んだ姿など見たことがなかった。だからどんな言葉を掛けていいものか、皆目見当がつかなかった。

そんな重くとも右左と交互に動いていた足取りは、愛代を祠の前まで運んでいた。

祠の前で愛代は、うつ伏せで倒れる海人の姿を発見した。

「きゃあ！ 海人！」

一瞬驚くもそれが海人だと分かれると、愛代は駆け寄って抱き起こした。

直前まで悩んでいたことも忘れる驚きだった。

名前を呼びながら抱え起こした海人を揺ると、呻きながら海人はゆっくりと目を開けた。

「う……。愛代……？」

「海人！ 一体どうしたの!？」

「ああ……？ そういや俺は、アテルイと殴り合っていて……」

頭を押さえながら海人は、愛代の手を借りて起き上がった。

「そうだ、俺は奴に投げ飛ばされたんだ。……なんで此処にいる？」

海人の記憶は、何度目かになるアテルイに投げ飛ばされた時点で途切れていた。

祠を見ると、中への扉が開け放たれて御神刀を祭る台まで表に出ている。その台の上に御神刀はなく、その先には幽世へと繋がる暗闇が広がっていた。

海人が前に一歩踏み出すと、土ではないものを踏んだ。足元を見ると御神刀の顕明蓮が転がっていた。

「戻しておけてよかったか……」

海人は足元の顕明蓮を拾うと、祠の中に入り台の上に戻した。それだけで幽世の入り口は閉じ、後には祭壇が広がっていた。

その現象を初めて見た愛代の目は釘づけだった。

「すごいね、その刀。幽世に行くには普通だったらもつと大掛かりな儀式が必要なのに……」

「まつろわぬ神の持ち物だからな、すごい物なんだから。それより今日は政の勉強があると言っていたじゃねえか、なんか急ぎの知らせか？」

「え!? えつと……」

海人についている、と重蔵に言われたことをそのまま伝えるわけにはいかない。愛代はしどろもどろになりながら、言い訳をしぼりだそうとした。

「特に何も……」

「ならいつも通りだな。大した用事で此処に来たことないだろう」

「そ……! そんなことないよ!」

突然の大声に海人は驚く。

「ここに来る時は『海人に会う』ってちゃんとした目的があったもん!」

「お、おお、そうか。とりあえず腰掛ける」

海人は縁側に座ると、地面の上に座っている愛代に自分の隣を薦めた。

愛代は自分が恥ずかしいことを言っている自覚があるのだろうか? 海人は心なしか自分の体温が上がった気がした。

愛代は海人の隣に座った。しかしこうして二人だけでこの祠に居るのも久しぶりだ。愛代は小鳥のさえずりと心地よい日差しを浴びながら思った。

愛代は安東の血をひく者として政を覚えるために忙しく、海人は海軍の仕事でそれぞれ忙しかったためだ。仁美が拐われてのんびりしている場合ではないと分かってはいても、久しぶりに味わうこの空気。愛代はもつとこのままでもいいとも思ってしまった。

愛代はちらりと横を見た。海人は上の空で、ぼーつと斜め上の方向を見上げていた。その海人は少し間抜けな顔だとは感じて、特に落ち込んでいようには見えなかった。

「海人、何かいいことあった？」

「……という？」

「なんか……落ち着いているから。仁実が攫われたこんな時、海人は苛立っていると思ってたから……」

そう言われ、海人にも思い当たることはあった。

「ああ、そうだな。確かにあった。そのせいかもしれないな、こうしていられるのも」

海人はさつきまでアテルイと殴りあって、こっぴどくやられたのだ。そしたら海人はどうしてかすがすがしい、晴れやかな気分になったのだ。

今海人の頭の中にあるのは、いかにしてアテルイを打ち負かすか、それだけだった。自分が落ち込んでいたことすら忘れていた。

海人は思い出したのだ。自分は強者を求めていた。簡単に一蹴できってしまう敵だけの中、どう足掻いても勝ち目が見えないような強者を求めていた。それを海人は仁実を助けられなかったことで、自分を責めて忘れていた。

海人はアテルイに救われたのだ。

「今まで以上に鍛えてアテルイに勝つ。そうすれば仁実を攫ったまっろわぬ神にも敵うはずだ」

そう語る海人の表情はひきしまり、心の中は熱くたぎっていた。愛代から見ても語る海人の表情からは、海人は目標が出来たのだと納得できる熱を持っていた。

その表情を見て愛代も思い出していた。自分はこの海人の姿に憧れていた。自由に生き、先頭に立って道を拓く海人の姿が。

「そう。目標ができたのね、海人」

「ああ。仁実を助けに行く。それには船が必要だ。……親父はどうしてる？」

「船の改造してる。どんな荒波にも耐えられる不沈艦を造るんだっ

てはりきつてたよ」

「ははは、親父はからくりも洒ぐらい好きだからな。幾日で完成する？」

「一月」

海人は船の完成する期日を聞くと、立ち上がり愛代に振り向いた。「しばらく帰らない。船が完成するまでに、俺はアテルイを越える」拳をぐっと握り締めて海人は決意した。神殺しの海人であっても一撃も当てることができなかつた。

二十年の努力を無駄とされた気がしてならない。二十年の努力でも敵わなかつた相手をたつた一月で越えることができるのか。

「やってやるさ。そうでもしなきゃ奴のは敵わない」

「ご飯持ってくる？」

「助かる」

海人は祠の中に入ると、幽世の扉を閉じるために戻した御神刀を、再び手に取つた。

愛代と海人の前に暗闇が広がる。その先は別世界、人の目と周囲への被害を気にする必要がない理想的な修行場が広がっている。

「まずはアテルイの動きを死ぬ気で覚える。……ふふふ、楽しくなってきた！」

海人の顔に喜色が浮かぶ。心の中では避けたいという思いよりも、強敵と戦えるのが楽しみで仕方がなかつた。



そして一ヶ月後、重蔵が手がけた船は完成した。

ここは港。時刻は日の出、人もまばらの明け方だった。丹精こめて造り上げた船の全体を眺めていた重蔵は、背後に接近する気配を感じ振り返つた。

「おお、海人！ 久しいな、大事ないか？」

「このとおり健康そのものだ。……これが船か。すげえ大ききさだな」

海人も船を見上げた。港に並ぶ船の中でもその船は異彩を放つて

いた。その船の大きさはまさに見上げるほど、甲板の高さが他の船の二倍以上だった。注目されていないのは、十三湊が異国の船がたくさん訪れる日の本有数の貿易港だからだ。

「ああ、異国の技術も取り入れた、俺の最高傑作だ。快適な船旅を保障する」

重蔵はそう言うのと海人の他、船に乗る仁実救出隊の面々を見渡した。各々が重蔵が全幅の信頼を寄せる精鋭。全員が海賊だった時から付き合いのある荒くれ者達だ。

重蔵と愛代以外の見送りはしない。極秘裏に進めていたため、知っているのはごく小数だ。

「愛代、お前はついて行かなくていいのか？ しばらく会えなくなるんだぞ」

もしくは一生、と心の中で続けた。重蔵は愛代に問いかけた。

「いいんです。私は海人の帰ってくる場所を守ります。十年、二十年経ったとしても、あの人が帰る場所があるように」

行っても足手まといになるだけ。ついて行きたい本音を必死に抑え、愛代は見送ることを決めた。

「どうした、何話してるんだ二人とも？」

二人に流れるしんみりとした空気を不思議がり、海人が口をはさむ。

「海人……生きて帰ってきてね。あなたの帰る場所は、私が守るから」

「おう、留守は任せたぞ、愛代。体は大切にしろよ」

「ありがとう」

それから二言三言交わしたあと、海人は船に乗り込んだ。

船はゆつくりと十三湊の港を出航し、未知の大海へと進路を向けたのだった。

二十七話、未知の大陸

太平洋という未知の大海に旅立った海人たち安東海賊団は、順調に航海を進めていった。

日本列島が水平線に隠れて見えなくなると、八方すべてが海になる。そこから本番。未知の大陸を発見し、仁実を救出する大冒険の始まりだった。

西の方角には大陸がある。だが東の方角に大陸があるとは知られてはいなかった。

頼りとなるのはポセイドンの残した羅針盤だけ。唯一の手がかりが目下の敵であるポセイドンの置いていった物とは、リスクの大きすぎる賭けだった。何の根拠もない相手の言葉を信じ、これでポセイドンが少しでも偽りを吐いていれば、海人達は海に骨を沈めることになってしまう。

だが一度負けてしまった海人には、それしか救い出すチャンスがなかった。むしろ機会を与えられて幸運だと思っていた。

無事に大海を渡りきり、大陸を見つけ、ポセイドンを倒し、生きて愛代の元に帰る。

言葉にすれば簡単だが、それを成し切れる可能性は限りなく低い。だがそのわずかな可能性に海人は賭けたのだ。

船長ならできるとついてきた船員に、船を造ってくれた重蔵に、支えてくれた愛代に心の中で感謝した。すべてを成し遂げた後告げられるようにと胸に秘めて。

海賊船は最大船速で、羅針盤の指す先へと進路をとる。天候の心配はしていなかった。海人の権能を使えば、天候すら自由自在に操ることができるのだから。

問題は食料。さすがの海人も無から命を生み出すことはできない。魚を釣って確保するしかなかった。

そして最大の問題であるところの、大陸の有無。こればかりはあることを祈るしかない。海人は世界を創造した神に、世界の果てを創っていないことを祈った。

そして永遠に続くかと思われた船の生活も、ついに終わりを迎える。

進行方向の水平線から、陸が現れた。

大陸は南アメリカ大陸。ポセイドンのいる島ではなかったが、この身いつぱいの感動から海人たちは一斉に歓声を上げた。逸る気持ちを抑えず、ポセイドンの罫の可能性も忘れて海賊船はいつそう速度を上げて、大陸に一直線で向かった。



「……おかしいな」

羅針盤を手にして海人は首をかしげた。羅針盤の指す向きが変わっているからだ。

海人達は現在、南アメリカ大陸に上陸していた。海賊船は沖に停泊しており、半数の乗員が船を見張り、もう半数が上陸していた。海人は渡るため使った小舟の前でいち早く戻ってきていた。

未見の陸土を踏んだ乗員たちは残らず歓喜の声を上げていたが、海人は目的を忘れてはいなかった。この遠方の地に来た目的は、仁実の救出。上陸には長旅の疲れを癒す気分転換の他に、海人だけは仁実またはポセイドンについての情報収集も兼ねていた。

海人がしげしげと羅針盤を眺めていると、乗組員数名が戻ってきた。改まって観察する海人に向かって、その内の一人が声をかけた。

「どうしました、船長？」

「おう、戻ってきたか。……指す向きが変わっていやがる。此処に上陸するまでは北東を向いていたが、今じゃ南東を向いている。気のせいなんかじゃねえ」

羅針盤を片手に持ち、もう片手に普通の羅針盤を差し出す海人。通常の羅針盤と比べてみても、ポセイドンの羅針盤はぴたりと南東の方向を指して動かなかった。

「……船とこの場所の中間点から真東に向かえば、島に着く、とか？」
半分冗談で一人が口に出すが、誤差とも言える小さな変化ではない

のは、一目瞭然だった。

「船長、他の奴らも戻ってきましたよ」

「お、そうか。なら船に残っている奴等と交代だ。手に入れた情報は船で話す」

船に戻った海人達は、乗組員が持ち帰った情報をまとめた。現地住民によるとこの大陸の西から来る船はないに等しいらしく、ほぼ全ての他国船は東から来るのだという。海人が西から来たと明かすと、とても驚かれた。

そして予想通りというべきか、ここは海人達の目指す目的地ではなさそうだった。島と言うよりも陸と呼ぶにふさわしい大きさであるし、仁実とポセイドン姿を見たものがないからだ。一人と一柱、どちらもこの辺りでは見かけない服装をしているので、見たのなら記憶に残っているはずだった。

「それにしても船長、よくこの言語が理解できましたね。俺たちは手振り身振りでどうにか通じましたけど、船長ほど詳細じゃないですよ」

「ああ、俺も驚いている。人の会話を聞いているだけで、なぜか言っている事が直ぐに頭で理解できるんだ」

「すごいっすね。船長にも馬鹿力以外にもそんな才能があったんですね」

「暗に俺には腕っぷし以外にないと言っただけはいいないか？」

はははまさかー、と笑ってごまかす乗組員にため息。海人も頭を回すよりも槍を振り回すほうが性に合っていると考えている。それほど腹はたたなかつた。

「ともかく今日は一晩ここに停泊し、明日出航する。目的地は陸の東にある、異国の船が溢れているという港だ。そこで仁実とポセイドンの情報を集める。南下して岬を見つけて、陸を迂回する」

『了解！』

「それともう一つ。噂程度だが耳に入れておきたい。耳かっぽじってよく聴けよ」

海人は乗組員全員を見回し、聞き逃すなど目を合わせて訴えた。

「岬を超えた先に濃い霧の出る海域があるらしい。その霧の中では行方不明の船が何隻も出ている。船その海域を通れば近道になるとしても、海域を迂回して近づかないらしい。……残念ながら正確な場所まではわからなかった。だが思い出してくれ、十三湊からここまでの旅路を」

海人達が思い浮かべたのは、快晴の空の下トラブルらしいトラブルもないまま淡々と過ぎ去っていった船の上での生活だった。船を進めるだけの風はあったものの、雨は真水が欲しい時以外は降らさなかった。船が転覆するほどの激しい嵐も起きることはなかった。

それほどまでに海人の手に入れた権能の制御は完璧であり、乗組員が日中から酒びたりになったり賭け事に興じるほどに権能は万能だった。

船長に任せていれば万事上手くいく。乗組員達の心は軽く楽だった。

だが海人は嫌な予感をひしひしと感じていた。何時何処で神殺しである自分が厄介事を引き込むか不安だった。だから常時気を張らずとも覚悟だけはしていたのだ。

「何もなかったのが不思議でならん。俺は嵐の前の静けさだと思っている。何事もなかったことへのツケが回って来ているのかもしれない……。お前等、気を引き締めてかかってくれ」

海人の勘は当たることとなる。
指す方角の変わった羅針盤は、噂に出ていた霧の出る海域を指していた。



「しまった。南には奴の支配下に置かれた海があった」

ちょうどその頃、噂の海域について思い出して頭を抱える一柱のまつろわぬ神がいた。玉座に座り海人を今か今かと待ちわびていたポセイドンは、中々訪れない好敵手の来ない訳、その理由に思い当たったところだった。

「ふむ……。しかし知らせようにもあの霧の中ではあらゆる道具が狂ってしまう。どうしたものか……」

ポセイドンは頬杖をついて頭を悩ませていた。悩んでいたのは、協力関係にある女神の四人の内のひとり、霧の海にいる女神にどのように知らせを届けるかだった。

まつろわぬ水天と会話をしたようにしたかったが、相手が水晶玉を持ってはいなかった。持っていたとしてもその相手がいる霧の海は、あらゆる神具や機構を有する物が狂ってしまう。繋がったとしてもノイズが酷かっただろう。

ポセイドンは己の眷属を遣わすことも一考した。しかしそれも直ぐに諦めた。なぜならその相手の歌に魅了され、確実に届くと言われれば疑わしいところだからだ。

「……いや、考えを改めよう」

なぜ自分は海人をあの女神に接触させたくない？ それは間違つて女神に海人を殺してほしくないからだ。ポセイドンは仁実の目の前で海人を叩きのめし、仁実が海人に向ける好意を全て自分のものにしてしようとしていた。それには海人にこの島——アトランティスに上陸してもらわなければ困るのだ。

ポセイドンは傍に眠る仁実に視線を移した。仁実はポセイドンの術にかかり、牢屋から攫われてからずっと深い眠りに落ちていた。服装は上質な布でできた和服を侍女にはがされ、純白のウエディングドレスを着せられていた。その姿は童話に出てくる眠り姫の样だった。

だが海人が旅路の途中で遭遇したまつろわぬ神に殺され、この島にたどり着くことができなかつたとしたら。

「そうなるなら、その程度の男だったのだ」

これは試練だ。意図して謀ったわけではないが、たどり着くことさえできないのなら自ら戦う価値はなかつたという事。戦って落胆するよりもショックは少ないだろう。あっさり殺してしまい拍子抜けするよりもずっといいはずだ。

「期待しているぞ、海人。奴を打ち倒し、俺の前に立ちはだかる時を」
ポセイドンは海人と戦いたいと、心の底から渴望していた。武神と

して顕現した己の闘争本能を満たしてくれる者を望んでいた。

海人はポセイドンと戦う前、まつろわぬ水天との戦いで消耗していた。ポセイドンは万全の状態での海人と戦ってみたかったのだ。

万全の状態の海人と戦い、そして完全勝利して彼から仁実を奪う。それがポセイドンのしたかったこと。

慣れたものだ。神世の時代からずっと行ってきたことだ。この島もポセイドンが力で奪い取ったものだった。

「海人の首があれば、まあ仁実を花嫁にするには十分な説得材料になる……さて、ゆつくり待つとするか」

ポセイドンは玉座に腰を沈めた。頭の中で、ポセイドンは海人のことを後回しにし、思考を別のことに割き始めていた。

考えていることとは、ポセイドンの支配する海にたびたび侵入する魔術師の対象だ。

一度だけ玉座の間に通してみたが、領土を返せと喚き散らすばかり。少し睨みつけてみれば失神したので、海に捨てた。それ以来ポセイドンは領海に入る者を悉く追い返していた。

領土を返そうとは思いもしなかった。このアトランティスの大地は元々海底にあったものではない。ポセイドンが大陸から民家ごと切り取ってきたものだった。

ポセイドンからしてみれば戦利品。その領主との勝負に勝ち、報酬として頂いたものと考えていた。返そうとも思っていない。ポセイドンは元々自分のものだと認識していた。

二十八話、船の墓場

船長に忠告されたことを船員達は胸に刻み、船は南に進んでいく。そして南アメリカ大陸の最南端、オルノス岬へと到達した。

羅針盤の針は突き出た岬から大陸を沿うように、北東の方角を指していた。

船は迷うことなく進路を北東に変更。大陸の沿岸部を眺めながら、数日間の船旅があつという間に過ぎていった。

「船長！」

見張り役の乗組員がマストの上で声を張り上げる。海人が船首のほうに立って、船の進行方向を見やる。船の向かう先には深い霧のかかった、見晴らしの悪い海域があつた。

まず間違いなく噂にでていた魔の海域であろう。そこは霧のせいか昼なのに妙に薄暗く、不気味なほどに静まり返っていた。

「突入する！ お前ら、どんな奴が棲んでいるかわからねえ、警戒を怠るな！」

船が霧の中に突入すると、海人はより警戒を強めた。しかし霧につかっても視界が悪くなるだけで、特に変化は起きなかつた。他の乗員を確認しても変化はなかつた。

「権能も使つてはいねえぞ……」

その時、頭上から声が落ちてきた。マストの見張り役からだつた。

「船長、歌が聞こえます！」

「歌……う？」

すぐに海人の耳にも歌が届いた。どこからともなく女性の歌声が聞こえてきたのだ。

「こつちも聞こえた。しかし一体どこから……？ おい、周囲に陸は見えるか？」

「……」

マストの上まで声が届くよう、海人は大声を張り上げた。しかしついさつきまで反応があつた見張り役からの返答がない。

歌声はどんどん大きくなっていく。声が届く程度は近くに女性が

いるはずだった。

「おい！ どうだ、何か発見できたか!？」

「……」

今度は雲の上まで声を届けるつもりで、金切り声のような声で呼びかけた。それでも返答はなかった。

何事か見張り役に起きたのではないか。何かよくない予感がした海人は、すぐさま見張りの様子を見てくるよう手近な人間に頼もうとした。しかし振り返り、海人は異様な雰囲気には驚愕した。

「おい、どうした！ しっかりしろ！」

「……」

海人はひとりの乗組員の肩をつかんで揺さぶった。頭を大きく揺さぶられても、乗組員の目の焦点は合わず、ただ棒立ちのままだった。

それも一人だけではない。目に見える乗員の全てが棒のまま甲板に立っていた。マストの上の見張り役も同じ状態なのは容易に想像できた。

一瞬だけ、たった一瞬だけ目を離した隙に、船内は悲惨な状況になっていった。その原因が歌のせいであるのは間違いなかった。だが海人以外にもたった一人だけ、棒立ちではなくしっかりと体を動かしている乗組員がいた。

操舵手だった。操舵手の男は真っ直ぐ一点を向き、しっかりと舵を握っていた。

海人は船首から舵のある船尾に向かった。そして操舵手に話しかけた。

「おい、大丈夫か？ 俺がわかるか？」

「……」

「くそっ」

しかし操舵手も他同様に海人の声に応じない。

だが操舵手だけ、口からぼそりと言葉を発した。

「……んでる……」

「……なに？」

「……呼んでる……」

すると操舵手は舵を右にきつた。海賊船は進行方向を右に変え、しばらくすると真っ直ぐに舵を戻した。陸からどんどん離れていく。操舵手の視線は迷いなく、ここから見えないどこかを見据えているようだった。

「呼んでる……」

「おい！ 一体誰が呼んでるんだ!? 何処に行こうとしている!」

「……呼んでる……」

「くそっ、こっぴなつたら……」

知らない場所に連れて行かれるとまずい。どこか夢を見ているかのように意識がない操舵手を、海人は殴って物理的に眠らせようとした。

拳を握り締めようとしたその時だった。

腕に力が入らない。海人は右手を眺めると、視界がぼやけて右手がブレて見える。

しまった、と気づいても遅すぎた。思考にもやがかかったように急激に意識が遠のいていく。

魔術は神殺しには効かないんじゃないのか。意識が落ちる直前まで海人は頭でそう考えていた。

その認識は間違っではない。アテルイの言ったことは正しい。正確には『魔術が常人に比べてはるかに効きづらい』だ。

神殺しには何らかの方法で体内から術をかけねばならない。しかしこのこの歌声は神殺しの魔術抵抗を上回るほど強かった。魔術の防備を突破し、強引にかけたのだ。だが中途半端にかかったせいで、海人は眠り込むだけにおわった。

海人が床に倒れこんで寝息を立てる中、船をは静かに海上を進んでいく。

船をは霧に覆われた魔の海域、バミューダトライアングルの中心へと向かっていた。



「……………」

潮の満ち引きで揺れる船体で、海人は目を覚ました。痛む頭を抑えながら立ち上がると、周囲を見回した。船をの甲板には誰ひとりとしていなかった。

歌声はなおもここ一帯に響いていた。

それよりも海人は外の景色に目を奪われていた。海人の海賊船よりも二倍はあるかという巨大な帆船たちが、所狭しと並んでいるのだ。

船の国籍はさまざまで、海人の海賊船のような真新しい船から、今にも崩れてしまうような朽ち果てた船まで年代も様々だ。

そこはまさに船の墓場だった。

これらすべてが行方不明となった船なのだろう。海賊船のすぐ近くにもひとつ船があり、それは人の手を離れてからそれほど経ってないように思われた。

だが人が動かさなければこの海賊船もこれらの船の仲間になってしまうかもしれないのだ。海人が船の下を覗くと、船は岩礁に乗り上げて座礁していた。海人が権能を使えば海に戻せるが、それには乗組員を乗せないといけない。

海賊船の船内を搜索したが、船内には誰もいなかった。と同時に金銀財宝、食料等と交換できるかもと積み込んだ価値ある物もなくなっていた。

幸いにも愛用の槍は持ってかれていなかった。海人は槍を握って感触を確認する。

「あいつら宝と一緒にどこに行きやがった……」

海人は船から降りた。乗員達を置いて自分だけ霧の中から出ることは選択肢にはなかった。

乗組員達が海人を放置してどこかに消えてしまった、その原因はわかっている。この船の墓場で目覚めた時からずっと響いている歌声が原因に違いない。

はじめは美しいと聞き惚れていた歌声も、今は海人にとっては耳鳴りを引き起こす騒音になっていた。海人の神殺しの体が歌声に対し

て大勢ができ、歌声は毒だと海人に警告を鳴らしているのだ。

海人は時折来る頭痛で頭を抑えながら、ゆっくりと巨大船の間を縫って抜けていった。目的地は歌声の主の元。陸に打ち上げられて家屋より背が高い船の間を一步ずつ確実に進む。海人にも歌声が『呼んでいる』ように、引き寄せられていった。

ついに海人は船の墓場を抜ける。そしてその光景に息を飲んだ。金銀銅貨や宝石類、剣や槍、ダイヤなどが嵌められた装飾品、財宝が船の高さと肩を並べるほどにうず高く積み上げられていた。一つや二つではない、十はある金の山が今にも崩れてしまいそうなバランスで積み上がり、山と山の間一人が通れる程度の細い道ができていた。

海人はようやく開けた空を見上げた。天気は曇天、太陽は霧で隠れていた。太陽が出ていたら光が金貨に反射して、まともに目を開けることはできなかつただろう。

財宝の山を崩さないように小道を慎重に歩く。途中所々で人骨が財宝の山に埋まっていたり道を塞いでいた。海人は踏まないように避けて奥へと進んで行った。

しばらく進むと乗組員のひとりが金貨の山に腰かけていた。隣には見覚えのある箱がある。確かあれには上質な反物を入れておいたはずだ。

見れば辺りに他の乗組員も散らばって座り込んでいた。

「おう、俺がわかるか？」

海人はしゃがみ、乗組員の顔の真ん前で手を振る。

「……やっぱりか」

「……」

乗組員は海人が気絶する前と同じように、焦点が定まっていなかった。未だに意識を奪われていた。

その意識を奪っている相手もこの先にいる。

この近くに来てから頭に干渉してくるかの様な魔術の歌声から、耳から直接入ってくる生の歌声に変わったのだ。頭痛の種には変わりなかったが、声が届く距離に来たのは確かだった。

「……待っている。すぐに元凶を断つてやる」
海人は立ち上がって歌声の方向に歩み始めた。



財宝が所狭しと積み上げられていた場所とは打って変わり、海人は何も無いゴツゴツとした岩が転がっている広場へと出た。

その中央、一回り大きな岩が積み上がった上に、歌声の主はいた。上半身は人間の女性の体だ。絵画や彫刻のモデルにされそうなスタイルの良い体が、布一枚纏わず露出していた。しかし腰から下は羽毛に覆われた鳥の足だった。鷲のように足の先で三つに分かれて、鋭い爪が伸びていた。岩に爪を突き立てて不安定な足場でも体の体制を保っていた。

より一層存在感を出しているのが、背中から生えている二対の翼だ。大きく横に広げられた翼は、一翼だけでも女性の身長ほど大きい。衣服を纏わない全身を覆うことができそうだった。

歌声が止む。あちらも海人に気づいたようだ。

「珍しいお客さんね。あなたも私の歌を聞きに来たのかしら、神殺しさん？」

「残念だが、俺は歌を止めさせに来たんだ。ずっと聞いていたい綺麗な歌声だったが、うちの乗組員が虜になっちまってね、梃子でも動きそうにないんだ。だから……」

海人は拳を掌に、パンと打ち付けた。

「元を断ちに来たんだ。あんたを黙らせれば歌声は止まるんだろ、まつろわぬ神？」

海人の体は熱く滾っていた。この高揚感は三度目だ。一度目はまつろわぬ水天を前にした時、二度目はまつろわぬポセイドンを前にした時。

この体の変化は間違えようはずもない。神殺しが仇敵であるまつろわぬ神と相対した時に起きる、体の奥から力が沸き起こる現象だった。

目の前の半鳥人はまつろわぬ神。仁実とポセイドンへの道の障害に成り得る女神だ。

「そう……。たしかにそれは残念ね。言葉を喋らず歌声だけを聴く観客でいればよかったのだけれど、私を害そうとするなら仕方がないわね。私も相応の対処をしましょう」

翼をはためかせると、女神は空中に飛びたつた。そして海人ではどう跳びあがっても槍が届かない高さまで上がると、そこで静止した。「降りてこい！ そのまま逃げる気か!？」

「あなた達の様に泥臭く低俗な戦いはいたしません。私には、私なりの戦い方があるのです」

すると女神は再び歌い始めた。だが口から紡がれる歌は、人間を木偶にしたあの歌ではない。何か別の、魔力の乗った美しい歌だった。

突然、海人の足元の地面がボコリと隆起する。

驚いて後ずさる海人をよそに、続いて周囲のあちこちで土が隆起していく。土の中から現れたのは、人骨。肉がなくなり骨だけになった人間の亡骸が、己を埋葬していた土を押しつけて出てきたのだ。

ジャラン、と金属と金属のぶつかる音が背後から聞こえてきた。金貨の山が崩れる音だ。あちこちで聞こえてくる。背後を振り向くと海人が通って来た金貨の山の間の道からも、骸骨が歩いてきた。違うのは腐った肉のついたものもあれば、どこらで拾ってきたのか剣や盾等、弓等の武器をもっているものもいることだ。

「野蛮で低俗な戦いは、同じ低俗な者同士で行うものです……。さあ、観客の皆さん！ 礼儀をわきまえない愚かな神殺しを、この世という舞台から引き摺り下ろしてくださいな！」

歌という魔力で囚われた者達が見えない力で動かされ、次々に海人へ襲いかかった。

二十九話、まつろわぬセイレーン

金貨の山から、地面の中から、広場と繋がる四方八方の道から。あらゆる場所から兵士達は現れた。女神の魔術の歌の虜になってしまった者達は、生きていけば潜伏できない様な場所から飛び出し、海人を捉えるなり襲いかかってくる。

その姿を見れば肉のついでている兵士はほとんどいない。白骨化した元人間が剣や槍、果てには自らのどこかの骨を武器にしていた。

統率されていない雪崩の如く襲ってくるスケルトンの群れを前に、海人は背中の槍を構えた。

「ふっ！」

まずは一体目。海人は先ほど地中から出てきた、地面を這う骸骨目掛けて振り抜いた。

蜘蛛の様にコソコソ地面を這って近づいてきた人の成れの果ては、その海人の一撃で頭蓋骨を粉碎された。人型をとっていたスケルトンの体の骨はバラバラに飛び散った。

どういう原理の魔術かは分からなかったが、倒し方はわかった。人間を相手取る時と同じように腕や足ではなく、頭を狙えば動きは止まるのだ。海人にはそれだけ判明すれば十分だった。

「来いッ！」

発破をかけた海人に、さびた剣を振り上げながらスケルトンが迫る。海人はスケルトンの胴に一突き、肋骨に槍が挟まって、武器が届かないスケルトンは止まる。槍の先端にスケルトンを突き刺したまま、海人は槍を右に薙ぎ払った。三体ぐらいを巻き込んで倒し、スケルトンは槍の先端から抜け落ちた。

息つく暇もなく海人は標的を変える。背後から殺気を込めて振り下ろされる剣を避け、カウンターで頭を打ち抜く。

左右から挟み撃ちをかけてくる兵士の剣を受け流し、同士討ちをさせ二人同時に倒す。

奇しくも隊列を組んで突撃してくる槍の兵士達を一息で飛び越え、背後から薙ぎ払い複数人を倒す。

これぐらいの事は人間だった頃から、神殺しになる前から船の上の混戦で慣れたものだ。あの頃と違うのは、海人は権能を織り交ぜてスケルトンを対処していることだった。

「我は厄災の化身、八頸の大蛇也！」

海人の口から聖句が紡がれる。すると霧のかかった空をさらに暗くするかのようには雨雲がかかった。

雨雲はゴロゴロと電気を貯め、今にも怒りを落としそうだった。

「あらあら、これは……」

「雷よ！」

海人の聖句で空中の女神に雷が落ちる。雷が強烈な閃光と轟音を響かせて女神に迫る。

「それっ」

しかし女神に舞うようにあつさり躲かれ、その下にいたスケルトンの集団に落ちた。骨が墨になる程の衝撃に打ち据えられ、数体のスケルトンの体がバラバラになる。

「ちっ。……おい、俺にこんな奴らを差し向けたって無駄だつてことは分かっただろう。高みの見物を決めこまないで、さっさと降りてこい！」

そう空中に声を投げかけながら、海人は片手でスケルトンを一体串刺しにした。右足では未だカタカタ動く頭蓋骨を粉砕していた。

「私に剣や槍は似合わないわ、布より重いものを持ったことがありませんもの。……それに、あなたが雷霆を操る権能をもっていると判明したことですし、収穫がなしとは言えないわ。……ありがとう、いい天気にしてくれて。晴れ晴れとした天気は嫌い、太陽なんて見たくないもの」

女神は空を見上げた。辺りは霧が光をさえぎり薄暗かったが、海人が雷雲を呼び寄せたことでさらに太陽光が届かなくなっていた。

「観念しろ！ 降りてこないのなら、無理やりにでも撃ち落とすぞ！」

海人は上空を向いて女神に声を投げかけながらも、スケルトンの一体を裏拳で打ち砕いた。そして海人は地面に槍を突き刺すと、大地に権能を行使した。

「地揺れよ！」

するとその一带に、初期微動もない突発的な地震が起こった。少しよろめく程度のそれほど大きくはない揺れ。しかし竹馬で歩くように不安定な歩行をしていたスケルトンは、たまらず転ぶ。

海人は瞬く間に数体のスケルトンを仕留めた。海人の周囲には骨だけのスケルトンに混じり、皮や肉が残ったスケルトンの割合も多くなっていた。

「そうねえ……。だったらそこにいる私の兵士達、みーんな居なくなったら降りていつてあげるわ」

それを聞いた海人は、槍を持った手を天高くに掲げた。すると突然、海から強風が吹き込んできた。

人為的な突風に女神は長い髪を抑え、スケルトンはより一層力カタタを歯を鳴らした。

風はやがて海人を中心に渦を巻き、海人は小さな台風の目となった。風が渦へと集まる中、海人の周囲は驚くほど静かだった。

「風よ、全てを打ち払え！」

海人が聖句を唱える。渦巻いていた風の力が一気に解放され、全方位に暴風となって放たれる。スケルトンは足が地面から離れて、運の良い者は船の壁に叩きつけられた。運の悪かった者は船を飛び越し、空中に巻き上げられていった。風が弱まったら海に落下するだろう。

広場にいたスケルトンは全て排除し、広場にいるのは海人と女神だけだった。暴風が過ぎ去った後の宙に浮いて、女神は何事もなかったかの様に平然としていた。

「次はお前だ、女神！」

「そう、それああなたの権能……。雷霆に風、さらには地揺れも引き起こす権能、さぞ高名な神を下したのでしよう。……認めましょう、あなたの力。私が直接指揮しなければならぬようですね」

役目を果たしているかよくわからない翼をはためかせ、女神がゆつくりと降りてくる、しかし女神は岩の上に戻り、視線は未だに海人を見下すような視線だった。海人はそれに無性に腹がたつた。

「ご自慢の兵士はもういないぞ、とつとと俺に討滅されやがれ！」

「慌てないで下さいな。私の兵士はあれで全てではありません。私の宝を守るために割いている者達を呼びました。もう少ししたら来ることでしよう」

「宝だとう？　ここにある金銀財宝の山のことを言ってるのか？」

「そうです。この海を通る船から献上されたものです。……金貨の輝きは美しい。太陽の光は嫌いですが、この輝きのためなら少しだけ、浴びてもいいかもしれませんね」

女神は頬に手をあて、うっとり微笑んだ。

「鳥頭ごときが人様の真似事とは、もしやその羽は鴉のものか？　賢く、それでいて光り物には目がない。盗む物は鴉にそっくりだ」

「奪い取ったではありません、これは契約です。彼らが貢物を献上するかわりに、私は彼らを兵士として雇い、歌を聴かせる。ずっとずっと、たとえ彼らの肉体が朽ち果てて骨になろうとも、私の歌は彼らの魂に響き続けるのです」

「契約とは、その歌で選択肢を奪っておいてよく言うぜ」

歌の魔力に吞まれてしまえば、もはや道はなきに等しい。選ぶ力を奪っておいて契約とは、まつろわぬ神の例に漏れない傲慢さだった。

「あなたのその減らず口、次にとっておいたほうが身のためですわよ。……さあ、やつとのご到着です」

金貨の山の間の道から、女神の虎の子の兵士達がぞろぞろと溢れてきた。そのほとんどのスケルトンに肉がついており、もはやスケルトンとはいえない。どこの部位も腐っていない、完璧な人型を保っているものもいた。

ガリガリにやせ細っていながらも顔の輪郭が判別できる。そのただ歌に操られている兵士たちを海人はざっと眺め、そして閉口した。操られている者達の中に、海人の海賊船の乗組員達がいるのだ。

「手が骨だけの兵士では、繊細な作業はできませんもの。新人さんが来てくれて助かりましたわ……。神殺し、あなたもお仲間に加えて差しあげましょう。神殺しを僕に出来ると思うと、心が歌いだしそう」
「残念なことに、お前の歌は騒音にしか聞こえない、仲間になるのは不可能だ。逆に俺が、お前を屍の仲間入りをさせてやるぜ！」

「あなたにそれが、できるのでしたらね！」

女神がまた歌いだす。今度は人間を眠りにつかせる子守唄のような優しい歌ではなく、荒々しく激しい歌だ。

歌に囚われた人間が海人向かって駆け出してくる。その中に海人の仲間が混じっている。妻や子供だっている者もいた、殺すなんて考えられなかった。

海人の槍を握る手が、じつとりと汗ばんだ。神殺しになってからこのかた、戦とまつろわぬ神との戦い続きで、手加減などしたことがなかった。乗組員達を殺さないように倒すなど、表には出さなかったが海人は不安でしかなかった。



海人の相對している女神は、ホメロス著の叙事詩「オデュッセイア」に登場する。

ギリシヤ神話の英雄オデュッセウスを主人公とした物語で、トロイア戦争で勝利した彼の凱旋までに起きた、十年以上の漂泊が語られている。

キルケーの住むアイアイエー島から脱出したオデュッセウス一行は、道中で歌声の響く魔の海域にさしかかる。そこには神さえ魅了してしまう声を持つ、半鳥半人の怪物が棲んでいた。

だが事前にキルケーから忠告を受けていたオデュッセウスは、仲間達に耳栓をつけるようにと指示を出した。歌声を聞かないようにするためだ。

しかしオデュッセウスは好奇心に負け、その歌声を聞いてみたいと自分だけ耳をふさがなかった。そのかわり自分の体をマストにくくりつけるよう指示し、自分が何を言っても縛り付けた縄を解かないようにとも命令した。

歌声の響く海域に入ると、歌声を聞いたオデュッセウスは歌声の元にいこうと暴れ出す。縄が邪魔で動くことができず、縄をほどけと叫びながら暴れ出した。

しかし部下達は耳栓をつけているので歌声もオデュッセウスの叫ぶ声も聞こえず、暴れる姿を無視して一心不乱に船を漕ぎ続けた。

ようやく怪物達の棲む海域を突破したのも束の間、オデュッセウス一行に次の試練が襲いかかる。

半島半人の怪物こそが、海人が戦っている女神、まつろわぬセイレーンだ。

オデュッセウスは、ポセイドンの怒りを買ってしまい、様々な海の怪物に襲われる。その中ひとつがセイレーンであり、セイレーンはポセイドンによつて差し向けられたのだ

「セイレーンの歌声にかかれれば、たとえまつろわぬ神であっても惑わされてしまう。殺されてなければいいが」

ポセイドンは玉座に座り、時間が経つのをじっと待っていた。

すでにに自分の創造した神獣を差し向けてある。その神獣でどうなったか確認するだけだった。

セイレーンは、ポセイドンが切っ掛けで顕現したのは間違いなかった。だがセイレーンはポセイドンに付き従うどころか、むしろ憎んでいるすらあった。英雄と大地母神という相容れない関係に加え同じ神話体系という結びつきもあり、他の女神よりも一際険悪な関係だった。

ポセイドンはセイレーンの強さを知っているからか、海人では勝てるか怪しいと考えていた。

しかしそれは大きな思い違いだった。神をも惑わすセイレーンの歌声も、海人には頭痛の種でしかなかった。

海人の魔法に対する抵抗力は、ずば抜けて高く、他の神殺しに効く強力な魔術でも海人には効かない。魔術に対する完璧な耐性を持っていた。

海人はセイレーンの天敵だった。



まつろわぬセイレーンの歌が響きわたる。すると操られた者達の

動きが見違えるように変わった。

「兵士達、神殺しを休ませてはいけません。一気にかかるのではなく波状攻撃で、休ませる隙を奪うのです!」

セイレーンが自分の兵士を歌で指揮するようになり、獣のように突撃してこなくなつた。数が多すぎて邪魔になつていた時とはかわり、数の利を生かしてタイミングをずらして攻撃してきた。海人は対処にとっても苦労していた。

そして何よりも厄介だつたのが、囚われた者達のパワーだ。

海人は振り下ろされた剣刀を、右片手に持った槍で受け止めた。

「ぐっ」

しかし兵士のパワーに押し負け、槍は弾かれてしまった。兵士の振り下ろした刀は地面に刺さつたが、もう少し踏み込んでいたら海人に当たつていた。

海人に刀を振り下ろした人間は、海賊団の一員だつた。しかも団員の中で一番ひよろりと体が細くて、よく仲間にかかわれていた奴だつた。その細い腕を見れば、海人の槍をはじくなどできるはずがない。

「人間の体は面白いわね。常に制限がかかつていて、十割の力を出せずにいるんですもの。十割の力を使ってしまうと体が壊れてしまうんだとか……。だからそんな不完全な人間の体を、私の歌で完全に上げてやるの。体にかかった制限を取り払う。大丈夫、骨になつたとしても使い道はあるもの」

「ちっ……。おい、正氣に戻れ! お前妻がいただろ、あんな奴に浮気してる場合か!」

海人は声に団員は応えない。

「くそつたれ! っこうなつたら……」

海人は賭けに出た。

海人はあらん限りの力を込めて、槍を思いっきり足元の地面に突き刺した。

不可解な行動に、セイレーンは眉をひそめる。

「一体なにを……?」

儀式的な意味合いがあるのかとセイレーンは注意深く観察する。

海人は聖句を唱えた。

「海よ！　荒れ狂う大波となり、総てを押し流せ！」

「ッ！　まさかッ！」

聖句の意味を理解し、セイレーンは大空に舞い上がった。海人は突き刺した槍を、がっしりと握りしめ、それが来るのを待った。

島から南東、海の広がる方向から超巨大な波が押し寄せてきた。

「やはり……」

異国の船も丸呑みしてしまいそうな大波を見て、セイレーンは下唇を噛んだ。波の届かない高さまで到達し、身の安全を確保したセイレーンが次に心配したのは、集めた金貨や宝だった。

セイレーンは高波に自分の住み処が呑まれるのを、ただ指をくわえて見ていることしかできなかつた。

三十話、一人

船の墓場が高波に吞まれる中、海人は波に押し流されまいと必死に槍をつかんで耐えていた。

自らの権能に悩まされるなど間抜けなことだが、それが海人の最初の権能の弱点だった。

八郎太郎から篡奪した権能は、災害を引き起こすか抑える権能。しかしその影響を与える対象を「海人以外」にするという器用なことはできなかった。

災いは万人に等しく降りかかるもの。そこに例外はない。雷も海人が落とす場所を誤れば、打ち据える対象が海人になるのだ。

右へ左へ、海人は体をかき混ぜられる。永遠に続くと思われた時間の中、水が引けて水面上に顔が出ると、海人は息を吐き出し目を開けた。

目に飛び込んできた光景に、海人は驚きを露わにした。天高く積み上げられていた金貨の山と座礁したまま放置された帆船は押し流されて、海とその先の水平線が見えるほどに視界がひらけていた。

だが、海人の目にとまったのは島のあるべき姿ではなかった。すぐ先にいる海賊船の乗組員やその他、セイレーンの歌に囚われた者達だった。彼らは海人と同じように波に押し流されまいと、身を寄せ合って凌いでいたのだ。

海に放り出せば命には関わらないという海人の目論見を外されてしまった。

「あ、あああ……！　なんてこと！　私のコレクションが……」

手先をわなわなと震わせながらセイレーンが降りて来る。拳をきつく握りしめて海人に怒りを向けるセイレーンに、海人は言い放った。

「……おい、半島人。どういうことだ、説明しやがれ！」

「どういうこと、とは？　私の集めた宝を波でさらっただけで、怒りたいのはこちらの方ですわ！」

「何故あいつらは固まって大波を凌げた。お前はそんな指示をしてな

「いだろ!？」

海人は身を寄せ合って固まっている者達を指しながら、セイレーンに怒鳴り返した。

高く飛び立つ前、セイレーンは兵士達に何も命令を下していなかった。だから抵抗もできずに波に押し流されるはずだった。

しかし兵士達は押し流されないよう自ら動いた。考えて動いたのだ。

「ああ……そういうことですか。当たり前でしょう。なにせ彼らにはまだ意識がありますもの」

「は……?」

理解できないと目を見張る海人。心底面白いのか、セイレーンは表情を怒りから喜びに一転させた。

「彼らの意識はまだあると言ったのです。言葉は発しません、目で見て耳で聞くことができる。ただし! 聞けるのは私の歌と指示だけ、目に映るのは排除すべき敵の姿だけ。私の指示がなくとも、身を守ることでぐらいは出来るのですよ」

「あいつら自分の意思で攻撃してきたと言うのか!？」

「そうです!。そして私の指示は、彼らを強い呪縛となって動かす。神殺しでさえ容易く振りほどけない攻撃となって表れる。この様にね!」

セイレーンが歌で指示を出す。すると背後から海人の仲間が羽交い絞めにし、海人の動きを封じた。

「くっ、くそ! 離せ!」

「簡単には引き剥がせないでしょう。私の呪力の乗った行動です。そして神殺しの頑丈な体も、私の命令であれば貫くことができる。さあ、神殺しを刺し殺しなさい!」

「お、おのれ! 離しやがれええええええ!」

海人は叫んだ。すると突如一带に地揺れが起きた。

「ツ! 何、これは一体……!」

セイレーンは空を見上げた。灰色で暗かった雨雲が、赤く光って周囲を照らした。

雲を突き抜けて現れたのは、真っ赤に燃えた岩石だった。他にも小粒の岩石が、雨あられと島に降り注いだ。体でまともに受けた兵士達も、体を貫かれて真っ赤な血を吐き出した。巨大な岩石に押しつぶされた者もいた。

「これは、噴火！ この近くに火山はないのに……！」

セイレーンはその大きな翼で体をかばった。しかし際限なく降り注ぐ火山弾は、容赦なくセイレーンを打ち据える。

チラリと海人を見た。炎の岩を降り注がせた海人自身も、等しく火山降下物の被害を受けていた。

「これでは神殺しもただでは済まないはず……！」

その隙が命取りだった。高速で落下してきた巨大な炎石が、セイレーンめがけて降り注いだ。

「しまっ……ッ！」

セイレーンはその岩石の下敷きになってしまった。



雨雲を照らす赤い光が消えて一帯が落ち着くと、船の墓場は原型を保っていないかった。

墓場にあった金銀財宝や打ち捨てられた船はほとんどが大波によって攫われ、むき出しになった島の地表は火山弾によって無数の穴が開いていた。まるでチーズのように穴があき、他にも空から降ってきた大小様々な火山岩が点在している。

異様な雰囲気醸し出していた船の墓場は、たった数時間のうちに荒れ果てた荒野のようになってしまっていた。

そんな景色の一変してしまった船の墓場の中を、ひとりの生存者が歩いていた。この船の墓場を荒らし回った張本人の、海人である。

海人は負傷した左手を支えながら、血を流している左足をひきずりつつ歩いていた。火山弾をもれなく全身に受け既に満身創痍、しかし他の者に比べたら傷は浅い方だろう。

なぜなら海人以外に立ち上がって動いている者はいないからだ。

海人は一人の男の前でしゃがみこんだ。男は仰向けに倒れ、全身の至るところに穴をあけて血を流していた。

もう手遅れだと素人目でもわかる重症だった。だが海人は諦めず、男の傷に手を触れようとした。

「踏ん張れ、今助けてやるからな……」

「……無駄、です。その男は助からない。そしてあなたもね……」
「ッ！」

海人は声の聞こえた方向を向く。そこには大岩に胴体を押し潰されて身動きのとれなくなつたセイレーンがいた。

頭と右手だけを出し、セイレーンは声を絞り出した。

「その傷ではたとえ神殺しといえど助からない……。私をこんな姿にした実力は認めますが、あなたもその男と一緒に地獄へと逝くのです……！」

「それはどうかな……」

海人は目を閉じると、体の内側に意識を集中させた。

想像したのは、粘土。壊れてしまった一部の形を崩し、作り直すイメージを思い浮かべた。

「我が身は流水、大河の化身。総てを受け入れ、一切を押し流す浄化と命の根源也」

海人は聖句を唱えた。まつろわぬ水天——アナーヒタを刹逆したことで得た、海人第二の権能だった。

その権能の力は肉体を水に変える。刀や槍の攻撃で傷を受けず、呪術的な攻撃でしか傷を負わない流体化といった権能だった。

海人の怪我をしていた左手と左足がぐにやりと形を崩し、無色透明な水に変わった。そしてすぐに手足の形をとると、そこには傷ひとつない綺麗な左手と左足があった。

セイレーンが驚きの表情で固まる中、海人は何事もなかったかのよう滑らかに立ち上がると、権能の力で回復した体の状態を確かめた。

「……ふう、初めて使ってみたが、こりやすごい。医者いらすだな」
セイレーンの思考は驚きの感情で占領されていた。そんな権能を

隠していたことにも驚いたが、一番驚いたのはその権能を海人が持つていたことだ。

半鳥人の歌姫は、その権能の元の持ち主を知っていた。ポセイドンの下で一時共同戦線を張っている女神の一人、その中で最も討滅するに難しい大河の化身だ。

その女神の権能を海人が持っている。それは大河の女神が海人の手によって討滅されたことに他ならない。

「はは……。私では勝てない訳です……」

セイレーンは乾いた笑みを浮かべた。

ですが、私の誇りにかけて、ただでは帰さない……！ セイレーンは無事な右手を虚空に伸ばし、ぎゅつと何かを握り締めた。セイレーンの頭にあるのは、海人に一泡吹かせてやりたいという考えしかなかった。

「起きろ……。頼む、起きてくれ……！」

海人が負傷した仲間に触れると、仲間の男のまわりを薄い水の膜がおおった。アナーヒタの権能は、魚が棲めるようなせいけつな水があれば、他人であつても治すことができる。水は、海水であつても可能だ。島の周囲に飽きるほどある海から水を汲み出し、海人は仲間を治療した。

瞬く間に男は傷一つない体になった。しかし男は一向に目を開かなかった。

「どうした、一体なにが足りないってんだ！」

「ふふふふふ……。ハハハハハハハハハハハッ！」

「何が可笑しい!？」

突然笑い声を上げたセイレーンに、海人は詰め寄った。

「思い通りになったからですよ。その男の魂は、冥府の神でもある私に魅入られた。私の歌を耳に入れた時から既に、魂を抜き取られ死んでいたのです。……屍が動いていたのは、私が魂を貼り付けていたから。時すでに遅し、その男の魂は黄泉の国へと送りました。あなたの権能は肉体を癒すことはできても、魂を呼び戻すことはできないようですね！」

セイレーンは海人の怒りを露わにした様子を眺め、心底愉快だと顎が外れるほど大笑いした。

「貴様ッ！ 戻せ、今すぐこいつの魂を喚び戻せッ！」

海人はセイレーンの右手を掴み、岩の下から引きずり出そうとした。しかしそれは叶わず、掴んだセイレーンの右手は砂で作られていたかのように崩れ落ちてしまった。

「あなたがたとえ、あのアナーヒタを討滅した者であろうと、まつろわぬポセイドンには勝てない。神世の時代、彼は海の王として崇め奉られ、数多の海の怪物を支配していた。私もその一人、ポセイドンが切っ掛けで現界した。……貴方はもう、私を討滅したことで目をつけられた」

「なら問題はない。俺は元々、ポセイドンに連れ去られた妹を取り返しにいくんだ。睨まれるのは望むところだ」

「……ならば余計に諦めたほうがいい。ポセイドンは侵略し、支配することに長けた海の王。そこに女も絡むとなれば、彼の王は権能の力を限界まで引き出せる」

徐々に砂となっていくセイレーンの体を、風が天高く舞い上げていく。

「最後に神殺し、あなたの名を聞かせては頂けないかしら？」

「……海人。安東海人だ」

「海人、私の名はセイレーン。海人の不幸を幽世の記憶から願っているわ」

そう言い残すと、セイレーンは今度こそ塵となってこの世から消え去った。風によってセイレーンだったものが吹き飛ばされると、生存者は海人だけになってしまった。

ドクン、と心臓が跳ねる。海人の中に、熱い力の源が注がれる感覚。セイレーンの権能だった。

仲間の遺体を運ぼうと振り向いた海人に、突然地震が襲った。

「なんだ!？」

海人はぐらついた体勢を立て直し、辺りを確認した。この地揺れは海人が引き起こしたものではない。島全体が大きく揺れていた。

セイレーンがいなくなったことで島を維持していた力がなくなり、島が海中に沈没しようとしているのだ。

「船はッ!?」

海人は周囲を見渡し、海人たちが乗ってきた海賊船を確認した。島のまわりの岩礁にひっかかり、流されずに浮いていた。

だが、仲間達の居場所がわからない。居場所がわかったとしても、揺れの大きさからして回収している余裕はなさそうだった。

「……お前達を連れてはいけなさそうだ」

海人は近くの男の遺体をちらりと見やり、全速力で駆け出した。途中で槍を回収する。そのまま速度を落とさず一気に駆け抜けると、船の近くにあった岩をジャンプ台に、船の甲板めがけて跳びあがった。

「うおおおおおおおおおおおッ……!」

海人は甲板の上で転がるように着地し、ギリギリ間に合った。背後では船の墓場がドドドドと地鳴りを上げて沈んでいった。岩礁に乗り上げていた海賊船も振動で海に戻り、海人は助かった。

しかし、海人以外の乗組員は全員、島と運命を共にした。無数の魂が眠る墓場が沈んでいく。

「くそっ、こうなる覚悟はしていたはずだ」

海人は島が沈没する様を見届けながら呟いた。

皆、仁実之恩義を感じてついでにきた者達はかりたつた。海人はやるせない気持ちで身を震わせた。

海賊なんてものをやっていたのだ。畳の上で死眠って死ぬのではなく、海に散る覚悟は出来ていた。だが仲間の中には愛する者、家族を湊に置いてきた者もいたのだ。それでも海人に付き従ってくれたのは、仁実をそれだけ助けたかったという思いの表れに他ならない。遺体も遺品も何も回収できなかった。せめて湊の近くで休ませてやりたかった。こんな遠海では、日の本に帰ることができないではないか。

海人は震える拳をぎゅっと握りしめた。

「皆……絶対に仁実を取り返す」

沈んでいく島を見送りながら、海人は強く誓った。

ここで立ち止まっている訳にはいかない。それでは本当に仲間の死は無駄になってしまう。

海人は晴れた空を見上げた後、完全に沈んでしまった墓場に背を向けた。

「進路は……」

海人は権能を行使し、船の進路を変えた。



「やばいつすよ……。まずいつすよ、これ！」

船の墓場近海で、海人以外にも船の墓場が沈む瞬間を見届けた者がいた。いや『者』というには少し違うかもしれない。そいつは背鰭を海上に覗かせ、頭上についての噴気口で呼吸をしながら島を眺めていた。

そいつはイルカだった。しかもただのイルカではなく、野生のイルカよりも知能の発達した、イルカの神獣だった。目の先で起こっている一大事に混乱を露にするイルカは、まるで人間のような感情が感じられた。

「と、とにかく、ポセイドン様にこのことを報せないと……」

「だーれに、何を報せるって?」

空は雲ひとつない快晴となったはずなのに、突然イルカに影がかかる。そーっと上を見上げたイルカが見たのは、海賊船から身を乗り出してこちらを覗く海人の姿だった。

「か、神殺し!? なんで自分の言葉がわかるっすか!?!」

「今ポセイドンと言ったな? 話を聞かせてもらおうぞ。……もちろん、逃げれるとは思ってないよな?」

「は、ははは……」

ニタリと凶悪な笑みを浮かべる海人に、イルカの神獣は渴いた笑い声を漏らした。

第四章 侵略の海王 三十一話、デルピノス

セイレーンとの戦いから数日後、海人は北アメリカ大陸の南東部、多国籍の船が集まる港にいた。船を停泊させ、海人が何をしていったかというところ、港町の至る所で頭を下げている。

「頼むッー」

男の前で海人は頼み込んだ。しかし海人の誠意もむなしく、男はも申し訳なさそうな表情を見せながら去って行ってしまった。海人はため息をつくとも来た道をとぼとぼと帰っていく。

海人は自分の船に乗ってくれる新しい乗組員を探していた。船はひとりでは動かせない。いや海人の権能さえあれば動かせるのだが、海人だけでは手が回らないのだ。

なのでこうして人が多いこの港町で募集したのだが、想像していたことではあったが、難航していた。

問題は、日本の国が全く知られていなかったこと。そんな何処にあるかもわからない船に乗ってくれることなど、あるはずがなかった。

そして最大の問題は海賊船であり、これから何が起きるかもわからない危険な島へ向かうということだった。乗組員も命をかけている。生きて帰れるかわからない船に乗ろうとする人などいないだろう。

海人は誠心誠意頼み込んだがしかし全て断られ、水平線の太陽は沈み日が暮れようとしていた。

今日のところは諦めて、海人は船に戻った。



「ただいま……」

海人は港に停めた船の甲板に降りた。前なら大勢の乗組員達の返答が聞こえてきたのだが、今はしーんと静まりかえっていた。

妙な物悲しさに苛まれる海人。

そんな時だった。海人以外誰もいないはずの船内で、ガタンと大きな音がした。音は甲板の下、船の中から聞こえてきた。

「まだ元気なのか……。やっぱり、ただの魚じゃねえな」

海人は船内へと入っていくと、大きな物音のする部屋の戸を開けた。

そこには口先と全身を縄で簀巻きにされたイルカの神獣が転がっていた。

「おいイルカ、喋る気になったか？ お前は一体彼処で何をしていた？

奴に、ポセイドンに一体何を命令された!？」

海人がそう問いただと、イルカはブンブンと頭を振った。口先は縄で縛られており、開くことができない。

「おっと。すまねえ、忘れてた」

口を塞がれては人間だって喋ることができない。海人はイルカの口先を縛っていた縄を外した。するとイルカの神獣は早口でまくし立てた。

「知らないっす！ 本当にあんたのことは、誓って何も知らされていないっす！ ただ自分は、セイレーン様の島の様子を確かめてくるように命じられただけで……」

「命じられているじゃねえか！ 吐け！ ポセイドンは一体何考えてやがる!？」 どんな意図で、何しようとして仁実を攫った!？」

海人はイルカに詰め寄って、掴んで吊り上げ……。ようとしたが、服も来ておらずつるりと滑らかな体表をしたイルカの体を掴めず、突き出した右手は手持ち無沙汰となり空気を握った。

「ほ、本当に知らないっす！ それにポセイドン様に造られた自分達は、例え殺されそうになっても主人に逆らうようなことはできないっす。そう造られているっす！」

「ふむ、そうか……。だとしてもだ、俺のために出来ることが残っているだろ？ ポセイドンの根城まで道案内をしてもらおうか」

「アトランティスのことっすか？ 主人に危害を加えようとしてしている者を、先導するなんて出来るはずないじゃないっすか！ 自分そ

「う言いましたよね！」

「いいや、出来るはずだ」

床に転がるイルカの神獣の前で、海人はしやがみこんだ。海人は幼子に絵本を語り聞かせるような口調で、イルカの神獣を諭した。

「いいか、お前はただポセイドンの元に戻るだけだ。ポセイドンに逆らおうって訳じゃない、なんせ奴に命令されたからだ。ポセイドンに島は沈んだと報告すればいいだけで、俺が後ろをついていくことには全く問題ない。そうだろ？ お前は何も考えず、自分の巣に帰ればいいんだ」

「わ、わかつたつす……」

につこりと笑う海人に寒気を感じ、イルカの神獣はこくこくと頷いた。

海人は乗組員の勧誘をしている最中、ある噂を耳にしていた。それはこの大陸と東にある西洋諸国のある大陸、その間にあると言われる『幻の大陸』の話だ。

曰く、その大陸の周辺の海域には流れの強い海流が、渦を巻くように流れているのだという。そのためその大陸に行こうとする船はその大陸を見ることがかなわず、海流に弾き出されてしまうらしい。

西洋諸国からこの大陸に訪れようとする船も迷惑を被っている。海流のせいでその海域を避けねばならず、大きな遠回りをさせられるためだ。

海人はその大陸こそ、ポセイドンがいるのではと睨んでいた。

教えてもらった海域の方向と同じ方向を羅針盤はさしているし、何より教えられた方向から良くない予感をビンビンに感じ取っていた。その大陸に行くには海流をどうにかしなければたどり着けない。だがそれもこの鮪の神獣がいれば、抜け道を案内させれば良い。

「そうと決まれば、早く乗組員を見つけてきなきやな」

海人はいつそう気合を入れた。仁実のいる島まであとちよつと、海をひとつ越えればいい。この大陸に来るまでの大海より小さい海だ。

しかしそんな海人のやる気を抜かせるかのように、イルカの神獣は

言った。

「ポセイドン様と戦うのでしたら、人間は連れて行かなほうがいいですよ」

「ん？ 何故だ？」

「被害者を増やすだけだと思うので……。まつろわぬ神と神殺しの闘争に巻き込まれれば、命の保証はできないですよ」

「だが、避難させていけば済むのではないか？」

「駄目ですよ！」

イルカの神獣は強く反論した。

「どんなまつろわぬ神を下したかは知らないですが、ポセイドン様は海と大地の神。海の支配者でありながら、槍の一振りで大地的を作り替えるつす。セイレーン様の島も、これから行く大陸も、全部ポセイドン様が造りあげたものつすよ！」

「なんだと？」

船の墓場が沈んだのはセイレーンがそうしたのであって、何もしななければつすとそこにあり続けたはずなのだ。

海人は驚いた。それだけの規模の権能を行使するとすると、島程度の大きさの戦場では足りないかもしれない。

「大陸には原住民も住んでいるつす。だけどその原住民さえ安全という保証はないつす。死に行くのと同じつす！」

「……そうか。わかった、乗組員を集めるのは諦めよう」

海人はあつさり^{まつろ}と忠告を受け入れた。イルカの神獣がきよとんとする素直さだった。

海人も頭のどこかで理解していたのだ。自分の船に乗ってくれる者など見つからないことは。

「じゃあ俺とお前の二人で行くか。……しかしその陸にはポセイドンだっているんだろ？ そこに住む民はまつろわぬ神の圧政に苦しんでいるのではないか？」

「いえ、神獣の自分に言えることではないつすが、住民感情は良いようつすよ。ポセイドン様は海の王、王と呼ばれるだけあつて人間相手でも政の腕はいいつす。ある一点を除けばですつすが」

「そうか……。だが分かんねえな。その陸はポセイドンが造ったんだろ？ 住んでいる民は、どうしてそこに住みたいと思っただんだ？」

「住んでいる人達は、大陸に住みたいと思って越してきたわけじゃないっす」

イルカの神獣は、気持ち沈んだ口調でぽつりと溢した。

「住んでいる人達は、ポセイドン様に陸ごと切り取られて連れてこられたっす。そこに自由意思はないっす」



「なんですか、この街は……」

仁実、窓から展望できる街の異様な景色に、愕然としていた。

場所はポセイドンの寢床のある邸宅。そここの起きたら寝かせられていた巨大なベッドがある部屋から、街の全体が一望できた。

「これがこの大陸、アトランティスの正体です。この世界のあらゆる場所からポセイドンに運ばれ、つなぎ合わせて造られています」

街はまさにつきはぎで、世界中の文化をひとつの鍋に入れて混ぜ返したかのように混沌としていた。

赤レンガ造りの建物があれば、すぐ隣には石で造られた白い一軒家がある。木造の建物もあれば移動式のテントの家もある。そこに協調性はなく、だが文化の境は一目で判断できた。整地さえされておらず段差が階段のようになっていたからだ。

どうしたらこのような街が出来るのか教えられなければ気づくことはできないだろう。だが言われてみれば納得する。ポセイドンが切り取った大地を無作為に配置したためなのだと。

そのことを仁実に教えてくれたのは、彼女だった。黒髪に黒目の、同じ故郷の出身者。外見からして三十代の日本人の彼女は、仁実が起きた時から傍にいた。ポセイドンに命じられた事であり、同郷であるから言葉も通じると考えたからだ。

「この陸は二十年以上前からあるそうですが、私は十年前に連れてこられました。私はスペインにおり、ある村で一泊した時に連れてこら

れました。他にも私と同じ境遇の人々がふもとにいます。……日ノ本は今、どうなっていますか？」

「足利將軍家は力を失い、下剋上の風潮高まる乱世の時代です」

「そうですね、そんな物騒な時代に。ですが帰ってみたい、もう一度故郷の土を踏みたかったですね……」

「できますよ！ どうして逃げないんですか？ 外に逃げれば日の本にだって帰れます。周りは海、船を造れば脱出できるじゃないですか！」

「無理なんです」

壮年の女性は悔しさにじむ表情で言った。

「この大陸の周りに流れる海流が、船出を邪魔します。一度流されてしまえば、またこの大陸に戻されてしまうのです」



「大陸の周りを流れる海流は外からの船を来させないための壁でもあり、大陸にいる人間を外に出さないための檻の役割も果たしているっす」

「そうだったのか。……だが、お前ならいけるんだろ？」

「はいっす。自分なら抜け道を知ってるっすよ。然る順序で通れば、船で入ることだって出来るっす！」

イルカに表情があれば、自信満々の表情を浮かべていただろう。任せてくださいと言わんばかりのイルカの神獣を海に放した。

海人は首輪は必要ないと判断した。ポセイドンには逆らえないと言いながら、やけに協力的だったのだ。

「……なあ、どうしてお前はそこまで俺に協力してくれる？」

「自分は見たとおり、イルカから造られた神獣っす。元はイルカで、そこそこイルカの中では頭もいいほうだったっす。だからポセイドン様に神獣にされたら、頭もより一層良くなったっす。だからっすかね、他の奴らとは違って、人の痛みもわかっちゃうんっすよ……」

「……ふーん」

甲板から肘をついて聞いていた海人は、どうでもよさそうに返事をした。しかし思うところがあつたのか、海人はイルカの神獣に向かって問いかけた。

「お前、名はあるのか？」

「……？ ええ、ありますつすよ。デルピノスっていう、これもポセイドン様からのもらいものですよつすけどね」

「そうか、デルピノス。俺は海人だ。これから俺のことは海人様と呼べ」

「え!?! いきなり何つすか!?!」

「ほら、無駄口叩いてないで先導しろ、この魚風情が」

「痛っ、痛ッ！ 何つすかこれ、見えないものがべしべしと自分の顔を叩くつす！」

そうして一人と一匹は、大きな港を出立した。目指すは幻の大陸、アトランティス。そこではギリシャ神話における全能神ゼウスの兄弟、海と陸の支配社ポセイドンが待ち構えている。

三十二話、アトランティス

数日後、海人とイルカの神獣、デルピノスはアトランティスの地に足をつけた。

さんと太陽が照りつける中、海人は突き出した崖のような場所に並び建つ家々に驚いた。デルピノスは海人が乗って来た小舟の横で水面から顔を出した。

海人はまた、港がなかったので小舟を使って上陸していた。アトランティスは閉ざされた大陸、入ることも出ることも想定されていなかったため港があるはずなかった。

「ここがアトランティスか……」

ここまでの道中に、海人はデルピノスから此処の住民達の境遇を聞かされていた。不当に連れて来させられ、まつろわぬ神に抗う術を持たない人々はポセイドンに従うしかないということも。

海人の同情を誘うような内容だったが、海人のやることは変わらない。ポセイドンをぶん殴り、この世から叩き出す。

むしろ懸念事項が消えた。ポセイドンが消えて困る者がいなければ、心置き無く闘うことができる。

しかし住居の集まった街で闘うのは、現在住んでいる人々のことを思うとさすがに気が引けた。

「デルピノス、ここで闘うのはまずい。どこか広い場所はないか？」

「それは——」

「その必要はない」

頭上から声が響いた。声が聞こえた上を見上げると、そこには海人が待ち望んでいた宿敵、ポセイドンが空に浮かんで待ち構えていた。ポセイドンはこちらを見下す視線でゆっくりと降りてくると、海人の前に降り立った。

「久しいな、海人よ。あれから月と太陽が幾度となく廻った。随分と遅かったではないか」

「こちとら空飛べる貴様と違って、船で来たもんでね。……それに足止めも食ったしな。セイレーンは手前の仲間だな？」

ポセイドンはちらりとデルピノスを見た。視線を向けられたデルピノスはビクツと怯えて体をのけぞらせた。

「ふむ、その様子だとセイレーンはお前に討たれたようだな。取るに足らない相手だったろう。セイレーンの魔性の歌は術のかからない神殺しには全く効かない。しかし、だとするとその怒りように説明がつかん」

海人の目はポセイドンを見据えて離さない。瞳の奥にはポセイドンを殺すという怒りと殺意が込められていた。

おお怖い怖いと茶化すポセイドンは指摘した。

「当ててやろう。セイレーンに仲間を殺されたな。あ奴の歌は人の子等には空気に含まれた毒だ！ 策を講じねば耳に入れて操られる。沖に泊まる船に乗ってきたのだろう？」

「貴様あッ！」

怒りが爆発し、海人は背負っていた槍に手をかけた。しかしポセイドンは手のひらを突き出し制止をかけた。

「おっと、このような狭い場所では闘わず、別の場所に移動しよう。俺とお前が闘うに最高の舞台を用意してある。ここではお互い動きにくいだろう？」

「……」

周囲を見渡した海人は、掴んでいた槍からゆっくりと手を離れた。

「案内しろ」

「話が早くて助かるよ。それではついてきたまえ」

くるりと海人に背を向け、ポセイドンは海人を先導し始めた。

海人の背後からデルピノスが小さな声で話しかける。

「賢明な判断っすね」

「頭に血がのぼって周りが見えていなかった……。こんな人の集まる街中で争う訳にはいかないからな」

海人の先にいるポセイドンは、かろうじて道と言えるような住居と住居の間を進んでいた。その両脇には頭を地につけて、ポセイドンに最大限の敬意を払っている住民達がいた。

土下座でポセイドンに屈する彼らは、わずかに恐怖で震えていた。

そんな自国民がつくった道を、ポセイドンは当然のことだと言わんばかりの表情で歩いていった。

まつろわぬ神とはそういう存在だった。神殺しを視界に入れることはあっても、只の人間ひとりに興味を示すことはない。だが行く手を邪魔されれば、容赦なく踏みつけられるだろう。特定の人間を攫つて妻にしようとするポセイドンは、まつろわぬ神の中でも異質だった。

「デルピノス、お前の役目もここで終わりだ。縛り付けて悪かったな」
海生動物のデルピノスは陸には上がれない。生きることではできるが、海人が抱きかかえて運ぶわけにはいかなかった。ここでお別れだ。

「いえ……。ご武運を祈るっす」

それだけ言うと、デルピノスは海に頭をひっこめて姿を消した。あっさりとした別れだったが、アトランティスまで案内してくれたことに感謝の念が絶えない。

海人は、ポセイドンの後を追った。



「海人よ、この街はどうだ？ すばらしいとは思わないか？」

しばらく歩いた後、振り返ったポセイドンは海人に尋ねた。一人と一神は街を抜け、遮蔽物もない広大な草原に出ようとしていた。

街を一通り回った海人の感想は決まっていた。

「全く思わないな。何も整備されていない、バラバラだ」

文化も景観も、土地の高低差さえ出鱈目。こんな場所は街と呼べるかも怪しかった。

するとポセイドンは島の中心の方を指差した。

「あの山を見る。あの山の頂上に我が神殿がある。仁実もそこにいるぞ」

「……………」

ポセイドンは仁実がいますと教えられ、海人は目の色を変えた。大陸

の中心にある大きな山。標高二千はあろうかという山の頂近くに、ここから確認できるほど大きな屋根があった。

「だが今から我らが行くのは神殿ではなく、決闘場。あの神殿から一望できるよう造った。あそこから仁実含めた我が妻達も、貴様との一騎打ちを望むことができる。お前の無様な負け姿を晒してやろう」

ようやくポセイドンの目的がわかってきた。ポセイドンに海人が負ける姿をその目で見せつけることで、仁実の抵抗する気力を奪おうというのだろう。ポセイドンの発言の中に、気になる言葉がひとつ。

「そうだ。十人以上になるか。ありとあらゆる国から集めた、美人揃いだ」

「集めた……！」

まるで女性を連れ去ったことを『物を蒐集した』かのように誇るポセイドンを見て、海人は冷めていた怒りの熱がまた湧き上がってくるのを感じた。

「集めたとは、てめえ、女をなんだと思つてやがる！」

「手段だ。己の力を引き上げるためのな」

「何？」

「女をかけて男と男が戦う、他国を侵略する……。俺以外のものを『侵す』ことを原動力に、俺の力は強くなる。女は俺にとつて手段でしかない。……だが幸せだろう。王になるには力こそが全て。力さえあれば何者にも勝てる。仁実の治める国も、俺というより強大な力の庇護を得れば、他国の干渉を撥ね退けられる」

「お前の力の源はわかった。だが王となるには力が全てつてところには賛同できねえな」

「何を言うか。貴様のその覇者の力も、より強大な力を以て勝ち取つたのではないか」

「違う！ 確かに俺は力でまつろわぬ神を打ち倒し、羅刹王になった。だが民を治める王になるには、腕っ節の力だけじゃ足りねえんだ」

海人は力強く否定した。

「それに湊を統治するのは俺にはできない、仁実にしかできないことだ。あいつは常に民の気を配り、統治者の素質もあり良き国長になる

うと努力もしている。安東の跡取りであるあいつが、湊には必要なんだ」

「ふむ、そうか……」

必死に言葉で訴える海人に、ポセイドンは頷く。まつろわぬ神にも理解を得られたのかと一瞬期待したが、次の一言で裏切られた。

「ならば俺がその土地を支配してしまえばいい。その国だけを大地より切り取り、ここに繋げよう。それで万事解決ではないか」

ポセイドンはそう言い放った。

「そして我が下で仁実がその湊とやらを統治すればよい」

「そんな横暴、許されるはずがない！ 湊の民が従うものか！」

「従うさ。海人、お前の屍を仁実の前に晒せば抗う気力など失い、おのずと従うようになる」

「ならその未来は訪れないな。俺は、お前に勝つ。……さっさと案内しろ」

「ふん、平行線か」

ポセイドンは前を向き治すと、歩みを再開した。



「さあ、着いたぞ。ここが決闘場だ！」

ポセイドンが大きく腕を広げる。大きな岩さええない真っ平らな大平原が広がっていた。街の台地を見れば想像つかないほど整地された場所だ。ポセイドンがわざわざ均したのかもしれない。

「ポセイドン、始める前に聞きたい」

「ふむ、何だ？ 言ってみろ」

「どうしてお前達は、湊に侵攻してきた？ 一体何を求めて日ノ本に来たんだ？」

人間が別の国に侵攻するのには理由がある。豊かな土地を求めて、領土を守るために侵攻する場合もある。

水天——アナーヒタは、一つの大陸と二つの海を超えて日ノ本に攻め込んできた。日ノ本にそうしてまで欲する何かがあるということ

だ。

「大地の女神達は『最後の王』とやらを探していた。英雄の中の英雄、この世の終わりに顕れるという最強の鋼だと。だが女神達が何故『最後の王』を探してるのかは知らない。興味もなかったからな」

「ならなんで、お前はアナーヒタに協力した。最後の王とやらを探していなかったのだろう?」

「俺が『最後の王』に興味があったのは、そ奴が強いということ、ただそれだけだ」

ポセイドンが大地に手のひらをかざす。すると周囲の大地から水が噴きあがり、ポセイドンの前で集まりだした。

水はやがて三又槍に形をつくると、ポセイドンはそれを掴んで、ぶんぶんと手ごたえを確かめる振りまわした。

あれの一撃を受けた海人は知っている。あの水の槍は見た目以上に重い。本来の刺し貫く槍の役割よりも、叩きつける鈍器の役割に向いているほど重量が重い。それをポセイドンは小枝のように振りまわしている。

「俺は強敵を求めた。まつろわぬ神でも神殺しでもいい、俺の攻撃を受けきれぬ武術を持つ強敵を……。だから俺はアナーヒタに協力した。『最後の王』を探す過程で俺の求める敵が現れればそれで良い。まつろわぬ神が集まれば、光に誘われる虫のように神殺しが寄つてくると考えていた。だがまつろわぬ神が五柱も集まっても出てこなかった時には、さすがに落胆したがな」

「五柱?」

これまで海人がアナーヒタ、セイレーンの二柱。ポセイドンを合わせても三柱、二柱足りない。

この大陸にまだまつろわぬ神がいるとしたら。想像したくない。

「安心しろ。もう二柱は此処にはいない。いたとしても、邪魔はさせんがな。……神殺しと戦うのは二度目、俺が顕現して以来だ」

「その神殺しは……」

「当然、このトリアイナで貫き、海に還してくれたわ! 俺と戦うため喚び出したとぬかしていたが、俺の相手には実力不足だったがな」

ポセイドンは、槍の先を海人に向けた。

「アナーヒタとセイレーンを下したその力、失望させてくれるなよ！」
「それはごっちの台詞だ。そこまで大口叩いておいて、あっさりやられたりするなよ？」

海人は背中 of 槍を手にとった。しかし無暗に突撃したりせず、海人は目を凝らしてポセイドンの動向を伺った。

三十三話、まつろわぬポセイドン

「来い、ヒツポカムポスよー」

開戦の鐘が鳴った。ポセイドンは海人に突撃し、すぐさま刃を交える……というわけではなかった。迅る気持ちを抑えて、ポセイドンは高らかに声を張り上げて何かを呼んだ。

するとポセイドンの遙か後方から、高くいななきながら接近してくるものがあつた。

近づいてくるのは馬だった。だが形は馬でも、海人の知っている馬とは体色が大きく違っていた。その馬は全身の体毛が空に近い青、たてがみは白く風にたなびいている。

特に驚くべきは速度。初めは点だった姿が、十秒も経たない内に体格がはつきり見えるほど接近してきていた。そして見えたと思った時には速度を落とし、ポセイドンの横に並び立った。

「こ奴こそヒツポカムポス、我が愛馬よ！」

「てめえ、一騎打ちじゃなかったのかよ!？」

「互いに全力を出し切り、己の力総てを以って戦う。まさか我が権能で呼びだした神獣を従えること、卑怯とは言うまいな」

ポセイドンは手綱を握り、ヒツポカムポスの鞍にまたがった。ポセイドンは三叉槍を構え手綱を引き絞り、ヒツポカムポスは海人に鋭い視線を向けた。

敵として完全に認識された。ヒツポカムポスは前足で地面をかき、闘争心をみなぎらせた。

「行くぞ、我が一駆けは如何なる神とて止められぬと知れ！」

ポセイドンが手綱を緩めた。途端にヒツポカンポスは駆けだし、驚異的なスピードで海人に突撃した。

出方を伺っていた海人は一直線に駆けてくる馬を見て、右に回避する体制に入る。

「ふんッー」

ポセイドンもただ馬上で眺めているだけではない。海人とすれ違 いざまに槍を突き刺そうとする。

「ッ！」

馬の車線上から逸れた海人は、咄嗟に手に持つ槍で受け止めた。だが馬のスピードが乗った槍の一撃は強大だった。

海人は瞬時に判断すると、左に勢いを受け流した。

ポセイドンの槍ははじかれ、ヒッポカムポスも轢くことはできなかった。ポセイドンはそのまま駆け抜けると、海人に向き直った。

「ほう、避けるとはな。たしかに前とは違う、セイレーンは貴様を成長させるほどの強敵だったか」

「見えない速さではないからな。それにたった一回打ち合っただけで理解されるほど、俺は浅い人間じゃねえぞ！」

神速、というものがある。常人の目では捉えられない速さのことで、時空を歪めて移動するという、普通では手が届かないような恐ろしい能力だ。

だが幸いなことにあのヒッポカムポスの速さは神速ではなく、物理的に速いというだけ。しかも当たり前だがスピードが速ければ小回りもきかないらしい。

ヒッポカムポスに関してはその爆発的な加速に注意していれば、神速を見切る鍛練をしてきた海人にとって脅威ではない。

「そこまで言うのなら、遠慮なく行かせてもらおう！」

遠慮など覚えたことなど無いだろうに。また一直線に突撃してくるポセイドンを見極め、海人は槍を構えた。

冷静そうに見える海人だったが、内心では心臓に冷や汗をかいていた。

海人には、騎兵と殺り合った経験はなかった。陸での戦は何度か参加したが、本業は海賊だ。舟の上での命の取り合いこそ得意でも、舟の上で馬に乗った将がいるはずがない。

すれ違いざまに、馬を斬ろう。突き貫くための槍だが、あれだけの速度が出ていけば、馬の通る空間に置くだけで肉を切り裂ける。

余裕をもって直線上から離れ、通り過ぎるヒッポカムポスを斬りつけようとする。だがそれをポセイドンが良しとしなかった。

馬に氣をとられていた海人が上を見上げた時、ポセイドンも同じよ

うに三叉槍を海人に当たるように差しだしていたのだ。

「ぐっ」

海人はとっさに槍を持っていない左腕でかばう。衝撃を流しきれずに海人ははじき飛ばされ、地面を転がった。

両手について起き上がる。じんじんとしびれるが、左腕は折れていなかった。

「ふははははっ！ それではいつまで経っても俺に致命傷を与えることなどできぬぞ！」

離れた地点でヒツポカムポスを転回させ、ポセイドンは笑った。

じり貧なことは海人自身、一番身に試みてわかっていた。だから油断し隙を見せたときに、大きな一撃を与えるのだ。

空にはゆっくりと雷雲がかかりはじめていた。海人がポセイドンに気づかれないよう、慎重に念じているのだ。

「権能を使ったらどうだ、海人！俺は権能を行使した貴様の全力と……はて？」

ぽつぽつと雨が降り始め、雨粒がポセイドンの顔にかかった。ポセイドンが空を見上げると、そこには太陽を隠さず不自然なかかり方をした雷雲が。

気付かれた！海人は絞っていた栓を解放し、雷雲を一気に展開した。快晴だった空が、海人に呼び出された雷雲に埋め尽くされていく。

「ならお望み通り見せてやるぜ！落ちろ！」

雷雲から稲妻がポセイドンめがけて落ちる。辺りは轟音と眩い閃光に包まれた。



「きやつー！」

山の頂にある宮廷の窓から海人とポセイドンの一騎討ちを見守っていた仁実は、落雷の閃光に驚き、持っていた双眼鏡を落とした。

驚きのあまり、尻もちをついたまま動けなかった。

「仁実様、大丈夫ですか？」

「……ッ！ ええ、ありがとう」

しばらく放心していたが、仁実と同郷の女性に声をかけられ我に返った。立ち上がり女性が拾った双眼鏡を受け取ると、窓から海人が戦っている戦場を双眼鏡で覗いた。

戦場には、雨が降り始めていた。

海人の権能を使った『まつろわぬ神との』戦いを見るのは、仁実はこれが初めてだった。権能だつて一度だけ、海人が風を操っていた時しかない。

海人がこの陸に来たと隣の同郷の女性から聞かされたとき、いの一
番に会いたかった。しかしポセイドンの言葉を預かって来た女性が言うには、「ここを出て我らの近くにいれば、命はない」という。

一般人とは違い、自分は魔術を使える。少しは海人の力になれると思っていたが、気付けば宮廷に魔術をかけられて出られなくなってしまったのだ。

だがこの様子を見るに、海人の元に駆けつけなくてよかったと仁実は思った。まつろわぬ神にちよつとだけでも食いつけると思っていたが、あれでは自分の身すら守れるかも怪しい。自分はまつろわぬ神の恐ろしさの一端しか見えていなかったのだ。

今回はポセイドンに助けられる形となった。仁実にとって義兄の力になれないのは心苦しかったが、戦場において足手まといになるのもっと自分が許せなかった。

その点で今の私は……。仁実は下唇を噛んだ。湊で女神に連れ去られたと思つたら、連れて閉じ込められた牢屋でさらに別のまつろわぬ神に誘拐される。海人に迷惑をかける自分が情けなかった。

「……あなたはポセイドンの持つている力をご存知ですか？ 例えばあの馬がどれ程の力を持つているのか、とか？」

「いいえ、仁実様。私はあの白いたてがみの俊馬も見たことはありません。ポセイドンは自らに従う神獣達を、海に放しているのです。私たち人民に、見る機会などありません」

女性は体を震わせて、恐ろしいと言いたげな表情で教えてくれた。

そんな時、戦場に変化があった。雷が落ちてできた土煙が晴れ、ポセイドンの姿が出てきたのだ。

「ただ言えるとするなら、ポセイドンは度々『海と陸の王』を名乗っていました。それにまつわる権能を持っていると考えるのが自然です」



「アナーヒタでもセイレーンでもない力だ。蛇、天候を操る権能かなかなか楽しませてくれる」

海人の目の前で立ち上っていた土煙が晴れる。土煙が晴れた後に経っていたポセイドンとヒツポカムポスは、全く傷を負っていないかった。

「雷が避けられた…!?!」

「かわしてはいない。ヒツポカムポスもあの一瞬で雷を振り切ることはできぬからな。俺も権能を使わせてもらったぞ」

そう言つてポセイドンは自分の頭上を右手で指差した。よく見ればポセイドンは三叉槍をもつてはいなかった。

どこに行つたのかという疑問の答えは、指で示された頭上にあった。ポセイドンの頭上には水の塊が浮かんでいたのだ。

水の塊はシャボン玉の様に宙に浮かび、時折バチバチと放電していた。

「そうか、水の槍に電気を通したのか!」

ポセイドンは雷を避けてはいなかった。電気の通りの良い水の三叉槍を盾にして、電気エネルギーを水の塊となった三叉槍に封じ込めたのだ。

「このまま武のみで闘っていたかったが、貴様がそう出るのなら我も使うまでよ……。これこそがトリアイナの水を支配する力! 形を持たぬ水はトリアイナを中心に我に従うのだ!」

ポセイドンから水の塊になった三叉槍——トリアイナへ、神力が供給される。すると水の塊となったトリアイナから呪力が周囲にほとばしった。

その瞬間、海人はまるで時間が停止したように錯覚した。

それは空の雷雲から降り注いでいた雨粒が、宙で静止したからだった。海人とポセイドン、ヒッポカムポス以外の動くもののない草原で、空中に水滴が浮かぶ幻想的な光景が広がっていた。

強風が吹きすさび、停止していた時間は動き出した。

「そして支配する水は大地を断ち、万物を押し流す銚の一部となる。雨水よ、我が元に集まれ！」

静止していた雨粒はポセイドンの発した言霊で、トリアイナに渦を巻くように取り込まれていく。絶え間なく降り注ぐ雨を取り込み、トリアイナはどんどん膨張していった。

「……まずいな……」

次第に大きくなっていく水の塊に、海人は危機感を覚える。

アナーヒタという水を主体に操るまつろわぬ神と闘って、水を操れることがどれほど恐ろしいか理解している。しかし今更スイッチで証明を消すように雷雲を消し去ることはできない

「ふははは、そちらから俺に武器を運んでくるとはな！ 後悔しても遅い。トリアイナの銚のひとつ、その身で味わうがよい！」

ポセイドンが腕を振ると、トリアイナから水が放射された。

海人から見て点となってピンポイントで放たれた水鉄砲を、咄嗟に海人は右に避ける。だがポセイドンが左に手を振れば、右に避けた海人を追うように水鉄砲は左へなぎ払ったのだ。

「ちっ、面倒な！」

海人はそれを姿勢を低くして避ける。頭の上を通り過ぎた水鉄砲は、次第に勢いを弱めて消えていく。しかし水鉄砲の切れ味は鋭く、背の低い草が刃物で切ったかのように真っ二つになっていた。威力も強力で、水鉄砲が通った地面がえぐれていた。

立ち上がった海人に向かって、ポセイドンは馬上から見下して笑みを浮かべた。

「避けたか……。だがまだあるぞ。武器の源は天より無限に降って湧く。貴様が呼び寄せた雷雲からな。それにトリアイナの銚はひとつではない！」

ポセイドンが頭上のトリアイナに手をかざすと、今度はトリアイナから三本の水の筋が放出されたのだ。

三本の水鉄砲はそれぞれ独自の動きをし、規則性は全く読めなかった。これでは目が二つあっても足りない。

「ふはははっ、どこを見ているー！」

「なっ……ぐああっ！」

そして水鉄砲を放っているトリアイナに気をとられている隙に、海人の目の前にはヒツポカムポスが迫っていた。

よけきれないと察した海人は両腕でかばい、ヒツポカムポスに轢かれて跳ね飛ばされた。

数メートル跳ね飛ばされて全身を強く打った海人は、即座に起き上がる事ができない。トリアイナを手放したポセイドンは手綱を引き絞り、トリアイナはポセイドンの頭上につき従っていた。

「俺を忘れてもらっては困る。貴様と闘っているのはトリアイナではない、この俺なのだからな！」

三本の水鉄砲を発射するトリアイナ、それと同時にポセイドンの乗るヒツポカムポスにも気を配らないといけない。海人は乾いた笑いをあげながら、足りない頭を使って必死に打開策を考えていた。

三十四話、まつろわぬポセイドン（2）

「雷よ、打ちつけろー！」

海人は再び稲妻をポセイドンの頭に落とす。しかし空を駆ける閃光を、ポセイドンの頭上に浮かんでいるトリアイナは吸い込んでしまった。

水の塊となったトリアイナが避雷針となり、海人の攻撃が届かない。

「ほら、返してやる。貴様の雷だッ！」

ポセイドンが手首を振ると、トリアイナから水弾が発射された。水弾は着弾する前に破裂し、周囲に電撃を放った。海人が雷雲から放った稲妻を跳ね返されたのだ。

「ちいっ！」

海人は両腕と槍でかばうも、海人の目の前で炸裂した電撃は服を焦がすだけに済んだ。海人は消し炭にする気で放っていたのにだ。全ての電気を吸収したわけではないらしい。

海人は防戦一方だった。そもそも馬と人間というだけで不利で、一撃離脱を切り返すポセイドンを真っ向から相手にしては、徐々に削られて弱ったところでトドメをさされてしまう。

「今度こそは避けられんぞ、覚悟しろー！」

再びポセイドンがヒツポカムポスに乗り、一直線に駆けてきた。

右に逸れて避けようとした海人だったが、トリアイナがそれをさせなかった。海人の右と左に水鉄砲を鞭のように振りおろしたのだ。

海人に当たるような攻撃ではなく、海人の逃げ場を奪う攻撃だった。水の鞭に挟まれた海人は、ポセイドンの突撃を避けるほどの隙間がなかった。

水鉄砲で作られたレールを駆け抜けるポセイドンが、ニヤリと笑みを浮かべた気がした。

不味い。海人はかわせると考え、防御する姿勢に入れていなかった。大打撃はまぬがれない。

海人は迷わず、自分が使える別の権能に交代した。第二の権能、ア

ナーヒタから篡奪した全身を流体にする権能だ。

流体となった海人の身体の真ん中を、ヒツポカムポスは駆け抜けていった。

海人の身体は水滴になってバラバラに飛び散ってしまう。しかし散った水滴が集まり、全身が再構成された。度重なる攻撃を受けてガタがきていた腕も、戦闘前の元通りの腕になっていた。

「感じるぞ、それがアナーヒタの権能だな！ 己を流体と化し、激流を受け流す。まさにあ奴から篡奪した権能であるな！ ……だが、それでは我が攻撃すべてを制することはできぬ！」

ポセイドンは頭上のトリアイナに手をかかげた。すると海人は自分の流体の体に違和感を感じた。

「我がトリアイナは液体を、水の力を操る。海で自分の行き先さえ決めぬようでは、海の王の名折れ。貴様の体も奪い取ってくれ！」
トリアイナが心臓が脈打つように跳ねると、海人の全身が引つ張られはじめた。

背中から押されるような感覚ではなく、全身が磁石となって磁力で引き寄せられているような感覚だった。

宙に浮かぬような必死に踏ん張るが、水に干渉する力はトリアイナの方に部があった。このままではいずれ引き寄せられ、トリアイナに取り込まれてしまうかもしれない。

海人はアナーヒタの権能を解除し、八郎太郎の権能に切り替えた。それがポセイドンの狙いだった。

「ふははははっ！ 隙ありいッ！」

海人がアナーヒタの権能を解除した隙を見計らって、ポセイドンが突撃してきたのだ。完全に不意をつかれ、海人はまともな受け身も取れずに轢かれる。

海人は宙を舞い、地面に叩きつけられる。ゆっくり起き上がる。なんとか二本足で立つが、膝はガクガクと笑い声をあげていた。

ここでアナーヒタの権能で全身の傷を元どおりにはできる。しかし呪力には限界がある。ここで治しても、また同じことの繰り返しだ。

◆
そこからは一方的な展開だった。ポセイドンがトリアイナに命じれば、海人の体は縛り付けられてしまう。トリアイナから伸びる三本の鞭を巧みに使って逃げ道をふさぐ。

時には天から降る雨をトリアイナに取り込まず、そのまま海人に銃弾のように降り注がせる、まさに『雨の銃弾』とも言うべき技も繰り出してきた。

そして海人が肉体に戻した時は、ヒツポカムポスで突撃だ。海人も時折雷で反撃するが、トリアイナに吸い込まれてしまう。

海人は徐々に追い詰められていった。

「諦めたらどうだ、海人！ 貴様とセイレーンの相性がよかったように、貴様と俺の相性は最悪。……だが何かがあるだろう。どんな勝機のない戦でも、細い勝ち筋を見つければ神殺しだ。セイレーンとの戦いで放った、炎の星を降らせる技を使うのはどうだ？」

それは駄目だ。海人は度重なる突撃で疲弊し、地面に這いつくばった格好で却下した。

空から炎塊を降らせるあの技は、周辺に甚大な被害をもたらす。街は確実に被害を被り、山の頂にいる仁実にも及ぶかもしれない。

「それとも大津波で己もろとも押し流すか？」

大津波で押し流す災害も、同じ理由で使わなかった。それにポセイドンにはあまり効果がなさそうだ。

どちらも最終手段にしたかった。

「どうする？ まさかここで諦めるわけではあるまいな!? 立て、そしてもつと俺を楽しませろ！」

ポセイドンに言われなくとも、海人は諦める気は微塵もなかった。代わりに海人は傷ついた体で立ち上がるのを諦め、アナーヒタの権能を使った。

水はそこら中に撒き散らされたものを使えばいいが、問題は魔力。それに海人の精神力も度重なる被弾で疲弊しきっていた。

「ふん、興ざめだ。何も学ばず同じことの繰り返し。諦めたのならその命差し出し、アナーヒタの権能も還してもらおうか！」

ポセイドンは再び海人の体を縛りつけようとした。トリアイナに魔力を流し、海人の体を操ろうと指令を送る。

だが今回ばかりは様子がおかしい。海人の体を操っているという手ごたえがない。

「なに、拮抗しているだど!? 水が俺の支配を拒む、否、貴様の干渉のほうが強いだと! 何をした海人!?!」

アナーヒタの権能よりも、トリアイナの水を操る権能の力のほうが上回っていた。だが今は同じどころか逆転しており、じわじわとトリアイナの操っていた水の制御も奪い返していた。

「特別なことはしていない」

海人はふらふらと今にも倒れそうな様子で立ち上がった。アナーヒタの権能で体の傷は癒えたというのに、必死に何かに絶えているようだった。

「俺の権能よりお前のその槍の力のほうが強いというのなら、別の力を合わせればいいんだ。二つの力を合わせれば、一つだけよりも大きな力になる。俺でもわかる簡単な式だ!」

「まさか……海人!」

「二度とやりたくはなかったがな、二つの権能を同時に使うのは」

権能二つの同時使用。海人はアテルイとの修行中に一度だけ使ったことがあった。アテルイに勝ちたい一心で並行行使したが、海人は使った後に後悔した。

頭が割れるように痛かったのだ。

「まさかそこまでするとは。今はいいだろう。だが使い続ければ命を燃やすに等しい行為だ。わかっているのか!?!」

神を神たらしめる権能、普通ならば人の身で扱うことはできない。だが神殺しになれば権能を使っても耐えられるような体になる。

しかし二つ同時に使うとなると、容量が足りなくなる。神殺しの体にも限界以上の負担をかけることになるのだ。

「わかっているさ、身に染みているからな。だがな! これくらいのも

無茶は何度もしてきた。八郎太郎の時も、アナーヒタの時も、セイレーンの時も。お前達まつろわぬ神を倒すには、これくらいの無茶が必要なんだよ！」

「命を削ることになってもか！」

「家族を守るために命を捨てる覚悟はできている！」

海人は激しい頭痛に襲われながらも、それをひた隠しにしながら天に手を伸ばした。

確かに戻ってくる感触。海人は自分の手を離れていた雷雲を再び制御下に収めたのだ。

そしてこのまま、トリアイナの制御も奪い取る。海人はじわじわとポセイドンから支配権を奪い取っていく。

「ヒツポカムポスッ！」

ポセイドンもただ指をくわえて突っ立っているわけがなかった。自分の愛馬に命じると、海人に突撃をかけようとした。ヒツポカムポスの爆発的な加速があれば、海人をかく乱することができただろう。

しかしかなわなかった。ヒツポカムポスの足元がぬかるんで、泥に足を取られてしまったのだ。

「なんだとッ！」

「何度もやられれば覚えるし、対処法だって思いつく。その足も奪わせてもらうぞ！」

海人が地面に水分を多く含ませて、踏めないような足場にしたのだ。足場を悪くして相手をその場に縛り付ける技は、海人がアナーヒタにやられたことだった。

ポセイドンは限界だとヒツポカムポスを見限り、馬から飛び降りた。瞬間、ヒツポカムポスに落雷が振りそそいだ。

ポセイドンは頭上のトリアイナを見上げると、もうサッカーボール大の大きさまでしぼんでいた。気づくと、空から雨もまた降り始めていた。トリアイナが吸い込まなくなってしまったからだ。

ヒツポカムポスだった塊からは、肉の焼ける匂いがした。雷に耐えられるようには造られていなかったらしい。

だがポセイドンは自分の愛馬が息絶えたというのに、驚くほど冷め

ていた。

「まあいい。今度は雷が落ちても物ともしないような奴をもらおうとするか」

「……戦場を共にした愛馬ではなかったのか？」

「いいや、俺が使った馬にしては持ったほうだったがな。そもそもこいつは初めから俺に従属していたのではない。他の女神が造ったものを譲り受けただけだ。俺がやるのはたったひとつだけ」

ポセイドンの頭上にいたトリアイナが三叉槍の形をとり、実体化するとポセイドンの手元に落ちてくる。ポセイドンは左手で握り締めると、海人に突きつけた。

「強大な力で侵略し、略奪する。それで全てを手に入れてきた。地位も女も、栄光も。……この人の世に、俺という栄光を普く届かせる。それが俺を動かす原動力となる！」

ポセイドンは真正面から突っ込んできた。どんな小細工も使わず、単身自ら槍だけをかつき突撃を仕掛けてきた。

トリアイナも構えず無防備なポセイドンに、海人は雷を落とした。しかし防衛する様子も見せず、雷を浴びながら海人との距離を一気に詰めてきた。

「でやああああッ！」

「ぐっ！」

振り下ろされた三叉槍を、海人は槍で受け止める。すごい衝撃が伝わり、地面についた足が沈むかという重さだった。

槍同士を交わしながら、海人は言葉を投げかけた。

「お前が持っているものは、すべて奪ったものだということか」

「ああそうだ。だからお前と俺は似ている。奪うことでしか生きられない海賊が！」

「黙れ！」

三叉槍をはじくと、海人は槍で攻撃を繰り出した。時折、雷を加えながらポセイドンを追い詰めていく。

ポセイドンはそれを三叉槍ひとつでしのいでいく。海人のほうが明らかに手が多いというのに、度々攻撃が飛んでくる。

「なんで権能を使わない、ポセイドン!？」

「期待に応えられずに残念だが、俺の権能はトリアイナひとつだった。まさかトリアイナを越す力があるとはな。……だが先ほど言ったことに嘘偽りはない。力こそがすべて！ トリアイナの力を上回ったこと、誇るがいい！」

権能ひとつだけで王と呼ばれる程の名声を得たのはさすがというべきか。三叉槍ひとつで海人の攻撃をさばききり、自身の脚力で縦横無尽に戦場を駆け巡っていた。

だが――

「だが、俺は負けん！ この身ひとつでも貴様に勝ってみせる！」

だが、海人とポセイドンは、神殺しとまつろわぬ神だった。

ポセイドンの渾身の一撃は、海人の体をすり抜けてしまう。アナ―ヒタの権能だ。

海人は体に刺さったトリアイナをそのまま抜けないように固定し、手に持った槍でポセイドンの体を貫き返した。

「悪いが、俺とお前は宿敵同士。こつちが不利な状態じゃ、公平な勝負はできねえ」

海人はポセイドンを串刺しにした槍を引き抜いた。ポセイドンが地面にトリアイナを突き刺し、大地に膝をついた。

「また会った時は、その時は何者にも邪魔されない場所で正々堂々とやり合おう」

「ふはははは……。そうだな、めぐり合わせ悪かったのだな。ならば次の機会としおう。それまでに俺との不利を詰めるほど強くなれ。再びこの世に顕れる時、この俺とは限らぬからな……」

ポセイドンは地を手をつくことなく、さらさらと塵となって天に舞い上がっていく。

後にはポセイドンが大地から切り離れたアトランティスという浮き島と、主を失い地面に突き刺さったままのトリアイナが残された。

三十五話、崩壊

「兄さんツ！」

「仁実！」

死闘の末、山頂にあるポセイドンの邸宅にたどり着いた海人は、出迎えてくれた仁実を抱きしめた。仁実が攫われてから、およそ半年の時間が経っていた。

「えっ、私が寝ている間に、もうそんなに時間が……」

「ああ、愛代も心配しているはずだ。すぐに十三湊に帰ろう」

「ですが、この大陸にいる、ポセイドンに連れてこられた人達は……このまま見捨ててはおけません」

「いいのです、仁実様」

仁実の傍に付き従っていた日本人の女性が、覚悟を決めた面持ちで言った。

「我々のことは構わずに、日ノ本に向けて出立なされてください」

「何を言ってるんですか！ あなたも日ノ本に帰りましょう。他の人達も時間はかかるでしょうが、元いた故郷に帰れるのですから」

ポセイドンの支配に縛られていた時とは違い、大陸の周囲を渦巻いていた海流も解かれていくはずだ。

ポセイドンは斃れた。海人の片手に握られた三叉槍トリアイナがそれを物語っていた。

「いいえ、帰ることはできません。実は、この大陸に来てから子を生した者もいます。私もその内の一人です」

仁実と海人は驚いた。海人は子を生したとは思えぬ外見に、仁実は世界を彼女が世界を旅していたと言っていたからだ。

「生まれた私の息子からしてみれば、ここが故郷なのです。この大陸しか知らないのです。それに他の人達も、なんだかんだでこの大陸での生活に慣れてきました。……一番の理由として、故郷に帰ったとしても、家がありません。ポセイドンに家ごと運ばれましたからね。今にして思えば、ポセイドンはそれも見越して家ごと運んできたのかもしれないですね」

女性はにっこりと、海人達を落ち着かせるように笑った。

「だから気にしないでください。私は——」

その時、邸宅を大きな地震が襲った。揺れは、足をふんばってなんとか安定する大きさだった。飾られていた花瓶や立て掛けられていた絵画が落ちる。

仁実はしやがみながら頭を両手で守った。女性も同じく、地揺れには慣れていた。

しかし地震はいつまでもおさまらなかった。

「まずいな……。ここを出るぞ、崩れるかもしれない」

「は、はい……」

海人達三人はポセイドンの邸宅を出た。だが地震は一向に収まる気配を見せなかった。揺れは弱まるどころか、むしろ強くなっている気がした。

「こりゃ自然に起きたもんじゃねえな、何が起きてやがる……」

そんな時だ。海人が持っていたポセイドンの遺物、トリアイナが震えた。

はつとトリアイナを確認すると、海人の頭に直接語りかけてくる者がいた。

『はじめまして、海人様』

「ッ！ 誰だ、どこから話してやがる!？」

「えっ、何!? 兄様、一体?」

思わず返答を大声で出した海人に、仁実がびっくりして飛び上がる。

「いや、誰かがはじめましてとか言ってきたから……」

すると、また海人の頭の中に言葉が響く。

『はじめまして、海人様。私の名前はトリアイナ』

「トリアイナ、ってまさかこのポセイドンの槍が喋ってるのか?」

『その通りです。正確には、あなた様の槍です。まつろわぬポセイドンから篡奪され、私の所有権は海人様にあります』

そして謎の声の正体であるトリアイナは説明を始めた。

海人が持つ三叉槍トリアイナは、まつろわぬポセイドンから篡奪

し、海人の権能となっていた。このトリアイナの声は所有者である海人だけに届き、他の者には原則聞こえないという。

トリアイナの声の役割は、所有者の思考を読み取り、その思惑通りに自身や他の権能を制御すること。ポセイドンが三本の水鉄砲を操りながら馬も操れたのは、水鉄砲の制御をトリアイナが担当していたらしい。

もしトリアイナの助けがなかったのなら、ポセイドンは水鉄砲の軌道にも思考を割かねばいけなかったという。

「はあん……。でもいいのか？ 前の主をそんな呼び捨てにしちゃって」

『前の私の所有者といっても、海人様に所有権が渡る際に記録は全て消去されています。以前の私が何をしたかは、この大陸中に私が手を加えた跡が残っているのです、それを掬い上げたからわかるのです』
「手を加えた、ねえ……。例えば、前のお前は一体何をしていたんだ？」

『おおよそですが判明しています。この大陸周囲に海流を発生させること。そしてツギハギだらけのこの大陸を繋ぎとめておくことです』
「この地震はそのせいか……」

ポセイドンが所有者だった時のトリアイナが担っていた仕事なので、海人に移る際に放棄せざるを得なかった。

そのせいでこの地震は起きている。この振動はのりの役割を果たしていたトリアイナがいなくなったことで、島全体が崩壊している証拠だ。

「あの、兄様。もしかしてその槍と喋っているのですか」

「ん、ああ。そうか、お前には聞こえないのか」

海人は会話を口に出していたが、トリアイナの声は海人にしか聞こえていなかった。傍から見れば、海人は槍に話しかけて相槌を打っているように見えた。

「おい、仁実にも聞こえるようにしてやれ」

『ですが』

「いいからやれって。これじゃ俺が痛い奴みたいじゃないか。お前の

主の名誉回復のためにも」

『……承知しました。では仁実様に、私に触れるようにと仰ってください』

海人がそれを伝えると、仁実がトリアイナに触れる。それと同時に海人は体から力がガクツと抜ける感覚に襲われた。

『聞こえますか、仁実様』

「あつ、聞こえます。本当に喋れるんですね」

「おい、鉄の棒。俺の体に何かしやがったか？」

『はい。呪力をお借りしました。……仁実様は人間です。私と会話するだけで、人間の身で神の権能を扱うことになります。膨大な呪力で守らなければ仁実様の体が弾けてしまうでしょう』

「やめさせろ、今すぐ！」

『かしこまりました』

トリアイナはすぐさま仁実との会話を断った。

「それで、島の崩壊は止められないのか？」

『はい。島の根幹である部分が崩壊し、島は海に沈むのみです』

「残る道は、脱出するしかないか……。ちよつと聞くが、船は何処にあるか」

海人は、仁実と一緒に連れ出した女性に在りかを問うた。トリアイナの言うことが正しければ、島の周囲の海流もなくなっているはず。普通の船で脱出できるはずだ。

メイドの女性は、ふるふると首を横に振った。

「船はありません。私達はほとんど内陸から連れてこられました。海沿いに住み、なおかつ造船経験のある者がいるなどという偶然が起きるはずありません」

「ちつ、仕方ない……。だったら俺の船に乗せられるだけ乗せるしかない。山を下るぞ」



「子供とお年寄りが先に乗り、次に女、最後に男だ。ゆつくり乗り込ん

「でくれー」

島の住人達が次々に海人の船に乗り込んでいく。船に乗せられるだけ乗せて、重量に耐え切れず沈んでしまう心配はしていなかった。海の水そのものを動かして船を進めようと考えていたからだ。

八郎太郎の権能は細かな調整が難しい。だがトリアイナから、自分に任せれば出来ると進言されたのだ。ついさつき会話したばかりの意識に任せるのは抵抗があつたが、海人は一人でも多くの人を助けられるのならばとトリアイナに賭けた。

「権能の制御は任せただ、トリアイナ」

『お任せください』

「だ、だれか。うちの息子を知りませんか！ 遊びに出かけたまま帰ってこないのです！」

そんな時、膝をついて祈りを捧げる姿勢で助けを求める女性の声を、海人は耳に入れた。

すぐさま女性の元に駆け寄ると、しやがんで女性の手をとった。

「どんな服を着ていた？ 名は？」

「え、えつと、その……」

「……ええい、まどろっこしい！ 仁実、こいつを持っているー！」

「ええ、ええええ!？」

海人は立ち上がると、仁実にトリアイナを投げ渡した。仁実はそれを慌てて受け取る。

すると海人はくるりと反転し、またしやがむと今度は女性に背中を向けた。

「一緒に探しましょう。さ、乗って」

「だ、大丈夫です。歩けます。それにポセイドンの呪縛から私達を解き放ってくれた者に、そのような事をさせるわけには……」

「あなたと一緒に走るよりも、こつちのほうが速い。それに俺が好きでやっていること。気にするな」

「は、はい……」

おそろおそろといった様子で女性は体重を載せると、海人は立ち上がった。

「あなたの息子は普段どこで遊んでる？」

「あちらの広場で——きやッ！」

女性の指さした方向に、海人は人一人背負っているとは思えない加
速で走り出した。



「いましたッ！ あの子です！」

島中を駆け巡って見つけた女性の息子は、道端にうずくまって隠れ
ていた。無理もない、島の揺れは立っているのも困難なほどに大き
くなっていった。

女性が息子の元に駆け寄っていく。その時、海人と二人の間の大地
に大きな亀裂が入った。アトランティスの限界が近づいているのだ。

大地の亀裂を飛び越えようとした海人だが、踏みしめた足場が崩れ
た。亀裂の底には海水が浸透していた。

海人は出っ張りにつかまるが、大地にできた亀裂はクレバスの様に
大きなものだった。海人は亀裂の下方におり、すぐ下には海面があっ
た。海人にロツククライミングの経験はない。時間がかかる。

「くそっ、やっぱり全員は助けられないか……」

船がないと聞いていたときから分かりきっていたことだ。島の住
人全員は助けられない。いくら足が速かったとしても、海人一人では
物理的に無理があった。

もうこれ以上、まつろわぬ神との戦いの余波で犠牲者は増やしたく
ない。

セイレーンの歌に魂を吸われて、船員達を失ってから海人はそう心
に決めていた。しかしポセイドンはこうして島を崩壊させる仕掛け
を施して、海人を苦しめていた。

せめて数があれば……。海人の脳裏に犠牲になってしまった船員
達の顔が浮かぶ。

「猫の手も借りたいとはこのことか……」

「猫じゃないっすけど、手は貸してやれるっすよ！ いや、正確には手

「じゃなくヒレっすけど……」

海人の下にある海面からイルカが顔を出し、海人の独り言に返答してきた。ポセイドンと戦う前に別れたデルピノスだった。

「デルピノス？ お前、どうして……」

「島の人達には世話になってるっすからね。自分も助けるの手伝うっすよ」

「だがお前ひとりじゃ」

「そこんところも心配無用っす。助っ人をいっぱい呼んできたっすよ」

デルピノスの隣から、馬の神獣が顔を出した。ヒツポカムポスに似ているが、体色が違った。体が海の色に近く、たてがみは太陽の光で虹色にきらめいていた。

「アリオンっていう名があるっす。他にもいろんな仲間が助けに来てくれたっすよ。海人様、こいつに乗ってくださいっす。海の中も海面も、もちろん陸も走れる優れた馬っすよ」

「いいのか？ 俺はポセイドンを斃した。お前は俺を恨んでいると思っただが……」

「逆っす。感謝してるっすよ。自分達はポセイドン様に造られたわけでもなし、今なら言えるっすが横暴に耐えかねていたっすから」

「ポセイドンも言っていたな。じゃあお前を造ったのは……」

その先を言おうとした海人だったが、掴んでいた岩が崩れて海の中に落っこちた。アリオンにしがみつき海上に顔を出した海人は、言うとうとした疑問を忘れてしまった。

「それじゃ手分けして探すっすよ！ 仲間達には自分が指示をだすっす。助けた人達は海賊船に集めればいいっすよね？」

「ああ、それで頼む」

「了解っす！」



その後、デルピノス達海に住まう神獣の助けもあり、海人は島に住

む全ての人達の救出に成功した。

海賊船にところ狭しと敷き詰めることでなんとか全員を乗せることに成功し、トリアイナの船の制御の下、アメリカ大陸に向かって出立した。

途中何度か別の船とすれ違ったが、周りに見たこともない数十匹の海生動物を侍らせる船は、異様に見えたことだろう。

一週間ほどで無事ひとりも欠けることなくアメリカ大陸に到着した海人一行は、そこで島の住人達を降ろした。

住んでいた家はアトランティスと共に沈んだ。家がないのを承知で元いた国に帰るのもよし、それともこの進展地で新たな生活を始めるもあり。住人達は決断することになった。

ヨーロッパ諸国による植民地化が進んでおり、ちやうど開拓されているアメリカで仕事には困らないだろう。

海人はというと仁実、そして唯一日本人であったメイドの女性とその息子を加えて、海人は日の本へと帰った。

海人が十三湊を出立してから、およそ一年の歳月がたっていた。

三十六話、得失

海人と仁実は、十三湊に帰ってきた。太平洋という果てしなく大きい海を超え、久方ぶりの陸を見た。

メイドの女性とは港で別れた。彼女は別の貿易船に乗せてもらい、生まれ育った故郷に帰るそうだ。

海賊船を棧橋につけ、海人達は真つ先に城へと向かった。

「海人！」

「おっと」

目が合った途端飛びついてきた愛代を、海人は受け止めた。

「愛代様、ただいま戻りました」

「仁実ちゃんも、おかえりなさい」

仁実の挨拶に返答し、愛代は仁実も抱きしめた。

「本物の仁実ちゃんだよな？ 足もちゃんといっているよね？」

「はい、このとおり」

「よかった、本当によかった……」

仁実が生きていることを確かめるように、愛代はがっしりと抱きしめていた。仁実も少し苦しかったが、心配させた罰として甘んじて受け入れていた。

しばらくして、海人が二人をひきはがす。

「はいはい、そこまで。愛代、親父は何処にいる？ 心配してないかもしれねえが、顔を見せておきたい」

「せっかく帰ってきたのに！ 私がどんな気持ちで待っていたか……」

「わかっているつもりだ。だが、けじめはつけなきゃならねえ。親父もそう言うだろう。……それに、愛代もやらなきゃいけない仕事があるだろ？ な、国長」

「うっ……」

城に来るまでの道中で、愛代が安東家を引き継いだことを耳に入れていた。海人達が海を越えている半年の間に、愛代は名実ともに安東家当主となっていたのだ。

だが、『愛代』という名は広がっていなかった。現在の安東家当主は『安東愛季』ちかすえという男の領主が統治していることになっていた。

「それを終わらせてから、二人だけの時間を作ろう。誰にも邪魔されずにな」

「……うん、わかった。だけど、『けじめ』って何するの?」

「……身内が死んじまった時にはいつもやってた事だ」

愛代と会えて笑顔になった仁実も、その話題になると表情を曇らせて俯いてしまう。

「墓、作るんだよ。俺と仁実以外の全員分のな」



その後、海人はその場を早々に立ち去った。雰囲気は暗くなったあの場所に置くのは少し悪いと感じたが、仁実は愛代のお傍付きに任せて置いてきた。

海賊団の全滅。それは付き合いの短い愛代にとっても衝撃的だったらしく、驚きで目を見開いていた。乗組員達は家族の様なもので、重蔵が船長だった時から付き従ってくれた者もいたのだ。

戻ってこれるほうが難しいと思われた旅だ。何人が戻ってこれなくなるかと覚悟していたとはいえ、失うものが大きすぎた。十三湊に戻ってきて、海人の心にはぼっかりと大きな穴が開いていた。仁実にとっても重蔵について乗員達には世話になっていた。海人より彼等と親交が厚く、決して失ったものは小さくない。

重蔵は一言だけ、肩を叩いて頑張ったなど励ましてくれた。簡潔なたった一言が、海人の身に染み込んだ。

そして、海人は一日で全員分の墓を作ってしまった。

「ふう……」

朝から夕方まで休みなしで作り続け、海人は近くの岩に腰かけて休憩をとっていた。

海人は夕焼けで赤く染まる空を眺めながら、物思いにふけっていた。

「なーに黄昏てるんだ」

「アテルイか……」

海人に声をかけてくる者がいた。アテルイだ。片手にもつ酒の入った土瓶を見て、海人はあきれる。

しかし、よく見ると角がない。角がなければ見た目は人間と変わりなかった。

「出歩いてていいのか？ お前は封印されたってことになってんだろ？」

「いいじゃねえか、ちよつとぐらい。まあ、まつろわぬ神一柱いるだけで現世に与える影響は少くない。すぐ戻るさ」

「一体なにしてたんだよ？」

「重蔵と飲んでたんだよ。酒の席で愚痴聞いてやってさ。安東という立場と親という立場に挟まれて、お前らが帰ってきたことが素直に喜べないんだとさ」

「それを俺に言っちゃあいかなだろ……」

「おっと、口が滑った。まあ忘れてくれ。はっはっは！」

そう言つてアテルイは海人の隣の岩に腰掛けた。

「んで、俺にもなんか用があるのか」

「んー、そうだな。これ飲んだら教えてやってもいいぞ」

「それ神も酔わせるつつうすげえ強い酒じゃねえか……」

「酒の席でなら、愚痴ぐらい聞いてやるよ」

そう言われて、海人は盃に並々と酒を注ぐと、ぐびつと一気にあおった。

「っはあ……。仲間をたくさん死なせちまったんだ。天候を操ったり、体を水に変えたりする力を手に入れても、身近な命すらまともに守れねえ」

「神の権能とはそういうものだ。己の存在を誇示するためにある。否応なしに他人を巻き込んでしまう。……どうしても傷つけたくない、守りたいものがあるならば、それは遠ざけて置くほうが確実だ」

海人に忠告をするアテルイは、誰か別の人を思い浮かべているようだった。アテルイをよく知らない以前の海人だったらわからなかつ

だが、今の海人になら予想できた。

「忠告どうも、身に染みるな。随分と重みのある言葉だが、もしかして……お前の経験から来てるんじゃないか？　なあアテルイ、いや、悪路王よ」

「その名で呼ばれるのは、少しこそばゆいな」

アテルイ——悪路王とも呼ばれるまつろわぬ神は照れるような、懐かしむような様子で首の後ろを搔いた。

「俺が大切な人を守れなかったのは、俺の力不足が原因だ。だが過ぎた力は人を孤独にする。……何事もやり過ぎはよくない、ままならんものだな」

「じゃああんたは、権能という力を手にしたこと、まつろわぬ神になったことを後悔しているのか？」

「いや、俺はこの生に満足しているよ。大切な人とも一緒になれたことだしな」

そう言ってアテルイは立ち上がると、両腰を叩いた。もし侍であったならば、アテルイは腰に帯刀していたに違いない。

酒の土瓶を逆きにして振り、アテルイは中に酒がないことを確認した。

「酒もなくなったことだし、俺はまた引き籠もってるぜ。何かあつても俺を頼るなよ」

「待て。俺に用があるんじゃないのか？」

「おお！　そうだ、うっかりしていた」

「お前な……」

目を丸くして驚く姿からして本当に忘れていたらしい。

「十三湊の沖にどこの神に従属しているかわからない神獣、海人があそこに留まらせているのだろうか？」

「ああ！　そうだ、忘れていた」

「おい。さっきまで俺を責めていたのは一体どこのどいつだったか……」

「は、ははは……。それよりも魚の神獣達だ、すぐにどうにかする！　」
「いや、その必要はない。何十匹はいたか、全て一斉に東に去っていつ

てしまったぞ」

しびれを切らして帰ってしまったのだろうか。帰るべきアトランティスは沈んでしまったが、魚だし海があれば生きられるか、と海人は考えていた。

「だがな、二匹だけ残っているやつがいたんだ。沖の辺りをうろろし、十三湊に入りたいが人間に見つかるのは不味い、そんな様子だったのだな。すぐそこまで連れてきた」

二匹、と問われて思い当たるのは、デルピノスとアリオンだ。

「別れの挨拶でもするつもりか？」

人間と同じ様に考えることができても、魚であるデルピノスにそんな殊勝な心がけができると思わなかったが……。

「さあな。魚の言ってることなんぞ俺にはわからん。俺に聞くよりも、本人達に聞いたほうが早いんじゃないのか？」

「わからない？ あんなにもはつきりと喋ってるじゃねえか」

「少なくとも、俺にはキーキー金切り声を上げてるようにしか聞こえなかったぜ」



「ということがあった。どういう事だと思う、デルピノス？」

「そりゃそうっすよ。自分には人間みたいに声を発する器官がないんすから。人間と言葉は交わせないっす」

アテルイの封印されている社から程近い浜辺で、海人はデルピノスと会話をしていた。デルピノスは浜辺に打ち上げられており、その隣にはアリオンが行儀正しく待っていた。デルピノスを海へ戻す役を担っていた。

「言ってることがめちゃくちゃだ。じゃあどうして、俺とお前はこうして会話できているんだ？」

海人はデルピノスの回答に疑問を投げかける。人と言葉を交わせないというのなら、今こうして自分としていることにも説明がつかない。完全に矛盾している。

「……やっぱり気づいてなかったんすね。海人様はどうやらイルカの言葉を理解しているみたいっす。自分も頭がいいように作られたんで、人間の言葉が理解できるから、それで会話できているんすよ。自分、さつきからずっとアテルイ様の言う通りキーキー鳴いているっすよ」

デルピノスにそう言われ、海人はようやく気づいた。意識してデルピノスの声を聞くと、確かにデルピノスはキーキーとしか鳴いていない。だが頭に入った途端、海人はデルピノスが言っている事が理解できたのだ。

「……本当だ。鳴き声が理解できる。大陸の未知の言語も短期間で理解できたが、これも神殺しの特性なのか？」

「それも一因だと思うっすけど、それだけとは考えられないっす。自分達イルカは音で通じ合うっす。他に心当たりはないっすか？」

「音……」

思い当たるものがあつた。まつろわぬポセイドンと戦う前、前哨戦として海人はまつろわぬセイレーンと戦つた。

船員のすべてを失いながらも、まつろわぬセイレーンを討滅した。セイレーンの遺骸が塵となつて天に巻き上げられた後、海人は体にセイレーンの権能が宿つたことで、セイレーンを殺した確信を得たのだ。

しかし今まで権能がどんなものなのか確認もしていなかった。討滅した後には島が沈んでどたばたしていたので、さっぱり忘れていたのだ。

「セイレーンの権能だ。奴は歌を最大の武器にしていた。俺が奴から篡奪した権能も歌、つまり音に関係する力なのかもしれない」

「音に詳しくなる権能っすか？」

「まだわからん。だがそれだけでは神の権能としてはしよばい。もつと別の使い道が、強力な使い道があるのだろう」

雑談もほどほどにして、海人は本題に入った。

何十匹のお仲間が東に去って行ったのに、何故二匹は此処に残っているのか？ 海人はデルピノスに質問した。

「アリオン以外の神獣仲間が戻っていったのは、自分達の創造主が呼び戻したからっす」

「創造主か。確か言っていたな、ポセイドンがお前達を造ったわけではないと。別に創造主がいるんだな？」

「そうっす。だから忠告に来たっす。神獣達からポセイドン様が殺されたと聞いたなら、絶対に海人様に報復に来るっすから」

創造主、つまりは従属している本当の主。そのまつろわぬ神の命令に抗ってでも、デルピノスは警告しに来てくれたのだ。

二匹は創造主よりも海人を優先したということに他ならない。

「そうか、お前も俺を心配して残ってくれたのか。ありがたい」

海人はアリオンの首元を撫でた。アリオンはくすぐったそうに身をよじる。

「だが忠告されるほどの問題か？ 確かにまた災厄が降りかかるのは良くない知らせだが、討滅すればいい話ではないか。まつろわぬポセイドンとどの様な繋がりか知らないが、奴と同じように神話の世界に送り還せばいい」

「おそらく、あの方は自ら戦場に出てくることはないっす。海人様、あの方は自分達の創造主っす」

海人ははっとした。デルピノスが深刻な口調で語る理由に思い当たったのだ。

「創造主様——アンfitriテ様は海洋動物を改造した神獣、自分達の仲間を送りこんでくるに違いないっす。絶え間なく、海人様に休みを与える暇を与えず。神獣は只人にはまず倒せないっすから、全て海人様が倒すしかないっす」

——そして海人がポセイドンを斃してから、およそ三十年の月日が流れた。

三十七話、月日は流れて

カモメが頭上で鳴くのを聞きながら、海人は頬杖をついて全く変わらない景色を眺めていた。海人の視線の先には、雲ひとつない空と深い海、永遠に続くかと思われる水平線が広がっている。

こんな何もない景色を飽きもせず眺めていた頃があった、と海人はふと思い出したが、それが遠い昔のように感じる。

実のところ、遠い昔というのは間違っていない。

およそ三十年。

それが海人が神殺しとなってから経った年月だった。成人していたあの時から三十年も経てば結婚して子供が出来てもおかしくない年だ。現に愛代と仁実は……。

水平線を眺めていた海人は、大きな欠伸をした。やはり飽きずに海を眺めていたのも、昔のこととなってしまったのだ。こうしてしばらく我慢していても、全く面白くない。

つまらなくなった理由はわかっている。人間だった若い頃とは違い、神殺しになった今なら丈夫な体と天候を操れる権能を手に入れ、この三十年で人間のいる場所は全てと行っていいほど行きつくしてしまった。

この三十年で海人にとって世界は、未知でも冒険する場所でもなくなってしまうのだ。

「海人様、そろそろ見えるっすよ」

ひよこつと顔を出したデルピノスが、もうすぐ十三湊が見えると教えてくれる。

「……なあ、デルピノス」

「なにつすか？」

「俺達が十三湊を最後に寄ってから、どれくらい経った？」

「そうっすね……。だいたい、十年つてところっすかね」

「そうか……」

もうそんなに経っていたか、と海人は思った。いくら海を眺めるのが面白くないといえど、それしかやる事がない。そして海を眺めてい

ると、この状態が永遠に続くと感じてしまうのだ。

なにせ、と海人は自分の体を眺めた。海人の体は五十年の歳月をかけても、未だ瑞々しい肉体を失っていないかった。二十台の若々しく健全な体のままなのだ。

アテルイの言っていたことは本当のことであり、海人は老いによつて死ぬことはない。人間と同じ時の流れの中にいるのではないのだ。やがて、本州が見えてくる。愛代は、仁実は一体どんな姿になってしまったのだろうか。

「デルピノス、そろそろ上がってこい。俺がいない間、留守番を頼む」「了解っす」

海人は頭の中で船が右に曲がるよう、風の流れを変えた。

ポセイドンとの戦いの時よりも、海人は権能の扱いが巧みになり、今では頭の中で念じるだけで操作できるようになっていた。

雷雲は呼び寄せないといけないが、雨を降らせずに雷だけ落とすことができるようになった。しかし八郎太郎の権能は上手く扱えなければ自分にも影響が及ぶことは変わらず、これはどんなに使い慣れても海人に不利になって働くだろう。

風を受けた帆船は進行方向を曲げ、十三湊へと向きを変えた。船は水の上を滑るように、静かに進んでいった。



「な、なんだありやあ!?!」

誰かが驚きで大声を上げた。その者の視線の先には、十三湊の港に入ってくる海人の帆船があった。

海人の船は、三十年前に重蔵が造り上げた船をそのまま使っていた。大したダメージも負わず、形を保っていた。しかし老朽化が進み、船の全容はまるで木造の廃墟が水に浮かんでいる様だった。

幽霊が住んでいるかと思われるほど、船は不気味だった。

港にいる民の視線を一身に浴びながら、船は帆を閉じずにゆっくりと速度を落とすと、棧橋の近くで泊まった。錨が下ろされ、船から海

人が下りてくる。その海人に向かい、様子を伺っていた安東の兵が二人駆けつけた。

「止まれ！」

「うおっ、何だ何だ」

「貴様、何者だ！ あんな今にも崩れそうな船に乗り、もしや妖魔の類ではないだろうな！」

衛兵二人は槍を海人につきつけ、棧橋を塞ぎ、海人は両手を制して落ち着かせようとする。

そんな時、群れた野次馬の間を掻き分けて、壮年の男性が現れた。男性は上質な鉄の鎧を身に着けていた。

兵士の一人がその男性に気づき、男性を役職で呼んだ。

「あつ、隊長！」

「何をしている？」

「はい、怪しい船から降りてきた男を問いただしていた所で……」

隊長と呼ばれた男はまず船、そして海人の顔を認めると、何か思い当たったのかしきりに頷いた。

「隊長……？」

「ん……？ ああ、その方はいい。槍を下ろせ」

「は、しかし……」

「下ろせと言っている！ ……申し訳ありません、海人様。私の部下への教育がなっていないばかりに……」

隊長は部下を押しのとくと、海人の前に跪いた。驚く二人の部下を尻目に、海人は一応擁護した。

「よい。そいつらは若い、十年以上帰ってこなかった俺を知らなくても無理はない。逆にお前はよく覚えていたな」

「はっ、恐縮です」

あんな幽霊船のような船が来れば、十年経つても忘れられないだろう。隊長と呼ばれた男性もその当時の事はよく覚えていた。十三湊の民にとっても同じように大騒ぎになったのを、忘れられない出来事として覚えている者が少なくない。

現に野次馬の中からも年長の者が思い出し、周囲の人間に説明して

いた。

「た、隊長……。その男は一体……」

恐る恐る尋ねる部下に、隊長は跪きながら振り返り答えた。

「この方は安東海人様。仁実様の兄に当たるお方であり、外国を巡り旅をしておられる。そして神より教えを受け、この奥州の地に並び立つ者がいないと称されるほどの槍の使い手だ。我等安東海軍の長でもある」

それを聞いた部下の表情は滑稽で、なかなか忘れられそうにないほど見事なものだった。



それから群集を掻き分けて港から離れた後、海人がまず向かったのは湊城だった。さすがにあの隊長が特別覚えていただけであって、ここ数年で配属された門番も海人の素性を知らなかった。

身元の確認が済んだ後、海人は城に入ることができた。どうやって身元を確認したかというところ、海人を知っている者に来てもらったのだ。

城の廊下を歩く海人と、海人を知る人物。海人は並んで歩く、血縁上息子に当たる人物に話しかけた。

「しかしお前だったとは。容姿を見ただけではわからなかったと思うぞ。……成長したな、実季^{さねすえ}」

「はい、あなたは十年経った今でも全くお変わりないようです」

真に迫る表情で海人の隣を歩いているのは、愛代との間に儲けた実季という息子だった。顔を見るのは七歳の頃から十年ぶりである。男子三日会わざれば刮目して見よとは言いが、十年も会わなかった息子の姿はまるで別人だった。

それに実の親子だというのに、どこか仰々しい。表情も硬く、小さな頃は活発で明るい男子だったというのに。

「あつ、兄様！ 帰ってらっしゃったのですか！」

そんな時、廊下を歩いていた仁実が海人を認め、駆け寄ってきた。

久しぶりに会った仁実は、また年をとっていた。

「仁実か。久しいな。元気にしていたか？」

「兄様こそ……。十年も一体どちらに？」

親に駆け寄る子を思い起こさせるがしかし、外見年齢は真逆だった。

海人は五十になるというのに瑞々しい肉体を保ち、対して仁実は顔にしわが増え、声もしわがれている。実際は海人が数歳年上なのだが、仁実が母親で海人が息子と勘違いされてもおかしくない外見である。

「実季も一緒だったのね。十年ぶりでしょう？ お父様と積もる話もあるでしょうし、お母様の部屋に行つて——」

「自分はこの人を、父親と思つたことはありません」

「実季、なんてことを言うの！ 兄様に謝りなさい！」

海人を父親として認めないという実季を、仁実は叱りつける。だが撤回するつもりはないようで、実季は海人を正面から睨みつけていた。

「ですがこの人は当主を引き継がず、その役目を継いだ母上の助けもせず、外国をふらふら船で放浪するばかり。父親らしいことなど何一つしなかつたではありませんか！」

「実季、それは仕方なかつたんだ。俺が厄介なものに目をつけられて、この十三湊の民にも被害が及ぶまいと……」

「仕方なくツ……。！ だつたら！ 一生帰つてこなければよかつたんだ！」

海人は訳を説明しようとした。神殺しの厄介ごとを引き寄せてしまう体質を、そのせいでアンfitriテというまつろわぬ神に現在付けねらわれていることを。だがそれが実季の神経を逆なでし、逆効果になつてしまった。

「母上はずつとあなたが帰つてくるのを待っていた……。だがあなたは帰つてこなかつた。母上はあの人は帰つてくる、帰つてくるとうわ言のように眩いていた。あなたに出会わなければ、いなければ母上は幸せになれたんだ！」

「実季ー」

仁実が大声で再びしかりつける。実季は海人を見るが、海人は怒るでも悲しむでもなくただ冷静に見ていた。あれだけ言っても何も感じていないようだった。

「……失礼します。私はこれでも、あなた以上に国務を任されているので」

「待ちなさい、実季ー」

仁実の制止を無視し、実季は廊下の角を曲がって姿を消した。

仁実も追いかけるつもりはなかったようで、実季に伸ばした手を下ろし海人に頭を下げた。

「ごめんなさい、兄様。あの子は普段本当にいい子なんですよ。本当ならあんな事を言う子じゃ……」

「いや、実季を怒らないでやってくれ。あいつの言っていることも、あながち間違いではないしな」

海人は今もなお、アンファイトリテに追い回されていた。アンファイトリテは自分が生み出した神獣を尖兵として戦わせ、自らは一切顔を見せなかった。デルピノスも以前はアンファイトリテと感覚を共有して位置を知らせあっていたが、裏切りが判明すると繋がりが切れて居場所がわからなくなってしまったのだ。

アンファイトリテは神獣に手を下させて、自分は一切手を汚さないつもりなのだ。

未だにアンファイトリテの居場所はつかめず、定期的に来る神獣を殺すことが日常だ。

「ですが兄様を誤解させたままでは……」

「あのままでいい。自分の考えを素直に言えるのはいいことだ。もう必要もないことだしな」

「必要ない……？」

海人はしまったと表情に出し、口を片手でふさいだ。

「いや……忘れてくれ。俺は愛代に会いに行くよ」

「お兄様……」

海人は誤魔化すと、仁実に背を向けて逃げるように早足で歩いた。

仁実はそう言つて遠ざかつていく海人を、ただ立って心配そうに見送った。

「もう、どこにも行きませんよね……?」



「そんなことがあったの……」

太陽も落ちて空が暗くなった頃、海人は愛代に昼に起こった出来事を話した。

場所は愛代の寢所であり、愛代は年をとり寢床から自力で起き上がれない寝たきりの体になっていた。

海人はそんな愛代の枕元に座っていた。愛代はそんな体になつても、訪れた海人にしわくちやな笑顔を向けた。

「ああ。だからお前に擁護を頼もうと思つてな。あいつは俺よりも愛代に懐いていたからな」

実季は次男であり。上には業季のりすえという兄がいる。業季は安東氏の別の城を既に任されており、どちらかといえば業季のほうが海人に懐いていた。

だが実季は海人の記憶が正しければ、小さい頃は母親にべつたりだつたはずだ。

「そうね。だけど私もあの子の年の頃は、もう母親離れしていた。しなくてはならなかった、と言つたほうが正しいでしょうけど……。とにかく実季にはこの十三湊の城を任せなくてはいけないから、私に頼らないでしっかり自分で考えて、大人になつてほしいの」

お家を揺るがす大事件があれば、さすがに助言するけど、と愛代は付け加えた。

「だから突き放したのか?」

「言い方は悪いけど、そうよ。あの子が業季ほどに大きくなつたら、当主を任せようと思うの」

だが海人は、実季に構つてやらないのは逆効果ではないかと思つていた。実季は安東全体のためというよりも、自分本位の考えで言つて

いるように感じた。海人の直感でしかないが、実季のあれは八つ当たりだ。

母親に褒めてもらいたくて高潔で冷徹な人格者を演じてはいるが、当の母親が自分を心配して目をかけてくれないため、邪魔者に思っているのかもしれない。

「それよりも、海人。旅の土産話を聞かせてくれないかしら？」

だが、海人は黙っておいた。久しぶりの夫婦会話であった。いらぬ気苦労をかけることもないだろう。それに愛代のほうがずっと実季を見てきた。あとでさりげなく仁実に言っておくだけでいいだろう。

海人はアンフィトリテの追っ手をまく際に訪れた、発展著しい英国の話を始めた。途中話を聞いて興奮した愛代が大きく咳き込むが、大丈夫だと言う彼女の言葉を信じ、海人は重く気に留めなかった。

それから外の国の景観や文化の話は続き、夜は更けていった。



蠟燭の火が消えたのをちょうど良い区切りとし、海人達は話を切り上げることにした。愛代の肩まで布団をかけ、寝るまで傍らにいたりとした。

夜は更け、障子から月明かりが漏れる。それだけがお互いの表情を判断できる手がかりだった。

「海人、どうしてそんな恐い顔をしているの？」

愛代に言われて、海人は自分の表情が強張っていることに気づいた。

「……なんでもない。寝て起きたら、全て元通りの日常に戻る。ゆっくり休め」

海人は穏やかな笑顔をつくって愛代に向けた。

「……お願い、海人。私が寝るまで手を握っていてくれる？」

「こっか？」

海人は愛代のしわしわの手をそっと握った。

「海人の手、暖かい……」

愛代の手は、冷たかった。

「おやすみ、海人」

「ああ、おやすみ」

そうして目蓋を閉じた愛代は、しばらくするとすーすと穏やかな寝息をたてはじめた。

愛代が眠りについたことを確認すると、海人は障子を開けてそつと部屋を出た。

空を見上げると、満月だった。町明かりがないおかげで星が綺麗に見える。

少し空を眺めた後、右を振り向いた。すると満月や星に照らされた廊下の先には、仁実が立っていた。幽霊の様に存在の薄かった仁実に気づいておらず、海人はわずかに目を見開いた。

「何処に行くのですか、兄様？」

「ちよつと厠に寄ってから、寢床にな」

「嘘をつかないでください。厠はこつちにはありません」

「そうだったか。焼け落ちて立て替えたのか？」

「この十三湊は築城してから一切攻め込まれていません！」

仁実がずんずんと威圧感を撒き散らし廊下を一直線に近寄ってくる。それでも深夜なので足音は立てなかったが、逃げられない気迫を感じた。

「まさか、また十三湊を出るつもりなんですか!? まだ一日も経ってないんですよ！」

すぐ近くまで寄り見上げてくる仁実に、海人はあとため息をついた。

「そうだ。すぐ近海に神獣が出た。俺が海に出てそいつを引き付ける。大丈夫、町に被害は出さない。お前達の日常に影響はでない」

「……兄様から見れば、私達の日常は守れるかもしれない。だけど愛代様と、そして私にとっての日常は、兄様がいて初めて元通りになるんです！ 兄様がいなくなったあの日から、私達の日常はずっと戻ってきていないんですよ……」

そつと胸に顔をうずめてくる仁実の肩に手をおき、海人はそつと仁

実を胸から離した。

「行かないでください。それでも行くというのなら、私も……」

「駄目だ。お前じゃあ神獣には勝てない。もし奇跡的に勝てたとしても、まつろわぬ神には……」

「昔よりも、術は上手く使えるようになりました！」

「それでも、お前はもう長旅に耐えられるような体じゃないだろう。いつでも愛代みたいに寝たきりになってもおかしくない年なんだ」

海人は仁実の体を眺めた。健常で病気にかかっていない健康体だが、もうおばあちゃんと呼べる年であり、老化で体の機能が衰えている。

それに寿命という生物にとって逃れられない概念が、すぐそこまで迫ってきているのだ。

「私は、まだ兄様に命を助けてもらった恩を、返せていません……！」

「それも元々は神殺しの巻き込まれ体質が、お前を巻き込んでしまったからだ。沢山の命を犠牲にしてみました。お前が気に病むことではないんだ……。本当にすまなかったな、俺がお前の人生を縛り付けていたんだな」

「兄様……」

「じゃあな、またその内帰ってくるよ」

海人は仁実に背を向けると、湊城の城門がある方角へと向かった。

仁実はその姿を何もできずに見送った。しかし決して海人の力になれず、悲壮に暮れていたわけではなかった。



——その後、安東家当主である愛代が亡くなった。寿命であり、この時代では多くはない親族に見送られての死だった。だが、その場に愛代が最もいて欲しかった海人の姿はなかった。

愛代の遺言の通りに安東家の次期当主は、長男である業季に決まった。しかしこれを不服に思った実季が、業季相手に真正面から戦を始

める。兄弟の間で安東家の家督争いが目に見える形で起こった。

その最中、業季と実季の叔母である仁実は、消息不明となる。

十三湊で実権を握った実季は、海人の十三湊入りを禁じた。安東の支配地域では言語統制も行い、海人や神殺し、まつろわぬ神に関することは発言を禁止した。海人の船は見つけ次第、警告なしに大筒で沈めるよう命令された。

あまり事を荒げたくない海人は、段々と寄ることはなくなり、それから一切十三湊に寄ることはなくなった。愛代の墓参りもしていないのだ。

——そして海人が十三湊を離れて、船を操り世界を放浪する中。

およそ一世紀の時間が流れた。

第五章 神殺しの同胞 三十八話、魔術師の王

「まったく……まったく、嘆かわしい。魔術師どもはこんな事を隠していたのか」

彼はそう呟いて、手に持ったティーカップを傾けた。静けさが漂う図書室に、彼の低く重い声はよく響いた。

彼は三人の魔術師を傍らに侍らせている。名は、サーシャ・デヤンロード・オブ・メイガス スタール・ヴォバン。欧州の魔術師に、魔術師の王と呼ばれ恐れられている。

だが彼は生来、自分が魔術師だと思つたことは一度もなかった。浮浪児であつた彼は、魔術の基礎すら学んだことはなかったのだ。

ならば何故、ヴォバンは魔術師に恐れられているのか。それは彼がこの世に顕れたまつろわぬ神を刹逆し、魔術よりもはるかに強力な神の奇跡を操る、神殺しのひとりだつたからだ。

「魔術師はこんなにも心躍ることを私に黙つていた。はてさて、私が一体どうすると思つていたのだろうか？」

ヴォバンはくっくつと笑いを漏らした。彼はその落ち着いた佇まいで椅子に腰掛けている反面、内心では熱く滾つていた。

もしこの昂ぶつたヴォバンの姿を見た人間がいれば、重くのしかかる重圧に逃げ出していたに違いない。だがあいにく、ヴォバンのいる空間には、魔術師の三人以外にはいなかった。

その魔術師三人も、人間と呼ぶよりは『人間だつたもの』と言うほうが相応しい外見だつた。顔色は青白く、瞳孔も開いている。表情もうつろで、まるでリビングデッドやゾンビ、死者が立ちつくしているようだつた。

『カイト』。この名に聞き覚えのある者はいるか？」

ヴォバンは三人の魔術師に、疑問を投げかけた。

ヴォバンが持つ権能のひとつ、『死せる従僕の檻』。その力はヴォバンが殺した者の魂を呪縛し、己に仕える死霊として使役するというも

の。

三人の魔術師は、元は高名な魔術師だった。しかしヴォバンに殺されてしまい、なまじ優秀だったためにこの権能で死にたくても死ぬことができない状態にされてしまったのだ。

魔術師のひとりが、口を開いた。命令さえあれば動けるのだ。

『……カイト。出身不明、容姿不明。優秀な騎士の人材を輩出したとして、魔術師界限に名を残す。彼の弟子を称する者の中で、騎士として高名を馳せる者は多い。海洋を傷ついた帆船で放浪しているとされ、弟子以外でほとんどその姿を見た者はいない。彼が弟子を取るのには気まぐれである。彼の下で修行を積み免許皆伝を受けた者は、総じて達人級に近い槍の腕前である……』

「ふん、そうだ。私が聞き及んだ通りだ」

顎鬚を生やした、神父服の男が答えた。ヴォバンは答え合わせをするかのように頷いた。

アンドーの弟子はその年齢に比して優秀すぎるほどの剣の腕前を持ち、そして槍の腕前においては並ぶ者が弟子以外ではないとされている。彼等の魔術の腕はまばらであるが、幼くとも大人と渡り合える実力を持っている。

そのため貴族の間では『カイト』という名が広まり、その弟子を名乗る者にはまるでブランドの如く箔がついているのだ。

「だが私が聞きたいのはもつと別の事だ……。そのカイトという者の記録は、一体何年前から残っている?」

『……一世紀以上前……』

今度は別の男、白い顎鬚を胸元まで垂らした高齢の魔術師が答えた。

「そうだ! 百年も前から名を残していながら、未だ健在だということではないか。そんな長きに渡り活動できるのは仙人でもない。可能性があるのはまつろわぬ神……。でなければまつろわぬ神を刹逆した同胞のみ」

ヴォバンは獰猛な笑みを浮かべた。好敵手となり得る者が目の前に現れたのだから。

ここ数年ヴオバンが戦った者の中に、『智慧の王』という老齢の神殺しがいた。その者がヴオバンに神殺しは老いず、外見の老化も抑えられると教えたのだ。

その老人の神殺しとも戦うことになるのだが、長く生きて故の多彩な権能に苦しめられた。その神殺しと同じかそれ以上生きている同胞と、一戦交えることになる可能性があった。

ヴオバンはここ数年、激戦に次ぐ激戦続きだった。まつろわぬ神との連戦、前述の『智慧の王』との決闘、休む暇のない闘争の日々だった。

ある日、パタンとまつろわぬ神とのゴタゴタが来なくなり、今のような大した事件もない平穏な日々を過ごせるようになった。

ヴオバンをはじめはこれを快く受け入れたのだが、神々との闘争に慣れきってしまった体はそうもいかなかったらしい。最後に戦ったまつろわぬ神が痛みわけだったこともあり、体は次の闘争を求めていたのだ。

どこかでこの体の疼きを発散できないか。そう考えていた時に、あの噂話が流れてきたのだ。

「大西洋に、そのカイトが乗っていると思わしき船が目撃された」

何らかの魔術的方法で船の姿は隠蔽されているらしく、魔術を知らない民衆には見えない。神力や魔術に強靱な抵抗力のある神殺しになら見破れるかもしれないが、カイトは世界を回っているといわれている。世界は広く、手当たり次第に捜すというわけにはいかないのだ。

今回はなんらかの理由で偶然、民間人にも姿が見えてしまったのだろう。今にも崩れてしまいそうなボロ船が浮かんでいるので、さぞ記憶に残ったであろう。

だから、偶然、運が良かった。ヴオバンは笑みを深め、その人より太く長い犬歯をぎらつかせた。

「そいつについて、少しでも情報が欲しい。特に権能についての情報を……。お前は何か知らないか？」

ぎらりとヴオバンは三魔術師の内最後のひとりに目を向けた。前

の二人がしゃべっている間、口を閉じていた青年だった。

知っていれば儲けもの、程度の軽い問いかけだった。

だが飛び出してきた発言は、ヴォバンの想定を上回っていた。

『……フルネームはカイト・アンドー。外見は二十代、少なくとも百歳。十九の頃に蛇神を刺逆し、神殺しに至る。黒髪黒目、肌は黄褐色の東洋人。権能は風を操るもの、海流を操るもの、天候を操るものがある。流体の水の槍を扱い、魚と会話もできる。性格は』

「待て。何故そこまで知っている？」

放たれた予想外の未知の情報に、ヴォバンは発言を遮った。

最後の青年は、金髪の二十に満たない剣士だった。細身の剣を持ち、鎧を着ずに薄い衣服をまとっていた。青年と命のかけひきをした時、見せてもらったその剣さばきは見事なもので、ヴォバンも手駒に加えたのだが……。

「もしや……。お前は『カイト』の弟子だったのか？」

剣士の青年は、コクンと頷いた。

「フッフ……。そうか、手間が省けたな」

この青年の魂を縛り付けた時期は、ヴォバンが『死せる従僕の檻』を篡奪したばかりの頃。権能を試しにと思って青年他何名かに使った。

まさかこの青年が、『カイト』の弟子だとは偶然だった。ヴォバンは『死せる従僕』に一通り情報を聞き出した後、直接『カイト』の弟子を訪ね、『カイト』について詳細を吸い上げようと考えていた。

おとなしく答ええない場合は、多少手荒な真似をしても必ず得ようと画策していたため、その手間が省けたことには素直に喜んだ。

「では詳しく聞かせてもらおうぞ、カイト・アンドーという神殺しのことを……」

幽鬼の青年は、ぽつぽつと喋りはじめた。これまでは公にならなかった海人の個人情報も、後の時代に最も悪評知れ渡る魔王に知られていく。内側に獣を飼うヴォバンは、明らかになるにつれて笑みを深めていった。



「は……！ は……！ ぶえつくしゅん！」

ヴオバン侯爵が暗がりて襲撃を企てていたその頃、海人は盛大なくしゃみをしていた。口を両手で押さえ、随分大きなくしゃみだったなと鼻を人差し指でこすった。

「船長、風邪ですか？」

「そんな薄い格好しているからですよー」

「うつせえ！ 風邪なんて柔な病にかかるはずねえだろ！ 休憩終わったら、とつと鍛錬に戻れッ！」

はーい、と弟子二人が返事をして鍛錬に戻るのを、海人はため息を吐いて見下ろしていた。

海人がいるのは、大西洋のど真ん中。青い空の下、船の操舵をしながら、弟子の槍の鍛錬を見守っていた。

上はシャツ一枚に、下はふんどしの上にズボン。どちらも洋服だった。しかしそんな格好をしても、風邪にかかるほど神殺しの体は弱くない。まつろわぬ神には勝てるというのに、風邪に負ける神殺しがいたらお笑いだ。

「ん……う？ 風が出てきたな……」

これは一雨来るかもしれない。海人は権能で、天候を操作しようか考えた。

天候を変えるには、いつものように頭の中で変えたい天気を思い浮かべ、空に向かって使えばいい。だが海人はこの時、あの暗雲のようにこの先に何やら嫌な予感を第六感で感じていた。

「おい二人とも、中に入れ」

「船長？ なんかつごい魔法みたいなやつで、晴れにできないんですか？」

「お前は権能を何か便利な道具と勘違いしてないか？ コーゆーのは、人間だけで対処できれば、使わないほうがいいんだよ。わかったらとつと中に入れ。……大丈夫だ。船がやられるような嵐だったら使うからな」

へーい、と弟子二人が鍛錬をやめて船内に入っていく。

「……デルピノス！」

「へい！ 何かあったつすか、ご主人！」

船の近くで、デルピノスが水面から顔を出した。

「皆に警戒を強めるように伝えろ。……はつきりしてねえが、なんだから嫌な予感がしやがる」

「了解つす！」

デルピノスは水面に顔をひっこめた。デルピノスは司令塔を担っており、海人^{ウミコ}と他の神獣との仲介役をしているのだ。

時は十八世紀中ごろ。海人は長年に渡る戦いの末に『まつろわぬアムピトリーテー』を討滅し、権能を篡奪していた。

権能の名はまだない。海人の名が魔術師界限に轟くのも、もう少し先の話である。

三十九話、邂逅

海人の警戒は杞憂に終わり、海人と二人の弟子の一行は、無事に英国の地を踏むことができた。

しかしまだ嫌な予感拭えず、首の後ろあたりがピリピリしていた。

海人はテムズ川付近の港に船を入れ、錨を下ろして船を泊めた。そして弟子達二人に、おつかいを頼んだ。

「これを届けてくれ」

「これは……？」

海人は弟子に小さな小包を渡した。

「この国にも俺の弟子、つまりお前達の兄弟子がいる。そいつに渡してほしい。剣の腕前ではこの国で五指に入るほど名のある騎士らしいから、名を頼りに居場所を探してくれ」

「え？ 船長、ここ数年船から下りたことないとか言ってますんでしたっけ？ どこでそんな噂聞いたんですか？」

「決まっているだろう」

海人は自分の頭をとんとんと叩いた。そのジェスチャーを見て、弟子二人はああ、と納得した。海人の権能にあるのだ、海人の目や耳を飛ばせられるものが。

用意ができた弟子達が、接した棧橋に降りていくのを見送る。

「ゆっくり体を癒せよー」

この英国に船を泊めた目的は海人の届け物のついでに、物資の買出しもあった。それに海人はずっと海の上で暮らせるのだが、弟子達はそうもいかない。たまには陸に上がらないと、気が滅入ってしまう。

弟子達が思い思いに羽を伸ばしている間、海人は留守番をしていた。

「ふいー」

海人は何処からともなく取り出したリクライニングチェアに身を沈めると、体の底から大きな息を吐いた。

右手の届く範囲にある机の上には、日本酒の入った徳利と盃が置い

てあった。

海人に船での生活は、それほど苦になっていない。

それどころか、故郷に戻っていない海人にとつては、この船こそか
家だった。権能を使えば暴風や嵐は打ち消せせるし、海上のため火事
や地震とも無縁だ。今ではどこかの大陸に定住するよりも、ずっと快
適だった。

あとは酒。酒さえあれば、どんなところでも生活できる気さえし
た。

海人は盃に酒をつぐと、くいつと傾けた。しばらく海人は楽な姿勢
で日光浴をしていた。権能を使う都合上、黒雲も呼び寄せるため、太
陽を見るのは気持ち久しぶりだった。

「のどかだな……」

海人はだらだらと何もしない時間を満喫していた。

若い頃なら暇があれば常に槍を振るっていただろう。しかし今は
鍛錬で槍を振ったのは何時だったか、思い出せなかった。

見えない敵に振るっても、高みに昇っている実感が全くわかないか
らだ。

「ん……う？」

そのままのんびりしていると、何やら船の外が騒がしい。英語で
汚い罵声が、段々と大きくなりながら聞こえてくる。

船の外はデルピノスが監視しているから何かあったら連絡してく
ると思うが……。と思っていると、そのデルピノスの言葉が、頭の中
に直接響いた。

『海人様、ちよつといいつすか?』

海人はこめかみに指を当てた。海人はアムピトリーターの権能で、
デルピノスと直接脳内で会話できるようになっていた。

「どうした、何があった?」

『それが急に男が二人来て、船長は顔を見せろと命令してるつす。ど
うするつすか?』

「んー、程ほどに追い返しておけ。海水でもぶっかければ逃げ帰って
いくだろ」

『了解つす』

デルピノスとの通話が途切れる。これでまたのんびりできる。

『海人様!』

徳利に手を伸ばした海人だったが、またすぐに脳内に響いたデルピノスの声ですつこけそうになる。

「……どうした?」

至福の時間を邪魔されたいらだちを出さず、海人は言葉を返す。

『奴らが船に乗り込もうとしてるつす!』

「はあ? 縄梯子は引き上げたぞ。甲板には乗り込めないはずだぞ?」

『奴ら、魔術師だったようで、宙に浮かんで上がろうと……』

「ちつ、魔術師か……」

海人は上体を起き上がらせると、強引に乗り込んでくるといふ魔術師を待った。すると燕尾服を着た二人の男が宙に浮いて昇ってきた。しかし男達は凶体がでかく、燕尾服は男の筋肉ではち切れそうだった。

服装に似合わず、英国紳士というよりも荒事に慣れた粗暴な印象だ。それは行動にも表れており、無理矢理船に乗り込んできたことからも伺える。

「なんだあ、てめえら? 一体何の目的でこの船に乗り込んできやがった」

「カイト・アンドーだな? 一緒に来てもらおう」

「はん! どこで俺の名を知ったかしらねえが、用があるならここで言うんだな」

「我々はお前をつれて来いとか命令されていない。大人しく着いてこなければ、それなりの手段をとらせてもらう」

「それなり? ははっ、いいぜ、やってみろ!」

「……やれ」

大男のひとりがゆっくりと海人に歩み寄ってくる。もう一人の男は後方で魔術の詠唱をはじめた。しかし海人は椅子から腰をあげなかつた。

海人の前に男が立った。男は腕を振り上げると、海人に拳を振り下ろした。

「ふんっ！」

男の拳が、海人の顔面に突き刺さる。男はニヤリと笑みを浮かべた。

「……その程度か？」

だがまったく動じた様子もない口調で腕を掴まされると、男の笑みはすぐさま引っ込んだ。海人の腕は男より一回り細かったが、万力で締め付けられているようだった。男は情けないことに悲鳴を上げそうになる。

「どいてろっ！」

別の男が退くようにと叫ぶ。魔術の発動準備が整ったようだ。しかし殴りかかってきた男は座ったままの海人に掴まれ、退避することができなかった。

男は海人を中心に回りこみ、殴りかかった男と海人を挟み込むようにして魔術を放った。炎の球が放たれるが、それでも海人は腰を上げようとしなかった。

炎に吞まれる海人。だが炎が引いて中から現れた海人は、火傷のひとつも負ってはいなかった。

「な、なぜだっ！」

「さあ、なぜだろう、なッ！」

海人は炎に吞まれても掴んでいた男を片手で持ち上げると、なんとか持ち上げて魔術師の男へ投げつけたのだ。

男たちは重なって甲板に倒れこんだ。うめき起き上がろうとする男たちだったが、二人を上から海人が踏みつけ押さえつけた。

「ぐうー！」

「もう一度聞くぞ、一体なんの用でここに来やがった？」

「わ、我々はこの船に乗っているカイト・アンドーを連れてこいと命令されたんだー！」

「んー、何のために？」

「会ってみたいから、としか……。それ以外は知らない、本当だ！ 信

じてくれ！」

悲痛な声で訴える様子から、嘘を言っているとは思えなかった。

「俺に、会いたい……？」

どこで俺のことを知ったのだろうか？ 弟子達からか？ それはあり得ない。船から離れた弟子達には、俺の名と教えたことしか思い出せないよう細工を施したのだから。

「だったらそいつに伝えろ……」

海人はその人物に会いたくなかった。どうやって自分のことを知ったのか、聞いてみたくなかったのだ。

「俺に会いたかったら、自分の足で訪ねて来いってな！」

「ひ、ひいいいいいいいいッー！」

海人が足を離すと、男たちは脱兎のごとく逃げ去っていった。



次の日、船を訪ねてきた男を見て、海人は驚いた。

素直にやってきたことではない。たしかに少しは驚いたが、魔術師を差し向けた理由は偵察と、これから行くという予告状の意味もあったらしい。はなから目の前の男は、連れてこれると思っていなかったのだ。

海人が驚いたのは彼が同胞、まつろわぬ神を殺し権能を奪った神殺しだったことだ。

「羅刹王、同類だったか。どんな奴かと思っていたが、珍しいこともあるものだ」

「お招きいただき感謝する。私もカイト・アンドーの人となりを知りたいと思っていた」

海人はこれまでに二人の神殺しと出会っていた。一人は治めている領土に踏み入ったと襲撃され、もう一人は同じ獲物を奪いあい痛み分けに終わっていた。

目の前の男はそのどちらとも違うようだった。文明を解さない野蛮人でも、鬪争に狂う戦闘狂でもなさそうだ。

細身に燕尾服の、理性的な井出達をしている。話がわかりそうだった。

「お初にお目にかかる。カイト・アンドー。私の名はサーシャ・デヤン
スタール・ヴォバン。見抜かれたとおり、あなたと同じ神を殺めた者
だ」

男、ヴォバン侯爵は恭しく一礼した。そのわずかな動作や立ち振る
舞いからは強者感が漂っている。少なくとも修羅場を潜り抜けてき
たと伺える。

「まあ立ち話もなんだ。座ったらどうだ」

海人はヴォバンに椅子に座るよう勧めた。ヴォバンはその椅子に
座り、海人とヴォバンは間に小さな机をはさみ向かい合わせになっ
た。

「とりあえず飲め。いい酒だぞ」

「ふむ……。ワイン、ではないようだな」

出された日本酒に興味を向けるヴォバン。しかし毒を警戒してか、
口をつけようとはしない。海人が実際に盃について飲んでみせると、
ヴォバンは一口だけ口にした。

「なかなか味わい深い。確かにいい酒だな」

「だろう！ わははは、お前は話がわかる奴だな！」

そうして海人はヴォバンが聞いてもいないのに語りだした。二人
の共通の話題といえば、まつろわぬ神か神殺しの話題だ。

ヴォバンとしても願ってもないことだった。ヴォバンが会ったこ
とのある神殺しは、「智慧の王」と呼ばれる神殺しのみ。文明で生活し
て五十年以上、ヴォバンの中にも「いろんな性格の人間がいる」とい
う常識はあった。あくまで人間という括りの中だけであって、神殺し
にはあてはまらないことは想像の埒外ではあったが。

なので初対面から同胞には友好的に接してくる神殺しもいるだろ
う、とヴォバンは考えていた。

会話をする気がなく見敵必殺といった神殺しであっても、それはそ
れでよかった。だが友好的に接してくるのであれば、それを無碍にす
るのは心苦しい。ヴォバンにもそう考える時代はあったのだ。

今回は外れか、とヴォバンは美味しい酒を口に含んだ。

「おっと、すまん。ついつい話し込んでしまった。初対面の者に話すことでもなかったな」

「いや、そんなことはない。なかなか興味深い話を聞かせてもらった。八つの頭を持つ蛇か、会ってみたいものだな」

「そうだ、次はお前が話してはくれないか？ 俺は一年のほぼ全てを海の上で過ごしてる。世間の流れには疎んだ」

「ふむ、あなたの冒険譚よりは榮えないとは思うが、リクエストがあれば聞くがね？」

「……思い出した。昨日からずっと聞きたいとは思っていたのだ。一体どこでお前は私のことを知ったんだ？ 弟子達が思わず喋ってしまふという事はないはずだが」

海人が弟子をとるのは、全員親がない孤児からだ。船が家の海人だが、日本酒などのために時々人間社会に入らなければならない。たまたま目につけてしまった孤児を哀れと思った海人は、弟子として拾って育て上げているのだ。

一人前の大人になったら、船から下ろして免許皆伝としている。その時に海人は弟子達の頭に「海人の名以外を思い出せない魔術」を仕込んでいるのだ。だから弟子達から情報が漏れることはない。海人のことを知っていてもゴタゴタに巻き込まれるだけだ。

「ああ、それは……。こういうことだ」

ヴォバンが手をかざすと、甲板の上に闇の穴が開いた。その穴からヴォバンが情報を聞き出した従僕が出てきた。

名は何と言ったか……。ヴォバンは思い出せない。そもそも名をこいつの口から聞いたことがあっただろうか。だが海人は覚えていたように、呆然としながら呟いた。

「フランク……」

海人もはつきり覚えていた。十年前弟子だったフランクは、この国で船から下ろした。その後の消息は判明していなかったが……。

フランクの顔色は蒼白になっており、とても生きた人間の顔色には見えない。明らかな死体となり、それでも動いていた。

こんな無残な姿になっても動かしているのは誰か。考えるまでもない、目の前のヴオバンと名乗る神殺しだ。

呆然から立ち直った海人は、体の奥底から熱い怒りが湧き上がったのを感じた。

「これはエジプトのとある冥府の神から権能で……」

「も面白い、『冥府』というだけでよくわかった」

「なに……?」

突然、海人とヴオバンの間にあった机が砕け散った。

「ッ！」

「嫌なことを思い出しちゃったぜ……。俺の家族の命を奪った、翼を持つ女神の行いを……！ 貴様の権能はそれと同種のものだ！」

海人は机に拳を打ちつけた格好で固まっていた。机のあった場所には大穴が開いていた。

「既に死した者の魂を現世に縛りつけ、死者を冒瀆する畜生の呪法。しかもそれを我が弟子に行い、よくも俺に見せつけられたな！」

何処からどうやって海人の素性が漏れたのかよく理解できた。海人が弟子達にかけた魔術は、人間が死ぬまで効力は切れない。しかし一度死んでしまえば魔術は解けてしまうのだ。

『死せる従僕の檻』は殺した者を蘇らせ、己の僕にする権能。一度死したフランクは海人を思い出し、ヴオバンに話せたのだ。

「もう何を聞きたくない。俺はお前を許さない、絶対に殺す！」

海人は頭の上に手をかざした。すると船の外から海水が集まり、三叉槍の形をとった。

海人がそれを握ると、水が弾けて中から槍が出てきた。

先が三つに分かれたポセイドンの三叉戟、トリアイナだ。

「構えろ。たとえ命乞いをしても、容赦なく殺すぞ！」

「ふっ、ははははははははははははっ！ 何と心地よい殺気だ！ いいぞ、ますます望むところだ。その槍からは何が飛び出してくる？ 百年以上戦いぬいた神殺しの實力を見せてくれ！」

ヴオバンは海人の態度の豹変を見て、怯えるどころかむしろ喜びで歓迎した。

後に何度もぶつかり合い、不倶戴天の敵同士になる海人とヴォバ
ン。その第一戦が始まった。

四十話、化物

海人は詰め寄ると、そのトリアイナでヴォバンを串刺しにしようと突き出した。だがヴォバンは槍が届く間一髪のところまで従僕を呼び出すことに成功した。ヴォバンと海人の間に盾を持った従僕が割り込み、海人の槍を受け流した。

そこにフランクが海人に剣を振り下ろす。逆に蹴り飛ばすこともできたが、海人は攻撃をためらってしまふ。トリアイナで振り下ろされた剣を受けた海人は、至近距離でヴォバンとにらみ合う。

「なぜたった一人の人間の死を見て、そこまで怒りを見せる？ 人間などという脆い生き物の死など、百年以上生きている神殺しの先達たる貴公なら見慣れているだろう？」

「黙れ！ こいつは……フランクは、俺の家族だ！」

海人は生気のないフランクの顔を覗き込みながら言った。

海人の生きた年月に比べれば短い時間だったかもしれないが、海人はその短い時間で愛を注いだのだ。その愛は他人と比べられなく、海人は彼を息子か孫の様に接した。決してただの人間と切り捨てることはできない。

「家族を殺し、その死を辱める貴様を、俺は許さない！」

「だが人間と神殺しは、同じ時間を生きられない。貴公がどこかで野垂れ死ななければ、寿命で人間が先に死ぬ。今もどこかで貴公の弟子が殺されているかもしれない。その死にさえ貴公は手をつけるのか？」

「そんなに大事ならば、弟子など取らねばよかつたものを！」

別の従僕が召還された。今度の従僕は槍を持っていた。海人のとは違い、穂先はひとつだけだ。

槍の従僕は海人へ槍を突き出すが、海人はそれを避けてヴォバンと従僕達と距離をとった。

「俺が弟子をとるのは、あいつらに助けを求められたからだ。あいつらが俺の前で、生きたいと願ったからだ」

海人の前でその時までには浮浪児だった彼等が助けを求めなければ、海人は弟子にしたりはしなかった。力を与え、送り出すこともなかった

た。

先手を防がれ、若干海人は熱が冷め冷静になってきた。

「不幸は探さない。だが目の前で助けを求める奴を、俺が絶対に見捨てない。……フランク、お前の助けを求める声が聞こえるぞ。だからヴオバン、魂を捕らえて無理矢理従わせる貴様を殺す。殺して魂を開放する！」

「気迫が強いのは結構だが、まだ貴公は私に刃を届かせていないではないか。私の従僕は三つだけではない、その気になればこの船を埋め尽くすことも可能だ。どうやって私を殺そうというのだ？」

ヴオバンはさらに従僕を二体召還した。これでヴオバンの前に、武器を持った従僕が五体揃った。

たしかにヴオバンの言うとおり、船の甲板は手狭だ。あと数体召還されてしまえば、槍を振るう空間がなくなってしまうかもしれない。

だが狭い場所での混戦は海人が最も得意とするところだ。海人は生まれながらにして、その身に剛力を宿している。力任せに槍を振るい、敵を一気になぎ払う。敵船に乗り込んで若いころ何度もやったことだ。

「いくぞ……い！」

海人はヴオバンへ一歩踏み込んだ。しかしすかさず、三人の従僕が一齐に海人に斬りかかった。トリアイナで受け止めるが、手にかすり傷を負ってしまう。海人は一人を蹴り飛ばし、一人をトリアイナで突き刺し、一人を力まかせになぎ払った。

海人は再び一歩踏み込んだ。今度は従僕が二人バラバラに斬りかかってきた。海人は一人目を受け止め盾にしながら、隙を見て二人一気にトリアイナで串刺しにした。その間にもヴオバンは険しい表情で追加の従僕を複数体呼び出していた。

海人はさらに一歩踏み込んだ。従僕が斬りこみ、海人がそれを迎撃する光景が続く。だが海人は初め以外一切後退せず、着実にヴオバンに近づいていた。

「どうした、貴様の従者は俺の前では壁にもならねえ様だな。潔く己から前に出てきたらどうだ、ヴオバン！」

そう言いながら海人はトリアイナでまた従僕を片付ける。従僕の形が崩れるが、これでは魂を開放したことにならない。倒された従僕は、時間が経てばまた復活してしまう。

そしてさらに数体の従僕を倒した海人は、ついにヴォバンに槍が届く距離に詰め寄った。

もらった。そう確信しトリアイナを突き出した海人だったが、トリアイナが空を切って愕然とする。

「ほう……っ？」

また二度、三度とトリアイナで攻撃を繰り返すが、それも全てかわされてしまう。

ひよろひよろの細い体格を見て武術を修めているとは思えなかった。実際、ヴォバンの動きはギリギリで避けていた。まるで追い詰められた獣が本能に従って避けているようだった。

それは正しかった。やがてヴォバンの体がどんどん大きくなっていく。ヴォバンは膨張すると、海人の体長の二倍はあるかという巨大な狼に化身したのだ。

「それも貴様の権能か！」

「そうだ。近づけば必ず殺せると思っていたか？ 私自ら戦う権能もあるのだよ！」

後の世で『貪る群狼』と名付けられる権能は、数千匹にも及ぶ狼を生み出し、自らも巨大な狼に変身することができる。

狼になれば俊敏力と反射神経が研ぎ澄まされ、その大きな牙と爪に攻撃されればひとたまりもない。

「ガアアッ！」

後ろ足で二足立ちするヴォバンは、右前足の爪を振るった。

まともに当たれば鋭い爪が肉を引き裂き、致命傷を負ってしまっただろう。だが海人は逆に振るわれた右前足を、手のひらを合わせるように真っ向から掴み返した。

「なにっ!？」

ヴォバンは左前足も振るうが、それもトリアイナを足元に突き刺し、両手を空けた海人に掴み返されてしまう。巨狼の鋭い爪は、手の

サイズが違うせいでギリギリ届かない。

ヴォバンと海人は両手で掴み合い、押し合う状況になった。

ヴォバンは狼の姿による体格差で海人を押しつぶしながら、手も握りつぶしてしまおうと両腕に力をこめる。膨れ上がった狼のサイズに比例して、握力も何倍にも強くなっている。

「ぐううう、おおおッ！」

しかし呻き声を上げたのはヴォバンの方だった。ヴォバンは握りつぶし海人の腕に爪を食い込ませようとしたが、逆にヴォバン以上の握力で握り返されてしまった。ヴォバンは巨狼となり身体面でとてつもなく強化されている。だが権能で強化されたヴォバンに握力のみであるが勝ってしまう海人は、ヴォバンの巨狼の姿より化け物じみていた。

海人に押し返されそうになるその時、ヴォバンは頭を突き出し海人の頭に噛み付こうとした。

「おっと」

握り潰そうとしていたヴォバンの両手をはなし、それを海人は後ろに飛びのいて避けた。ヴォバンの牙は海人を捕らえず、空しくガチンと歯の合わさる音が響く。

海人は甲板に刺していたトリアイナを引き抜いた。

「その怪力……。貴様の権能か？」

「違うな、俺の怪力は生まれつきだ。使っている権能は、この槍のトリアイナだけ。俺の馬鹿力で振るっても折れない優れものだ。……つまり貴様は俺が本気を出すまでもないってことだ！」

海人が再びトリアイナを構えたその時だった。ヴォバンが顎を開き、口から雷を放ってきたのだ。咄嗟にトリアイナを盾にし、海人は八郎太郎の権能を使った。

「ッ！……残念だったな、雷は俺も使える！」

『マスター、突然起こして権能の制御をさせないでください。こちらにも準備というものが……』

「うっせえ。そう言うがしっかり制御できてるじゃねえか。その調子で頼むぜ」

トリアイナは、ヴォバンの雷を引き裂いていた。八郎太郎の権能は雷を操ることもできるが、精密な操作ができない。制御をトリアイナに任せることで、海人の苦手な細かい権能のコントロールができるようになったのだ。

だが、ヴォバンが雷を放った目的は、海人を感電させるためではなかった。

「勘違いしているようだが、私は当てようとも、それで倒せるとも思っていない」

「なに……？」

『マスター、下です。足元を見てください』

海人はトリアイナの言う通りに足元を見た。今二人の足場になっている船の甲板は、海人たち神殺しの激突で滅茶苦茶になっていた。戦闘が始まる前から歴史的な古さだったため、衝撃に耐え切れなかったのだ。

さらに雷という火種が加わり、木造の帆船からは火の手が上がりはじめた。

ヴォバンが雷を放ち終わると、海人の周囲には大小様々な無数の狼達が、海人を待ち構えていた。

狼達の数は、まさに甲板を埋め尽くすほど。

そして雷を放つのをやめたヴォバンは、時を移さず海人に背を向け、船から飛び降りた。

「狼共、目の前の男を逃すな！ 命に換えても押さえつけろ！」

「待て、貴様！」

ヴォバンの後を追おうとする海人だったが、行く手を狼達が阻む。従僕よりも強くはないが、いかにせん数が多すぎる。

狼達は一斉に飛び掛ってきた。

そして飛び降りたヴォバンは、天にかかった雷雲に命令を下した。

テムズ川下流付近の天気は開戦前の快晴から一転、突如かかった雷雲で雨は降らずとも大荒れだった。ヴォバンが戦闘の最中、海人に気づかれないよう呼び寄せていたのだ。それを海人も出来ると知らないのは、仕方のないことだった。

古ぼけた帆船に、特大の雷霆が振りそそいだ。

大きな音を立てて燃え上がる帆船。造られたときは鉄の装甲もあつたが、今は重いという理由で取り外されている。雷に打たれれば、乾いた薪でしかなかった。

ヴォバンは狼の化身のまま着水するが、巨体での着水音は落雷の音で容易にかき消された。

帆船は燃え盛る炎とともに、海に沈んでいった。



G u u u …

海から港に上がってきたヴォバンの姿は、巨狼のままであつた。全身ずぶ濡れの巨狼は出てきた後、体を激しく震わせて水を弾き飛ばした。

ヴォバンは化身を解かず、狼達を無数に呼びだした。

「狼共、海を見張れ！」

命令された狼達は、港の海に面する場所にズラリと並んだ。召還された狼達の数は多く、港を埋め尽くす勢いだった。

狼達は言いつけどおり海を見張っている。

ヴォバンは、あの程度で海人が死ぬとは思っていなかった。ヴォバンも何度も絶体絶命の危険を乗り越えてきた。海人も神を殺めた者同士だとすれば、しぶとく生き残っているはずだ。

だからヴォバンは海から陸に上がれる場所を見張らせ、陸に上がってきた所を叩こうというのだ。

さあ来い。ヴォバンが拳を握りしめたその時、巨狼の第六感がヴォバンに警鈴を鳴らしてきた。本能に従って右に飛び退くヴォバン。

刹那、海が割れた。

海の裂け目はヴォバンに向かって直線に伸び、直線上にいる狼達を吹き飛ばした。そしてヴォバンの一瞬前までいた場所を何かが通り過ぎ、ヴォバンが後ろを振り向くと、そこには海人がいた。

「避けた……？ 厄介だな、その第六感は」

海人が乗っている馬はこの世のものとは思えない体色をしていた。体の色が海のように深い蒼、虹色のたてがみ。海人の愛馬、アリオンだった。アリオンもポセイドンの乗っていたヒツポカムポスと同じく、音の速さで走ることができた。

「ちと数が多いな。この数じゃ俺も倒すのに数分かかりそうだ」

海人は港に並ぶ狼達を眺めて言った。ぐるりと全体を見渡し、最後にヴォバンを見てニヤリと口角を釣り上げた。

「もしものため、呼んでおいたのは無駄にはならなかったな」

「キャウンー！」

ヴォバンの背後で狼の痛々しい鳴き声が聞こえた。振り向くと、ヴォバンは目を疑った。

狼がカジキマグロに突き刺され、体を串刺しにされていたのだ。

カジキマグロの吻——剣の様に鋭く伸びた上顎に突き刺され、体を貫かれた狼は灰になって消えてしまう。

さらに驚く事態が起き、地面に突き刺さったカジキマグロの尾びれが割れ、伸びて足となった。ひれも伸びて手となり、ヴォバンが狼の化身に変化する様に体がどんどんと膨張していった。

ヴォバンがあっけにとられる中、カジキマグロは四肢と魚の顔をした、身長一メートルの人間の形に変態した。

驚きはそれに留まらない。巨狼の類まれなる聴覚が、沖でバチャバチャと何かが水面から跳ね上がる音を聞き取る。空を見上げると、そこには何十メートルトビウオの様に飛び跳ねたカジキマグロの大群が。

カジキマグロの大群は弧を描き、吻をこちらに向けて落下してきている。トビウオの様にとっても、水面に着水するのではなく港に着弾しようとしているのだ。

あの高さから落ちれば、鉄の板でも鋭い吻で穿たれてしまうだろう。ヴォバンは急いで狼達に退避するよう命じた。

だが、遅かった。

半分以上は逃れられたものの、それ以外の狼はカジキマグロに捉えられ、吻の一撃で絶命してしまった。

そして後から降ってきたカジキマグロ達も最初の一匹と同様に変態し、人間の形態になった。

「これが俺の兵士だ」

ヴォバンは自分の策が崩れるのを感じた。海人には一対一の白兵戦では敵わないと考え、広い場所で多対一の戦いを挑もうと船を燃やしたのだ。

だが海人も手下を増やせるのであれば、今の状況は最悪に近い。こちらは無限に狼を生み出せるが、それも『体力が続くまで』という制限がつく。対して海人の数は未知数だ。

それに海人とカジキマグロの兵士に、ヴォバン達は挟み込まれている。

「権能を使うまでもない、のではなかったのか？」

「同朋との決闘だというのに、本気を出さないのは失礼かと思ってね」

「決闘、だと？ いつからそんなものになった！ これは貴様がふっかけた、殺し合いの喧嘩だろうー！」

「……おお。そうだ、そんな理由で始めたのだった」

海人は本気で忘れていたとばかりに、しきりに頷いていた。

「俺はあまりにまつろわぬ神を殺しすぎたせいで、神のほうから逃げていく……。戦いを挑まれたのも久しいことだった。たとえば命知らずだったとしても、な」

海人はトリアイナを構えた。ヴォバンもそれを見て、両前足を地面につく。最も素早く走りやすい姿勢だ。

カジキマグロは歯をガチガチ鳴らし、狼達はうめき声を上げ威嚇した。

「さあ、合戦の始まりだー！」

海人の掛け声を合図に、海人とヴォバンの軍団が激突した。



数時間後、港は血痕と血なまぐさい悪臭に包まれて……。はいなかった。

悪臭に包まれてはいたが、それはカジキマグロの魚臭い匂いだった。

「……逃げられた」

海人は残ったカジキ達と狼を掃討しながら呟いた。カジキ達を食いちぎって倒そうとして襲ってくる狼達を、一匹一匹潰していたのだ。

カジキ達は狼の様に消えてしまうのではない、ちゃんと卵から孵化しているのだ。だからこうして死体も残る。

ヴォバンは混戦に紛れて、まんまと逃げられてしまった。日ノ本の合戦に例えれば、ヴォバンは落ち武者となったと言える。

だが、このままロンドンの街に乗り込むわけにはいかない。海人はロンドンを知らない。敵地に乗り込むようなものだ。

ヴォバンは地の果てまで追い詰めるとして、準備をしなくてはいいない。

「まずは……船を捜すか」

黒い煙を上げて海の藻屑となってしまった船兼家を眺め、海人は大きなため息を吐いた。

幕間、魔教教主／洞窟の女王

羅翠蓮濠は、中華武林の頂点であり、魔術結社『五嶽聖教』の教主でもある。そのような立場になったのも、その身に修めた武術を以って神より神功——権能を篡奪した、神殺しの一柱であるからだ。

弟子達には、おもに羅濠教主と呼ばれている。

普段は黄山の山奥に籠り、俗世にはあまり現れない羅濠だったが、彼女はロンドンの裏路地に現れていた。武術の達人である羅濠は飛翔の術を使い、ひとつとびで此処まで来た。羅濠教主にとっては地球の裏側であっても散歩気分なのだ。

ロンドンに来た訳は、『鉄輪王』という武芸の達人からの頼みがあった。旧知の仲であった彼から末期の望みとして、羅濠は此の地に盗み出された神具『金剛三鈷杵』を始末しに来たのだ。

時は一八五一年。ロンドンの裏路地は、悪臭が充満していた。あらゆる匂いを煮詰めたような混沌とした臭気が鼻をつき、路地にへたり込む浮浪者や阿片中毒者、表では決していい顔はできない黒い服を着た怪しい男達など。

時刻は夜で、付近の怪しい店からの明かりのみが、裏路地を照らしていた。

そんな文明の退廃を羅濠教主は悲嘆も侮蔑もせず、ただ冷然と眺めるだけだった。

早く鉄輪王の依頼を済ませてしまおう。羅濠は裏路地を抜けようと歩みを進めた。

歩みを止めるつもりはなかった。だがしばらくして、声をかけられた羅濠は思いがけず歩みを止めてしまった。

「おい、その東洋人のお嬢さん。青い着物を着たそのあんただ」青い服を着た女、と言った時点で羅濠は足を止めていた。声をかけたのは、建物にもたれかかり路地に座り込んでいた男だった。

男の身なりは良いものとは言えず、他の浮浪者と紛れて違和感はなかった。男は持っていた酒瓶をぐびりとあおると、若干赤らめた顔を向けてきた。

わずかな明かりで照らされた肌は、白と黒の中間あたり。男はここ
欧州人から見れば、東洋人と呼ばれる人種だった。

「こんな遠い地で会ったんだ。同郷のよしみで頼みがある。俺に酒を
恵んではくれねえか？」

男は酒瓶を逆さにして、酒がなくなつたことを示す。羅濠はひたひ
たと男に向かつて、歩む向きを変えた。

「少し違います。私は大陸で生まれました、倭国の者よ」

「ふうん、そうか。確かにその薄い服は日ノ本ではないな。大陸の者
か。まあいいさ。それでどうだ？ 酒がなけりや、金子でもいいぞ」

羅濠は物乞いの男の眼前まで近寄ると、座り込む男を見下ろす形で
注視した。

「ひとつ尋ねましょう」

「うん？ なんだ？」

「何故私の姿が見えるのですか？」

「は？ 何を言つて——」

物乞いの男が言い切る前に、羅濠は蹴りを叩き込んだ。

男はレンガの壁に叩きつけられ、路地にドンと轟音が響く。盛大に
煙を巻き上げ、羅濠教主は壁に大穴を開けて男を吹き飛ばした。

一斉に路地にいた人間の視線を集める。ただし視線の向いた先には
大穴があり、羅濠には全く向かなかつた。

「とぼけても無駄です。私は隠行の術で姿を隠していました。私の術
ともなると、半端な術師では見破ることはできません。……あなたは
何者ですか？」

煙が晴れて、壁に開いた大穴の中から男が出てきた。肩には、身の
丈もあるような巨大な三つ又の槍をたてかけていた。

立ち上がった姿から男の身長は180センチほど。体格はがっし
りとして、あの巨大な三叉槍を振り回せるほどには鍛えられているよ
うだった。

「ほう、そうだったのか。中国から『武林の至尊』とやらが来るとは風
の噂で聞いたが、お前が『羅濠教主』か」

先ほどとは気力がみなぎりまるで別人となった男を見て、羅濠は直

感的に判断する。

この男は神殺しだ、と。

だとすれば、隠行の術が効かないのも説明がつく。

「あなたの名、もしやサーシャ・デヤンスタール・ヴォバン……ではないですね」

「当たり前だ、俺の名は安東海人。その名は、絶対に殺すべき男の名だ」

その名を聞いた男——海人の目がすつと細められた。

がやがやと、外野が騒がしい。二人が視線を交わすこの間も、羅濠の姿は隠行で消えていた。傍から見れば、巨槍をかついだ男が、まるで見えない女の霊と喋っている光景になる。

「奴に用があるのか。なら……行かせるわけにはいかねえな」

「邪魔をするというのであれば……押し通るのみです」

海人が槍を持ち直し、羅濠も応じて構える。一般人でもわかるようなピリピリと緊張感をはらんだ、一瞬触発の雰囲気に含まれる。

海人と羅濠がぶつかろうとしたその瞬間、二人の間に割って入る影が現れた。

「おふたりともっ、おやめくださいッ！」

空気を読めないのか、それとも空気を呼んでそれでも飛び込んだのか、インド人の少女が神殺し二人の間に割り込んできたのだ。

「おふたりとも、喧嘩はいけませんっ！」

「……」

「……けっ」

突然の闖入者に場がしらけたのを感じたのか、海人は槍の形を解いた。槍は水になって床に垂れると、地面に吸われてなくなってしまう。

「興が冷めちまった……。勝負はおあずけだ。観客も多いからな」

「逃げるのですか。私と同じ王の器を持つ者よ」

「違う。獲物を譲ってやる、と言っているんだ。俺はヴォバンが命を落とせばそれでいいからな。……ただし、トドメをさせ。ささなければ、俺が漁夫の利をもらうぞ」

そういう捨てる、海人は羅濠に背を向けた。

「ああ、待ってください！ その遅い方！」

インド人の少女が声をかけるが、無視して海人はロンドンの闇に消えてしまった。インド人の少女は羅濠と海人を交互に見て、どちらを引き止めるか迷っているようだった。

あの男と、私を？　そこで羅濠は違和感に気づいた。この少女は隠行の術を使って姿を消しているはずの羅濠を、しっかりと捉えているようだった。

気のせいだと自分に言い聞かせ、厄介ごとから遠ざかろうとした羅濠だったが、少女が声をかけて引き止めた。男性と女性のどちらかなら、話しかけやすい女性の羅濠にしたようだった。

「あの、私、アイーシャつていいいます。あなたの名を教えてくださいませんか？」

羅濠も無視して歩き出す。だが海人の時とは違い、羅濠に狙いをさだめたようだった。必死についてくる。

周りをうろちよろとうつとおしい少女のことを無視しながらも、羅濠は頭の中で少女の正体を考えていた。

王の器である神殺しには、隠行の術は効かないようだった。だがこのアイーシャと名乗る少女が自分と同じ器とは考えにくい。覇気も貫禄も、荒事には全くの不向きな柔弱な印象を受ける。

結論として、羅濠はどこかの高名な魔術師なのかと考え至った。このロンドンには、多数の魔教徒が入り乱れている。羅濠の術を破るとは相当の使い手だとは思いますが、そういう者もこの世にはいる。いないわけではない。

こんな剣も握ったことのない少女が、私と同じ神殺しを成したはずがないのだ。どこか言い聞かせるように羅濠は思ったが、一日後にその考えが間違いだったと撤回することになる。



羅水蓮濠と安東海人が邂逅したその日の内に、羅濠教主はヴォバン

る春の癒しの力を、冬の死の力に反転させたのだ。

この時ロンドンには、安東海人、サーシャ・デヤンスタール・ヴォバン、羅水蓮濠の三名の他に、四人目の神殺しがいたのだ。

それがアイーシャだ。彼女は暴風を吹雪に変えると立ち上がった。権能でアイーシャは『冬の女王』となり、吹雪では彼女は止められなくなった。

アイーシャはヴォバンと羅濠が闘っているであろう、屋敷の大広間だった場所へと向かった。案の定、二人はそこで激戦を繰り広げていた。

アイーシャはやめるようにと必死に叫ぶが、暴風がうなり風の音で二人には聞こえない。こうなっては仕方ないと、『冬の女王』の力を闘争を続ける二人に向けようとした。

台風の目に突入する前に、善なる者に幸運が来る権能をかけた、その時だった。

背後からアイーシャの両側を抜けて、雷が迸ったのだ。

「きゃあっ！」

突然の攻撃に悲鳴をあげるアイーシャ。雷撃はアイーシャには当たらず、抜けてヴォバンと羅濠が闘う戦場まで行った。

「ぬっ!？」

「なんだと!？」

第三者からの攻撃を、狼状態のヴォバンは権能で逸らし、羅濠は瞬間移動で避ける。

そして二人の視線は、離れた場所で蹲るアイーシャ、そしてさらに離れた場所で三叉槍を突き出す海人へと向かった。

「安東海人！ 私の決闘に水をさすとは、一体いかなる了見があつてのことですか！」

「ちっ、また貴様か。カイト・アンドウー。いい加減私を殺すのは諦めたらどうだ！」

羅濠は決闘の邪魔をされたことに対し怒りを露にし、ヴォバンはというと一世紀以上も命を狙われていることに、怒りというよりも諦めが強く感じられた。

そして海人の苗字は、ヴォバンに間違つて覚えられていた。

「……悪かったな。だが言い訳をすれば、雷はお前等に放つたもんじゃねえ、その小娘に放つた物だ。そいつの呪力の高まりを感じなかったのか？ 漂う危険な匂いを、只人には秘すことのできない呪力の量を。こいつは……」

海人は苦々しい顔で言った。

海人が喋る間、アイーシャはそつと後ろの様子を伺つた。見ればアイーシャのすぐ後ろに、『金剛三鈷杵』が転がっている。風に巻き上げられて降つてきた『金剛三鈷杵』が、アイーシャと海人の間に割り込み、雷を逸らしたのだ。

あの方が二人の喧嘩を止めてくださつた。アイーシャは海人に感謝した。

怖い思いはしたが、怪我をさせずにあの二人を止めてくれた。権能を持って日が浅いアイーシャでは、権能を上手く扱えず、手荒な真似をしなければお二方を止めることはできなかつただろう。

アイーシャは蹲つた状態からすつと立ち上がり、三名の視線を一身に集める。

「そうなんです。実は私、御主人さまお姉さまも、海人様も昨日は気づいていらつしやらなかつた様ですけど」

お二人は実はいい人なんです。ヴォバン御主人さまは私が失敗をしても何も言わずに許してくれるし、羅濠お姉さまは相槌をうって私の話に耳を傾けてくださいます。

なので誠心誠意、心の底から説得すれば、必ず争いを止めてくれます！ アイーシャはそう思っていた。

「神様の力を持つているんですよ！ どうかお二方、喧嘩はおやめください！」

だが、現実はその上手くはいかなかった。



その後の顛末はというと、二人の闘争は収まらなかった。

ヴオバンと羅濠の両名は矛を納めようとはせず、それどころかアイーシャにもその牙を向けたのだ。

さらにその中に海人が加わり、神殺しの各々が全員を纏めて相手取ろうとする。

海人とヴオバンは宿敵同士であるし、羅濠と海人は元々邪魔が入らなければ昨日闘おうとしていた。ヴオバンと羅濠は今まで闘っていたし、アイーシャは他三名にとってイレギュラーと呼べる存在だ。

こうしてバトルロワイヤルは始まり、最後はアイーシャがペルセポネの権能の切り札でもある『冥府落とし』を凶らずとも使い、三人まとめて現世から姿を消してしまった。

だがその三名は、ヴオバン、羅濠、海人ではない。ヴオバン、羅濠、アイーシャだった。

『冥府落とし』を切り札と言われるだけあって強力だ。まともに食らえば仮死状態になってしまう。しかしヴオバンと羅濠の二人は地割れに落ちるも飛翔して堪え、海人はそもそも落ちなかった。

そんな時、地割れの裂け目から強力な吸引力が働き始めた。地の底に向かって風が吹き始めたのだ。

海人は槍を地面に突き刺し堪えていたが、ヴオバンと羅濠、そして近くにいたアイーシャが吸い込まれてしまったのだ。

術者がいなくなったため地割れは閉じ、その場には海人一人だけが取り残される形となった。

海人は呆然とした。一世紀以上追いかけていた仇敵と、昨日の夜出会った好敵手となりそうだった武闘家の同胞二人が、一気にあっけなく死んでしまったのだ。

海人はその場で両膝をついて脱力してしまう。生きる目標を失った気分だった。

実は地割れに吸い込まれた三名は、現世とは違う別の世界に行っているのだが、この時の海人は知る由もなかった。三人が生きていることを知るのは、少し先のこと。

しばらく脱力していた海人だが、このままでも仕方ないと立ち上がった。

これからどうするか。この百年で海人は弟子を取るのを辞め、一人でこの島国を放浪していた。

とりあえず、船を用意する。そして――。

「……十三湊に、帰ってみるか」

目的地はそこにしよう。海人は側頭部に手を当て、デルピノスに連絡をとった。

どうせなら、派手な船を造ろう。この先のずっと未来の誰も真似ができないような、見たら忘れない印象に残る船を――。

第六章 帰郷と再会 四十一話、秋田

安東海人は羅刹王である。民衆に災いをもたらす『まつろわぬ神』を刹逆し、神を神たらしめる権能を奪った神殺しである。

『魔術師の王』と呼ばれるほど魔術師に注目されている羅刹王の海人だが、意外にも欧州の魔術師には海人の出身が何処の国かは判明されていなかった。

一世紀にも渡り欧州でヴォバン侯爵を追いかけ、散々暴れまわったのに、だ。

その髪と肌の色から大陸の端にある地域の出身であるのは判別できる。しかしヴォバン侯爵が『アンドウ』とファミリーネームを間違って覚えている、二世紀以上前から活動しているため記録がない等という訳から、東洋人であることしか知られていなかった。

そんな海人は、船の甲板から奥羽の連峰が見える、日ノ本まであと少しという所までやってきていた。

「ここからの景色は変わらん」

だが文化や街は変わっているだろう。西暦一八五二年。海人が日ノ本に帰らなくなつてから、およそ二百年という年月が流れていた。

時の流れは平等だ。万物に平等に訪れて、平等に過ぎ去っていく。時代で変わらないものはなく、十三湊も様相は様変わりしていることだろう。

文明も発達して、海人が見たこともない技術が使われているかもしれない。西洋ではこんな船を造ることもできるのだ。西洋の発展には劣るとも、目を見張る発見があるかもしれない。

それに何より、羅刹王と違って、人は歳をとる。生きとし生けるもの全てに寿命が訪れて、そして死ぬ。海人が十三湊で生活していた時の人間は亡くなり、海人を知っている人間はもう生きてはいないだろう。

「そう思うところの景色も違って見えるな」

心なしか昔見た景色よりも一段高い位置から眺めているような……。いや、それは当たり前か。

海人は自分の乗る船に視線を向けた。大きな三つのマストに、黒い煙を上げる巨大な煙突。甲板の手すりから身を乗り出して船を向けば、海水を漕ぐ水車が見えるだろう。

海人は蒸気船に乗っていた。機関で動かした外輪を推進力としているが、燃料節約のため帆もついていた。そのため蒸気外輪船、機帆船とも呼ばれているようだ。

何故海人がそんな船に乗っているかというと、奪ったのだ。

アメリカで完成間近だったこの船に真夜中に侵入し、石炭をくべて機関を動かし出航したのだ。

イギリスから大西洋を渡るのに別の小さな小船を用意していたが、途中で酒が尽きるという事態が発生したのだ。食料は魚を釣ればどうともなるが、酒は買わないと手に入らない。

酒の枯渇は海人にとって死活問題だ。それくらいしか娯楽がないとも言える。

なので太平洋を渡っても尽きないほど酒を貯蔵できる船を、海人は欲しかったのだ。

「……」

「うん、どうした？ ……そうか、石炭が尽きたか。なら水車は動かさなくていい。十三湊も近いしな」

船内から、海人の兵士である魚人が出てきて、海人に燃料がなくなったことを告げた。頭が魚なので知能はないと思われるが、海人が手を加えたことで意思疎通し命令を理解できるほどの知能ができた。やがて外輪がゆっくりとなり、水を漕ぐに立てていた音がとまった。

「さあ、十三湊は一体どんな様子だ？」

この大ききの船だと、港に入れると座礁してしまうかもしれない。沖に停泊させ、小船で上陸しよう。

海人は念話で舵をとる魚人に、船の進む方向を指示した。

◆
十三湊に小船で上陸した海人は、棧橋から上がって十三湊の様子を観察した。

港には民衆が押しかけており、喧騒で騒がしかった。人々の視線の先には、海人が奪ってきた蒸気外輪船があった。

海外の船が珍しいのかと海人は推測した。港に停泊している船を見れば、外国の船は海人以外にアイヌの船しかなかった。

だが、それだけではないらしい。耳を澄ませて民衆の声を聞くと、不安や警戒の声のほうが大きかった。

驚きの声も煙突と大きな外観に驚く声もあれば、なぜこんなに早く、あと半年もあるぞ、と。まるで海外の船が来ることがわかっていたような驚き方もあった。

意外なことだったが、その海外の船から降りてきた海人は注目されていなかった。

何故だかは知らないが、この内に群集に紛れてしまおう。海人は棧橋をすぐに離れようとした。しかしその時、海人は前方から来た、帯刀した侍に声をかけられた。

「待て、その男！ 貴様、黒船から降りてきたな」

だんだんと近づいてくる侍。侍の声を聞いた群衆がぎつと、海人と侍の二人から距離をとった。

海人は大人しく隠れることを諦めた。と同時に既視感も覚えていた。

こんな事が前にもあったな……。海人は額に手をあてて思い出そうとする。

二百年前、前回のことだ。十年も時間を開けて十三湊に帰ってくる、二人の水軍兵に拘束された事があった。その時は海人を知っていた兵達の上司がいて開放されたが、その日の内に海人は日ノ本を出て、それ以来帰ってこなかった。

だが海人にはどうでもいいことなので、忘れていた。

「貴様、名を名乗れ」

「俺か？ 安東海人だ。一応、武家の出になるか」

「安東？ 武士だと？ 刀さえ持っていないではないか。……見たところこの国の者のようだが、何故黒船から降りてきた？」

「黒船？ あの船のことをそう言うのか？」

「とぼけるな！ まさか貴様、南蛮の国の間諜ではあるまいな！」

侍が真剣を抜く。悲鳴が周囲で上がる。

海人はやれやれといった様子で自然体のままでいた。しかしそれが命しらず馬鹿に見えたらしく、侍は怒気をみなぎらせた。

神経を逆撫でするようであれば斬り捨てられても文句はいえない。だが海人はその程度脅威に値しないと余裕の表情だった。

いつ斬りかかれてもおかしくない雰囲気。そんな中、海人と侍二人の間に、若い女性の声が割り込んだ。

「待ちなさい！」

「ッ！ 誰だ!？」

「……あー」

侍は声の聞こえた方向に振り返った。海人はまた呑気にひとり言を零し、誰かが割って入る状況に既視感を感じていた。

声の主は想像通り、まだ成人になって間もない少女だった。

歳は十五あたりだろうか。周囲で傍観する民衆とは別格の着物を着て、彼女だけ切り取られた別世界にいるようだった。

帯刀してはいなかったが、彼女の後ろに帯刀した屈強な男二人が、護衛として付き従っているようだ。

『秋田』芽衣。それが私の名。……その男は私達が連れて行くわ。あめりかを知る重要な情報源だもの、斬ってしまえば聞き出せないでしょう?」

「秋田の小娘が、ここは南部の所領だぞ！」

「だからこそ、よ。あなたが城に連れて行ったとしても、あんたの様な浪人風情が取り合ってもらえる訳ないでしょ。ほら吹いてふっかけようって思われて、簡単にあしらわれるわよ」

「ほー」

侍の男もそれなりに上質な着物を着てると思ったが、人々の生活水

準も上がっているのか。海人はまるで他人事のように、二人が言い争うのを眺めていた。

それよりも聞く限りで重要なのは、ここが南部の領地になっていることだ。安東家の一族は一体どこに行つたのか？ まさか断絶してしまつたのか。

二百年の変化に、海人の疑問は尽きない。

「だからさっさと去りなさい。あなたの出る幕はないわ」

「……ちっ」

侍の男は舌打ちすると、無言で去っていく。

男の姿が見えなくなると、秋田と名乗つた少女が海人に近寄つてきた。た。

「さあ、一緒に来てもらおうわよ。まさか嫌とは言わないわよね？」

「けっ、嫌だね。俺は誰の指図にも従わねえ。例えそれが神であつてもだ」

そう海人は吐き捨てた。今まで国や法に縛られず生きてきた海人が、はいそうですかと従うはずがなかつた。

海人はこうすれば彼女は激昂するか実力行使に出るかと予測していたが、どちらでもなかつた。

芽衣は無防備に海人の目の前まで近づくと、小声で囁いたのだ。

「海人様。場所を変えましょう、人気のない所に。羅刹王であるあなた様に手荒な真似などいたしません」

少女の言葉に、海人は目を見開いて驚いた。この少女は海人のことを知っている。それにまつろわぬ神も、それを殺した羅刹王が存在する事も。国長でも知らないことを、この秋田芽衣と名乗つた少女は知っている。

「……わかつた。案内しろ」

「有難う御座います。——ついてらっしゃい！」

芽衣は短く感謝を述べると、今度は命令口調で声を張り上げた。海人が自分に従っていると周りの人々に示すためだ。

海人は芽衣先導の下、前後を護衛二人に守られながら、人通りの少ない裏路地へと入つていった。

◆
「ふんふふーん、ふんふふーん」

裏路地へと入り人が少なくなつた途端に、高圧的で不遜に振舞つていた芽衣が、まるで童心に還つたように笑顔で鼻歌を歌いはじめた。高価な着物でなければ、その場で回つて踊りだしそうなほどの浮かれっぷりだった。

海人は少女の雰囲気が一転三転するを見て、目を白黒させた。

「……いいのか、あんなに浮かれていて。一国の姫に相応しき振る舞い、とかあるんじゃないのか？」

「はっ、良いのです。芽衣様は秋田大名家の娘として作法を身につけてはいますが、あの歳で檜山から出たことはありません。初めての旅に初めて見る他国、姫様にとっていい息抜きになることでしょう」

護衛の者に聞いてみたところ、日頃息苦しい生活を強いられているので、今回だけは大目に見て休息をとらせよう、ということらしくかつた。周囲の目からも開放されて、今の彼女の姿が一番楽な姿なのだろう。

だとすると、あの娘がここに居るのは普通ではない。普通ではない日に海人がちょうど十三湊に都合よく訪れるのは、

しばらく先導する芽衣に海人達は付いて行つた。人気のない細い路地に入ると、芽衣はくるりと振り返り海人に恭しく頭を下げた。

「お初にお目にかかります、私の名は秋田芽衣と申します。海人様、先ほどは羅刹王の化身たる御身に無礼な態度で当たつたこと、真に申し訳ありませんでした」

「別に気にしちやいない。それよりも、その謙るような口調はやめろ。お前に一番話しやすいように話せ」

「では、お言葉に甘えて」

頭を上げた芽衣は、花が咲くような満面の笑みを浮かべていた。

「海人様、と呼ばせていただきますね。そうしないと気を緩めた時にうっかり出ちやいますから。それをおば様に聞かれたと想像したら、

もう……！」

芽衣は肩をぶるりと振るわせた。その『おば様』という人が、芽衣の教育係のような人なのだろう。彼女にとって頭の上からない存在のようだ。

「あの侍の反応も、あんな事があつた後では仕方のないことなのです。どうか許してあげてください」

「そういうえば、民は船を指して黒船と呼んで、どこか不安で怯えていたな」

「半年ほど前、江戸の浦賀沖に四隻の蒸気船が来ました。あめりかと言う国の使者であり、来航の理由は『開国』、外国に港を開くようにとの半ば脅しの要求でした。その時に江戸で発した不安と噂が、江戸から遠いこの十三湊にまで響いて伝わっているのです」

一八五三年、黒船来航。アメリカのペリー率いるインド艦隊が、浦賀に来航し日本に開国を迫った出来事だ。この時から明治維新までを『幕末』という。

そんな黒船来航と全く同じ時期に、同じ船に乗って海人は日ノ本へ帰国してしまつたのだ。

「あんなに目立ってしまったえば、すぐに幕府に知らせが行くでしょう。なのであの黒船には戻らないほうがいいです」

「それなら仕方ない。しかし、酒がなあ……」

「さ、酒、ですか……。そういうえば酒が好きだと言っていましたね……。すみませんが、諦めてください。替わりにこちらで用意しますので」

「そうか、ありがたい。だが聞き捨てならないことを言っていたな。『言っていた』だと？ 俺が羅刹王であることも、酒が好きであることも、一体誰から聞いたんだ？」

海人が日本にいたのは二百年も前の話である。まつろわぬ神がいることも、それを殺した羅刹王がいることも知っている。それはあり得る話だ。

だが海人個人の好物まで知っているとは。まさか海人の記録が残っているわけでもあるまい。どうやって知つたのだろうか。

「この十三湊も二百年も前は秋田の領地だったのです。しかし家督を兄弟どちらかに相続するかという問題で、家が二分されてしまいました。その混乱している最中に南部家に侵攻され、弟の実季が治めていた十三湊の秋田氏は滅亡してしまいました」

そこまで言われて、海人はようやく思い至った。

「てことはお前は、まさか……」

「はい。檜山の安東家は姓を改め、秋田家となりました。私は安東氏から代々続く秋田氏の直系。——海人様はご先祖様に当たります」

まるで時を越えてきたみたいですね、と芽衣——海人の子孫にいたる少女は、朗らかに笑った。

四十二話、再会

黒船で十三湊に帰ってきた海人は、そこで帯刀した男にアメリカの間者だとして疑われて斬り捨てられそうだった。

海人にただの鉄の刀など命を脅かす脅威にはならないが、穏便に済ませておきたかった。そんな時、秋田芽衣と名乗った少女が助けてくれたのだ。

少女は海人のことをよく知っていた。少女は、海人の遠い子孫だったのだ。

「半年ほど前に、海人様が此処十三湊に帰ってくるという予知があったのです。見上げるほど大きな異国の船で上陸する、と。なので私は海人様をお迎えに上がったのです。異国の船で来たのなら面倒なことになるだろうから、私の気分転換も兼ねて、こうして十三湊に来た、という訳です」

「なるほど、助かった。芽衣は未来のことも見えるのか」

「あ、いえいえ！ 誤解があるようですけど、私が予知したわけじゃないです。私は予知の内容を聞き、お迎えという仕事を請けただけ。海人様が帰ってくるという予知を授かったのは、おば様です」

「おば様か。その人は芽衣の本当の叔母なのか？」

「それも違います。私の母の、そのまた母の時から政などに助言を頂いている方です。声は拝聴しましたが、私は姿を見たことはありません」

だが声から察するにそれなりのお歳の様だが、老婆の様にしわがれてはいない。お婆様は失礼かもしれないし、お姉様は嫌味にとれるかもしれない。そう思い芽衣は間を取って『おば様』という呼び方をしているらしかった。

「なら芽衣を迎えによこしてくれた、そのお婆様とやらには礼をしなきゃな」

「でしたら！ 着いたら私が檜山をご案内しましょう！」

「ははは、じゃあ頼むか」

「お任せください！ あ、でも檜山に行く前にその……。この十三湊

を隅々まで巡りたいのですけど……。よろしいですか？」

「まあ、急かすことでもないしな。ゆっくりでいいぞ」

「はいっ！」

芽衣にぱあつと笑顔の花が咲いた。外の世界を見ることが、本当にうれしいのだろう。

それに海人もこの十三湊を見て回りたいとは思っていた。義父の重蔵と海人の行き着けの酒屋は、まだ残っているのだろうか……。

「ああ、そうだ。一番大切なことがあった」

「……？　なんですか？」

「愛代……。いや、安東愛季と安東一族の墓は、何処にある？」

この時代、領主であつても女というだけで下に見られることが多い。そのため愛代は、表では愛季という男の名を称していた。

海人の妻であつた愛代、義父の重蔵、義妹の仁実の墓参りをしたかった。重蔵はしたことがあるが、愛代と仁実は一度も墓参りをしていなかった。

「はい、安東愛季の墓所なら檜山の寺にあります。奥様でしたよね。他の方々も調べればわかると思います。……他にはどんな人を？」

海人はそこで重蔵と仁実、そして自分の息子二人の名を出した。

それを聞いた芽衣は、その内の一人の名を知らず、首をかしげた。

「申し訳ありません。仁実という人だけは、私はおば様から聞いたことがありません」

仁実の名は存じてはいなかったが、重蔵の名は知っているという。

重蔵の実子だと海人は教えた。護衛の二人にも仁実という名を知っているか問いかけたが、初めて聞いたと言った。

「不思議なこともあるものだな」

仁実は少なからず内政に関わっていたはずだ。それなのに知れ渡っていないのは、おかしい。海人は、この時はまだそうとしか考えしていなかった。

「その仁実という方は、一体どのような方だったのですか？」

「そうだな、仁実はな……」

十三湊を巡りながら、海人は芽衣に先祖がどんな資性か、どんな偉

業を成したのか、思い出しながら語った。

海人は、今を生きる人からすれば『歴史』といえる過去を、直接見てきた人物だ。その目で見たからこそ言えること細かな出来事を、芽衣に語って聞かせた。

その海人の思いう語りは、十三湊を巡る間はもちろん、海人達四人が十三湊を発ち、檜山に着くまで道中ずつと語られた。海人が一方的に喋るだけだったが、伊達に二世紀もまたいで生きてはいない。話題の引き出しは多かった。

芽衣が楽しそうに聞いていたのも、海人の舌を饒舌にさせた。海の向こうの異国の風景を語ると、目を輝かせて前のめりで聞き入ってくるのだ。



そうした陸路の道中は楽しく、あつという間に過ぎていった。芽衣との旅は終わりだが、ここで今生の別れという訳ではない。

海人はこの檜山で、海人が生まれたこの地に骨をうずめようと思っていた。

自殺するわけではない。もし海人が自殺以外の要因で死んだ時、愛代の墓の隣に自分の墓も作ってほしいと考えていた。

だからまだ芽衣が聞きたいのであれば、己の生涯の経験を語る機会はいくらでもある。

檜山についた海人は、まず愛代の眠る墓所がある寺を、芽衣に案内してもらった。

立派な門の手前まで案内された後、先導していた芽衣がくるつと振り返り、海人に提案を切り出した。

「海人様、突然で申し訳ありませんが、先に会ってほしい方がいるのです。……私のお母様と、おば様に会ってもらいたいのです」

「おいおい、せっかく此処まで来たんだ。墓参りを後回しにすることもないだろう」

「奥方様ですので、先に案内した方が海人様も安心すると思ったので

す。……それにお墓参りにも準備が必要です。線香に生花、お供え物も用意しないとけません。護衛の二人に調達させましょう」

「お願いします、と芽衣が護衛の二人に頼んだ。護衛の二人は了承すると、海人と芽衣を残して持ち場を離れた。

職務を放棄したわけではないし、警戒を緩めたわけでもない。海人に人柄に当たり気を許し、海人になら任せられると踏んだからだっただ。

「海人様がおば様に会っている間に用意できると思います。私もその間に他の方の墓所を調べて、判明すればお伝えできるかと。……どうですか？」

「いい考えだ。だが芽衣が自ら調べることもないだろう。姫はどっしり構えて、文官にでも任せればいい」

約三日の道程だ。芽衣からすれば一週間以上。慣れない長旅で足も疲れきっているはずだ。これで自分から開放させてやろうと海人は思っていたのだが……。

「いえ、実は『十三湊で海人様をお迎えし、おば様まで案内する』というのが、私の受けたお役目です。おば様のいる神社までご案内しなければ、私のお役目は終わりません。……お役目はきっちり最後まで果たします。海人様からの頼み事も、私が頼まれたのですから、責任もってこなします」

「……そうか。余計な気遣いだったな」

「はい？」

「なんでもない。それじゃ行くとするか。案内してくれ」

そうして海人と芽衣は、おば様とやらがいる神社へと向かった。

「……は……」

神社に向かう途中で、海人は気づいた。この先は、アテルイが封印されている祠と、海人が槍の鍛錬に使っていた広場がある方向だ。港と山の位置からして、方角は間違っていない。

海人が気づいてからしばらくして、祠まであとちよつとという所。芽衣に先導されるがままに歩いていると、突然住民の家屋がなくな

り、視界が開けた。

そこには広場を取り囲むように林があつたはずだが、林はなく、替わりに立派な白い土塀があつた。土塀の屋根は瓦で出来ており、右左と眺めるが塀が曲がりくねって角が見えない。相当大きな金がかけられていた。

「こつちです」

土塀に沿って左に向かう芽衣に、海人はついていく。しばらく塀伝いに歩いていくと、塀の終わりが見えた。

塀の角を二人は右に曲がると、これまた立派な鳥居が出迎えてくれた。

「ここがそうか」

「はい。私達秋田が先祖代々守ってきた神社です」

海人と芽衣は、鳥居をくぐつた。



鳥居をくぐつた後は、平坦な参道が本殿まで伸びる普通の神社の造りだった。

だが本殿から左右に回廊が伸びており、回廊は本殿の向こう側を囲っているようだった。回廊の屋根の中に塀があるので、回廊で囲われた中が見えないようになっていた。

『回』の字のように、土塀で囲われた敷地内に、さらに回廊と塀で囲われた場所があるのだ。

海人はどうなっているのか問いかけようとしたが、それより先に芽衣が声をあげた。

「あつ、お母様！」

お母様ー！ と手を振りながら芽衣が駆けていく参道の先には、まだ三十路に行っていないだろう若い女性がいた。

見た目と年齢が合っていれば、かなり若い頃に芽衣を産んだのだらう。もしかしたら今の芽衣よりも若い頃に産んだのかもしれない。

芽衣の母親はすつとんできた芽衣を受け止めると、柔らかい笑みを

浮かべた。

芽衣が、海人に母親を紹介する。母親は海人に向けて名乗った後、芽衣に自分が役目を継ぐことを告げる。

それを聞くと、芽衣は海人に礼をし、敷地にある建物のほうへと走っていった。

ここからおば様とやらの元へは、母親が案内をしてくれるようだ。芽衣はその間に、安東家の墓所の場所を調べてくれるようだ。

「芽衣は、何か失礼なことをされませんでしたか？」

「うん？ いや、別に悪いことはなかった。些細なことに気の回るいい子だ」

「ふふ……そうですか。もしよかったら芽衣を、海人様のお傍付きにさせても構いませんか？」

「ああ、いいが……。あいつがうんと頷いて、乗り気ならな。無理にやらせる必要もねえ」

「わかりました。後で聞いてみますね」

そのあとも芽衣の母親は、何度もそれとなく海人が芽衣をどう思っているか聞いてきた。娘が羅刹王なんぞという男に酷いことをされていないか心配なんだろう、と海人は思っていた。

海人は本殿の中を通され、小さな扉の前まで案内された。扉には頑丈な門がかかっており、扉自体も一人では動かせそうにない重さだ。

だが、海人の怪力なら開ける。門を取った扉を、海人は思いっきり押し開けた。

人一人通れる隙間を開けて、海人は扉から手を離した。

「私はここまでです。これ以上踏み入ることは、許可なしにはできません」

「ああ、声しか聞いたことないんだっただか」

「はい、それではごゆっくり」

芽衣の母親に見送られて、海人は扉の隙間から外に出た。

海人は始めは太陽の光に目を細め、その先の光景を認識すると逆に大きく目を見開いた。

「……あの時のまんまだ」

そこには回廊に取り囲まれるようにして、ぽつんと、中央に祠が建っていた。

アテルイが封印されている祠だ。

だが目先にある祠よりも、海人の背後の今出てきた本殿のほうが一回りも二回りも大きい。人が入れるほどの祠であるが、本殿と比べてしまおうとちつぽけに見える。

それに、この場所。ここは、あの海人が槍の鍛錬をした広場だ。

この神社は、林を切り出し、祠を中心にして建てられていたのだ。

「誰かいるかー？ アテルイー？」

海人は祠の扉を開いた。返事はない。

この祠は、アテルイというまつろわぬ神が住む幽世につながっている。飾られている顕明蓮という小刀を取れば道が開くのだが、顕明蓮はなく暗い空間がむき出しのままだった。

海人が祠の中に踏み入ると、かすかに声が聞こえる。暗い空間、現世と幽世をつなぐ回廊の中からだ。

『……………つちへ……………様……………』

女性の声だ。アテルイではない。海人は声に導かれるままに、回廊を通り、幽世に出た。

幽世は、全く変わっていないかった。此処に来るまでに十三湊や町並み、祠の外の景色など、変わっているところがほとんどだった。変わっていないのは自然の景色ぐらいだろう。

だが、この幽世の景色はひとつも変わっていない。アテルイに修練を受けた道場も、回廊を抜けたら見える光景も。

だが、ここからが最大の驚き。海人がこの日ノ本に帰ってきてから一番の驚愕であり、自身の正気を疑うような現実とは思えない再会の出来事が起こったのだ。

「——さま。兄様ッ！」

海人は背後から何者かに抱きつかれた。奇襲だが、殺気がなければ察せられなかった。

いや、何者か、ではないか。海人は背中に感じる人の正体に声で気づいていた。祠で呼びかけられた時はノイズがひどくわからなかつ

だが、この至近距離の今ならわかる。

だが脳が理解するのを拒否していた。そんなはずがないと海人は混乱し、頭が真っ白になった。

「兄様……。ああ、兄様……。！ 私はお待ちしておりました。兄様と再会できるこの日を、今か今かと待ち望んでいました。夢ではありませんよ、あなたは本当にそこにいますよね……。！」

抵抗もむなしく、頭に響き渡るその声の主の正体を、海人は理解してしまった。

それはこつちの台詞だと、なんでまだ生きているのだと。思い浮かんだ言葉をのみ込み、抱きついていている女性を引き剥がして向き直った。

間違いようがない。正面から向き合って、搾り出すように海人はその名を呼んだ。

「……仁実……」

「はい、仁実です、兄様。この二百年間、ずっとお待ちしていました」
そこには、二世紀以上に海人が日ノ本を離れて以来、会っていない女性。

海人と違ったただの人間、寿命が尽きて決して生きているはずがない、海人の義理の妹。

安東仁実が、別れた頃の老女の姿のまま、そこにいた。

——まるで、時を越えてきたみたいですね。

芽衣が言っていたことが思い出された。まさに今現在の状況がその通り。回廊を越える際、時を越えたと言われたほうが信じられるほど、海人は目を疑った。

四十三話、一途

「なぜお前がここに……。どうして生きてるんだ、仁実!」

秋田氏の芽衣とその母親に案内された祠。そこにいたのはアテルイではなく、とつくの昔に寿命を向かえて亡くなったはずの海人の義妹、仁実がいたのだった。

仁実は名残惜しそうに両手を下ろすと、海人にどうしてこの場に居れるのかを語った。

「兄様と別れるずっと前から、私は一緒に時を過ごせる方法を探していたんです。十三湊の貿易網を使って、数々の異国の魔術書を取り寄せ、読み漁りました。アテルイ様にも頭を下げて助力を請うたのです。数え切れないほどの試行を繰り返し、ついに私は『不死の存在』へと成ったのです! アテルイ様という、元まつろわぬ神という存在がいなければできない事でした」

私は本当に運が良い! と仁実は両手を組み感涙にむせび泣いた。白昼夢を見ているわけでも、タイムスリップをして過去に飛んだわけでもない。本当に寿命がなくなり、不老の方法を見つけて老いから解放されたようだった。

「あ、ああ……。本当に。お前とまた会える日がくるとは、思ってもいなかったよ」

「ささ、こちらへどうぞ。お茶でも飲んで、ゆっくりしていただくかい」

「それはいいんだが、俺はおば様という奴に会いに来たんだ。まさか……」

「はい、それは芽衣が私を呼ぶ時の呼び方ですね。他の者達はご先祖様やら大仰な呼び方をしてきますが、兄様は今まで通り呼び捨てで構いませんから。……。さ、あれが私の家です。座ってゆっくり話しましょう」

仁実の引つ張る先には、一階建ての木造家屋があった。



「ふふふ……。ああ、兄様……。ずっとこうしていたい……。幸せ……」
「……」

仁実の家の縁側に腰掛けた海人は、擦り寄りもたれかかってくる仁実を突き放そうとはしなかった。どうしたらよいかわからなかった。

仁実を傍目に、海人は茶をすすった。うまい。この茶葉も、檜山でとれた物らしい。海人がいた頃に比べれば農耕技術も発達し、檜山は本当に豊かになった。まつろわぬ神の毒に犯され、餓死者がいた頃は天と地の差がある。

それも仁実が二百年に渡って、安東氏を率いて支えてきたおかげだ。

「仁実、アテルイは何処にいる？」

「あー、ここに現在も住んでいます。よく留守にします。なんでも日ノ本にいる他の神と話をしているとか……」

「なに、他にも神がいたのか」

まつろわぬ神は危険だが、アテルイと話をできるなら理性的な神なのだろう。

そこで会話は一旦途切れる。

「……」

「ああ……。これからは、ずっと一緒です、兄様……」

海人が黙っていても、仁実は傍にいただけで嬉しそうだった。

迷っていても、悪戯に時間が過ぎていくだけだ。腹をくくって、海人は切り出した。

「仁実、ちよつといいか」

「……なんでしょう」

海人の真剣な雰囲気を感じ取り、仁実はゆつくりと体を離した。

「義父に、重蔵はこの事を知っていたのか？ お前が……。不老になつたことを」

「知っているはずがありません。私がそうしようと思いついた時には、既にこの世にはいませんでした」

「じゃあ愛代は、愛代は知っていたのか？ お前がこの先何百年も生き続けていくと承知で、お前を残していったのか？」

「知っているはずがありません。私は誰にもそのことを話してません。アテルイ様にも暴かれるまで心の内を晒したりはしませんでした」

「……なんで、誰にも相談しなかった」

それを聞いた仁実は、若干怒りをにじませた声で、けれどもなるべく感情を押さえ込むように言った。

「……それを兄様が、誰にも言わず日ノ本を出て行ったきり、帰ってこなかった人が言うんですか」

その声には悲しみも混じっていた。こうして再び会うと思っていなかった海人は、言葉をつまらせた。

「私も当時は五十を越えていました。兄様とは十も離れていない、いつまでも子供じゃないんです！ 自分で自分のことは決められます！」

仁実は感極まったのかぼろぼろと涙を流し始めた。

「兄様に命を助けられたあの日から、私の命は兄様のために使うと決めたのです。……兄様のためなら生贄にだって。喜んで命を差し出しました……。ですが、兄様は行ってしまった！ あの夜から日ノ本にはついで帰ってこなかった！ この命を捧げぬまま、何処か遠い地に言ってしまった……」

そして仁実は両手をあわせて指を組んだ。幸運に感謝する体勢だ。

「だから私は不老を望んだ。兄様と同じ時を生きれば、兄様が帰ってくる場所を守れば、必ず帰ってくると信じて。……そして現に！ 兄様は帰ってきてくれました！ 十三湊は遺憾にも奪われてしまいましたが、私以外に兄様を知る者はいません。書を焼かれたことが功に奏するとは、私も思いませんでした」

海人について書かれた書が焼かれたのは、二男の業季の行いだ。母親の愛代を放りだし世界中を放浪する海人を憎み、十三湊の城の城主になった折、一切の記録を排除したためだ。

「海人兄様、好きです。家族としてではなく、私はあなたを異性として

愛しています」

仁実海人の目をじつと見つめてくる。嘘をついている様子は無い。真摯な瞳に、海人は先に視線を逸らした。

「ですが、私は五十の老体。体も衰え、少し激しい運動をただけで骨を折リかねない……。ですので、多くは望みません。ずっと傍にいてくれるだけでいい。そんなささやかな願いを、聞き届けてはくれませんか？」

仁実は這ってきて、海人の肩にそつと寄り添った。海人は子供の頃より大きく、大人の若い頃より小さい弱々しい肩を抱き寄せた。

仁実が自分にそんな思いを抱いているとは思ってもしなかった。思いを知らなかったとはいえ、もう会うこともないからと、何も言わずに出て行ったのは自分だ。海人はそれで許されるのなら、傍にいてやろうと思った。

だが、次に言われたことは受け入れられなかった。

「兄様、芽衣のことはどう思う？」

「……？ いきなりどうした」

突然、仁実は海人の遠い孫の芽衣のことを出した。彼女の母親も、ここに来るまでに執拗に思えるほど聞いてきたと思ひ出した。

母親の場合は自分の気に触れたか心配なのかもしれないが、仁実も心配しているのだろうか。

「兄様の好みの女の子でしょ？ 兄様が気に入ったのであれば、めかけ妾にさせてあげたいんだけど……」

「なっ!? 妾って……。あいつはいわば、なんというか、遠い親戚の娘みたいなもんで……」

「大丈夫ですよ、そのために兄様の血を薄くしたんですから。奇形児は生まれませんよ」

海人は絶句した。仁実は、芽衣や安東の家系の者も、まるで道具のように言い放った。『おば様』として芽衣を叱っていたというが、そこに母の愛は一切感じられなかった。底冷えするような冷たい声に、海人はぞつとした。

「それに芽衣を見ると、誰かを思い出しませんか？ 箱入り娘な

ところとか、外の世界に興味津々なところとか……」

仁実は今度は昔のことを懐かしむように遠い目をした。

海人はぼつの悪い顔をした。海人も道中で芽衣を見て、重ねあわしてしまっていたのだ。必死に目を逸らしていたが、仁実に言い当てられてしまった。

「愛代様にそっくりですね。芽衣はひとつの事を目標にしたら、それに向けて一生懸命で、そういう所も似ています」

「ああ……。ああ。明るい性格に育ったのはいい。だが、だけど、外の世界を全く知らないというのは……」

「ええ、私がそうさせました。母親に教育をさせて、城の中でぬくぬくと育てさせました。だって、そのほうが愛代様に近くなるでしょう？」

海人は思わず仁実の肩を抱いていた腕をはなした。手のひらにいつのまにか汗をかいていた。

少なくとも、自分や海賊の仲間達と一緒に世界を旅していた時は、こんな風に人を道具扱いする性格ではなかった。

この二百年会わなかった間に、性格が歪められてしまったのか。海人は自責の念に駆られた。

「だからあの娘を愛代様の生まれ変わりだと思って、可愛がってあげてください」

「……それは、できない」

「なぜですか!? まさか、まだ再現が足りませんか？」

「違う。芽衣を見ていれば、若い頃を思い出すよ。仲間達を無駄死にさせて、三百年も生きた俺が言うのも何だが……。あいつは子供の頃の愛代に似ている」

「じゃあ……」

「だが仁実、死んだ人間は、決して生き返ったりはしない。あつちやいけない」

「兄様……」

仁実は心配そうな表情で、海人の顔を覗き込んだ。

しばらく海人その場にとどまり、仁実と二人の時間を過ごした。落

ち着ける空間だったが、時折仁実が見せる冷徹な態度が海人の肝を冷やした。

帰る時になって仁実が引き止めてくるが、海人はまた来るからと言ってなだめた。しぶしぶ引き下がる仁実に別れの言葉もそこそこ、海人は逃げるようにして現世に戻っていった。



そして当初の予定通り、海人は、愛代の墓参りをしていた。

しかし隣に芽衣と彼女の護衛もいない。生け花と線香と水を持ち、海人ひとりだけで来ていた。

祠から出て、本殿に戻ってきた時のことだった。

「お帰りなさいませ、海人様！」

芽衣が駆け寄ってくる。手には護衛が買いに行ったであろう道具が握られていた。

「これ、お墓参りの」

「ああ、ご苦労」

芽衣から道具を受け取る。

「それで海人様、義理の妹の『仁実』様のことですけど……」

「ああ、それはもういい。見つかった」

「へ……?」

「それよりも芽衣、お前はなぜ自分が俺の迎えを任されたか、その理由を知っているか？」

「い、いえ……。お母様もおば様も教えてはくれず……」

海人は芽衣をじっと見つめた。見つめられた芽衣はうろたえるが、嘘を言っているようには見受けられなかった。

「そうか……。わかった、ありがとう」

「えっと……。何がなんだか……」

「疑問があったら、おば様に聞け。俺がそう言ったと聞けば、おば様も教えてくれるだろう」

芽衣にはひとりで行く伝え、こうして寺までやってきた。

色々なことがありすぎて、気持ちがいっぱい。気持ちに整理をつけるため、ひとりだけにして欲しかった。

寺の住職に愛代の墓の場所を聞き、墓まで行き、周囲の掃除をし、花や饅頭をお供えし、火をつけた線香を供えた後。

ふうと墓の前でしゃがみこんだ。

「どうしてこんなことに……」

いつになく弱気に海人が黄昏ていると、ふっと音もなく忍び寄る黒い影があった。

「よう、海人」

肩をたたかれ海人が振り返ると、そこにはアテルイがいた。

「アテルイ！ 久しいな……。姿も、全く変わってない」

「神だからな。お前も変わらぬように安心した」

「羅刹王だからな。祠にはいなかったが、何処にいたんだ？」

「知り合いの神のところだ。お前が知らぬだけで、この日ノ本に他にも神がいるのだ」

海人とアテルイは、愛代の墓の前で酒盛りをした。愛代の前にも忘れず、酒をお供えした。

酒を酌み交わしながら、海人は仁実のことを相談をした。

「アテルイは知っていたのか？ 仁実の思いについて」

「ああ、知ってたさ。傍から見れば、とても分かりやすかったがな。不死になる方法について詳しい奴を、仁実に紹介したりして手伝った」
「どうして不死になる手伝いをしたんだ」

「仁実はずっとお前を思っていたんだ。だが海人は愛代のことしか目に入っていなかっただろう？ 愛代も大切には思っていたから言い出せなかったんだろう……。だから仁実は待っていたんだ。いつか愛代に寿命が来れば、自分がひとり占めできると。だがお前が出て行ってしまったせいで、不死になる必要がでてきた。いいじゃないか海人、これほど一途な女はそうそう居ないぞ」

「だが、あいつは自分の子孫である芽衣を道具のように扱っている。俺に言ったんだ、妾にしてもいい、と」

「男は船、女は港……。あいつは兄妹という繋がりだけでは細いと

思って、肉体の繋がりが欲しいんじゃないのか？ お前が何処に行っても、最後は必ず此処に帰ってくるように……。不安なんだろう。だから安心させてやれば、あいつもそんな扱いはしなくなる」

アテルイが、愛代の墓を見た。

「こいつも、仁実の思いには気づいていたぞ。懐かしい、お前みたいに相談してきた。仁実のために何ができるか、つてな……。婚姻しろとは言わねえ、だが傍にいてやれ。愛代もそれを望んでいる」

海人はそれを聞いて決心した。

「俺も腰をすえる時がきたか。わかった、仁実の傍にいる。死が別つまでな」

「ははは、それを聞いて安心した。これで心おきなく行けるというもの」

「なに？ 何処かに行くのか？」

「隠居するのさ。お前も仁実も危なっかしくて見てられなかったが、もう大丈夫だ。こうして現世に来て酒を飲むのも終わり、ずっと幽世に隠れるよ」



その後、ぎこちなさは残るものの海人は仁実と共に生きはじめた。芽衣とその他の秋田の直系とは、関心の薄い仁実に代わり見守り続けた。

海人はまつろわぬ神を引き寄せてしまうのを恐れた。民の命を危険にさらすからだ。

しかし、まつろわぬ神はあまり顕れなかった。海人が幽世に住んでいたのもあるが、神々にも海人の名は轟いていた。神も海人をおそれて近寄らなかつたのだ。

こうして平和な時が過ぎ。

時は二十一世紀。およそ百五十年の時が過ぎ去った。

ざっくりとした設定

〈登場人物設定〉

◇安東・海人（あんどう・かいと）

・性格など

主人公。酒が好物で、規則に縛られるのを嫌い、自由に振舞う。生まれつき鬼のような怪力を持ち、大の大人を軽々掴み、簡単に投げ飛ばす。

両親がいたが、小さい頃に他界。その後、重蔵に拾われ、養子となる。そのため重蔵の実子である仁実とは、海人の義妹となった。

魔術は全く使えない。権能で魔術の真似事はできる。代わりに魔術抵抗が強く、そこらの魔術師が攻撃してもかゆい程度にすらならない。体内からかける魔術も、あまり効力がない。

第一章は、およそ一六〇〇年。海人は、倭寇の集まりである重蔵海賊団の副船長だった。

両親から教えられた槍の鍛錬を続けており、祠のある広場で行うことが日課になっていた。行っていた時に、迷い込んできた愛代と知り合い、親密な仲になっている。

愛代のピンチを知り、祠に封じ込められていたアテルイから三振りの刀を借りて、まつろわぬ八郎太郎を弑逆する。瀕死の重傷になるも、パンドラに認められ、晴れて神殺しの羅刹王となる。

第二章では、湊に住居を移し、安東水軍のトップとなり率いることになる。愛代と結婚するが、愛代は表では男と通っていたため、結婚しているとは表ざたにはされなかった。

結婚して安東の姓を名乗るようになる。

この頃から鍛錬は全く意味がないとアテルイに言われ、槍には触るが鍛錬はしなくなっていた。

義妹の仁実が攫われてしまったため、大湊に乗り込み、首謀者のまつろわぬ水天を弑逆。しかし目前でまつろわぬポセイドンに、またもや仁実を攫われてしまう。

第三章では、義父で実質安東のトップだった重蔵に、船の建造を依

頼する。その間、海人はアテルイに実戦形式の修行を行われ、まつろわぬ神との戦い方を体で学ぶ。

建造された船で、地球の裏側まで仲間達と共に旅立つ。しかし旅の途中で突入した海域で、まつろわぬセイレーンに仲間達全員が操られてしまい、海人以外死亡してしまう。このことが海人の中に残り、死者を弄ぶ者を憎み、許せなくなる。と同時に心に傷が残り、人間では助けどころか足手まといにしかならないと考えるようになる。

セイレーンの島が沈んだ後、様子を見にきたデルピノスを脅して、アトランティスに案内させている。

第四章では、アメリカに寄り道した後、ポセイドンの根城であるアトランティスに到達している。

死闘の末、ポセイドンを倒し、仁実を救出する。できるだけ多くの島の住人を救出し、海人はデルピノスの呼んだアリオンに助けられている。そしてアメリカに、ポセイドンに攫われた島の住人を送ると、日本に帰った。

しかしそれから三十年後、海人は海外を船で転々とし、日本にはあまり帰らなかった。ポセイドンを殺され、怒り狂ったまつろわぬアンフィトリテが、手下を散発的に襲撃させていたのだ。

愛代や仁実、生まれた我が子に被害が及ぶと考え、大切な人達を遠ざけていたのだ。

だが、そんな海人の心の内を知らない子供達の心は離れていった。二男の実季は、母が病床に伏せるのは父のせいである、と海人を憎むようにまでなっていた。

海人が海外にいる間に愛代が亡くなり、次男の実季と長男の業季の南北に分かれた家中争いが起こると、日本には帰らなくなってしまうた。

第四章の一六五〇年頃から百年経ち、第五章は一七五〇年頃となっている。

この間に海人は弟子は何度もとり、一人前になったら拾った国に戻している。

またデルピノスの生みの親であるアンフィトリテを、海人は剝逆し

ている。デルピノスが操られることはなくなり、海人は奪った権能で海の生物で兵士を創ろうとしている。

第五章では、海人は二人の弟子をとっている。セイレーンの事もあり人間は遠ざけてはいたのだが、完璧には断つことはできないと考えていた。人肌恋しかつたこともあり、身寄りのない子供を拾っては弟子にし、槍を主に武器の扱いを教えていた。

しかしヴォバン侯爵が襲来。セイレーンのような権能で弟子の一人が囚われているのを見ると、ヴォバンを目の敵にするようになる。また自分から離れた人間にも被害が及ぶのを見て、自分に関わった者は不幸になると思いこむ。

ヴォバン侯爵を追いかけ続けた。それは百年後の一八五一年、アイーシャ夫人の権能で大地の裂け目に吸い込まれて死んだ（と海人が思い込む）まで続いた。この頃にはもう何のためにヴォバンを付け狙うのか忘れていた。

百年間の間に、海人は弟子をとるのを辞めた。自分に関われば不幸になると、ヴォバン侯爵の情報収集以外では人間との関わりを一切断った。

第六章では、海人は日ノ本に戻ってきた。愛代も仁実も、遠い時の人になっっているからだ。

しかし仁実は生きていた。安東の血筋は途絶えておらず、仁実が存続するよう見守っていたのだ。

海人は仁実が死なない体になってまで自分を待っていたと聞いて、自分が仁実をこんな風にしてしまったと己を責めた。罪滅ぼしとして、できる限り傍にいてやろうと決意した。

・権能

- 1、八郎太郎の権能
- 2、アナーヒタ（水天）の権能
- 3、セイレーンの権能
- 4、ポセイドンの権能
- 5、アンフイトリテの権能

◇安東・愛代（あんどう・ちかよ）

第二章から安東氏当主となり、海人の妻となった女性。第一章では海人という英雄に助けられる女性となった。

表向きには安東氏当主は男ということになっており、男性としての名は安東愛季^{ちかすえ}。

海人との間に長男業季^{のりすえ}、次男実季^{さねすえ}を儲けた。

第一章では、世間も安東の内情も知らぬお嬢様だった。

湊と檜山で家を二分して争うのはいけないと思ひ立ち、争いを仲裁するために奔走している。

しかし安東について調べる中で真相に近づき、檜山に訪れる理由も海人に会うためになってきている。

海人は彼女の目標のためにひたむきな所に尊敬しており、仁実^{にみ}は海人の自由に動ける所に憧れと嫉妬の混じった感情を抱いていた。

第二章では、当主となり、重蔵から政務を学んでいる。

海人と結婚し、海人が仁実を救いに旅立った後も帰る場所を守り続けた。

五十代で他界。豊の上での大往生だった。

◇安東・仁実（あんどう・ひとみ）

重蔵の実子であり、海人の義妹である。第二章では愛代の義妹にもなった。

重蔵は檜山安東の人間なので、その娘である仁実は檜山の姫である。

独身を貫き、その身は誰にも許していない。

魔術が結構使え、第六章では人類の最高峰にいた。

海賊として矢面に立って活動する海人の傍に寄り添い、補佐する立場にいた。

父親が連れてきた海人を最初は警戒するも、長年連れそう内に家族としての愛情を持つようになった。海人が愛代と結婚することになっても、義兄がとられると思ひながらも、海人が幸せならと心の中では祝福していた。

しかし自身がまつろわぬ水天、まつろわぬポセイドンと立て続けに攫われるも、長い旅路の果てに助けに来てくれた海人に、家族の愛を越えた感情を持つようになる。

愛代が生きていた時はその様子を見せなかったが、海人が日ノ本に帰ってこなくなつてから歪んだ愛へと発展していく。

海人が帰ってきた一八五一年には、海人の愛情が極端に変化。海人の望むことはなんでもするが、海人以外には関心を示さず、檜山を管理する道具程度にしか思っていない。

『不死の存在』となり、二百歳以上になっている。海人との年齢も、十歳も離れていない。

◇安東・重蔵（あんどう・じゅうぞう）

娘の仁実がおり、身寄りのなかつた海人を息子にした。後に海人の嫁として、愛代が義理の娘になっている。

檜山の安東に生まれたが、姓を捨てて家出する。倭寇の荒くれ者を率いて海賊団を率いていたが、実家が危機に瀕していると知り、再び安東の姓を名乗るようになった。

荒事には向かず、それは海人に任せるようになっていた。しかし物造りについては深い知識を持ち、異国の情報が入りやすい港町に生まれたからか、銃や船のことをよく知り得ていた。

海人がポセイドンを追いかける際、地球を半周して帰ってこれる船を造つたのも重蔵だ。

第二章で当主となって愛代を補佐し、舜季の代わりとなって、実質安東の政務のほとんどを任されていた。

海人がアンフィトリテから逃げ回っている海外にいる間に、病にかかり亡くなった。

◇海賊団の乗組員達

重蔵が集めた、海賊船に乗る倭寇たち。海人のことは兄貴と呼んで慕い、仁実のことを姉御と呼んで慕っていた。

重蔵のことも船長として尊敬している。

第二章では、海人直属の部下として安東海軍に取り込まれた。

第三章で、セイレーンの歌を聴いて惑わされる。セイレーンにゾンのように操られるも、海人がセイレーンを倒すことで開放される。しかしセイレーンの歌を聴いた時点で全員が死亡しており、魂は開放されたが目を覚ますことはなかった。

彼等を失った傷は、海人の心に深く刻み付けられている。

◇安東・舜季（あんどう・きよすえ）

愛代の父親。安東の血筋ではなく、外から入ってきた。安東直系の妻もおり愛していたが、生贄として犠牲になった。

魔術が使えるが、かじった程度である。

たったひとりの家族である愛代を守るため、あらゆる手段を用いてまつろわぬ八郎太郎を殺すことを計画する。

娘が、海人に心を寄せているということを知り、海人に接触する。愛代が危ない目にあうと知れば、邪魔をしてくるのではないかと考え、不確定要素は排除しておきたかった。

八郎太郎は、生贄を差し出さないと現れないと判明し、危険に晒すのを渋りながらも愛代を囮にする。

しかし計画はまつろわぬ神に暴かれ、八郎太郎の凶刃から娘をかばい、崖から転落する。

最後は到着した海人に愛代を託して、息を引き取った。

◇海人の父親

檜山安東軍の一兵士だった。海人に槍の使い方と、鍛錬方法を教える。

まつろわぬ八郎太郎の川にまいた呪詛により、流行り病にかかり妻ともども亡くなった。

アテルイとは姿は見たことはないが、話相手になっていた。

◇安東・芽衣（あんどう・めい）

一八五一年に海人が帰郷した時の、秋田氏の次期当主だった少女。

海人と愛代の子孫である。

姫で、箱入り娘で、何かに向けて一生懸命という、愛代と共通点が多い。

それもそのはずで、仁実がわざと愛代に似るよう、世間知らずの娘に育てた。いずれ海人が帰ってきた時に、海人に夜の相手として差し出し、体で海人を引きとめようという計画だった。

そんな事は露知らず、芽衣は裏表のない活発な子に育った。海人が仁実に言い含めたおかげで、芽衣が生涯その事を知ることにはなかった。

誠実で年齢も近い男性と結婚し、特筆すべき偉業はないものの、秋田氏に生まれた者の責務を全うした。

娘や孫達に囲まれ、その時代の人間にしては長い生涯に幕を閉じた。

◇芽衣の母親

仁実の考えにより、結婚はしていない。種馬となる男性だけだった。

初めは芽衣と同じような教育を仁実に施されて、秋田家当主となる。しかし結婚適齢期を過ぎると、仁実の『海人を留まらせる計画』を知らされ、次期当主を産むよう命令される。

種馬との間に芽衣を儲けると、仁実から開放され、自由になる。

唯一の家族である芽衣を溺愛している。そのため芽衣が海人の相手選ばれてしまった時、ひどいことをされないか非常に心配し、海人の機嫌を損ねていないか何度も伺ったりした。

海人が芽衣に非道なことをしないと分かると、安心して預けるようになった。

くまつろわぬ神と神獣く

◇アテルイ

筋骨隆々の大男で、額からは大きな角を一本生やしている鬼であ

る。酒をいつも飲んでいいるが、酔わない。

顕現してから世界中で暴れまわっていたが、飽きると顕現した奥羽に戻ってくる。その後通りかかった術師にわざと封印され、民衆に祠を建てられ奉られていた。

しかし時が経ち、祠自体忘れ去られたとき、偶然見つけた海人の父親にアテルイから話しかける。

幼い頃から見守ってきた海人に何度も手を貸し、助言を授ける。まつろわぬ神の存在についても海人に教えたり、愛した女性の形見を貸し与える等している。

海人に姿を見せた後、海人の周囲の人間にも度々姿を現している。その正体は、悪路王。坂上田村麻呂に討伐された鬼。

鈴鹿御前の形見として、『三明の剣』という三振りの剣を所持している。

大通連は、持つと敵を自動的に斬りつける。

小通連は、縁のある者と繋ぐことができる。

顕明連は、朝日に照らすと三千大全世界を見渡せる。

◇まつろわぬ八郎太郎

十和田湖に巢食っていた、八つの頭を持つ巨大な蛇のまつろわぬ神。

十和田湖の地脈点から大地の生命力を吸い取り、無限の再生力を得ていた。その影響で、十和田湖周辺の大地は植物の育たない、やせ細った大地だった。

特に檜山の大地は荒地が広がり、異様なほど植物が育たなかったが、それは十和田湖の下流である八郎瀉まで、八郎太郎が意図して川に呪詛をまいて流していたから。

百年以上前に顕現し、十和田湖を住処としたが、当時奥羽の支配者だった安東氏が総力を上げて討伐隊を派遣した。

それを容易く蹴散らし、腹をたてた八郎太郎が安東軍を全滅に追い込んだ。

わずかに生き残った安東氏とは『安東家の若い女を生贄に捧げるこ

とで、街には下りてこない』という約束を結び、安東氏は衰退していった。

そして安東舜季が当主となり、時間により八郎太郎の恐怖も薄まった頃、再び討伐隊が結成された。

一度は撃退され、八郎太郎の逆鱗に触れ、檜山では流行り病が蔓延した。このとき海人の両親は亡くなったが、海人は魔術に強かったため、気分を悪くするだけで済んだ。

十数年後に、二度目の討伐隊が派遣され、この時舜季が命を落とした。

攻撃方法は、その巨体での押しつぶしや、八つの頭による噛み付き、口から放つ水流。

アテルイから武器を借りた海人に、再生力の根源を見破られ、最後はお互い傷ついた体での決死の一騎討ちで討滅された。

海人を羅刹王にするきっかけとなった。十和田湖の噴火によって生まれた神であるから、奪われた神力は『天災をひきおこす』という権能となった。

◇まつろわぬ水天

ゾロアスター教の大河の女神アナーヒタが、時代が下るにつれて人格が剥離し、神祖寸前まで神力が弱まった姿。

力は他のまつろわぬ神に比べて弱かったが、ポセイドンと同盟を組み、力を得た。

顕現した場所である日本の名を名乗り、民衆に雨乞いの巫女として崇められながら、民衆を支配していた。

『最後の王』を見つげるため、日本統一をたくらんでいた。

大湊から侵略を企んでいたが、そこで羅刹王の海人が生まれたのを知ると、海人を自分が最大限の力を発揮できる拠点におびき出そうとした。戦場に紛れて仁実を攫い、まんまと海人をおびき出した。

権能は周辺地域の水を操り、自身も流体となって物理攻撃を無効化する。だが決して無駄というわけではなく、体を切られる等してそぎ落とされれば、周辺の水で補完しなければならない。

水天は拠点に地下水や河川水、温泉までも集めて、無敵となる環境を造っていた。しかし周辺地域ではそのせいで干ばつが起こっていた。水天はそれも利用して、民衆を操ろうと画策していた。

海人は八郎太郎から篡奪した権能を使い、水天の拠点で干ばつを引き起こした。水天のまわりから突如として水がなくなり、体を再生できずに徐々に削られ、海人に討滅された。

◇まつろわぬセイレーン

霧に包まれ、行方不明の船が沢山出る魔の三角海域、バミューダ・トライアングルの元凶。海域の中心にある島に居座り、人間を操る歌を歌っていた。

姿は鳥の下半身に、人間の上半身。背中に両翼が備わっている。

その歌声を聴いた者はセイレーンの島に行くよう命令され、島に船の金銀財宝を降ろすと、魂を奪い取られる。セイレーンの島には船と乗組員の死体が横たわり、『船の墓場』と海人は呼んだ。

権能は人を操る歌声と、操った手駒を強化する歌声。空を飛べるが、翼は使わない。

歌声は耳から入り、直接脳に呪力を注ぎ込む。そのため体外からの魔術に強い神殺しでも、近くで聞けば操られてしまう。しかし海人は特別、魔術の耐性が強かったため頭痛だけで済んだ。

操っていた人間や、既に白骨化している人間も操って、海人に差し向けた。多対一の攻撃を海人に仕掛けるも、仲間を操られて頭に血が上った海人に、まとめて噴火による炎の岩で焼く尽くされた。

最後は巨大な炎の岩に押しつぶされながら、海人の仲間は既に死んでいることを海人に教える。ざまあみろと嘲りながら、最後に一矢報いたことに満足して消えた。

◇まつろわぬポセイドン

ギリシャ神話のビュクスネーム、海と大地を支配する神。競馬の神でもある。

その本質は征服者であり、他国を侵略し、その領土を占領した証と

して女性を妾としていた。自分のものではないものを、自分だけのものにするのを至上の快樂としており、領土だけでなく他人の女も支配しようとしていた。

そのためポセイドンの寝所の神殿には、世界から集められた美女達があった。彼女らはポセイドンの支配を受け入れざるを得なかった人達であり、愛する異性や婚姻を交わした者もいた。

アンフィットリテも海を征服した証として、無理やり婚姻した者だった。

アトランティスという大西洋に浮かぶ大陸を所有していた。しかしそれはポセイドンの権能で浮いているつぎはぎの島であり、アトランティスの土はポセイドンが世界中から切り取ってきた陸の一部だ。陸の上にあつた民家も一緒に連れてこられており、大西洋が何処かわからない人達は、アトランティスでの生活を余儀なくされていた。アトランティスの周囲には神獣が多数おり、例え船で逃げれたとしても、島を渦巻く海流で外には出れなかった。

征服者である他方、自ら槍を持ち、軍の先頭で戦うような戦闘狂でもあつた。玉座で待っているとうずうずしてアトランティスを飛び出したくなったり、自分と似ている海人を見つけた時は大いに喜んだ。

水を操ることもできる三叉槍トリアイナを使つて戦う。三叉槍トリアイナは、海水から呼びだすことができた。実体をもたせれば他の鋼の武器に負けない強度を持ち、壊れても海水があればまた呼び出すことができる。

ポセイドンはそれに加え、愛馬ヒツポカムポスに騎乗してのランスチャージの戦法を得意としていた。ヒツポカムポスはポセイドンの呼びだした神獣であり、音速の速さで陸も海上も走る。

水を操ることにおいては海人のどの権能にも勝っていたのだが、海人が無理に二つの権能を同時に使ったことで、水の支配権を剥奪される。

ポセイドンの使える権能はトリアイナひとつだけだったため、水からつくるトリアイナをつくれなかった。己の体ひとつで真つ向から

海人に勝負を挑むも、敗北して消滅する。

◇まつろわぬアンフィトリテ

海の支配者である三面相の女神の、地方名のひとつ。侵略され、ポセイドンと婚姻を結ばされ海の支配権も奪われてしまう。

しかしまつろわぬ神になっても神力は衰えを見せず、長年に渡って海人を苦しめた。

デルピノスも アリオンも。ポセイドンが呼び出したヒツポカムポス以外の神獣は、彼女が生み出した。

アンフィトリテの権能は、海の生物を改造し、彼女の僕となる神獣に造りかえることができる。そのためアトランティスの周囲を懲戒する神獣も、彼女の命令に従う。世界のどこからでも命令を発すことができる。

一世紀近くにわたり追跡し、海人に尖兵を差し向けて疲弊させて殺そうとした。海人にとどめを刺すその時まで、決して海人にその姿を現すことはなかった。

しかし海人におびき出され、権能を篡奪された。

ポセイドンのことは、嫌々ながらの結婚であったが、長い付き合いで愛するようになった。海人を追っていたのは、復讐と敵討ちのためだった。

◇デルピノス

まつろわぬアンフィトリテが生み出した神獣。イルカの知能を特化させるため、脳を改造して神獣になった。

ポセイドンは知らなかったが、神獣達の司令塔の役割を担っていた。

セイレーンの島が沈んだ時に海人に捕獲されるも、海人に接するうちに、手駒扱いするポセイドンや、一度しか会わなかったアンフィトリテを見限り、海人につく。

アトランティスが沈むとき、神獣達に指令を下し、住民達を救出した。

その後アンフイトリテから召集の命が下るも、海人の下に海馬のア
リオンと共に残った。

アンフイトリテが海人に討滅された後は、自分の命を脅かす最も怖
い存在が消えたことで、海人を支える右腕のような存在となった。

海人がアンフイトリテの権能で造った神獣達は、すべてデルピノス
か、トリアイナを通して海人の命令に従っている。

第七章 安東と発覚 四十四話、三竦み

〔十九世紀イタリアの魔術師、アルベルト・リガノの著書『魔王』より抜粋〕

……この恐るべき偉業を成し遂げた彼らに、私は『カンピオーネ』の称号を与えたい。

カンピオーネは覇者である。

天上の神々を殺戮し、神を神たらしめる至高の力を奪い取るが故に。

カンピオーネは王者である。

神々から篡奪した権能を振りかざし、地上の何人からも支配され得ないが故に。

カンピオーネは魔王である。

地上に生きる全ての人類が、彼らに抗うほどの力を所持できないが故に！

〔二十一世紀にグリニッジの賢人議会により新たに作成された、安東海人についての調査書から抜粋〕

安東海人というカンピオーネが確認されたのは、十八世紀半ばのことである。しかし、そのおよそ一世紀以上より前から彼は悪名高い『海賊』として、世界中の海に名が轟いていた。

安東海人はおよそ十八世紀中頃、イングランドのテムズ川流域から上陸した。この時、同地に滞在していたヴォバン侯爵の襲撃を受け、だがそれを彼はあっさりと退けたのだ。

狼王の行いに憤慨した彼はその後、狼よりも執拗にヴォバン侯爵を追跡し、イングランド各地で何度も戦闘を行い暴れまわった。

既に欧州で魔術師より畏怖されていたヴォバン侯爵、そんなヴォバン侯爵と何度も渡り合える者として、魔術師の間でも名が知れ渡っていったのだ。

武器は三つ又の槍。それが悪名高き海賊『カイト』の象徴でもあった。

後に賢人議会により名付けられた槍の権能——『エフシガイオス・トリアイナ海神の三叉槍』は、水があれば何処にいても呼び出せる鋼の三叉槍だ。

水が安東海人の掌に三叉槍の形に集まり、彼がそれを握る。すると水の集まりだったそれは、実体ある鋼の槍に変わるのだ。

他にも、『神獣を造り出す権能』、『怪力の権能』を持つ可能性が、何度も交戦したヴォバン侯爵の証言よりある。海人は神獣を作り出し、兵隊としたことでヴォバン侯爵と渡り合っていた。

三叉槍を呼び出す際のパフォーマンスも、それを握り暴れまわる安東海人の姿も、当時の海賊や魔術師に畏怖の対象であっただろう。

しかし一八五一年を境に、ヴォバン侯爵と共に足取りが消え、消息がぱったりと途絶える。ヴォバン侯爵がヨーロッパへ帰還した後も、世界各地のどこにも、安東海人らしき人物は確認できなかった。

それから百五十年間、彼の素性について判明したのは『東洋人である』ということだけ。近年になるまで、その姿は謎に包まれており、死亡したという説が主流であった。

だがそれも、あの事件が起こるまでの説である。安東海人の名を思い起こす切欠となった事件についても、軽く触れておこう。

【ヴォバン侯爵、まつろわぬ神招来の儀式の最中に、闖入者あり】

サーシャ・デヤンスタール・ヴォバンは、邪知暴虐の魔王を体言する、最古参のカンピオーネの一人だ。

カンピオーネとは、日本では羅刹王とも呼ばれる、まつろわぬ神に勝利し、権能を篡奪した王のことを呼ぶ。ヴォバン侯爵はその中でも、十八世紀にカンピオーネとなった最古参の内のひとりであり、まさに『魔王』と呼ぶにふさわしい性格をしている。

欧州では最も悪名高きカンピオーネであり、名が通ると同時にその強大な実力も知れ渡っていた。なので魔術師達の中に歯向かおうとする者はおらず、畏敬の念を寄せており、逆にその力に魅入られた信

奉者も多くいた。

そんな狼王にも、悩みはあった。それは自分の数々の悪行によって恐れられたのはいいが、その自分の噂が神々の世界にまでも広まってしまっていることだ。

そのためヴォバンの名を聞けば、まつろわぬ神は挑むどころか、ヴォバンを避けるまつろわぬ神のほうが多かった。ヴォバン侯爵は、自身の内から湧き出る闘争本能を満足させることができないのだ。

ヴォバンに挑んでくる者は、そのほとんどが自分の実力も見極められない雑魚ばかり。

それも仕方のないことで、数々の権能を持つヴォバンに対抗できる強者は、世界中を見渡しても数えるほどしかない。

百五十年ほど前に一人、何度もしつこく追ってくる同族がいたが、それもアストラル界から帰還した時にはいなくなっていた。

来ないのならば自ら赴いてやろうと考え、部下に足取りを掴むよう命令を下したこともあった。しかし一向に掴むこともできず、百五十年が経ち、ヴォバンも奴は死んだと自然に考えるようになった。

そんな好敵手に飢えていたヴォバンのとった行動とは、『あちらから来ないのならば、こちらから呼び寄せよう』というものだ。

ヴォバンはまつろわぬ神招来の儀式を行い、まつろわぬ神を故意に顕現させようとしたのだ。

「ククククク……。儀式は順調だな。もう少しだ、あとわずかで『まつろわぬジークフリート』が降臨する！」

まだ見ぬ強敵に期待を膨らませ、ヴォバンは口の端から隠しきれぬ笑みを漏らした。

ヴォバンの周りには、何十人もの巫女達が言霊をつむいでいた。

まつろわぬ神の招来の儀式に必要なものは『きわめて巫力の高い魔女や巫女』、『神の降臨を狂気に近い強さで願う祭司』、『呼び寄せる神に血肉を与える触媒となる神話』の三つだ。

祭司は、この儀式を行うことを望んだヴォバンになる。

神話は、『ニーベルンゲンの歌』を触媒に。

そして魔女や巫女は、ヴォバンが魔術師達に命令し、世界中から拉

致まがいの方法で集めてきた者たちで行っていた。神招来の儀式は危険なものであり、生きて終えられる保障はなく、生きて終えることができて正気を保っていられる方が少ないからだ。

儀式も佳境に入り、巫女達はトランス状態になっており、逃げだすことはできない。無理に止めてしまえば、巫女達の命も危険に晒される状態だった。

ヴォバン侯爵もあとわずがで顕現する神に、その特徴的な『虎の瞳』を爛々と輝かせていた。

その時だった。ヴォバンは、儀式場の周辺で邪魔が入らないように警備にあたらせていた『従僕』が、消えたのを感じた。

「なに……？」

あつさりと従僕が消されたので、他の従僕を応援に向かわせる。

しかし焼け石に水。どんどん応援に向かわせた従僕も消され、消された場所から予測して、邪魔者はすごい速さで、どんどん儀式場に近づいているようだった。

「ほう、私にまだ歯向かう者がいるとは……」

集めた巫女達の関係者であろうか？ 数はわからぬが従僕を簡単に倒していることから、それなりの実力者。

ならば生態ピラミッドの頂点に立つヴォバンの実力も、わかっているはず。それでも立ち向かってくるのだから、その反骨心と無謀な勇氣だけは認めてやらねばなるまい。

ヴォバンは従僕に、侵入者に道を開けるよう命じた。従僕達は撤退し、殿を務めた最後の従僕が消えると、侵入者とヴォバンの間には誰もいなくなつた。

「さあ、来るがいい。このサーシャ・デヤンスタール・ヴォバンが——」
直々に手を下してやろう、と言おうとした瞬間、ヴォバンは強烈な悪寒に襲われた。

カンピオーネとしての本能が、ヴォバンに命の危機が迫っていると警告しているのだ。

この位置にいれば、自分の身が危ない。しかしヴォバンがこの位置から動けば、儀式が中断されてしまうかもしれない。

ヴオバンは瞬時に、待ち構えることを選んだ。

すると空から三叉槍が、ヴオバンの立つ位置に的確に降ってきたのだ。

「ぬうッ！」

ヴオバンは降ってくる三叉槍を体で受けた。だが直前に体をひねり、重要な臓器には刺さらぬよう誘導した。

三つの穂先がヴオバンの体を正確に貫き、ヴオバンは口から血を吐いた。

「ぐふっ！ こ、この槍は……！」

ヴオバンは腹にささる槍を見て驚いた。忘れようはずもない、この三叉槍はヴオバンを百年もの間追い回した者の権能だったからだ。

刺さっていた三叉槍は、解けるように水に変わると足元に吸い込まれていってしまった。それを見てヴオバンは確信を深めた。

「しばらく見ない間に、ずいぶん老けたじゃねえか、狼王」

「やはり貴様か……。野垂れ死んだのかと思っていたぞ、海賊！」

「お前もな。大地の割れ目に落ちて、地獄まで行ったのかと思つていたがな」

馬に乗った海人が、颯爽と現れたのだ。馬は青いたてがみを生やし、体毛は白かった。おそろく神獣だろう。

「何をしに来た。儀式の邪魔をしに来たのではあるまいな」

「神招来の儀式つてやつか？ まさか。俺の目的は……お前だ」

海人は、槍をヴオバンに向けた。

「さあ、百年前の戦いの続きを、今ここで始めようか！」

「ふん、いいだろう。一捻りにしてくれるわ！」

海人は決着のついていない因縁に蹴りをつけるため、ヴオバンは儀式を忘れて目の前の極上の獲物喰らいついた。

ヴオバンが海人に目標を変える寸前、儀式工程は完遂され、発動した。呪力が高まり、まつろわぬ神が降臨しようとしていた。

だがヴオバンと海人にはそれも目に入っていなかった。

【サルバトール・ドニ、最古の同胞と邂逅する】

「あちやあー、間に合わなかったかー」

儀式場から少し離れた場所で、頭を抱えて落ち込む人物がいた。公には六人目のカンピオーネとされる、サルバトーレ・ドニだ。彼がヌアダから篡奪した権能『斬り裂く銀の腕』は、何でも斬り裂く最強の矛だ。ドニはこれを自分の剣に纏わせ、神をも殺す武器としている。

何でも斬り裂く剣だが、弱点もあった。斬る対象に近づかなくてはいけないかった。

「これじゃあ僕が着く頃には、じいさまと戦いになってるかもなあ。弱っているのを相手してもなあ」

ドニはまつろわぬ神や同じ神殺しと戦い修行を積み、剣の極地へと至ろうと画策していた。今回の儀式は、まつろわぬ神一柱とカンピオーネ一人と戦える、絶好の機会だった。

しかしヴォバン侯爵といえば、神からも避けられる歴戦の戦士だ。十中八九ヴォバンが勝ち、神は刹逆されてしまうだろう。

まつろわぬ神には期待しないほうがいいかな。戦力増強のため、あわよくば権能を篡奪しようとも思っていたドニは、一刻でも早く着くよう駆け出そうとした。

そんな時、天から何かが降ってきた。

かなり高い場所から落ちてきたわりには、小さな音でそれは着地する。着地の衝撃で舞い上がった土埃が収まると、それは人形で、右手には巨大な両刃剣を持っていた。

「ありやあ、君は……。もしかして、ジークフリート？ 僕と同じ神殺しが近くにいたはずなんだけど……」

「ふん、奴ら神殺し共なら、争いながら何処かへ行ってしまった。戦うために召還されたというのに、戦う相手がいなくて困っていたのだ。どうだ、剣を交えて、私の滾りを静めてはくれぬか？」

「神殺し、共……？ まあいいか。望むところだよ！」

ドニは嬉しそうに言う、担いでいた愛刀をつかんだ。

神殺しが二人いることに、ドニは自分と同じ考えの人がいた、としか考えなかった。

こうしてカンピオーネとなって一年と経たない成りたての剣狂いと、竜の血を浴び不死性を獲得した鋼の英雄の、一騎打ちが始まった。



そして死闘の末、ドニはまつろわぬジークフリートの剝逆を成し遂げた。

ドニは重傷を負ってはいなかったが、それでも小さな切り傷は負っていた。それにジークフリートの魔剣グラムの一撃をまともに食らえば、いくらカンピオーネといえど戦闘は困難だったであろう。

一歩間違えれば死ぬ、死と隣り合わせの激戦を制し、ドニは確かな実感を得ていた。ジークフリートが消え去った後に、ドニはジークフリートの権能を篡奪していたのだ。

まつろわぬ神との闘いで酷使した体を整えていた、サルバトーレ・ドニ。そんな彼の背後の茂みから、ひとつの影が飛び出してきた。

馬の神獣に乗った、海人だった。彼は無骨な剣を持ったまま立ち尽くすドニを認めると、トリアイナを呼び出し問いかけた。

「てめえか、呼び出されたまつろわぬ神をやったのは」

「ん……？　そうだよ。そう言う君は誰かな？　僕と同じカンピオーネみたいだけど。君みたいな人は聞いたことがないなあ」

「海人だ。まあ知らねえだろうな、俺が欧州にいたのは百年も昔だ。……そうか、まつろわぬ神は斃されたか。なら手前が代わりに相手してもらおうか」

海人は有利な馬上からドニを見下ろしながら、闘志をみなぎらせた。

海人が此処に来たのは、ヴォバンに逃げられたからだだった。ヴォバンを追い詰めて、とどめを刺した海人だったが、ヴォバンの体は黒い灰となって崩れてしまったのだ。

ヴォバンの権能、『冥界の黒き竜』の力だった。

そのせいでヴォバンの居場所を見失ってしまい、海人はまつろわぬ神のいる場所に来ていないかと確認しに来たのだ。

「中途半端に終わってモヤモヤしていた所だ。お前を倒して、すつきりとした気分ですらせてもらおう」

「ふう、長生きした同族は、みんなこんな風に血気盛んなのかな……。まあ、大歓迎なんだけどね！ 三つ又の槍を使うのか。二人も武器を使う強者に出会うなんて、今日は最高の日だね！」

「楽しんでいられるのも今のうちだぞ、若造！」

そして両者は剣と槍を交え——ドニはあっさりと打ち負かされてしまった。

敗因は連戦で疲労が海人よりも溜まっていたこと、権能をまだ扱いきれていなかったこと。なんとか勝ち筋を見つけようとするも、多数の権能に翻弄されて逃げ道を潰されてしまったのだ。

海人は命までは取らなかった。ヴォバンは潰すべき敵だが、ドニは伸びしろがある若い芽だったからだ。

ドニは落ち込みはしなかったが、次こそは倒すと安東海人の名を記憶に刻み付けたのだった。

だが、ドニは知らない。この後、儀式で召喚された獲物を掠め取られてしまったことをヴォバンが知り、ドニを宿敵認定することに。



この事件で、海人の名は魔術師界で再び躍り出ることになる。

一世紀前のカンピオーネが顔を見せたことは魔術師に報じられ、情報技術や衛星の活用により、海人の足取りは瞬く間に判明した。

それによれば彼のカンピオーネは日本の秋田に帰り、ヴォバン侯爵やサルバトーレ・ドニの証言から、名を安東海人というらしい。

それが知られるようになり最も頭を抱えるようになったのは、日本の魔術組織である正史編纂委員会であることは言うまでもない。

四十五話、発覚

【二十世紀後期に賢人議会により作成された、海洋に棲む神獣らしき生物についての報告書より抜粋】

中世期頃に船乗り達の間で海の怪物——『クラークン』などの存在が真しやかに囁かれていた。かの巨大な軟体動物は船底を這いずり回り、そのマストより長い何本もの足で船体を絡めとり、転覆させて捕食してしまうのだ、と……。

伝説としてだけ語られ、表向きには空想上の産物とされている。だが我々魔術師からすれば、それはまつろわぬ神々やカンピオーネを主とする『神獣』であること、容易に想像がつくことであろう。

神獣は、まつろわぬ神々やカンピオーネの生物の形をした眷属である。魔術師数十人がかりでようやく押さえ込むことができ、倒すことは不可能ではない。だが神から直接力を与えられれば、それは特大の脅威と化す。

まつろわぬ神とは違い、倒しきることが現実味を帯びている。だがそれに至るまでに、多大な犠牲を強いなければならない。一般人から見た海の怪物は、魔術師から見たまつろわぬ神になるかもしれない。

神獣はまつろわぬ神やカンピオーネなどにより権能で生み出される、召喚される——発生源がある。決して自然発生はせず、魔術的要因以外で生まれることはない。

世界中の海で目撃される『海の神獣』においては、そのほとんど出現原因が特定されていない。海の生物の形をとる神獣は、その全てが海中を移動するため、捕捉し討伐するのも非常に困難である。

これら列挙した世界で目撃される海の神獣は、水や海に関連する強大な創造女神の眷属の可能性が高い。

万が一の有事の際に活用できるよう、もしもの時のための備えである。

幸い、死亡者が出るといった、人間への被害は出ていない。だがもしこれらの神獣を束ねる神がおり、人間を手を出さないと考えるを変えたのならば。海の深淵に潜む獣が、人間にその牙を向いたのなら

ば。

そのような方が一の有事が起こらぬことを、切に願うばかりである。

・シヤチ

高い知性と獯猛性を兼ね備えた、『海のギャング』として知られるシヤチの姿をした神獣である。チリで目撃され、陸地で長時間活動していたことから、神獣として認定された。

通常のシヤチは、陸に上がると自身の体重で死亡してしまう。しかしこの神獣は重力に押しつぶされるどころか、捕食対象と同じように陸地を這って移動し、アザラシの群れを殺戮し全滅させた。

しかもこの内捕食されたのはほんの数匹だけであり、アザラシの命を奪って遊んでいたと推測され、この個体の残虐性が伺える。

・ダツ

ダツとは、秋刀魚のような細長い体に、長く上がった両顎が特徴の魚である。Needle^針fish^魚と呼ばれ、光の反射に反応して突進し、漁師や海に潜るダイバーなどへの被害が発生している。

このダツの形を模した神獣は、とあるタンカー事故の調査で確認された。原因不明の浸水によって原油を流出しながら沈没していったタンカー船を、潜水艇が調査した。すると船底には全長二メートルほどの巨大なダツの群れの死骸が確認されたのである。

タンカーの船底は、ガトリング砲で撃たれたかのような無数の穴が開けられていた。オイル漏れの事故がないよう厚く造られたタンカーの船底を、ダツの突進が貫通したのだ。死骸が無数にあったのは、貫通して船内に浸入した後、水中に戻れず呼吸できずに死したためと考えられた。

公にはただのヒューマンエラーとされているが、真にはこのダツの神獣が原因である。ダツがどうしてタンカーを攻撃したかは定かではないが、この厚い鉄板を貫く危険なダツの神獣は、他にも多数いると考えられる。

・ダイオウイカ

クラークのモーターとされている世界最大の脊椎動物ではあるが、その生きている姿を見た者はほとんどおらず、目撃情報も少ない謎多き生物だ。天敵であるマッコウクジラの腹の中から出た死骸のほうに、確認された数が多いとまで言われている。

そのダイオウイカの神獣だが、直接目撃されたわけではない。その神獣の餌食にされたマッコウクジラの死骸から、存在が推測された。

座礁して死体となった鯨は、腐敗ガスを溜め込んで爆発してしまう。しかしそのマッコウクジラの死骸は爆発したのではなく、クジラ内部から食い破られて死亡していた。死骸を解剖して調べたところ、クジラの胃袋にはイカの吸盤の跡があった。吸盤の跡のサイズと特徴から、ダイオウイカと判断された。

これらの状況から、マッコウクジラは普通のダイオウイカだと神獣を丸呑みにし、呑まれた神獣は胃袋を吸盤のついた触腕で破ろうとするもかなわず、ついには強靱なカラストンビでマッコウクジラの体を食い破ったのだ、と判断された。

e t c .



「いやー、大変なことになりましたねえ」

甘粕冬馬は手元の、安東海人についての賢人議会の資料に目を通しながら、デスクをはさんで椅子に座る者に話しかける。大変とは言いながらも、冬馬の表情は苦笑いに近かった。

「まさか日本にもカンピオーネが誕生するとは……。いや、この場合はしていたですか。これで魔術の最先端を行く欧州に、日本も一歩近づきましたかね？」

「そんな悠長なことを言っている場合じゃないと思うけどね。カンピオーネが生まれて得る利益と、被る被害を比べて考えるとね」

対面で会話を交わっていた沙耶宮馨は、深くため息をついた。羅刹王が誕生したことで起こる厄介ごとを頭の中で採算した結果、愚痴を

吐かずにはいられなかった。対岸の火事を眺めていたら、自分のところに火が燃え移ったようなものだ。

沙耶宮馨は、正史編纂委員会という組織の、東京分室室長を務めている。甘粕冬馬は彼女の懐刀である。

正史編纂委員会とは、都市部の呪術師達を統括し、魔術が表に出ないような情報操作を行う、政府直属の秘密組織である。その日本で唯一と言える魔術組織が自国のカンピオーネの存在を知らず、自分達よりも先に国外の『賢人議会』が海人の居場所を発表したという事実は、恥ずべき失態であった。

賢人議会の発表を耳にした時、沙耶宮馨にとってはまさに晴天の霹靂であった。日本の魔術関係者に駆け巡った

そのニュースは本当に唐突な事態であり、正史編纂委員会には早急な対応が求められていた。

だが、馨の直属の部下であり、彼女の手足として各地を走り回る甘粕冬馬の表情は、若干余裕があった。

馨も緊張しているというよりも、ほっと安堵した様子であった。

「いやー、でも良かったですよ馨さん。そのカンピオーネの居る場所が秋田で」

「ええ。まさに不幸中の幸いですね。僕達の管轄外ですから」

沙耶宮馨は東京分室——関東一帯の管理を任されていた。なので秋田を統括している東北分室の者に任せていけばいい。

対応に頭を悩ませ、胃を痛めることもない。委員会ならず魔術師界全体の問題ではあったが、直接対応しなくてもよいというのは、心にかかる負担が軽かった。

自分達に出来る事といえば、東北分室の者の対応がカンピオーネの逆鱗に触れないか祈ることだけである。

「この報告書によれば、少なくとも四百年以上昔に生まれています。十七世紀……戦国時代の、歴史の生き証人ですね」

「ええ、しかも甘粕さん、彼の王は過去にヴオバン侯爵と幾度となく衝突し、なんと彼の王のほうが勝ち越しているとか」

馨は報告書に目を落とした。報告書には安東海人について、儀式場

で起こった出来事と、それより過去の起きた事実が簡潔に書かれていた。

それだけでも、安東海人という人物の好戦的な性格がわかる。そのあまりに血の気の多い性格は、ヴオバン侯爵に避けられる程だという。

ヴオバン侯爵と比べられる程の荒々しい王というのは、それはもう特大の爆弾である。それを突然抱え込まされた正史編纂委員会に、ひいては日本にその矛先が向かねばよいが……。

それと馨と冬馬の二人は、もうひとつ気になっていることがあった。

「日本に羅刹王が生まれたことを、古老の方々が把握していなかった、なんてことはあると思いますか？」

「まずあり得ないでしょうね。ですが委員会が組織される前のことですから、何らかの手は打ってあるのでしょうか」

馨が分かりきったような質問を投げかける。冬馬はそれはない、と断言した。

正史編纂委員会の上には、『古老』と呼ばれる集団がある。何百年も前から活動が続けている、人外の集まりである。日本で最も強い権威を持つており、委員会の元老院のような立場にあった。

何百年と言う通り、彼等は人ではない。古老筆頭の『御老公』と呼ばれる者は、元まつろわぬ神である。

そんな古老の方々が、羅刹王の誕生という大事件を、知らずにそのまま放置しているとは考え辛かった。

知っていたとして、何故今の今までカンピオーネの存在を公表しなかったのか。二人にとって雲上の存在であるため、御老公の思惑はわかっていなかった。

そんな時、机の上の備え付けの電話が鳴った。馨が出てしばらく話し込んだ後、驚愕で目を見開いた。

馨は相槌を打ちながら詳細を聞き、話し終わり受話器を下ろすと冬馬に向き直った。

「なんと、安東海人に接触する伝手が見つかったらしいです」

「それは……驚きですね」

安東海人の存在が公にされたのは、つい先日だ。こんなにも早く彼の王を知る人物が出るとは、二人とも思っていなかった。

「長くて百五十年この日本に居るのでしよう？ それほど長い時間、容姿が変わらなかつたら、人間じゃないと気づかれそうなものですが……」

二人は、安東海人は百五十年間なんの活動もないと聞いていた。

容姿が変わらなければ人間に怪しまれるし、安東海人はてつきり交流を断っているとはばかり思っていた。

「それがどうやら、媛巫女の中にいたらしいですよ。秋田の姓をしていたのでダメもとで訪ねたところ、ドンピシャだったそうですよ」

「秋田？」

「改める前の名字は、安東だったそうです。遡れば七百年以上前に一族の起こりをたどれる、日本有数の名家ですよ」

冬馬はこれまた驚いた。安東ということはつまり、その媛巫女の先祖には……。

「馨さん、ということとはつまり……」

「ええ。その媛巫女は、安東海人の子孫にあたるだそうです。何世代にもわたって、ずっと安東家の土地を守ってきたのだ、と……」



「海人様！ 海人様ー！」

「おっ、もうそんな時間か……」

堤防の先端で海を眺めていた海人は、背後から聞こえる少女の声に振り返った。

振り返った視線の先には、こちらに向かって駆け寄ってくる、巫女服の少女の姿があった。

「綾花、悪いな。呼びに来させて」

「いえ、私もこの子たちに顔を見せたかったですし……」

そう言う綾花の立つ堤防の近く、海面からはイルカとシヤチが顔を

出していた。

このイルカやシャチ、普通の動物ではない。海人の手で神獣になったものばかりだった。

綾花は堤防の上でしゃがみこむと、手をのぼして頭や口先を撫でた。片方の手で袖が水につからないよう押さえ、少し苦しい姿勢だ。「ごめんね、今日は時間がなくて……。また今度ね！」

海人がそれを眺めていると、海人の立っている近くの水面から、デルピノスが顔を出した。

『いつ来ても大人気つすね、綾花様』

「ああ……。それより、食料は足りたか？ まだ食い足りないとかはないか」

『みんな満足してるつす。……。それに何度も言ってますが、自分達で食料の確保はできるつす。海人様がやる必要は……。』

「いいんだ、俺にやらせてくれ。お前達を生み出した俺の責務だ」

もう何度目かの会話になる。神獣達はそのパワーから、多大なエネルギーを消費する。そのため同じ種類の動物よりも、何倍もの栄養を摂取しなければ、体の維持ができなくなる。

中には、ある一帯の生態系を破壊する神獣もいる。

そういつた神獣の食料調達を、海人が一手に引き受けているのだ。

「海人様、そろそろ行きましょう」

ひと通り撫で終わったらしい綾花が、海人にそう話しかけてくる。

「終わったか。わかった、帰ろう」

「はい。……。みんな、またねー！」

海人が歩き出す。その後ろから、神獣達に別れを告げた綾花がついてくる。

「それで今から、お前の所属している組織が会いにくるんだったな。名はたしか……」

「はい。正史編纂委員会。日本の魔術師や媛巫女を統括しています」

「まさかこんなに早くバレるとはなあ……。…」

海人は空を見上げて、手を伸ばした。

「まさか人類は星を造れるようになるなんて、時代の流れは早いな

……」

今のこの姿も、衛星とやらで監視されているのだろうか……。海人は時の流れをひしひしと感じていた。

「そこだけ聞くと、本当におじいさんみたいですね……」

「実際、ジジイだからな。地球上の誰よりも生きてる自身があるぞ」

「見た目は二十代と言っても、信じてくれるほど若いですけどね、おとーさんは」

「お父さんはやめろ、海人と名を呼べと言っているだろう」

「はい、わかってますよ、海人様」

くすくすと笑顔を浮かべながら、追いついてきた綾花が隣に並ぶ。

少女の名は秋田綾花^{あやか}。海人や秋田芽衣の子孫であり、媛巫女の素質

も持つ。

歳は若干十五歳。近所の中学に通う、しつかり者の少女だった。

四十六話、交渉

能代市の中心地からそれほど離れていない場所に、海人達の住む神社はあった。

築三百年の長い歴史をもつ建造物であり、周りを土塀に囲まれて、そこそこの面積があった。明治維新後の廃仏毀釈の的にならず、太平洋戦争の戦火をまぬがれ、ここまで取り壊されることなく現存していた。

そんな年季のはいつた神社には、おもに三つの建物がある。御神体を祀る本殿、仁実が居住する幽世へと繋がっている社、綾花の暮らす一軒家だ。社務所もあるが、渡り廊下で本殿とつながっていた。

そんな神社に今回、海人を訪ねる客が来ていた。正史編纂委員会の使者だ。

綾花を訪ねる客であったなら、一軒家のほうに通していた。だが今回の客は日本の呪術師を纏める組織の使いとして、カンピオーネに面会しに来ていた。正史編纂委員会の使者は、本殿へと通された。

使者の目的は、日本にまつろわぬ神の脅威が迫った時に、海人が力を貸してくれるよう、約定をとりつけることだった。

『お断りいたします』

使者の応対をしていたのは、安東仁実だった。

案内役の巫女から『安東海人は、綾花が呼びに行っている』と聞かされ、使者は水晶玉を前にしてソファに座っている。水晶玉には仁実の顔が映っており、テレビカメラで会話しているかのようだった。

仁実の体が水晶玉に入っているわけではない。仁実は今、幽世にいる。仁実は水晶玉に姿を映し、使者と会話しているのだった。

『安東海人が正史編纂委員会に協力するいわれは御座いません。早々にお引取りください』

使者は仁実から開口一番、交渉の余地なしとばかりに撥ね付けられていた。

だが、はいそうですか、と引き下がるわけにはいかなかった。手を貸してもらわねば、まつろわぬ神の脅威にどう立ち向かえばよいと言

うのだ。何の力もない人間では、とうてい勝ち目などない。

「で、ですが、カンピオーネはその比類なき力ゆえに、災いを引き寄せてしまいます。もしまつろわぬ神が訪れた場合、海人様の持つ、神々の権能の力が必要なのです」

使者は必死に食らいついていった。

カンピオーネはまつろわぬ神の仇敵であるため、魔術関連の騒動に中心にすることが多い。使者はそのことを持ち出し、安藤海人が呼び寄せたのだと言いがかりをつけ、責任をとらせようとした。

『神殺しがいなくとも、まつろわぬ神は顕現します。それに家の安東海人は人間社会よりも、神々の世界のほうで名が轟いています。その伝わりようは、かのヴォバン侯爵と並ぶか、それ以上とも……。なので安東海人を避けるまつろわぬ神よりも、狙う神を探すほうが難しいかもしれません』

だが仁実、まつろわぬ神が顕れたとしても、それは必ずしも海人のせいとは限らない。加えてまつろわぬ神のほうから海人を避け、海人が災いを呼び寄せることはない、とした。

『少しでも調べたのなら分かるはずです。ここ二世紀ほど此処奥羽の地で、まつろわぬ神が顕現したことなど無いということに。……安東海人は欧州へ向かう数ヶ月前まで、ずっと幽世に籠っていました。幽世にいれば、民の生活を脅かすことはないのです』

「し、しかし……。現にこうして、海人様は現世へと姿を現し、ヨーロッパで騒動を起こしました。科学技術の発達により、居場所もこうして判明してしまいました」

幽世に引き籠っていた海人は、外界の科学技術がそこまで進歩しているなど考えが及ばなかった。

まさに江戸時代における、日本の鎖国状態。空から見張られているとはつゆ知らず、こうして住所を割り出されてしまったのだ。

「仁実様、これから海人様の力を利用せんと、各国の魔術組織がスパイを送り込んでくるでしょう。我々日本の正史編纂委員会が自国なので一番に接触できましたが、他もすぐに接触を試みてくるはずです……。まつろわぬ神に抗う力はなくとも、同じ人間相手ならば、どう

に力をお貸しくださらないでしょうか？」

使者は頭を下げた。しかしそれも、仁実の首を縦に振らせるには至らなかった。

『結構です。我々の身は自分達で守れます。それにこの辺りは安東の島。余所者など簡単に見分けが付きません。他人に手を出されると、かえって邪魔になります』

正史編纂委員会は、日本全国の呪術師を束ねる組織だが、此処秋田においては安東のほうが影響力が強い。全国に満遍なく手を伸ばす委員会よりも、三世紀前から集中して根を張る安東の違いだ。

これで、使者は切り札を出すしかなかった。委員会の印象は悪くなってしまうかもしれないが、背に腹は代えられない。

『では仁実様、先ほどの話で『海人様が騒動の中心にはならない』とおっしゃった。ですがヴォバン侯爵については一体どうなされるのですか？』

仁実は押し黙った。それを見て、使者はこれ幸いとばかりに攻め立てる。

『その口調ではまるで『安東海人は日本に災いは招かない』と言っているようでした。ですがヴォバン侯爵は、海人様とは因縁浅からぬ相手。つい先日モヨロツパへ赴き、ヴォバン侯爵と刃を交えたそうではないですか。……海人様への報復目的で来日することは決まっているようなもの。どう責任を取るおつもりか？』

仁実は考える素振りを見せたあと、威圧的な態度は崩さず話し始めた。

『……確かに、争いの火種となることを起こしたのは安東海人です。だが居場所が此処であると暴いたのは人間です。空に星を浮かべて、知らなければいいことを知ってしまったのは、人間の責任。覗き見のような真似をして、興味本意で探らなければ、災いが降りかかることはなかったのです』

酷い言い草だった。安東海人を脅威と認定し、衛星で搜索したのは賢人議会だ。正史編纂委員会に非はなく、完全にとばっちりだった。

ヴオバン侯爵に日本が狙われたのは、人間の技術のせいだと、まるで人間を他人のようにのたまう。

「まるで己は人間ではないかののように仰るのですね」

『ええ、その通りですよ』

さも当然の様に仁実と言った。

『私が安東海人のことを普段なんと呼んでいるか教えてさしあげましょう……。『兄様』ですよ。血のつながりはなくとも、安東海人が私の実父の養子であることは、紛れもない事実です』

お引取りください、と仁実は水晶玉の傍に控えていた巫女に指示を出す。玄関までの案内役の巫女だ。

交渉材料も出尽くしてしまった使者は、もはやこれまでか……。とソファから腰を上げようとした。

その時だった。部屋の唯一の扉が勢いよく開かれ、男が一人、我が物顔で入ってきたのだ。

「すまん、待たせちまったな」

その男の後から、巫女の服装をした少女が一人、頭を低くしながら入ってくる。

男はわからなかったが、少女は見覚えがある。媛巫女のひとり、秋田綾花と聞いたか。

『兄様……』

安東仁実が『兄様』と呼ぶ人物。つまりこの男が……。

「遅れてきて悪かったな、正史編纂委員会の使者。俺が安東海人だ」

男——安東海人は、使者の正面に水晶玉をはさんで、ソファにどかつと座り込んだのだった。



海人が遅れたのには訳があった。綾花が海人を呼びにきて、神社までの帰路につくはよかった。

だがその帰路の道中、何故か綾花があれが欲しい、これが欲しいと要求して引きとめようとしてきたのだ。

最初から普段の綾花が欲しがらる物ではないので、海人もおかしいと思っていた。要求が何度目かになってようやく問いただと、仁実に『出来る限り到着を遅らせろ』と言いつけられたと白状した。

海人が到着する前に交渉を終わらせ、海人を参加させたくはなかったらしい。

海人は急いで神社へ戻ると、こうして応接室の扉を開いたのだった。

『兄様……。その……。』

「仁実、お前との話は後でだ。あとは俺に任せてくれ」

『……はい……。』

落ち込んだ様子で低い声で返事をすると、水晶玉の仁実の映像は消えた。そして海人は、使者に向き直った。

「遅れてきた身で悪いが、仁実に説明したこと、もう一度説明してもらえるかな？」

「あ、はい。では……」

海人の応対に面食らっていた使者だったが、我に帰ると再び交渉を始めた。カンピオーネの力を貸してほしいこと、ヴォバン侯爵の相手をしてもらいたいこと、味方になってくれるのであれば戦闘に参加する以外の支援を全力で行うこと。

それらを全て説明し終えた後、海人はしばらく悩む素振りを見せた。そしてこう答えた。

「いいだろう」

「い……今、なんと？」

「全面的に協力しよう、と言ったんだ。まつろわぬ神が顕れた場合、俺が斃そう」

使者は心の中で歓声をあげた。この場に一人だけだったら、両手を上げて万歳していたところだ。

「ほ、本当ですね?! 力をお貸ししていただけなのですけどね?」

「ただし条件というか、要求というか、付け加えて欲しいことが三つある」

「な、何でしょう」

「第一に、俺と委員会の関係は、あくまで協力関係だ。俺があんたらに望むことは、俺がまつろわぬ神と戦った後の事後処理のみ。それ以外はしなくていい」

各国の組織の諜報員を処理してくれるという申し出はありがたかったが、海人はそれを断った。安東からしてみれば委員会も己を利用しようとする組織であり、他の魔術結社と変わらない。この地に委員会の手が入るのを拒んだのだ。

「第二に、俺は『日本の』カンピオーネではないということ。確かに生まれたのは此処日本だが、住居は船だと思っている。つまり、海の上で生活しているってことだ」

海人はここ最近（およそ百年）、この神社で過ごしているが、海人自身は長い里帰りのようなものだと思っていた。

なので海人としては現住所は海の上であり、日本は故郷ということにしてほしかった。在住しているわけではない、と念押しした。

「最後に、二つ目の条件に繋がるんだが……。俺は船で世界中を移動するつもりだ。アメリカ、イギリス、ブラジルにだって行くかもしれない。日本に留まらず、世界の港を渡り歩きたいと思っている」

星を飛ばせる時代になったのだ。この百年程で世界の景色も様変わりしているはずだ。海人は今一度、世界中を旅してみたかった。

「だから駆けつけられない距離にいたら、それはもう諦めてくれ」



「ごめんなさい、お母さん。^{仁実}お父さん^{海人}を引き止められなくて……」

『いいのよ、綾花。来ちゃったものは仕方ないもの』

綾花が謝り、水晶玉の中の仁実がなだめる。やはり海人が神社につかないよう遅れさせようとしたのは、仁実の指示だったようだ。

「それで、どうして当事者の俺を除け者にしようとしたんだ？」

『……兄様を利用しようとする者達ですから、早々に立ち去ってもらおうと考えていました。兄様がいると交渉になりませんから』

「馬鹿にしてんのか？ 俺だって考えて、お前等が被害にあわないよ

う考えているんだ」

『ですが兄様は、まつろわぬ神と後先考えず戦えるといわれたら、嬉々として受けるでしょう？ 現にそういう条件で受けましたし……』

「おう、そうだな」

『まったくもう……』

やれやれと仁実は頬に手をあてた。面倒が見切れないといった、呆れた様子だった。

「だが利用すると言ってもだ、委員会は当たり前のことをしただけだろう？ まつろわぬ神の脅威のため、カンピオーネを味方にしようとした」

『ですがそうとも言い切れません。……綾花、説明しなさい』

「はい！ 実は正史編纂委員会の上には、『古老』といった方々がいるそうです。その方々は何百年も日本を守っていて、実質トップで、日本の呪術師は誰も逆らえないだとか……」

「何百年？ ということはつまり、そいつらはまつろわぬ神。それか……」

『それか、不死の存在』

海人に続けて、仁実が呟いた。仁実もまた、寿命を克服した不死の存在となった者だった。

『その古老の方々には、私に不死の方法を教授いただいた方がいるかもしれません。その方は、アテルイ様から紹介して頂きました』

「アテルイが？ ということは、つまり……」

『はい、アテルイ様もその『古老』の方々の中の一人かもしれません』海人がこの檜山に戻ってきてから、一度顔を見せただけで、どこかに消えてしまったアテルイ。引越すと言いつつ残っていたが、そのアテルイが古老と呼ばれる者の中にいる可能性がある。

「アテルイ……？」

この場にいる中で一人、アテルイと会ったことのない綾花は、話についていけずに首をかしげるのだった。



それから四年の月日が流れた。

何事もなく過ぎれども、海人のより詳しい情報が魔術師の世に浸透していった。

海人は世界を船で渡り歩いたが、世界一周とはならず、頻繁に檜山へと戻って仁実と綾花に顔を見せていた。

そして物語は五月の終わり頃、賢人議会在『草薙護堂』についての報告書、日本で二番目となるカンピオーネについて発表する所から、始まる。

第八章 一面六臂の破壊神 四十七話、教団

その日、世界に八番目のカンピオーネの誕生が報じられた。

魔王の名は、草薙護堂。日本人だった。

これにより歴史上類を見ない、同国にカンピオーネが二人居るという事態となった。

賢人議会の発表を耳にした日本の魔術協会——正史編纂委員会は、対応に追われていた。

草薙護堂はどんな人柄をしているのか、何処に住んでいるのかなど、早急な対応と調査に乗り出していた。

その調査する過程において、草薙護堂がイタリアから『神具』らしき物を日本に持ち込んでいることがわかり、その『神具』がまつろわぬ神と縁あるものとも確認された。

「これは……。なんとも、タイミングの悪いことで……」

正史編纂委員会、東京分室室長の沙耶宮馨は、頭を抱えていた。

草薙護堂が持ち込んだ神具が本物であるため、この日本にまつろわぬ神の襲来が予想される。

まつろわぬ神は嵐のようなものである。只の人間なら過ぎ去るのを待つしかない。

だが、今は違う。この国には安東海人というカンピオーネがいる。

助けを求めれば、まつろわぬ神の前に立ち盾となってくれれば、約束をしてくれた。

指をくわえて見ているだけではない。

と思っていたのだが……。

「まさか一ヶ月以上前から行方不明とは……、本当にツイていませんね」

甘粕冬馬はそう口から溢した。彼の笑顔はひきつり、苦笑いになっていた。

この報を受け、安東海人に助力を求めるため、仲介役の秋田綾花に

連絡を入れた。しかし綾花の口から、初めて安東海人の行方がわからなくなっていることが判明したのだ。

海人は一ヶ月前、欧州から日本へ戻るため、インドに停泊し、綾花に一報を入れてきたらしい。だがそれ以降行き先は知れず、船の位置もわからなくなってしまったという。

安東海人はカンピオーネだ。安否は心配していなかったが、正史編纂委員会としては頼れる相手がいなくなってしまったのは痛い。

こうなってしまうのは、正史編纂委員会が継げるのは、一人しかない。

「草薙護堂に、まつろわぬ神を滅ぼして頂きましょう。どのような意図があったか分かりませんが、彼の王も神具がまつろわぬ神を引き寄せることは知っていたはずです。闘ってもらうしかないでしょう。それでよろしいですか、馨さん？」

「ええ、賛成です。直ちに万理谷祐理につなぎ、草薙王に協力を求めてください」

冬馬は携帯電話を取り出すと、万理谷祐理に連絡し始めた。

それを見ながら、馨は海人の行方について考えていた。

海人が連絡してきたというインドについて、魔術的に厄介な地であった。インド神話と叙事詩、ヒンドゥー教やイスラム教を代表とする様々な宗教がある。中には人間を生贄とする過激な宗教もあると聞く。

カンピオーネの騒動を引き寄せる体質が働いたのなら、もしくはは……。

「馨さん。草薙さんがまつろわぬアテナを迎え撃つてくれるそうです」

それを聞いた馨は、海人のことをひとまず置いておくことにした。後で考えるところとして、目下の脅威について頭を働かせるのだった。



日本で二番目のカンピオーネの誕生に、魔術関係者が大混乱の中。

一番目のカンピオーネの安東海人はというと……。沙耶宮馨の思った通りのことになっていた。

「ぐっ……。くそっ……」

海人は胸を押さえつけながら呻いた。片膝をついている状態だ。

現在、海人は森の中を逃走している最中だった。こうして蹲っている間にも、後方から追っ手が近づいているはずだった。

急いで立ち上がり、海人は駆け出す。駆け出した直後、海人のいた地面に弓矢が突き刺さる。間一髪だった。

「くそッ……！」

海人は悪態をつくことしかできなかった。海人を追ってきているのは、人間であるのだ。

追ってきているのは只の人間ではなかった。組織された集団であり、まつろわぬ神の加護を受けた軍隊でもあった。

数は多いが、加護を受けているといっても殺すことはできる。だが、きりがなかった。殺しても殺しても、時間が巻き戻ったかのように復活するからだ。

終わりが無い。なので海人はこうして逃げに徹しているのだ。

森を抜ければ、開けた場所に出る。そこで権能で一網打尽にするつもりだった。

しかし森を抜ける前に追いつかれてしまった。海人は十数人の人間に包囲され、地上や木の上から追っ手が襲い掛かってくる。

追っ手達の服装はバラバラだが、口元に黄色い布巾を巻いていた。

「どけえ！ 退かねえと、死ぬより恐ろしい苦痛を与えるぞ！」

まつろわぬ神の加護を受けているといっても、武器は普通の人間と同じである。刃物や弓で攻撃をしてくる追っ手を、海人はぎこちない動きでさばいた。槍は使わず素手で、喧嘩の延長線上のような戦い方だった。

そしてその中の一人を、水天の権能で水の塊の中に閉じ込めた。

ズキリと頭痛に断続的に襲われるが、海人は奥歯をかみ締めて顔に出さない。

閉じ込められた人間は目を見開き、息が出来ずにもがき苦しんでい

る。

「さあ、かかってこい。死なないのなら、死にたくなるまで何度も溺死させてやる」

すると水塊の水圧が強くなり、中の人間は肺の空気を吐き出させられ溺死した。だが即座に復活し、満足に呼吸が出来ずにまた溺れはじめた。

息ができずに、だんだんと意識が遠のいて死ぬ。拷問にも使われる苦痛が何度も繰り返されるのだ。

それを見て躊躇した追っ手達が、海人を囲んで円を作ると、こう着状態に陥った。

じりじりと時間が過ぎ、埒が明かないと海人が一步踏み出そうとした時だった。

「いけませんよ。我が子であっても、兄弟達をいじめることは許しません」

声が響き、追っ手達が割れると、そこから異形の女性が現れた。

足は二本で人と変わらないが、腕が二対あり、額には第三の目が輝いていた。

そして最も目を引く特徴として、人間の骸骨を数珠つなぎにしたものを、肩にかけていた。

海人の体が臨戦態勢に入る。目の前の女性は、まつろわぬ神だ。

「やっときたか、カーリー。疲れることは信者共に任せるせいで、体になまっているんじゃないか？」

海人は出てきた親玉——まつろわぬカーリーを挑発した。だがカーリーにとつてはのれんに腕押しどころか逆効果だったようで、聖母の笑みを返された。

異形の体からは考えられないような、慈愛に満ちた笑顔だった。

「そうね、本当に海人は速いわ。毒を盛られた状態でも、私が飛ぶ速度より速く走れるんだもの。驚いたわ」

カーリーの言う通り、海人の体は今も毒に犯されていた。海人はカーリーとその信者達の罠により、毒入りの酒を飲んで、権能が一部使えなくなってしまうていた。

トリアイナを出さずに、拳で戦っていたのもそのためだ。

しかも権能を使っている今も頭痛がして、集中力が途切れそうになる。

「前よりはマシンになったからな。毒が抜けて、体の痺れもとれて、なにより権能が使えるようになった。これで手前を殺せるぞ、カーリー！」

「そう……。ならいらっしやい、海人」

海人の傍らで信者を捕縛していた水塊が、ずるりと抜け落ちるように信者を解放した。

すると水塊は細長くなると、蛇のようにカーリーに絡みついたのだ。それでもなお、カーリーは笑みを崩さない。

そのまま体をへし折ってしまったおうと海人は念じ、水塊がカーリーの体をすさまじい力で絞めつける。

鈍い音をたてて、あっさりとカーリーの背骨がへし折れてしまった。

信者共が復活するのを見て、カーリーも復活するのだろうと海人は警戒を崩さなかった。しかし次に起こった事態は予想外だった。

カーリーから突如火が吹き上がり、周囲の森に燃え広がった。あまりの熱気に海人は顔を背け、顔を上げた時には炎の燃え移っていない木はないほどだった。

奴は何処だ。周囲を見渡す海人だが、背後から突然抱きすくめられてしまう。

絞めるのではなく優しい力で、まるで我が子を抱きしめる愛さえ感じるような抱擁だった。

「ッー」

「そう力まないで……。あなたは私の愛を受けるに相応しい子。さあ、私に身を委ねて……」

「離、せ……ッ」

海人が抵抗しようとするが、持ち前の怪力でも腕を振り払うことができない。それどころからカーリーの腕に抱きすくめられると、海人の意識が遠のいていった。

「そうよ、いい子ね……」
心地良く暖かいものに包まれて、海人の意識は深い眠りへと落ちて
いった。

四十八話、殺戮

海人は硬いベッドの上で目を覚ました。台の上にマットを敷いただけの簡易な寝台から上体を起こして、周囲を見渡す。

そこは鉄の骨組みにシートを被せただけの、テントのような場所だった。近くの椅子に座っていた男が、海人が起きたのに気づく。

「お、起きたか。穏やかに寝ていたな。あれだけ派手に暴れまわっていた奴の寝顔とは思えなかったよ」

白人男性だった。英語で話しかけられたので、海人も英語で会話することにした。

「……此処は……」

「救護テントだ。覚えているか？ 貴方は我らが母であるカーリー様に包まれて、今まで気を失っていたんだ。身に余る光栄だな」

「死なない体をもつ集団でも、医者が必要なんだな」

「蘇るといっても、多少の切り傷や怪我なんかは此処に来る者が多いからな。楽な仕事だよ」

立てるかい？ と海人に訪ねながら、白人の医者は椅子から立ち上がってテントの出口へ向かう。

海人もベッドから降り、医者が続いてテントをくぐって外に出る。

その先では密林の中であり、雨風を最低限凌げるだけの同じようなテントがいくつか立ててあった。外ではアジア系と分かる人々がおり、洗濯物が干されている等生活している様子が伺えた。医者のような白人は見当たらないし、女性の姿はほとんど見当たらなかった。仮面を着けている人もいない。

すると海人の存在に気づいた者から順々に作業の手を止め、海人をじつと見つめてくる。海人に視線が集まり、中には殺気が乗っているものまであった。そいつは海人を追ってきた、カーリーを信奉する者達の一人なのだろう。

いや、もしかしたら此処にいる全員、カーリーに並々ならぬ執心を持っていてもおかしくない。

「私達はこの森で暮らしている。……道を開けてくれ！ カーリー様

の命だ、お客人を神殿へ通す。もしかしたら客人から家族になるかもしれないがな」

「ふん、俺はその家族とやらになる気はないぞ」

「何を選択しようが構わないが、カーリー様には拝謁してもらおうよ。こつちだ」

海人は白人の医者に先導され、好意的とは言えない視線を一身に浴びながら着いていった。しばらくすると森が開けて、大理石の荘厳な神殿が現れた。

しかし神殿に近づくにつれて、海人はそこから漂ってくる匂いに顔をしかめた。神聖な雰囲気似つかわしくない、海人の嗅ぎなれた、血の匂いがした。

「カーリー様、お客様をお連れしました。……ッ！」

「下がりなさい」

「失礼しました」

神殿へと入ると、神殺しの体がまつろわぬ神に反応して、ドクンと高鳴る。医者がカーリーの前で跪と、そこに広がる光景にさすがに堪えたのか、医者も嘔吐く。カーリーも反応を予想していたかは分からないが、直ぐに下がらせた。

海人と玉座に座るカーリーの間には、百に届くかといった人間の生首が、山高く積みまわっていた。

「こいつは……」

「私への捧げ物。私の最も強い面である『破壊者』の面は、血と殺戮を求める。これが一番、私のエネルギー源となる」

「てめえがやった、て訊じやなさそうだな。捧げ物……。やったのはお前の手下共だな」

「そう、私の息子達からもらったの。海人、あなたも私の息子になって、同じように只人の命を捧げなさい」

「それが俺を誘った理由か……」

どうやらまつろわぬカーリーは力を貯め込んでおり、海人にはそれに加担しろと言っているのだ。

はいそうですか、と承諾するわけがない。要求を足蹴にする返答の

代わりに、海人は先制攻撃として重い一撃を加えようとした。だが使える権能は、眠らされる前から使えた水天の権能だけだ。

しかも使おうにも、操る水がない。海人は、カーリーとの間に鎮座する人間の首の山に目をつけた。

海人はカーリーに察知されないよう、そつと人間の血を集めだした。

「何故、俺を狙った。俺の他に、居場所の分かりやすい神殺しが居るだろう」

集めるのに時間がかかる。海人は興味のあるふりをして、時間を稼ぐ作戦に出た。

話に乗ってきたことが嬉しいのか、カーリーはニタリと笑みを浮かべた。

「それは海人、あなたの持つ権能が私の目的に、最も適したものだからですよ」

海人は己の全てを見透かされているような感覚に襲われた。

「魚を操る権能のことか。だったらヴォバン侯爵のほうが適している。奴の権能は、自ら殺した者の屍を操るもの。ドラゴンだって従える」

公に知られている海人の権能は、ポセイドンの槍とアンフィトリテの神獣を創る権能。水を操るのは副産物とされ、あとは怪力の権能もあると推測されていた。

それを知っているのだらうと、海人は考えた。しかしめカーリーは首を横に振る。

「あなたを求めたのは、アナーヒタ、セイレーン、アンフィトリテの権能を持っているから。私がこの三つの目で見て、本質をよく知った同胞の権能を持っているから」

出てきた女神の名に、海人は驚いた。水天——アナーヒタの権能は、まさに今使っている最中だ。

随分と昔のことだが、仁実を攫っていった水天、道中で遭遇したセイレーン、そしてポセイドンは、伴って行動はせずとも連絡は取り合っているようだった。アンフィトリテもポセイドンを知っていた

ため、他の二柱を知っていたかもしれない。

では三柱の名を知っており、その権能を篡奪したのが海人であると知っているということは、こいつは……。

「お前は、あいつ等の仲間か……！」

「同志、と言ったほうが正しいかしらね。あの神等とは志を同じくするものである、けれども仲良くする相手ではなかったわ……。そんな神等だったけど、四百年前に現世に顕れたのは無駄じゃなかった。四柱の権能を篡奪した、あなたという存在が生まれたのだもの」

カーリーは海人に向かって大仰に手をひろげ、胸に抱きこむように手を伸ばした。

「来て、海人。私ならあなたを守ってあげられる。あなたの母になってあげられる。海人を死の恐怖から開放してあげられるわ」

母という言葉に、海人は奥歯をかみ締めた。

「そう言っつて、外にいる奴等を囲い込んだのか。不死の体が欲しければ、生贄を捧げろと殺戮を繰り返せと、そう指示したのか」

「ええ、そうよ。意味もなく殺さなければ、殺戮ではないでしょう？」

「俺がこの森に来たのは、港で幼子が泣いて懇願していたからだ。帰ってこない父を探して欲しい、と」

「海人を誘い込んでくれたあの子には、後で褒美を与えなくちゃね」

海人がインドに留まっていたのは、港で会った幼子の依頼があったからだ。父親を探してほしいと懇願する幼子を宥め、海人は森に入ったのだ。そこでその父親を食い殺したであろう神獣を倒し、誘われた宴会で酒を飲んだ。

その酒に毒が入っていたのだ。麻痺して権能が使えなくなるどころか、植物人間にする劇毒だった。

海人はうつむき、ぶるぶると肩を震わせた。

「ふふふ……。はーはっはっはっはー！」

そして大声で笑い出した。

「……？ 何か面白いことでもあったの？」

カーリーは何故笑っているのか、それどころか悪い事をしたことも理解していなかった。

「ああ……。俺の馬鹿さ加減と、不幸になった子供はいなかった。そのことが面白くて嬉しかったのさ」

「そう？　話は戻るけど、協力してくれる？　私の子になれば、そうすれば死ぬこともなく……」

「なあ、お前、焦ってるだろ？」

「……え？」

それまで慈愛の笑みを浮かべていたカーリーの表情が、ずっと無表情になった。

「少なくとも四百年、お前は今の現世にいた。それなのに何故今頃俺を欲した？」

「それは、準備が整ったからで……」

「力を蓄えるとか言ってたなかったか？　それも時間をかければ人間だけでも出来そうなことを、俺にやらせようとしている。お前、時間がないんだろ」

カーリーは挙げていた手を下ろし、無表情で海人を睨み付けてくる。

「どうやら凶星なようだな。最初から決まっていたが……。そうなければ答えはひとつだ」

海人は権能を発動した。血の塊が、首の山から飛び出す。

「そんなものは、くそくらえだッ！」

血液の塊が弾丸となって、脱力したカーリーに向かって放たれた。

四十九話、生と死

海人の放った血液の弾丸は、カーリーに向かって一直線に飛んでいった。

カーリーに着弾する寸前、突如カーリーの頭部が肥大化した。肥大化した頭は口を開き、血の弾丸を容易く呑み込んでしまった。

頭部に次いで胴体、四本の腕、脚と肥大化していく。ついにカーリーの身長は、三階立てのビル程あった神殿の天井に届きそうになった。四本の腕には刀剣を握っており、刀剣の先端は三日月状の片刃になっていた。先端の片刃では撫で斬り、柄の両刃では叩き斬れる凶悪な武器だ。

「それが答え？　なら力づくで協力してもらいます。格の違いを思い知った後で、ゆっくりと話をしましょう」

「喧嘩か。いいぞ、そっちのほうが話が早い」

とはいえ、如何したものか。海人は今一度、己の武器を確認した。海人は麻痺毒を盛られてしまい、まつろわぬ水天より篡奪した権能しか使えない状態にあった。水天の権能は、液状の体になったり、水を宙に浮かして飛ばすことができる。しかしカーリーに対してはご覧の通りだ。そもそも武器にする水分が、乾燥した気候なのか周りに少なかった。

何か使えるものはないか。必死に頭を回転させる海人に、呼びかける声があった。

『海人様！』

それは長年愛用してきた相棒の声だった。海人の体に力がみなぎる。ポセイドンから篡奪した権能が使えるようになった。

すぐさま海人は取り出し、ポセイドンの神器トリアイナを右手に構えた。

『寝過こしてしまい、申し訳ありません』

「いや、グッドタイミングだ。お前がいれば百人力だ、奴を一気に片付けるぞー！」

『はー！』

声の主は、右手の三叉槍から頭に直接聞こえて来ている。冷静で的確な助言を下し、海人の権能の補助もしてくれる優秀な意識を持っているのだ。

「あの海神の三叉槍……。あなたの本気ということですか。時間を与え過ぎましたね」

「時間を気にする生活も、今日で仕舞いだ。お前を幽世に送ってやるよ！」

カーリーの持つ凶器が振り下ろされた。海人の身長以上の大きさだ。

海人はそれを難なく避けると、刀剣が神殿の床に突き刺さった。速さはそれほどでもない。だが石造りの床を大した抵抗なく貫通した所を見ると、恐ろしく鋭いようだ。

その巨大な刀剣が連続で振り下ろされる。二つ、三つと振り下ろされたが避け、海人は脚を攻撃しようとした。

四つ目の腕が振り下ろされた。しかしそれは海人目掛けてではなく、海人とカーリーの間突き刺さった。カーリーの持つ神器は巨大で、海人してみれば壁が降ってきたようなものだ。

海人はカーリーの足元へ続く道を断たれてしまい、しかもカーリーは一撃目の神器を既に振り上げていた。

「くそっ、近づけねえ！」

海人に怒涛の連続攻撃が襲い掛かる。絶え間なく刀剣が振り下ろされる中、カーリーは神器で海人の逃げ道を巧みに塞ぎ、海人を徐々に追い込んでいく。

海人は類まれなる反射神経で避け続け、反撃の機会を伺う。だがカーリーは四本の腕を攻撃にまわし、もう二本の腕を使おうとはしなかった。海人の不意な行動に備え、防御にまわしているのだ。怒りの様子を見せながらも、戦い方は冷静沈着で隙が見当らない。

ついに海人は追い詰められてしまった。三方を神器に囲まれ、カーリーの見える前面しか空いていない。

「ふふふ、安心して。私の前で、死は終わりじゃない。あなたの力は、私の中で生き続ける！」

防御に回されていた二本の腕が、海人目掛けて同時に振り下ろされる。逃げ道を奪われた海人は、それを三叉槍で受け止めた。

ギイイイイイイン！ 三叉槍と二本の刀剣が衝突する。

二つの神器のぶつかり合いは、どちらも傷つけるには至っていない。カーリーは押し潰そうと体重を乗せるが、海人の硬さと怪力に驚きを顔にする。

そしてまた海人も逆の意味で驚いていた。虫のように踏み潰されるところと思っていたが、攻撃が軽い。それでも両者の力は拮抗していたが。

そんな時だった。カーリーの攻撃に海人は耐え切ったが、建造物は耐え切れなかった。

カーリーの神器での攻撃に何度も晒された床が、崩壊した。刀剣で何度も切り刻まれ、海人を中心に一点に負荷がかかったことで崩れてしまった。

石造りの床が崩れて、その上に建つ神殿が無事なはずがない。床につられて神殿の屋根も一気に崩落し、にらみ合っていたカーリーと海人は崩落に巻き込まれていった。



「…………ふはっ！ ……はあ…………。はあ…………」

神殿が崩落し、瓦礫の山の中から海人が顔を出した。海人は神殿の崩落から、三叉槍を突き立てることで頭を守った。しかし建物の大きな破片から頭を守れても、胴体や小さな破片からは守れなかった。体を破片で打ち付けられ、傷だらけの状態だった。

対してカーリーはというと。自分の上に積みあがった瓦礫を吹き飛ばす勢いで起き上がってきた。身長が高く天井に近かったため、大したダメージにはなっていない様子だ。

「あなたの怪力、甘く見ていたと認めましょう。ですが次は三本、その次は四本の腕で潰します。いくつまで耐えられますかね」

「はん。俺があつたどんな女神よりも、短絡的な奴だな。悪どい策を

弄するならまだしも、力づくで俺で敵うと思ったら大間違いだ！」

再び対峙する一柱と一人。そこに段々と近づいてくる足音が聞こえてきた。ひとりではなく、何十人という大人数の足音だ。

「……カーリー様！」

神殿が崩壊する音を聞きつけたのだろう。村にいた信者達が総出で押しかけてきた。瓦礫の山となった荘厳な神殿と、巨大化したカーリーの姿に目を白黒させている。

それを見てカーリーは唇をにやつかせた。

「子供達、その男を捕まえなさい！ あなた達を苦しませる水を操る権能は使えない。死を恐れることはありません！」

カーリーにそう命じられた信者達は、初めは戸惑っていたものの海人を包囲していく。信者の目印の黄色い布をつけていない者が多いが、カーリーの加護は健在だろう。このままでは同じ過ちを犯しかねない。

そんな時、再び頭の中に声が響いた。戦闘が始まってから今まで黙っていたトリアイナだった。

『お待ちせしました、海人様。解毒が完了し、セイレーンの権能が使えるようになりました！』

「……！」

トリアイナは今の今まで『権能を使えなくする毒』を解毒していたのだ。会話も行わずに解毒を最優先で行っていたため、割いていなければ間に合わなかったかもしれない。

「おあつらえ向きのタイミングだ！ いい仕事しかないな、トリアイナ！」

『お褒めにあずかり恐縮です。どうぞ、ありったけを込めて下さい』

海人は大きく息を吸うと、一瞬息を止め、そして腹の底から出すように思いつきり叫んだ。

『ツッ!!!』

海人の発した怒号はこの世のものとは思えないような声であり、それを聞いた周囲の信者達は一様に耳を塞いだ。

だが耳を塞いだのも束の間、多少ひるんではいたものの信者達に不

可解な様子は見受けられなかった。首を傾げるも、カーリーは再び足を止める信者達に命令を下した。

「威嚇のつもりですか？　まるで獣のよう……。子供達、何をしているのですか?!　早く海人を捕まえなさい!」

海人もまた信者達に向かって命令した。

「いいや、お前等の相手は俺じゃない、カーリーだ。カーリーを攻撃しろ!」

「何を馬鹿なことを。あなたの言うことに従うはずが……」

二者に命令された信者達は、ぐるりと顔を向けた。敵意を向けられたのは、海人ではなくなんとカーリーだった。海人を囲む包囲網は解かれ、信者達は信奉するはずのカーリーに刃を向けた。

「……なにを、しているのですか?」

心の底まで冷えるような声色でカーリーが呟く。やがて愛しい我が子達が己に刃を向ける理由に思い当たると、海人を睨みつけた。

「海人、さっきの雄叫びはまさか……!」

「そう、セイレーンの権能だ。聞いた者を傀儡とする呪いの声。……お前は、自分が守ってきた我が子の手で殺されるんだ!」

信者達は老若男女問わず武器をかかけ、鬨の声をあげながらカーリーに突撃する。カーリーは我が子を迎え撃つことができず、脚に剣や槍を突き立てられた。

「ああ、我が子達!　私の声が聞こえないのですか!?!」

「すみませんカーリー様!　ですが、海人様の命です!」

「海人様には逆らえません。残念ですが、死んでいただきます!」

「ああ、そんな……」

信者達に死の恐怖はない。カーリーの加護を受けてから死という概念をなくし、いつしか生物の根源たる恐怖を忘れてしまっていた。

またひとり、またひとりと蜜に群がる蟻の如くカーリーにとびかかる。そしてまた一人、男性がカーリーに刃を突き立てようとしていた。

「私に歯向かうというのなら、それなら……」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおッ!」

カーリーが誰にも聞こえぬ程小さく呟く。

男性がカーリーの脚に槍を突き立てようと、槍をひいたその時だった。

カーリーが手に持つ刀剣を振り抜いた。

ぶちツと何かが潰れる音がし、少しした所でドサリと何かが落ちる音が聞こえた。

信者達が音のした方向を見ると、そこには見るも無残に潰れた男性だったものがあった。

「ならば、母を愛さない子など、死を与えるまでです」

男性が蘇生する様子はない。復活するのはカーリーに与えられた加護であり、カーリーに殺されれば当たり前前の結末だった。

それを見てようやく信者達は、カーリーの加護が彼の神の前では無力であると思いついたようだ。死への恐怖を思い出し、信者達は一樣に逃げ惑った。

しかしカーリーは一度刃を向けた者達を逃がさない。海人との戦闘が始まってから初めて、カーリーは一步踏み出した。

一步踏み出すだけで、カーリーを震源に地震が発生した。

信者達は揺れに足をとられ、動かなくなった所をカーリーに切り裂かれ、叩き潰されていた。



そしてひとしきり我が子達を肉塊へと変えたカーリーは、持っていた刀剣を消し、体を萎めていった。

「ふう……。人間は駄目ですね。母の言う事をきかない子など、何の価値もない。それがわかったことと、あなたと話せたことで良しとしましょう。……ねえ、海人。考え直してくれないかしら？」

「子になるって話か？ お断りだ。お前はただ、言いなりになる手駒が欲しいだけだろう」

「そう？ あんまりしつこいのは嫌だろうから止めますが……。私は、海人ならできると信じていますよ」

するとカーリーから炎が吹き上がり、周囲を一瞬で火の海にした。海人は顔を腕でかばってもカーリーからは目を逸らさずにいた。しかしカーリーは海人の間に炎の壁をつくると、海人に背を向けた。「また会いましょう」

炎の壁がより一層吹き上がり、まもなく収まった頃にはカーリーの姿が消えていた。

周囲には信者達の肉の焼ける匂いで鼻が曲がりそうだった。

「海人……様……」

海人の背後には、海人を神殿まで案内した医師の白人男性がいた。周囲の炎の熱で倒れている。

偶然ではなく、海人が森を抜けるまでの案内役として残しておいたのだ。

「なにが信じている、だ。なにが会いましょう、だ」

海人はあの破壊神と再び合間見える予感を、ひしひしと感じていた。今回の邂逅は厄介な縁になりそうな、そんな気がしてならなかった。

第九章 同胞と仇敵 五十話、先触れ

日本の東京、文京区のとある潰れた古書店。潰れた後は民家となつたその場所の電話がジリジリと鳴った。

暦は梅雨時の六月下旬。湿った空気の日、夜も更けた十時頃のことだった。草薙護堂が受話器を取ると、耳に快活な男の声が聞こえてきた。

「はい、草薙です」

『やあやあ護堂、久しぶりだね。僕だよ僕。君の一番の親友』
「人違いです」

護堂は叩きつけるように受話器を下ろした。また掛かってくるかもしれないと思い、電話線を引っっこ抜いた。

受話器から聞こえたのは、護堂にとって聞きたくはなかった声だった。

「くそっ、あの野郎、ついに復活しやがったのか」

護堂が悪態をつくとき、今度はポケットの中の携帯電話が鳴り響いた。取り出し着信画面を見ると、送信者の名前が『通知不可能』と出ている。

これもあの男からの着信か？ これ以上つき纏われても困ると判断した護堂は、覚悟を決めて通話ボタンを押した。

『酷いじゃないか、護堂！ 一方的に通話を切り、親友である僕の声をお忘れなんて！』

「たしかに聞き覚えのある声だが、そいつには電話番号を教えていないし、何より親友であったことなんて一時たりともない！ ……どちらのイタリアの神殺しか知りませんが、番号を間違えていますよ」

『番号は部下に調べさせたんだ。というより、誰だか分かっているじゃないか、護堂！』

「……何の用だ、サルバトーレ・ドニ」

『……ねえ、何時から君と僕、用がないと電話しちやいけない関係に

なつたの?』

「切るぞ」

『ああ!・ 待つて待つて』

それから少しの時間、親友だ友じゃない、といった押し問答を繰り返した後、サルバトーレ・ドニは本題を切り出した。

『君はデヤンスタール・ヴォバンの名前を知っているかい?』

「ああ。たしかあんたの近所に住んでいる偏屈じいさんの大魔王だろ?」

『じゃあもちろん、安東海人の名前も知っているよね?』

「知っているに決まっているだろ。こんな体になる前に教えてもらったよ」

それは護堂がサルデーニヤ島で、二柱の神々の争いに巻き込まれた時のことだ。共に巻き込まれた騎士の少女、エリカ・ブランデツリに、人間が神に勝利することがあると教えてもらったことがあった。

——神に勝利するって、あんなのだぞ?　とうてい信じられないな。

——そう?　護堂にとつても、そんなに遠い世界の話ではないはずよ。護堂の国にも居るわよ、神への勝利者、カンピオーネが。

——え!?!　日本にか!?

——ええ、ほんの数年前、サルバトーレ卿と時期を同じくして、日本出身だつてことが判明したの。それまでは生死すら判明していなかったんだけど……。

そんな会話があつたはずだ。

しかし『信じられない』と言つた護堂も神殺しを成し遂げ、八人目の魔王となつた。

草薙護堂は世界で最も若く、新しいカンピオーネであつた。サルデーニヤ島で軍神ウルスラグナを斃し、日本で二番目の羅刹王になつたのだ。

「今は世界を放浪しているんだろ?　たまに騒動を起こして、気まぐれでまつろわぬ神と闘っているって耳にしてるぞ」

『ふーん。その様子じゃ、まだ同じ国の同胞とはまだ会ってないみた

いだね』

「ああ。それで、その神殺しの先輩に、魔王のじいさんが一体なんの關係があるんだ？ 俺はその二人の顔も知らないぞ」

『ヴォバンのじいさまと海人船長は、深い因縁があるんだよ。なんでも十八世紀の中頃から一世紀以上衝突してたって話だからね。お互いに性格も鬩い方も、一番よく知ってるんじゃないかな？』

一世紀。スケールが大きすぎて、護堂には想像できない話だ。

だが、それを今話したのは、どんな意図があつてのことだ？

『そのひとり、ヴォバンのじいさまが今日本の何処かにいるらしいから、アドバイスにと思つて連絡したんだ』

「日本に……まさか、その海人つてカンピオーネと闘いに来たのか？」

『そうだ、とは思うんだけど……。今日本に行くのはちよつと釈然としないんだよね。海人船長は四年前に日本にいるって判明したから』
「そうだな。来るなら三年前でも四年前でもいい気もするな」

まあ、何時だったとしても、来てほしくはないというのが護堂の本音だった。

「ああ……。なんでこう、次々の厄介ごとが舞い込んでくるんだ！」

『そういえば、護堂はあのアテナを撃退したらしいじゃないか。強い敵が次々に襲いかかってくるのは、カンピオーネの宿命だから仕方ないよ』

「俺は降りかかった火の粉を払っただけなんだがな……」

ここで護堂は、ドニに会話の中で気になったことを尋ねた。

「ドニは、安東海人つていう日本のカンピオーネと会つたことがあるのか？ 会つたような口ぶりだったが」

『うん、二度あるよ。一度目は一言二言話ただけで決闘したし、二度目は普通に会話をしたよ。まあ、決闘はあつさり負けちゃっただけだね』

「一、二回話しただけで決闘して……。あんたが興奮して吹っかかんじやないだろうな？」

『ち、違うよ!? あの時はまつろわぬ神を斃して、海人船長とは連戦

だったんだから！ 僕からは決闘を申し込んではいないし、その前にまつろわぬ神と闘っていかなかったら善戦できてたはずだよ！」

サルバトーレ・ドニは嘘がつけるような性格をしていない。とすると安東海人という人物は、ドニの様に嬉々としてカンピオーネに闘いを挑んでくるような人ということだ。

その同胞とも闘うことになる可能性があると思うと、護堂は腹に爆弾を抱えている心境になった。

「その『船長』ってのはなんだ？」

『船長は勝手に僕が言ってるのさ。彼、すつごい大きな帆船持っているんだ。カリブの海賊のような、映画でしか見れないような船に、僕も乗せてもらったんだ』

「一回会って決闘したってのに、二回目でそんな仲になったのか？」

『僕もあつちも、その時はそんな気分じゃなかったしね。あ、でも再戦は絶対にするよ。海人船長とも、もちろん護堂ともね！』

「お断りだ」

その後、護堂はドニはヴォバン侯爵についての情報を教えてもらった。食欲以外の欲が薄いところや、『貪る群狼』から始まるヴォバンの持つ権能の概要などだ。

それを聞くと、護堂は通話終了のボタンを押した。

今、安東海人は日本にいない。ヴォバン侯爵の狙いが安東海人ならば、叶わないはずだ。なら別の狙いがあるのか？

これ以上考えても仕方ないと思った護堂は、明日『万理谷祐理』か『エリカ・ブランデッリ』に相談することにした。

祐理は日本の魔術組織『正史編纂委員会』に所属する媛巫女であり、エリカはイタリアの魔術結社『赤銅黒十字』の魔術師だ。この場で頭を悩ませるよりも、護堂より魔術師界限に通じている彼女達に相談したほうが手っ取り早いに違いない。

だが、それは叶わなかった。相談する前に、それどころかこの会話以前に、サーシャ・デヤンスタール・ヴォバンが引き金を引いた騒動は、既に始まっていたのだった。

◆

その日、東北の秋田の地では、突発的な暴風と雷雨に襲われていた。降水確率が低く快晴なものにも関わらず、夕方から降り始め、日が沈む頃には黒い雷雲が空を覆っていた。

秋田綾花は、県内の大学に通う一年次生だ。講義が終わり、在来線を使い駅に降りた頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

駅を出て、綾花は空を見た。駅から自転車で十分ほどかかる場所に、実家の神社がある。しかし雨が降っているし風も強いため、どうしようか迷っていた。

すると声をかけられたのだ。声の方を振り向くと、夜の闇から現れたかのように、スーツを着た老人が立っていた。

「君が、安東海人の身内かね？ 名は何と言ったか。あとでまた聞くでしょう。……私に着いてきたまえ」

老人は緑柱石の色の瞳は、風雨の夜でもはっきりと浮かび上がっていた。その瞳に捉えられた綾花は、背筋の凍る寒けに身震いした。

すぐさま踵を返し、綾花は雨の中を全速力で逃げた。駅員に助けは求めなかった。あの老人は安東海人の名を語っているのです、助けを求めれば無闇に一般人を巻き込んでしまう恐れがあったからだ。

その判断は正しかった。後ろを振り返ると自動車ほどの大きさの狼の群れが、綾花を追跡してきていた。

細い横道に入り、曲がりくねった複雑な小路で狼達の視界から消えようとする。フェンスを飛び越え、穴を潜り抜け、荷物を投げ捨てる。

知り尽くした地元の道で必死に追っ手から逃げようとするも、生まれてからの生粋のハンターから逃げ切ることはできず、綾花は狼達に袋小路へと追い詰められてしまった。

「さて、随分と頑張ったようだが、もう終わりだ。私に同行してもらおうぞ」

「……海人様に……、私に、何の用事が……あるのですか……？」

綾花は息も絶え絶えになりながら、ヴォバン侯爵に問いかけた。右手には、仁実から贈られたお守りが握られていた。

「君には餌になってもらおう。ああ、狼の餌ではない。安東海人をおびき出すための、生餌になるんだ」

ヴオバンはそのエメラルドの瞳を輝かせながら言った。

瞳が輝き綾花が捉えられた瞬間、綾花の脚は石のように動かなくなってしまうた。

「まずは逃げられぬよう、餌には不要な手足を落とすとするか。……む？」

すると何故か綾花の脚を石にしたというのに、不振な表情を浮かべた。

「まあいい。塩にならないのなら好都合だ。猟犬どもに連れてこさせよう」

ヴオバンが手を振り上げると、取り巻きの狼数匹が綾花に接近してきた。恐怖で固まって動けない綾花は、左腕を狼の一匹に噛み付かれてしまった。

激痛が走る。このまま引き摺っていかうとしていているのだ。綾花は痛みに目を白黒させ、悲鳴を上げながら必死に抵抗する。

「いやッ……いやッ、いやああああああああッ！」

「煩いな……。舌を抜いてしまおうか。だが、鳴いたほうが獲物も寄ってきやすくなるだろう。そのまま連れて来い」

腕を無我夢中で振り回そうとするが、狼の体躯が大きく、顎の力も強く離れない。

綾花がじわりと涙を浮かべた時、侯爵の嘲笑と狼達のうなり声を引き裂き、凜とした女性の声が響き渡った。

「お止めください、侯！ 一般市民を相手に何をなさっているのです!？」

腕に噛み付いていた狼の体に銀色の一閃が入り、狼は闇に溶け込むように消えた。

しかし、綾花は気を失ってしまった。狼に腕を噛み付かれた時の痛みに耐え切れなかったのだ。

ヴオバンの前には、無防備になった綾花が横たわることになる。ヴオバン侯爵の態度からして客人の扱いはされないだろう。

だがそのヴォバン侯爵と綾花の間に、銀髪の少女が割ってはいった。

リリアナ・クラニチャール。魔術結社『青銅黒十字』の騎士で、今回のヴォバンの日本遠征にお供として従っている者だった。

「一体何故このような事を?! 魔術の存在を知らない女性に『貪る群狼』を焚き付けるなど!」

「クラニチャールか。君にはマリヤの件とは別件があること、明かしてはいなかったな。……その娘は安東海人の身内だ。その娘が捕らえていれば、奴も呼び寄せられるだろう」

リリアナは驚愕し、背後の綾花の顔をまじまじと見つめた。彼女の『最古参の魔王』に対するイメージは、ほとんどヴォバン侯爵から来ている。神々との闘争を生業とする、世捨て人なのだろうと。

なので近年誕生したカンピオーネならまだしも、最も高齢の魔王に家族がいるとは考えてもいなかった。

「丁度いい。クラニチャール、その娘を魔女術でホテルまで運べ。いかに雨といえど、私の猟犬は目立つからね」

「承知いたしました。ですがカンピオーネの身内なのであれば、客人として丁重に持て成させて頂きます」

「構わぬ。だがこの娘、ヴォバンを前にしても抗う気力は持ち合わせているようだ。逃げ出さぬよう、首輪代わりに脚の石化はそのままにしておく。……君が面倒を見る、クラニチャール」

「……仰せのままに」

リリアナは、ヴォバン侯爵と綾花を『飛翔術』でホテルまで運んだ。その後ヴォバン侯爵がホテルの一室に入ると、リリアナは綾花を担ぎ上げ、別の一室のベッドの上に綾花を横たえた。そして綾花の腕の治療を行い、石化した脚の状態を注視した。

脚は、膝のあたりまで石化していた。だがヴォバンは魔術の心得はなく、石化の権能を持たない。隠された権能という線もあるが、どの様にこの現象を起こしたのか気になることだった。

石化は、このままにしておく他ない。リリアナ程度では、魔王の奇跡に対抗できるはずもなかった。

◆ 次の日、リリアナを供とするヴオバン侯爵は、綾花を連れ去り、東京へと向かった。

次なる目的は、まつろわぬ神招来の儀式に要する人材『万理谷祐理』だ。

東京を舞台に、カンピオーネ同士の闘争が引き起こされようとしていた。

五十一話、遊戯

サルバトーレ・ドニから連絡のあった翌日。

護堂は昼間、通常どおり城楠学院に通っていた。昨夜、遠い東北の地で起こったことを護堂は知らないのです、学生の本分を全うしていたのだ。

昼休みに別のクラスの万理谷祐理が、彼女の後輩で護堂の妹である草薙静花に連れられて、護堂に電話番号を教えてもらいに来るといふ出来事があった。

護堂は祐理との仲睦まじい様子から、クラス中の男子の嫉妬を買ってしまう。祐理が『護堂以外の異性の電話番号は登録しない』と言ってしまったのが、大きな原因ではあるが。

憎しみや殺気のこもった視線で針のむしろとなってしまう祐理は、エリカ・ブランデッリの先導で、屋上へと避難した。そこで護堂、エリカ、祐理、静花の四名で昼食をとったのだった。

そこで祐理かエリカに、昨夜かかってきた電話の内容を相談できれば丁度よかったが、あいにく屋上には他にも生徒がいたし、まつろわぬ神関連の事情を知らない静花もいた。相談はできなかつた。

代わりと言ってはなんだが、祐理とは携帯電話の番号を交換した。これで放課後にでも連絡し、安東海人について聞くことができる。正史編纂委員会の媛巫女である祐理なら、エリカよりも日本のカンピオーネに詳しいと考えたからだ。

しかし護堂のドニの見込み以上に、ヴォバンの行動は迅速だったのだ。

雨が降る中、護堂がエリカとひとつの傘を二人で使いながら下校している時だった。二人に声がかかり、振り返ると正史編纂委員会の青年、甘粕冬馬がいたのだ。

彼から護堂は、万理谷祐理がヴォバン侯爵に連れ攫われてしまったことを知らされる。そして彼女を救出するために協力を請われ、護堂は二つ返事で受け入れるのだった。

「……どうして祐理が攫われたのか、理由を聞かせてもらってもいい

かしら？ ヴオバン侯爵がこの極東の島国に来るわけは、安東海人があるわ。二人は宿敵同士だと広く知られているものね。だけど祐理を侯爵が攫う理由は何？」

「その理由に心当たりが無きにしも非ず、なのですが……。おっしやられた通り、安東海人もこの事態に絡んでくるのですよ。疑問はひとまず置いておいて、私と共に来てはくれませんか？」

「わかりました。行きましよう。……エリカ、ドニの奴から電話があったんだ。ヴオバン侯爵が此処に来てるって」

「サルバトーレ卿が？」

「ああ。どうして攫われたのかは分からないが、友達がピンチだつてのに悠長なことはしてられない。ひとまず着いていこう」

「詳しい事情は、車の中でお話しします。こちらです」

そして護堂達は冬馬の車に乗り込み、そこで事態の詳細に耳を傾けた。

「公にはされず、委員会のほうで秘匿されている事なのですが、現在の安東王には血の繋がったご家族の方がいらつしやいます」

「親か子供がいるってことか？ そういえば、俺はその安東海人つて人の年齢を知らないぞ。十八世紀にはカンピオーネになっていたって聞いたが」

「護堂、安東王はおよそ四百歳とされていて、カンピオーネの中で最も永く生きた魔王なの。侯爵より永く生きているから、正確な年齢は分かっているわ」

「四百歳か。想像もできないな」

護堂は途方もない年齢の高さに驚いた。四世紀も前となれば、室町時代。歴史上の武将と同時期に生きていたことになる。

「それですが、最近記録が出てきまして。およそ四百六十から七十程度まで絞られています。安東王は幼少の頃は孤児であり、安東という苗字は婿入りした際にもらったものだと」

「四百年前の記録があったんですか？」

「はい。安東氏は武家であり、時代が下ると安東から秋田へと姓を変えています。……護堂さんのお察しの通り、秋田氏は今の秋田県の辺

りを支配していました。現代に至るまで安東王の血を絶やさず、存続してきた安東家の末裔こそが、安東王のご家族ということですよ。それで、そのご家族の方が」

「大方、祐理と同じように攫われたとか、塩にされてしまったとか、それに類する事をされたのでしょうか」

「……はい。エリカさんのお察しの通りですよ」

冬馬は意気消沈したかに言うと、護堂とエリカに一枚の写真を差し出した。

「この写真の方が安東王のご家族の、秋田綾花さんですよ。確証はありませんが、おそらく攫われたものかと。これからお連れするヴオバン侯爵の下で、祐理さんはもちろんですが、もし綾花さんがいたら救出して頂きたい」

正史編纂委員会は、海人の情報を秘匿し続けてきた。それは無謀にも魔王に挑もうとする人間が出ないようにするためであり、今回のようなことが起きないようにだ。

だが、それが起きてしまった。委員会から情報が漏れたとは限らないが、情報の出所として真っ先に疑われるのは委員会だ。だから冬馬は綾花の安全を確保し、後に委員会の潔白を証明しようとしているのだ。

「わかりました。見つけたら連れてきます」

「お願いします、王よ」

冬馬の運転する車は、ヴオバン侯爵の居る図書館へと到着した。



図書館へと足を踏み入れた護堂とエリカは、そこで『死せる従僕』たちと遭遇した。途中リリアナ・クラニチャールというエリカと縁のある騎士の助力があり、従僕達を撃退した。

そして二階へと上がった護堂達を待っていたのは、白衣の袴を着た祐理と、スーツをぴっちり着たヴオバン侯爵だった。

護堂は祐理を返すよう要求するが、ヴオバンは対価を持ってこない

と渡さないと拒否する。

対価となるものもないため、力づくでの交渉を躊躇っていた護堂に、エリカが助け舟を出す。護堂がサルバトーレ・ドニから友と呼ばれているのを利用し、ヴォバンが護堂に興味をしめすよう誘導したのだ。

リリアナも図らずもエリカを助力するように証言し、力の信奉者であるヴォバンは護堂を標的として定めてしまった。

酷薄に歓喜するヴォバンは、護堂にゲームを提案した。これから護堂は祐理を連れて逃げ、日の出までヴォバンの手から逃げ切れれば護堂の勝ちという、護堂達を獲物に見立てた狩猟ゲームだった。

後には引けなくなった護堂は、ゲームに乗った。

突き出された祐理を連れて、護堂とエリカは図書館から出たのだった。



ひとまず甘粕冬馬の車の元まで戻ってきた三人だったが、自動車はあれど冬馬の姿はなかった。

ヴォバンが追ってくる三十分以内に、少しでも遠くに逃げなければならぬ。車に乗せてもらって距離をとりたかったのだが、免許を持っていない高校生の自分達では運転できない。

迷っていたのもほんの一時。図書館の中から冬馬ともうひとり、彼に肩に担がれて女性が出てきた。

「甘粕さん、その人は……。まさか！」

「あつ、草薙さん」

「……草薙……護堂？」

足元を見ながら歩いていた女性が、顔を上げる。車の中で見た写真の女性、秋田綾花だった。

彼女の脚を見ると、脛の辺りまで灰色に変化していた。脚が石になり、非常に歩きにくそうだ。

「秋田綾花さんです。一階の個室で寝かされていました」

「監視とか無かったんですか？ ……あつ、肩貸しますよ」

「ありがとうございます。草薙、さん」

護堂が肩を差し出すと、綾花はおずおずと護堂の肩に手を回した。冬馬には図書館内でヴォバンと交わした会話の内容を、手短かに説明した。それを聞いた冬馬は乗車を促し、五人は図書館を発った。

しばらく時間が経過し、護堂達は首都高を港区方面へ走っていた。運転席に冬馬、助手席に護堂、後部座席に女性三人という構図だ。

「皆様、助けて頂きありがとうございます」

座席に座りながら丁寧に頭を下げる綾花に、冬馬が容態を尋ねる。

「秋田さん、脚の具合は？」

「痛みはありませんけど、感覚もありません」

綾花は自分の脚をなでる。ひどく脚が痺れたように、神経まで石化してしまった。

「けれど、かの魔王に睨まれた程度でこれなら、良かった方でしょう。解呪できれば元に戻ります。塩になったら戻らないかもしれないですから」

「つまりその脚は、ヴォバン侯爵の『ソドムの瞳』で石化したのかしら？ 塩にするだけでなく、石にもできるとはね」

「ですが、侯爵ほどの権能を打ち消すには、何十人もの大規模な儀式場が必要です。それか、同じ神々の権能で打ち消すしか……」

エリカは気の毒そうに視線を脚に向け、祐理は心配そうに気遣ってくる。

「大丈夫です。治す当てはありません。おと……ご先祖様がいますから」

綾花は手に持ったお守りをぎゅっと握りしめた。

カンピオーネと同じ時を生きる魔女が、綾花の先祖にはいた。あの人達を頼れば、脚は元に戻ると信じていた。

綾花はあの人達の子供に生まれて、不幸だと思ったことはない。

それに脚が塩ではなく石化で済んだのも、海人がご先祖様に居たからだと思う。

綾花は一般人と比較して、何倍もの呪力を体に秘している。海人も

カンピオーネになる前から高い呪力を有していたため、仁美から先祖返りの類いだと言われていた。

ヴオバンが手加減して『ソドムの瞳』を使い、それを中途半端に防いだため、石化したのだと綾花は考えていた。

「ご先祖様というところ……俺と同じカンピオーネの」

「はい、草薙様。あなた様と同じ羅刹王である安東海人は、私の先祖に当たります」

「その、どんな人なんですか？ 俺は話でしか聞いてないですから。

……甘粕さんは会ったことがあるんですか？」

「いえ、委員会の資料を読んでいますますが、直接お会いしたことはないです。私も安東王に最も近い方から、かの王の人物評を聞いてみたいですね」

「そうですね……。典型的なカンピオーネ、魔王と言葉が当てはまる人だと思っています。自由奔放で、周りを巻き込んで騒動を落とす。……けどヴオバン侯爵と決定的に違うのは、親しい人間を決して見捨てないことです」

綾花は海人のことをそう評した。普段は自由に振舞い落ち着かない存在だが、いざとなると仲間を守るため命を張って脅威に立ち向かう、英雄のような存在だと。

「甘粕さん、携帯電話を貸していただけませんか？ 海人様に連絡したいのですが、あいにく自分ののは落としてしまいました」

「携帯を持っているんですか？ それは、とても先進的ですね」

冬馬は運転しながら携帯を差し出し、それを受け取った綾花は番号を打ち込んで、携帯を耳に寄せた。

「……そういえば、もう三十分経っていますな」

そんな時、サイドミラーから見える後方の景色に、灰色の影が現れたのだった。



海人へと連絡した綾花だったが、電波の届かない場所にいるのか繋

がらなかった。

その間にも事態は切迫し、背後から馬かと思えるほどの巨狼が追いかけてきていた。

護堂たちは、これ以上一般車を巻き込んで大惨事になってしまおうと考え、首都高を降りた。そして近場にあつた学校へと門を越えて侵入し、その広い校庭でヴォバンを迎え撃つ作戦に出た。

車を降りる際、同じ媛巫女の万理谷祐理が『護堂さんに迷惑はかけられない』として降りるのを拒み、自らを犠牲にしようとしていた。護堂の説得により、祐理はなんとか車を降りてくれた。

綾花も降車し、護堂たちに着いていった。祐理は儀式のために生かしておかれるが、ヴォバンの前で綾花の命の保障はできなかつた。ついていって同じカンピオーネの庇護を求められなかつた。

そして校庭にヴォバンの猟犬が現れた。エリカの喚び出した魔剣が猟犬を斬り裂き、護堂も『雄牛』の化身を行使し、剛力で蹴散らしていく。

その戦いを見守っていた綾花だったが、突然背後から『従僕』が襲い掛かってきたのだ。

寸前のところで気づいた綾花は、隣にいた祐理をかばい、代わりに綾花自身が捕まってしまった。

「ぐうー！」

綾花は首を腕で後ろから締め付けられてしまう。護堂とエリカが助けに入ろうとするが、綾花に刃を突きつけられて動けなくなってしまう。

「秋田さん！」

祐理の悲鳴が響き渡る。その声をさえぎるように、古き魔王の音が膠着した場に響いた。

「生き餌が逃げ出したかと思つたら、まさか貴様らと行動を共にしていたとはな。探す手間が省けた」

ヴォバン侯爵が、ゆっくりと護堂たちに歩み寄ってくる。

にやにやと笑みを浮かべるヴォバンに対し、護堂はキツとにらみつけた。

「秋田さんを離せ！」

「……いいだろう。その娘を離してやれ」

護堂が叫ぶと、何故かヴォバンはそれを素直に聞き入れた。ヴォバンに命令され、従僕が腕を緩めて綾花を離す。

ゲホゲホと咳き込む綾花。あっさりとは離されたことにヴォバン以外が呆気にとられる中、ヴォバンが続けた。

「できれば活きのいい方が良かったが、これ以上手間がかかるのなら死体のほうが手っ取り早い」

「ッ！ 護堂！」

「不味いッ！」

ヴォバンの意図する所に思い至り、エリカが声を上げ、護堂が一拍遅れて理解する。

一番近い護堂が走りだす。しかし今の化身は『雄牛』で、神速を与える『鳳』ではない。振り上げられた従僕の剣には間に合わない。

「ッ！」

綾花は命を覚悟し、目を瞑った。手に力はいり、お守りを握り締める。

肉の抉れる水っぽい音、ほぼ同時に金属の打ち合う硬い音、綾花の右耳の近くを何かが抜ける風切り音が響いた。

痛くない。綾花は体のどこにも剣による衝撃や傷の痛みも感じなかった。おそろおそろ目を開けると、尻餅をつく綾花の右耳すれすれに、見覚えのある槍があったのだ。

それは海人の持つ三叉槍だった。

胴体は大穴を開けた従僕が、塵となって消える。するとそこには、青色の毛並みの馬に乗った海人が現れていた。

「遅れた。怪我はないか、綾花」

馬が駆けた時にできた風が、激しく降る雨粒を吹き飛ばす。風音の中でも、最古の魔王が発した第一声は、凜として届いた。

そして待ちに待った好敵手の登場に、狼王の笑みがより一層深まった。

五十二話、腹積もり

雨が轟々と降りしきる中、海人は神獣の馬に乗り、建物の屋根から屋根へ飛び移って移動していた。

馬の名はクサントス。直線を走れば音速を越すことのできる、とても加速力のある馬だ。

そんな馬で豪雨の中を駆けているため、打ちつける雨は強烈だ。しかし海人は雨を物ともせず馬を走らせた。目的地には綾花を攫ったヴオバン侯爵がいるからだ。

なぜ綾花の居場所が分かるのか。それは綾花の握っているお守りが、地球上の何処にいても居場所が探知できる発信機的な役割を果たしているからだ。仁実手製のお守りで、過去に綾花が洋上で迷子になった際に、お守りのお陰で迎えにいけたことがある。

「トリアイナ！」

『はい。海人様』

とある雑居ビルの屋上で一旦立ち止まると、海人が空に手をかざした。すると降ってくる水滴が集まって、三叉槍となった。

「前と同じ手筈だ。先に飛んで、ヴオバンに一撃入れてこい！」

『了解しました』

海人は三叉槍を頭の後ろまで振り被ると、それをあらん限りの全力で空に投擲した。

「いっけえええええええッ！」

空高く投擲された槍は、あっという間に小さくなって消えた。

海人は狙って槍投げをしたわけではない。おおまかな方角に投げはしたが、正確な狙いはトリアイナが付けてくれる。トリアイナ自体が風を操って調整し、確実にヴオバンに直撃する仕組みだ。

そして再び馬を走らせて、海人は戦場となっている校庭へ滑り込んだのだった。

しかし、海人の予想していた光景とは少し違った。投げたトリアイナはヴオバンには刺さっておらず、綾花の目の前にいた従僕を貫いていたのだ。

海人は頭の中でトリアイナに、どうしてヴオバンではなく従僕を標的としたのか問いかけた。

『あの騎士によって綾花様が手にかげられる寸前でした。なので綾花様の安全を優先し、騎士を攻撃いたしました』

……そうだったのか。海人はヴオバン侯爵を倒すことばかり考えていたが、トリアイナは綾花の身を優先したのか。

「怪我はないか？」

「……えっ、えっと、狼に噛まれたんですけど、リアアナさんという方に治していただきました。傷は残っていません。それと、脚が……」

海人は尻餅をついている綾花に声をかけ、綾花は突然現れた海人に驚きながらも返答した。

綾花を気かけながら、海人はぐるりと戦場となっている校庭を見渡した。ヴオバンと狼達、それとは別に日本人の少年と金髪の美少女がいることによく気づいた。

綾花を立たせると、海人は二人の素性を問いかけた。

「あいつらは？」

「草薙護堂様と、エリカ・ブランデツリさんです。草薙様はカンピオーネ——羅刹王です。エリカさんはその愛人？　の方で、私を今まで狼から守ってくださいました」

「そうか、世話になったのか」

海人は電話で教えられていたため、日本人のカンピオーネである草薙護堂の存在を知っていた。海人は大声を張って、少し離れた場所にいる二人に話しかけた。

「綾花が世話になったようで、そのことについて感謝する！　ヴオバンの相手は任せてもらおう。新参者の羅刹王には不相応だろう！」

海人の声高にひるむ様子を見せるも、護堂はすぐに立ち直り言い返してきた。

「いいや、加勢してくれるのは助かるが、あんたとじいさん二人だけにするのは断る。あんた等みたいな魔王が暴れて、東京がめちゃくちゃになったら困るからな」

護堂はドニやエリカ、綾花から聞いた人物像から、海人もまた周り

の迷惑を考えずに闘争を繰り返す者だと考えていた。それはカンピオーネ全体に言えることだが、海人と護堂はこれが初対面のため仕方なかった。

「私はどちらでも構わぬがな。むしろ徒党を組んで同時にかかってきたほうが嬉しい。同族三者が集うことなど滅多にないからな！」

海人の護堂に向いていた視線がヴォバンに移る。その目は燃えるような怒りでギラギラに輝いていた。

「ヴォバン……。何故綾花を攫ったッ!? 綾花を人質にすれば、俺がこのこやつて来て、無抵抗で殺されるとでも思ったかッ！」

「貴様をおびき寄せる餌にしようとしたが、人質にしようとは思っていない。その娘を攫ったのは、貴様の目の前で殺すためだ」

「なに……ッ！」

海人の頭に血の気が上る。

するとヴォバンの近く、闇の中から一体だけ従僕が湧き出てきた。

それを海人が見た時の反応は劇的で、それまで燻っていた憤りはどこかへ吹き飛び、夢から覚めたような顔つきで、名を口にした。

「フランク……」

それは海人の弟子であり、ヴォバンに殺され『死せる従僕の檻』に囚われた騎士であり、そして海人とヴォバンが終生の敵となる切欠となった人物だった。

「そうだ。三世紀以上経った今でも、未だこの者の魂は『従僕の檻』に捕らえている」

状況が分からない護堂に、素早く察したエリカが『死せる従僕の檻』の力を解説している。この権能はヴォバンが殺した生物を使役し、殺しても魂が囚われている限り、時間が経てば再び呼び出せるのだ。

「四年前、貴様との闘いは至福のひとときだった。だが同時に何か足りないと考えていた。……それがこれだ」

今度は海人だけでなく、護堂たちも驚くことになる。なんと呼び出された従僕が、持っていた剣で自らの胸を貫いたのだ。

己に剣をつき立てた従僕は、塵となって崩れていった。海人の驚愕はやがて、此処に来た時以上の憤怒へと変わった。

「貴様、ヴォバン！」

「ふははははは！ そうだ、その気迫だ！ 地の果てまで追い詰めて殺すというその殺気、四年前はそれが足りなかった！」

ヴォバンは海人と何世紀も睨み合う原因を、とうの昔に忘れていた。それを思い出したのが、部下に海人の居場所を探らせていた際に、『安東海人には血縁者がいる』とい報告を聞いた時だ。

昂ぶった感情は時が経てば平静に戻る。海人の自分に対する怒りの感情も、同じように何百年という年月で冷め切ってしまったとヴォバンは考えたのだ。

「目の前で仲間を殺された気分はどうだ？ 久しく忘れていた感覚であろう。しかし今回は、その怒りの天頂を越えようではないか！」

ヴォバンは海人の後ろ、綾花をその虎の瞳でぎらりと睨んだ。綾花の身がひつと竦む。

「血の繋がった家族を目の前で殺されれば、その怒りも有頂天を超えるはず。貴様の目の前で惨殺してやろう！」

「——ッ！」

声にならない雄叫びを上げ、海人はヴォバンに飛び掛ろうと地を踏みしめた。

「我が元に来たれ、勝利のために。不死の太陽よ、我がために輝ける駿馬を遣わし給え。駿足にして靈妙な馬よ、汝の主たる光輪を疾く運べ！」

その時、密かに唱えていた護堂の聖句が完成した。

海人とヴォバンの睨みあい、水を差し、嵐の夜であるというのに、東の空が暁の色に染まった。

「む？」

「太陽が……!?!」

海人は駆け出すのを止め、ヴォバンは東の空を見上げた。

草薙護堂の権能、ウルスラグナ第三の化身。天から超高熱のフレアを降り注がせる『白馬』は、民衆を苦しめる大罪人にしか放てない。悪名高き魔王は、その標的になるだけの罪を重ねてきたのだ。

二人の魔王の会話を聞きながら、護堂はエリカから『死せる従僕の

檻』の力と、その檻に囚われた騎士達の悲惨な末路を知った。海人に親しい者を目の前で殺して見せあげ笑う悪辣なヴォバン侯爵に、一度痛い目を見せてやらないと気が済まなかったのだ。

だが、それは叶わなかった。エリカと護堂を取り囲むようにいた狼達が消える。するとヴォバンの体が膨れあがり、巨大な二足歩行の狼となった。

そしてなんと、牙の生えた顎を開き、向かい来る白馬の焰を呑み込んでしまったのだ。



護堂の切り札のひとつである『白馬』が吸い込まれてしまった。ウルスラグナの化身を使うと一日の間使えなくなってしまうため、切り札をひとつ失ったことになる。

だが水をさされたことにより、海人の燃え上がるような怒りが若干落ち着いた。

それによつて周囲の声に耳を傾ける余裕も出来た。

『海人様、ここは一旦退きましよう』

「ッ！ 何故だ！ 奴を殺すまたとない機会だ」

『確かに貴方様が冷酷に事を運べば、十中八九、再起不能にすることができますでしょう。ですが海人様はついさっきまで……冷静ではなかった。私の言葉が聞こえない程に激昂していた海人様では、敗れる可能性のほうが大きい。それに……』

「それに？ 何だ、さっさと……うん？」

服の裾を引っ張られる感触に、海人は後ろを振り返った。そこには巨狼となったヴォバンを見て怯える綾花の姿があった。

「……」

『それにヴォバン侯爵は雑兵を生み出す権能を、多数所持しています。海人様お一人なら構いませんが、綾花様を守護しながらとなると、その判断は的確とは言えません』

「……チッ」

海人は舌打ちをして不服な気分を発散する。頭ではわかっていたが、ヴォバンを殴りたい気持ちでいっぱいだった。

そんな会話を交わす間にも、ヴォバンは手下を呼び出し、差し向けてきた。護堂達には従僕を、海人達には猟犬をだ。

『従僕共、万理谷という小娘は殺すなよ。それ以外は殺せ。猟犬共は貪り喰らい、海人と生き餌の屍を晒せ！』

「ひっ」

ヴォバンが吼え、迫り来る猟犬達を見て、綾花が短い悲鳴を上げる。綾花は狼に噛まれたことがトラウマになってしまっていた。

綾花の怯える姿を見た海人は決断し、恐怖で固まる綾花を押してクサントスの鞍に乗せた。

そして自らも跨ぎ、手綱を持った。

『尻尾を巻いて逃げるのか、海人！ 臆病者めが！』

「さつき己の思惑を大声で語っていたではないか。お前の魂胆には乗らない。まずは綾花を安全な場所に避難させてもらう！」

クサントスがいなくなると地を蹴り、瞬く間に戦場である校庭から脱した。いくら自動車より速い狼共でも、馬の神獣であるクサントスには敵わない。

敷地から出る際、海人はちらりと護堂の方を横目で確かめた。海人の同胞であるなら、窮地も自らの方法で脱することができるだろう。だが何故か迫り来る従僕を前にしても、護堂は直立不動で立ち尽くしていた。



海人がいなくなった後の護堂はというと、その後なんとかヴォバンの追っ手を振り切っていた。

振り切るに用いた化身は『鳳』、速い攻撃を受けた際に使え、護堂に神速を与える。これで祐理のみを抱きかかえ、雨を防げる屋根のある場所で休息をとっていた。

エリカは従僕達を引きつけてくれている。それに一人きりのほう

が彼女も闘いやすいという配慮もあった。

休息をとるのも、『鳳』の化身の反動があった。使った直後から胸のあたりに激痛が走るのだ。

護堂が苦しむ様子を見て、心配した祐理が痛みの和らぐ術をかけるが、カンピオーネのため失敗する。それでも気遣い胸の辺りを撫でつづけてくれる祐理に、護堂は少し耐えやすいような気がした。

そして気づいた。祐理と思った以上に密着していることに。雨でずぶ濡れの衣服で密着しているため、気にしないように必死だった。

護堂は気を紛らわすために、ヴォバン侯爵の『死せる従僕の檻』を話題に出した。

『死せる従僕の檻』はヴォバンの性格が表に出た、とても悪趣味な権能といえる。海人の弟子の従僕が召喚されたとき、祐理の口からこぼれた所によると、オシリスという神から篡奪した権能らしい。

あの時、護堂もやり取りを眺めてただ無感動でいたわけではない。ヴォバンの非道なやり口に腹をたて、どうにか痛い目を見せてやらないうと気がすまなかった。

「どうにか開放してやれないか……」

護堂の頭には『戦士』の化身があった。この化身なら、囚われた騎士達を成仏させてやれる。

祐理に詳しくオシリスについて訪ねるが、『戦士』を使えるには至らない。『戦士』を使うには神についての一定の知識が必要なのだ。

やがて雨が激しくなり、轟々と嵐も強くなる中、護堂の中に焦燥が積もっていく。

そんな時、祐理が切り出した。

自分もエリカと同じように、『教授』の術が使えるのだ、と。

五十三話、待人

海人と綾花はクサントスに乗って街中を駆けた。

しばらくして狼達を撒いたと確認した後、安全と思われる場所で止まった。クサントスの最高速でならあつという間だったのだが、あいにく騎乗している者を保護してはくれない。カンピオーネには耐えても、人間には耐えられない圧力があるため、綾花に配慮してクサントスは疾駆した。

海人は建物の屋上を飛び回っていたクサントスを、とあるテニスコートに降り立たせた。

「……よし。ここらでいいか」

東京全土にかかり雨を降らせている雨雲だが、空は曇れども海人達に雨粒が降り注いではいなかった。

これは海人の八郎太郎の権能で、海人を中心に周辺一帯に雨が降らないよう雨雲の制御を奪っていたためだ。念のため海人達の周囲に風の防壁も張り、雨粒も吹き飛ばすようにしていた。

これにより綾花は雨から守られ、雨で濡れた洋服も乾ききつていった。

海人がまずクサントスから降りると、綾花を抱えるようにクサントスから降ろした。

綾花の石になっていた脚は、街中を駆けている最中に元の健常な脚へと戻っていた。指も動かせるし肌や血行の色も正常だが、一日以上固まっていたせいで上手く立つことができなかつた。

綾花は海人の助けを借りて、近くのベンチに腰を下ろした。

「海人様……。行くのですか？」

「ああ。ヴォバン侯爵はブツ倒す。……お前は此処で待っている。俺が先行したため遅れているが、陸でも活動できる神獣が来る。お守りをしつかりと持つとけ」

そう言いつける海人の顔は、綾花が見たこともない表情をしていた。口角を上げ、瞳をギラギラと輝かせて笑っている。魂を囚われた弟子の無念を晴らせるからか、それとも宿敵と闘えるからか。

このまま行かせては拙い。綾花は曖昧な不安を感じた。

「それじゃあ……」

「か、海……お父様！」

クサントスに乗って向かおうとする父親を、綾花は気づけば呼び止めていた。気が立った海人に睨まれるが如く鋭い視線を向けられ、綾花は一瞬たじろいだ。

「なんだ？」

「……その私を迎えに来てくれる神獣が来るまで、一緒に居て、くれませんか？」

鞍に手をかけていた海人は、綾花のお願いを聞くとしばらく押し黙り、やがて鞍から手を離れた。

大きくため息を吐くと、綾花のほうに近寄り、ベンチの隣に腰を下ろした。

「来るまでだぞ」

「あつ、ありがとう、お父様」

それ以降、海人は腕を組んで黙りこくつてしまう。二人の間で沈黙が続く、聞こえるのは遠方に見える雷鳴と雨音だけだった。

思い切つて綾花が話しかける。

「えつと、その……。お父様は、ヴォバン侯爵を如何したいのですか？」

「決まっている。奴はこの世から消し去る。奴に囚われている弟子の魂を天に還すためだ」

「なら、海人お父様一人で行わなくともよいのでは？」

「何が言いたい？」

「草薙護堂に協力してもらっては如何ですか？」

海人は数秒だけ空を見上げながら考え込むと、答えを出した。

「駄目だ」

他の神殺しには手伝いでも任せられなかった。

「どうしてですか！ 草薙護堂は私を助けてくれた、理性的な方です。話し合えるし、ヴォバン侯爵を日本から追い出すのに協力し合えるはずです」

「お前を助けてくれたことには感謝しているが、駄目だ。ヴォバンは俺一人で倒さないと、あいつが浮かばれない」

「確かにお弟子さんは可哀想だとは思いました。ですが……でしたら、心配している家族のことも考えてください！」

「綾花……？ ツー！」

海人に綾花が抱きついて、胸元に顔をうずめた。

「インドで音信不通になった時、心配しました。お父様が突然いなくなるかもって、胸が張り裂けそうでした」

「……心配かけて、すまなかつたな」

「本当です。……私はまつろわぬ神も見したことないし、羅刹王もお父様以外に見たところないですけど、ヴォバン侯爵には勝てるか分からないのでしよう？」

綾花は、海人が昔ヴォバンについて語っていた時のことを思い出していた。

海人が言うには、勝率は五分五分、勝利は時の運。そもそも神殺しが『どんなに力の差があろうと、わずかな勝機を掴み取る』者である、という。

「お父様なりの死者の弔いを止めはしません。ですが必ず戻ってきてくださいね。秋田の地でお母様……仁実様も待っています」

胸元から離れて海人の顔を見上げると、海人のは剣呑さが薄れ、小さな笑みが浮かんでリラックスした表情になっていた。

「ふう……。お前の言いたい事はわかった。草薙護堂とは利害が一致したのなら、共闘してもいいかもしれない」

ヴォバンとの様な終生睨み合う関係になると思っていたが、現代の日本人の常識を持ち合わせているのなら、肩を並べる関係もありなのかもしれない。

だが海人が会った神殺しは全て利己的な人物で、性格がぶつかり合い、争いあう関係にしかならなかった。同国の人間とはいえ、草薙護堂も神殺しには違いはないのではないか。

ともかく海人は、綾花の提案は心の片隅に留め、綾花や仁実という帰りを待つ者がいることを心に深く刻んだ。

「共闘については考えておく。それよりお迎えだ」

海人は、綾花の背後の先を指差した。綾花が振り向くと、そこには十体ほどの神獣の姿があった。

神獣達はサメの仲間とシャチから創られている。元となった魚の顔を持ち、体は人間の、まさしく魚人と言うにふさわしい容貌をしていた。戦闘用に獰猛で、なおかつ陸上でも活動できるようにした結果だった。

綾花は神獣らに気づくと気持ち切り替え、笑顔になって駆け寄った。

「オルクス！ 和邇に磯部も来てくれたんだ！」

綾花が駆け出すのを見て、海人は鞍に手をかけてクサントスに跨った。そして手綱を握ると、綾花には声をかけずにクサントスに乗って跳び去っていった。

「お父様！ ……あれ？ お父様？」

綾花が再び振り返るが、既にそこに海人はいなかった。

それにより海人の権能である風の結界が解け、ぽつぽつと雨が降ってくるようになった。

「……」

シャチの神獣が身振り手振りで綾花に何かを伝えようとする。

綾花は稲光の見える方向をしばらくじつと眺めた。激しく閃光を放ち暴風が吹き荒れる方にはヴォバンがいるのだろう。

「……うん、わかった。行こう」

すると綾花はそう呟き、先導する神獣達に続いた。



エリカ・ブランデッリは、自らの陣営に引き込んだリリアナ・クラニチャールと正史編纂委員会の甘粕冬馬と共に、東京タワーを望む芝公園へと急いで向かっていた。

二人の騎士は占術でヴォバンの居場所を探ろうとしていたが、冬馬の情報提供がありヴォバンの居場所が判明したのだ。正確にはヴォ

バンが狼を市街地に放ち、躍起になって探している人物の居場所がわかったのだ。

最古のカンピオーネの一人、安東海人は神獣を傍らに立ち尽くしているという。間違いなくヴォバンをおびき出そうとしている。待ち伏せの可能性はあるが、狼が探し出した時、狼王は嬉々として飛び込むだろう。

「最悪の事態です」

巨大な狼の群れに追われても飄々とした態度を崩さなかった甘粕冬馬だが、海人がこの場に来ていると聞き、深刻な表情に焦りを見え隠れさせていた。

「このままでは日本の首都で神話の世界でしか語られないような争いが起こってしまいます。奇跡的に人命に被害は出ていませんが、それに巻き込まれたら……」

賢人議会によれば、狼王と海王が戦った影響で壊滅した都市の例が、いくつかに在るという。

正史編纂委員会のほうで住民の避難を行っているが、二人の神殺しが激突した余波がどれほどの範囲に及ぶかわからない。被害が広がれば人民に被害が及び、東京もその壊滅した都市のひとつになってしまう可能性がある。

「草薙さんには仲裁か、周辺の被害を最小限に留めて欲しいものです」
「それには安東海人の協力が必要よ。共闘まではいかなくとも、利害の一致程度にはしたい。三すくみだけは絶対に避けたいわね」

海人のヴォバンに向けた憎悪の大きさから、仲裁は無理だと考えられる。だが果たしてカンピオーネ同士の共闘など叶うのだろうか。

カンピオーネは私の強い者が多い。世界に八人おり性格もバラバラだが、睨み合う関係は聞けども信頼関係があるとは聞かない。唯一護堂とサルバトーレ・ドニの関係は良好だが、エリカは最古の王話が通じるかどうか少し不安だった。

三人が芝公園に到着し、木々に隠れ、安東海人がいると言う広場の様子を伺う。

そこには海人と、無数の狼。そして木の上に頭を出しそうなほどの

背丈を持つ巨狼。

「間に合わなかった、か……」

リリアナが落胆し呟いた。三人の視線の先には、海人とヴォバンが対峙していた。



「のこのこ出向いて来るとはな。脳みそまで獣になったか。……あの塔を見る。あれが貴様の墓標だ。狼風情にはもつたいないだろう？」
『ほざけ！ たとえ罫を仕掛けてであろうとも、内側から食い破つてやるまでよ。……貴様の神獣はそれだけか？ 出し惜しみするのなら、我が手勢で翩り殺しにしてやるわ！』

海人が対峙するヴォバンの舌戦を練り広げていると、その間に割り込む若い女の声が響いた。

「お待ちください、王達よ！」

声のする方に視線を向けると、草薙護堂の傍にいた魔術師の少女と、見たことない銀褐色の髪をした少女がいた。その先にもう一人眼鏡の男がいたが、傍観する姿勢のようだ。

『出てくるのが遅かったではないか、『紅き悪魔』の小娘。そして……何故その仇敵と共に並んでいる、クラニチャール？』

「おそれながら申し上げます。供の御役目を返上したく参りました。婦女子を攫い神の供物にするなど、騎士の行いではありません」

『王に逆らうか。それもまた騎士の鑑といえよう。……それで何の用向きがあつてこの男との決闘に口を挟んだ。下らぬ用であれば、『死せる従僕』に二人まとめて加えてくれよう！』

ヴォバンが脅し、狼が牙をむいて威嚇する。しかしエリカは動じる様子を見せない。

「順番を間違えてはいけません。草薙護堂とのゲームがまだ終わっていません。……それとも、自ら提案したことを放棄なさるおつもりですか？」

『ふん、安い挑発だ。だがそこまで言うのであれば、肝心の小僧は何処

にいる?』

ヴォバンの王者の笑いが、血の滾りを持って余す闘士の哄笑に変わる。

『半年も経たぬ若造の力など高が知れているわ。剣王の小僧を下した力が、こ奴に届くのならば話は別だがな!』

「俺を引き合いに出すな、狼が。……ヴォバン、お前はひとつ思い違いをしている。遙か昔の神殺し同士の戦のように、視界に入る者全てが敵だとは限らないぞ」

『何?』

「——草薙護堂! 御身の騎士が呼び招きます。今こそ来たり、王の責務を果たし給え!」

セーラー服を着たエリカという少女が、声高らかに名を呼ぶ。すると二人の王と少女達の間には、一際大きな風が吹いた。そして風の渦の中心に、草薙護堂と万理谷祐理が現れた。

風となって現れた護堂に、海人は驚愕を露にした。

「お前は……草薙護堂!」

『ようやくと来たか、小僧』

「ヴォバンのじいさんに、確か、安東海人だっけか……」

決戦場に再び三人のカンピオーネが揃った。

五十四話、風

草薙護堂はエリカに呼ばれ、『強風』の化身となり祐理を伴い降り立った。降り立った芝公園は三人のキャンピオーネが揃い踏み、決戦に相応しい様相を呈していた。

護堂は連れてきた祐理を離れるよう指示し、エリカに目配せをする
と、同胞二人の方向に踏み込んだ。

一人は巨狼の姿で狼と騎士の手駒を並べ、一人は異形の馬に跨り水の槍を構えている。そんな二人に高校の制服を着た何も持たない護堂は、傍から見たら酷く場違いだろう。

だが彼もまた神を殺し、権能を内包するキャンピオーネなのだ。この場に立てる存在としては同格だった。

『随分と遅かったな、小僧。だが先に新たな獲物を見つけたのだ。そこで指を咥えて眺めているがいい。辛抱辛いというのであれば、貴様と海人、二人まとめて相手してやってもよいが』

「忘れたのかじいさん、これはあんたが吹っかけてきたゲームの続きだ。じいさんが勝てば万理谷を連れていく。だが俺が勝ったら、とつとこの国から出て行ってもらおうぞ！」

『よく吠える。ならばその言葉を買ける力があるかどうか、この場で試してくれよう！』

巨狼姿のヴォバンが手を振るう。すると闇の中から従僕達が現れ、護堂に殺到する。

エリカとリリアナ、二人の騎士が護堂の盾となるため、従僕達の前に躍り出た。二人の騎士は魔剣を構えるが、彼女達が魔剣を振るうことも、従僕達が彼等にたどり着くこともなかった。

「雨よ、撃ち穿て！」

それは海人が聖句を唱えた声だった。従僕達の周囲のみ、雨粒が海人の権能の影響を受けた。

権能の力を受けた雨粒は、水の銃弾となって従僕達の頭上から降り注いだのだった。機銃の掃射を受けてしまった従僕達は頭から腹まで刺し貫かれ、再び闇に溶け込んでしまった。

者々の視線が海人に集中する。神獣の馬に騎乗する海人は、いつの間にか護堂達の傍に近寄ってきていた。

海人は、騎上から護堂に話しかけてきた。

「草薙護堂。まずは改めて、綾花を助けてくれてたことに感謝する」

「礼はいいよ。俺も万理谷を助けるついでだったからさ。甘粕さん――後ろの眼鏡をかけた男の人が助け出してくれなかったら、じいさんから守ることもできなかった」

「あの男にも後で礼を言おう。……本題に入るが、草薙護堂。俺と共同戦線を張らないか？」

「あんたと？」

それは願ってもない申し出だったが、護堂は先刻会った時の様子を思い出していた。

海人は護堂と敵対はせずとも、ヴォバンと自身の闘いに介入して欲しくはなさそうだった。海人とヴォバンの間には浅からぬ因縁があり、二人の世界に邪魔が入ってきて欲しくなかったのだろう。

だがそれでも護堂は、一度目は『白馬』の化身で、二度目は『強風』の化身で割って入った。

神の権能を持つ者同士の闘争は、台風以上に広範囲に被害をもたらす。護堂の実家がある東京をめちゃくちゃにされては困るからだ。

だから護堂は覚悟してここに来ている。ヴォバンとの決闘を邪魔され、護堂を排除しようとしてくる海人と戦う覚悟をして介入したのだ。

「俺が手を出してもいいのか？　じいさんとは因縁があるんだろ。さつきまで任せろ、とか何とか言っただけじゃなかったか？」

「たしかに、あの場から去るまでは一人でやろうと思ってた。……だが考えが変わった。奴はどんな手段を使っても倒す」

海人がヴォバンに視線を向ける。ヴォバンの頭は狼のため表情が判別できないが、低く唸り、目はぎらりと海人を睨みつけていた。

「わかった。あんたと手を組もう。じいさんを追い出すための共同戦線だ」

「交渉成立だな」

海人は馬から降り、護堂に水の槍を持たぬ左手を差し出した。護堂も手を出し、握手をした。

「俺を誘ったってことは、何か作戦があるのか？」

「作戦なんてもんじゃねえが、お前はヴォバンに攻撃を加えて、俺が奴の手駒を牽制する。そんなところか。……戦場に戻ってきたってことは、見つけてきたんだろ、勝機を。奴に対抗する手立てをよ」

「……ああ」

護堂は力強く頷くと、海人と肩を並べてヴォバンに向き直った。



「という訳だ。待たせたな、ヴォバン」

『いささか驚いたぞ。まさか貴様が、神殺しと神殺しが徒党を組む光景を見るとはな。だが青二才など者の数にもならん。まとめて叩き潰してくれるわ！』

「二兎を追う者は一兎も得ず。加えて俺は鬼で、草薙護堂は能ある鷹かもしれん。……はつきり言えることは、お前は何も得るものはない、此処で全てを失うということだ！」

海人はクサントスにこの場を離れるよう命令を下した。ヴォバンが吼えると、芝公園を包囲していた狼達が一斉に襲い掛かってきた。

狼達が四人の四方八方から迫り来る。エリカとリリアナが護堂の背後を守り、海人がヴォバンと睨みあう形となる。二人はそれぞれの愛剣を呼び出し、押し寄せる狼達を迎え討った。

「雨よ、集いて刃となれ！」

海人が聖句を唱え、槍を突き出した。槍の先の宙に雨粒が集まり、ヴォバンまで届きそうな巨大な半月状の刃を作りだした。

「ふッー」

海人が槍を振るうと、宙に浮いていた水の刃が、海人達四人を中心にして周囲をなぎ払った。

鋭利な水の刃は周辺一帯の樹木も巻き添えにして、何の抵抗もなくすべてを断ち斬った。

反応できなかった狼達は訳も分からず両断され、大半の狼が闇に溶けた。生き残ったのはエリカとリリアナに接近していた狼と、海人の攻撃に反応して跳びあがった狼だ。

『やはり狼どもでは数にもならんかッ！』

水の刃の攻撃を予期して跳躍したヴォバンが吼える。ヴォバンは落ちながら空中で、その大きく開いた牙の間から稲妻を吐き出した。

後ろには護堂がいる。海人は迷わず、操っていた雨水の塊を平たい板の形にし、目先の地面に突き刺した。板状の水塊は海人達の姿を隠せるほど大きく、水塊に阻まれた雷は地面に逃げていった。

今度はヴォバンが板状の水塊を正面から破り、海人に飛びかかってきた。巨狼となって鋭い爪の生えた両腕を振りかざし、また凶悪な牙の生えた顎で海人を引き裂こうとしてくる。

海人は爪と牙の攻撃を避け、懐に潜り込もうとした。槍の一突きでヴォバンの巨体を貫こうとしたが、それは叶わなかった。ヴォバンは海人に肉薄した瞬間、なんと懐に従僕を召喚したのだ。空いた隙を埋める肉壁とし、水の槍がヴォバンに届くかわからなかった。

『トリアイナを変化させ、防御に回します』

海人が思考を巡らせるより早く、トリアイナが水の槍の形状を変化させる。水の槍は円盾となり、海人はそれを差し出し、ヴォバンの両手頭の攻撃を受けた。

水の盾は衝撃を吸収し、容易に受け止めて見せた。

目と鼻の先で海人とヴォバンが睨み合う。

『貴様の神獣はどうした、海人！ 喚ぶがいい。それとも貴様一人で闘い、我に勝利するなど甘い見ではなからうな』

海人の創り上げた海魔——神獣たちは着いてこれていなかった。取るものも取り敢えず東京に急行したため、着いてこれて陸上で活動できるのは、綾花の護衛につかせた神獣だけだった。

何処に居ても召喚できるヴォバンの『死せる従僕の檻』も、そこだけは便利だと思っていた。

「いつもは俺とお前だけだった。だが今回は後ろに居るだろうが」

『……フフフフ。フハハハハハ！ 己を律し、小僧を庇いながら我を

倒せるとでも？ 下僕ではなく仲間を増やした途端、貴様は弱くなっているぞ。牽制程度の攻撃も避けられず、後ろの足手まといを庇うだけではないか！』

「……確かに一人の戦士としては弱くなったかもしれないねえ。だからこれは、俺の大博打だ！」

『戯けたことを抜かしおる。従僕共、安東海人を小僧もろとも押し潰せ！』

最後の狼がエリカの剣によって倒され、続いてヴォバンの召喚により『死せる従僕』が現れた。

ヴォバンが至近距離にいたため、従僕は海人達を囲い込むように闇の中から這い出てくる。

時代も文化も違う様々な従僕達が、持ち前の武器を構える。間近で召喚された騎士や戦士が、海人達に武器を振り下ろす。

だが、この従僕達が召喚されるのを待っていた者がいた。

「——ヴォバン、俺は知っている。あんたが殺した太母神——冥界を司る、命を实らせる穀物神を知っているぞ！」

その言霊は、海人の背後から聞こえてきた。すると言霊は海人達の周囲に光る玉となって顕れた。雨空の中きらめく無数の光玉こそ、草薙護堂が紡ぎ出した神格を斬り裂く黄金の『剣』だ。

草薙護堂が持つウルスラグナの化身のひとつ、『戦士』の能力だ。権能の源である神の知識を詳らかにすることで、神格を斬り裂く言霊の剣を創りだす。

黄金の『剣』が周囲に散り、従僕達を縦横無尽に切り裂いていく。光玉に反応し武器を振り下ろす従僕もいるが、黄金の『剣』は武器ごと従僕を切り裂いていった。

『なんだ、その力は!?!』

ヴォバンも言霊の剣の危険性を察知し、後方へ飛び退く。黄金の『剣』はそのヴォバンを執拗に追撃し、狼となったヴォバンの銀色の体毛を四方八方から斬りつけていく。

しかし、ダメージは少ないようだった。ヴォバンはアポロンの権能の力で巨狼に変身しているため、オシリスの神格を斬り裂く剣では効

果がないのだ。

「へっ、やるじゃねえか！」

周囲の従僕がなす術なく斬り裂かれていく光景を見て、海人はそう漏らした。海人が護堂と手を組んだのは、こういった未知の攻撃を期待してのことだった。

海人とヴォバンは何度も闘ったせいで、お互いの闘い方がある程度熟知してしまっている。権能の能力はもちろんのこと、権能の扱い方、得手不得手、場所の有利不利など。お互いの性格もそれなりに知っているため、次にどんな手段を講じてくるかも予測できてしまうのだ。

だから草薙護堂を引き入れた。このままヴォバンと闘っていたら、また互いに消耗し、痛み分けて終わってしまうからだ。膠着した状態に風穴を空けるため、新しい風が必要だったのだ。

「オシリスは一度、八つ裂きにされて死んだ。そこから復活を遂げて冥府の神となった。春に命を与え、秋に収穫し、冬に刈り取るのが地母神の役割。そして春に生まれ、秋に実り、冬に死ぬのは大地の子である穀物神の役割だ」

護堂が必死に言霊を黄金の『剣』に吹き込んでいる。しかしヴォバンの周囲を飛び回っている光玉が与えるのは小さな切り傷だけだ。海人の目からも効果があるようには見えなかった。

『海人様。あの光玉は、神格を斬り裂く剣のようです。草薙護堂は、従僕の権能を斬り裂く言霊を吹き込んでいる。狼の権能に効果はありません』

トリアイナが海人に助言する。ヴォバンも自らに効果がないと分かったのか、再び狼を無数に呼び出していた。

狼が従僕の前に立ちはだかり、盾のような扱いをされては、黄金の『剣』は減るばかりだ。

「だったら、狼は任せてもらおうか！」

言霊を紡ぎ続ける護堂に一瞬だけ目配せし、海人はトリアイナを地面に突き刺した。

その瞬間、ヴォバンは首筋に寒気がした。物理的にも感覚的にも、

ヴォバンの周りの気温が突如下がったのだ。

「地表よ、凍りつけ！」

海人の聖句により、何とヴォバン一帯の地表が凍りついた。海人は地中に染み込んだ雨水を支配しており、それを凝固させヴォバン達の足を取ったのだ。

従僕と狼は足が凍りつき動けなくなり、そこを狙われて従僕のみが黄金の『剣』で斬り裂かれた。

ヴォバンも流石にこれには意表を突かれ、だが直ぐに凍りついた脚を力まかせに強引に引き抜いた。

海人は一瞬でも動きを止めたこの機を逃さず、ヴォバンに追撃を繰り出した。海人はヴォバンの頭上に、鋭い円錐形の氷柱を何本も造りだした。

ヴォバンと接戦を繰り返している間、雨水を集めて造った氷柱は、巨狼のヴォバンよりも大きかった。それを頭上から降らせたのだ。

「もひとつ、オマケだ！」

『なに!?!』

さらにダメ押しに、海人は地中からも氷柱を生み出した。ヴォバンはそれを咄嗟に避けるが、そのせいで頭上からの氷柱の対応が疎かになってしまった。

ヴォバンは巨狼の腕を頭上に掲げ、氷柱を受け止める作戦に出た。巨狼の鋭い爪を突き刺し氷柱をがっしりと受け止め、なんとか氷柱の隙間に体を滑り込ませた。

だがヴォバンは身動きがとれず、まるで自分より巨大な顎を持つ肉食獣に噛み付かれ、必死に抵抗する小動物のような状態だった。

「これで、終いだッ！」

身動きのとれなくなったヴォバンに向かって、海人が手に持ったトリアイナを投げつけた。

雨粒を吸収しながらヴォバンに迫る水の槍。しかし槍は巨狼の肉には突き刺さらず、巨大な氷柱へと突き刺さったのだ。

「ぐっ！」

何故か海人は、突風によって吹き飛ばされた。

何とか宙で体勢を建て直し両足で着地すると、見ると人間形態に戻ったヴオバンと目が合った。

ヴオバンは巨狼の姿を解除し、出来た隙間を使って氷柱の牙から脱出したのだ。

「氷とはな。貴様は水しか扱わぬから、不意を突かれた。もつと愉しませてくれ！ まさかもう、タネ切れではあるまい？」

「いいや、もう必要ない。まんまと誘い出されてくれたな。お前がその姿に戻るのを待っていたんだ！ ——草薙護堂！」

「なんだと？」

ヴオバンが護堂の方を振り向くと、護堂の手には長大な剣が握られていた。黄金の刃をもつそれは、言霊の剣がひとつに束ねられた神剣だった。

「ぬうッ！」

護堂がヴオバンめがけて神剣を振り下ろした。芝公園周辺は眩い閃光に包まれ、残っていた従僕は斬り裂かれ、ヴオバンもまた光に包まれていった。

五十五話、決着

巨狼から人間へと戻ったヴォバンに、護堂の黄金の『剣』の一撃が叩き込まれた。

ヴォバンがアポロンの権能を解除したため、神格を斬り裂く剣から守る鎧がなくなり、護堂の渾身の一撃が直撃したのだ。

その瞬間、氷によって地面に縫い付けられていた全ての従僕が、塵となって消え去った。その中には海人の弟子だった者の姿もあった。

護堂の権能によって高名な魔術師達の魂が、ヴォバンの『檻』の呪縛から解き放たれたのだ。

「……………この声は……………!? お前なのか……………?」

従僕達の姿が崩れ落ちていく時、海人は何者かの『声』を聴いた。それは何百人もの、海人と護堂に感謝を表す声だった。

それはヴォバンの権能から開放された、ヴォバンに殺された騎士や魔術師達の『声』だった。

檻の呪縛から開放され、元従僕達は真の安らぎを得たのだ。

『ありがとう……………ありがとう……………』

元従僕達の言葉からも、感謝の念とともに心安らぐ気持ち伝わってくるようだった。

海人はしばらく棒立ちになり、弟子が昇っていったであろう天を見上げていた。

『来ます、海人様!』

トリアイナの声ではっと気付き、海人はヴォバンの方に向き直った。

「何を上の空になっている。まだ闘い終わっておらんぞ!」

そうヴォバンが吠ええると、海人の頭上から稲妻が落ちてきた。

海人はまた雨粒を集めた水塊を避雷針にし、天から降り注いだヴォバンの雷撃を防いだ。

「ふん、小賢しい!」

雷撃を防いだ途端、海人に突風が襲い掛かった。

空中の水塊は風圧に飛び散らされ、海人も突然発生した台風のよう

な強い風に吹き飛ばされてしまった。

なんとか倒れ込まずに四つん這いで着地する。しかし間髪居れず、ヴオバンを中心に強風が巻き起こった。

強風が海人達をまとめて吹き飛ばそうと迫る。

だが海人もまた風を操る権能を持っている。海人はすぐさま風を起こし、ヴオバンの風と真正面からぶつけた。

見えない力が衝突し、互いの風を相殺してせめぎ合う。

ヴオバンは風雲雷霆を支配する権能を行使し続け、ヴオバンはまさに台風の目となって、全方位に向けて風を放ち始めた。海人も余所見からの不意打ちから立ち直り、負けじと風を操る権能を行使をし続ける。

暴風の脅威は無差別に与えられた。護堂を守っていたエリカとリアナは引き剥がされ、ヴオバンの召喚した狼達は地面から氷ごと剥がされ吹き飛ばされた。

「まずは誉めてやろう、小僧。予想以上の働きぶりよ」

風と雨が激しい嵐の中にも関わらず、ヴオバンの声がはつきりと聞こえる。だが言い放った会話の相手は海人ではなく、もう一人の神殺しのような。

海人は自らの権能で、ヴオバンの起こす烈風に対抗している。だが風に対抗する手段のない護堂は、必死に姿勢を低くして地面にしがみついている。

「貴様の神格を斬り裂く剣が、我がオシリスの権能を切り裂き、捕らえた従僕共を解放した。貴様を見くびっていたことを認めよう。だが、もうタネ切れのようだな？」

ヴオバンが護堂に向かって手をかざすと、天から雷が降り注いだ。落とされた雷は護堂に直撃する、はずだったが逸れて至近距離に落ちた。

どうやら呪力を跳ね除けるカンピオーネの特性を利用し、護堂が稲妻の軌道を逸らしたようだった。

「しづとい。成り立てといっても流石神殺しといったところか。……先刻から気になってはいたが小僧、貴様は昔の私に似ているよ。魔術

の心得も知らず、剣を修めてもない身で『王』の権能を手に入れる。私も通った道だ」

そう言うと、ヴォバンの肉体がふくれ上がっていく。人間の体が、銀の巨狼へと変貌していく。

ウウウオオオオオオオオオオオンツツツ！

ヴォバンは再び巨狼となり、咆哮を上げた。

『私と海人の闘いを、そこで這いつくばって眺めているがいい』

銀の巨狼が、海人に向き直った。

『さあ、始めようか。貴様と私の一騎打ちを！』

「戯言を。従僕は解き放たれ、狼はこの嵐で吹き飛ばされる。不完全な上体で私に敵うとでも？」

『だが互いの手駒がないこの状況は、限りなく対等だ。……常にそうだった。貴様と私の闘いは互いの手駒を出し合い、残っているのは私達のみ。最後に頼れるのは、我が身ひとつだけよ！』

ヴォバンは爪を天に突き立てた。両者はおのずと接近し、ヴォバンはその鋭利な爪を、海人は水の三叉槍を振るった。

互いの最も頼れる武器が激突する。

その瞬間、二人が吹き起こしていた風が、互いの勢いを巻き込んで取り入れた。風はより強い暴風となり、周辺のもの全てを吹き飛ばすようにその風威を撒き散らした。



護堂は必死に、二人の神殺しの起こす暴風に抵抗していた。

轟々と吹きすさぶ風の音で、護堂の周りの声は聞こえていなかった。ヴォバンの底冷えするような声と、海人の頭に直接語りかけるような声は聞こえていた。だが背後にいるエリカや祐理、リリアナの声はかき消されてしまっていた。

……！！

護堂はこの場にいる五人以外の誰かが、叫んでいるような予兆を感じ取った。

うつすらと目を開ける。視線の先では、海人とヴォバンが接戦を繰り広げていた。

ヴォバンは膨張した厳しい体軀から、丸太のように太い腕を振り回している。その腕力で振るわれる鋭利な爪にかかれば、人間は紙の如く斬り裂かれてしまう。

海人は紙一重でヴォバンの爪をかわし、避けられない攻撃は水の槍を持った片手で受け止めていた。巨狼と腕力で競り合い、隙を見てまっろわぬ神も貫く槍の突きを繰り出していった。

このまま這い蹲って見ているだけでは終われない。護堂の闘争心に火がついた。

……！……！……！

またあの声だ。どこか遠くから、何者かが呼ぶ声がする。立ち上がってくれ、闘ってくれと懇願する声が聞こえる。

ウルスラグナの聖句を唱え、護堂は何とか立ち上がった。その時、護堂は新たな力と声の正体を理解した。

護堂の体を甘美な全能感が駆け巡る。だがそれに流されず、抗い制御するように護堂は力を振るった。

「——義なる者たちの守護者を、我は招き奉る。義なる者たちの守護者を、我は讃え、願ひ奉る。天を支え、大地を広げる者よ。勝利を与え、恩寵を与える者たちよ。義なる我に、正しき路と光明を与え給え！」

ウルスラグナ第九の化身『山羊』の聖句を唱え、護堂は天を覆う雨雲へと手をかざした。

護堂の頭上より、稲妻が下った。



海人はヴォバンとの近接戦において苦戦を強いられていた。その訳は、ヴォバンの纏う風にあった。

海人は、自身を水の体にして攻撃を受け流す権能を持っている。たとえば体が吹き飛ばされても、水を取り込めば補填することができる。

だがその水の体も、ヴォバンの攻撃をまともに受けた際に発動すれば、風で体を構成する水を吹き飛ばされてしまう可能性がある。

周囲の雨水を集めようにも、風のドームで跳ね除けられてしまう。攻撃を受けれる猶予は一回だけだ。

『どうした、昔の勢いは！ 私を追い詰めた、殺気を込めた技の連撃を見せてみる！』

海人はひたすら防御に徹した。ヴォバンがしびれを切らし、隙を見せる機をひたすら待った。

そんな最中、海人とヴォバンがいる場所とは違う場所に、天から雷が降った。

咄嗟に落ちた方角を見る。そこには雷をボール状にして掴む護堂の姿があった。しかもヴォバンと海人の生み出す風を受けても体勢を崩す様子も見せない。

『まだ闘う力を残していたか、小僧！』

「俺も混ぜてもらおうか。ヴォバン、これ以上お前の好きにさせて堪るかよ！」

護堂が手の内に溜め込んでいた雷撃をヴォバンに放つ。海人は巻き込まれないように後方に跳び退いた。

だがヴォバンも風雲雷霆の使役者。護堂の放った雷撃はヴォバンに当たる直前に軌道を曲げ、脇に逸れた。

(トリアイナ！)

海人はこれを千載一遇の好機と捉え、防御から一転、攻撃に転じた。

トリアイナに命じ、護堂が放ってヴォバンが逸らした雷撃を掌握したのだ。そのの向きを反転させ、逸らしたと思いつくヴォバンの背中から叩き付けた。

『何ッ!? グオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ』

ヴォバンの巨体が一瞬稲光に包まれる。だがそれでも、ヴォバンを倒すまでには至らない。

海人はヴォバンがひるんで出来た隙を逃さず、追撃に移る。ヴォバンの頭上に周辺の水を集結させ、瞬時に凝結、細く鋭い氷の槍を三本作り出した。

氷の槍を勢いよく投下する。堅牢な銀の体毛を破り、ヴォバンの両腕、首から胴までを貫いたのだった。

槍は地面に届き、ヴォバンを磔にする。

「いまだ、やれ護堂！ トドメを、ありったけの一撃を！」

「おうッ！ —— 我は言霊の技を以て、勝利の聖句を謡う！」

ウルスラグナの聖句が唱えられ、護堂が雨雲の掌握に意識を向ける。

この時、最後の―撃を託した海人から、無意識の内に護堂へ呪力の受け渡しが行われた。海人からトリアイナを仲介し護堂に少なくとも呪力が移され、『山羊』の化身の特性もあり、護堂の呪力が爆発的に高まった。

海人が一瞬だけ虚脱感に襲われる。

『おのれ海人、そして小僧！ どこまでも小癩な真似をおおおおオオオオオオッ！』

しかしヴォバンは止まらない。底なしの闘争心をふりしぼり、氷の槍を体に刺したまま地面から抜きにかかる。

槍が地面から抜けた。巨狼の頭の向く先には護堂がいる。

「やらせるかよッ！」

ヴォバンと護堂の間に、海人が立ちふさがる。そして高い呪力を発する護堂しか眼中にないヴォバンに、跳躍、眼前に現れた。

「うおおおおおッ！」

『ガアアアアアアッ！』

海人が突いた水の槍は、巨狼の顔面を貫いた。しかしヴォバンも腕を振りぬき、海人の体を上下に引き裂いた。

海人とヴォバンの駆け引きがまさに瞬く間に行われ、そこに全てを灰燼に帰すかの如く、護堂の渾身の雷撃が落とされた。

致命傷を負った二人の神殺しの姿が、稲光に包まれた。



その後の顛末はこうだ。

極大の雷撃により出来た煙が晴れ、雷が落ちた地点の視界が晴れた。

護堂は海人の姿が健在なのを見て、胸をなでおろした。恐ろしい速度で自分とヴォバンの間に割ってはいった海人、胴のあたりが何故か歪んではいるが、二本の足で大地に立っていたからだ。

海人の奥の手であり、体を水で補填していたのだ。これがあれば、死の淵から蘇ることができた。

だが、それはヴォバンも同じようだった。雷が落ちた地点にある塵が巻き上がり、積もり、やがて人の形を成した。ヴォバンだ。

ヴォバンと海人が睨みあい、第二ラウンドが始まろうとした、その時だった。

天を覆う雨雲の隙間から、芝公園に朝日がかかったのだ。

「もう止めろ、ゲームはお前の負けだ、ヴォバン！ 俺は立っているし、万理谷も無事だ。まさか侯爵様とあろうお方が、これでも認めない訳ないよな？」

しかしヴォバンは諦めが悪く、海人との決闘は終わってはいないとのたまう。

護堂は焦った。海人が乗り気なら、本当に第二ラウンドが始まってしまう。

だが心配は杞憂だった。護堂がどう説得するか思考を巡らせている間に、海人が腕を下ろしたのだ。そして水の槍の形を解いた。

『ヴォバン。お前には返しきれない積怨がある。貴様の命だけでは足りぬ程の心からの憎悪が燃えている。……だが今回は見逃そう。俺の弟子の魂を解放したことだけで見逃してやる。俺が何百年も願ってやまなかつた事を為した、草薙護堂に免じてな』

海人はそう、護堂のいる方向に振り返りながら言ったのだ。

『今回の勝者は俺でもお前でもない。その草薙護堂だ。敗者は勝者に従う。勝者が闘いを止めろというのなら、それに従おうじゃないか』

こうして東京を舞台にした三人のカンピオーネの闘争は終わりを迎えた。

ヴオバンは去る際に、こんな言葉を残していった。

『覚えておくがいい。我ら『王』同士は互いを無視し合うか、不戦の協定を結ぶか、終生の敵と決めて戦い抜くか——いずれかだ。今より貴様は、私の敵のひとりとなる！ いずれは其処の海人ともそうなる。この狭い島国で、互いの版図を競い合うがいい』

ヴオバンが去った後、芝公園は酷い有様であった。樹木は風であらぬ方向に曲がり、地面には雷の焼け跡が残る。さらには広範囲にわたって地面が凍りついているのだ。

一般人が見れば、夏が近い六月において異常なことだと口を揃えて言うだろう。

だが、凍りついた地面に関してはすぐに解決することになる。残った海人が、権能で氷を水に変えたのだ。

「うし、これでいいな。……終わったぞ、草薙護堂」

「助かった。あんたがいなければ、どうなっていたことやら……」

「いいさ、お互い様だ。俺も助けられた」

その様子を見れば、護堂はこの同郷の神殺しと敵対する関係になるとは思えなかった。

護堂の中での比較対象といえば、サルバトーレ・ドニとヴオバン侯爵だ。今まで見たところ、二人のように戦闘狂でもなく、常識人で、それに仲間思いでもある。

後のことは正史編纂委員会が行う、と安全な場所で戦いを見守っていた甘粕冬馬が申し出た。まつろわぬ神や神殺しとは戦えない替わりに、こうした隠蔽や処理などの後始末を請け負ってくれる。護堂もアテナとの戦いの後、世話になっていた。

「改めて草薙護堂、綾花を保護してくれたこと、そしてヴオバンに囚われた者達の魂を救ってくれたこと、感謝する。本当にありがとう」

「い、いや。俺も助けたいと思ったただだから……」

護堂は差し出された手を握り、海人と握手を交わした。するとまるで万力に締め付けられているかのように凄い握力で握り返された。

「いてっ、いてっ。いてててててててててッ！」

「お前と、あの黄金の『剣』がなけりや、俺じゃ一生かかっても解放で

きなかつたかもしれん。だから謙遜せず素直に受け取ってくれ」

「ああ！ 受け取る、受け取るから！ 手を離してくれ！」

「おお、すまん」

握力が緩められ、海人からぱつと手を離す。カンピオーネとなって頑丈になったはずの体だが、握手だけで手が悲鳴をあげていた。

「草薙護堂。いや、護堂と呼ばせてもらおう」

「じゃあ俺も、あんたのことは海人って呼ばせてもらおうぞ」

海人は快諾した。いつのまにか海人の傍らには、蒼い体表と白いたてがみを持った馬の神獣がいた。海人がクサントスと名付けた神獣だ。

海人はクサントスの鞍にまたがると、手綱を握り護堂に言った。

「護堂。お前に返しても返せない借りができた。俺はこれから秋田に戻るが、助けが欲しいときは言ってくれ。何処にでも駆けつけ、出来る限りのことをしよう。……俺は綾花の様子が気になるが、お前はあの女衆を見てやったらどうだ？」

海人の視線をたどり護堂が振り返ると、祐理とエリカ、リリアナが倒れ込んでいた。

護堂はまだ気づいていなかったが、『山羊』の化身の副作用だった。周辺一帯の生命力を吸い取っていたのだ。

「じゃあな、また会おう。八人目の同胞、草薙護堂よ」

そう言い残し、最古参のカンピオーネは目にも留まらぬ速さで去っていった。

護堂は海人に出会う前に不安があつた。前情報を一言で表すなら、荒くれ者の海賊。できるなら争いごとには発展してほしくないと思っていたが、不安は残っていた。

だがこうして話してみると、他の二人のカンピオーネに比べて常識人を感じた。護堂は同じ常識人同士、上手くやっていける気がした。

護堂は、へなへなと腰を抜かして倒れ込む三人の下に向かった。

余談だが、この日東京では深夜から朝方にかけて最低気温5℃を記録した。

カンピオーネ同士の戦いによって人的被害は皆無だったものの、海

人の使った権能で気温が急激に低下した。これにより体長を崩す者が続出し、農作物に甚大な被害を与えたが、海人や護堂がこれを知るのは少し後の話である。

五十六話、平穩

この空間にいと、時間の感覚を忘れる。外ではもう、あれから一ヶ月の月日が流れたという。

安東仁実が軒下の縁側から空を見上げた。あいにく此処は、時が経てば太陽が昇り、やがて沈むなどということはない。何百年もこの変化のない幽世に身を置いているので、人間の生活のリズムなどどうの昔に崩れていた。

仁実の住んでいる此処は『幽世』といい、人の住む現世とは違う世界である。あらゆる情報が記録されており、まつろわぬ神はこの幽世で受肉すると言われている。

そんな世界の一部に仁実はいた。元々ここは『アテルイ』というまつろわぬ神が隠居していた場所であり、二百年前に海人を通じ、仁実が譲り受けた場所だった。

「ふう……」

湯飲みの茶を一口飲み、仁実は一息ついた。

綾花がヴオバン侯爵に攫われてから、早一ヶ月。二度と攫われぬよう警戒態勢の強化に奔走し、ようやく一区切りついたところだった。この幽世から出ていないので体力的な疲労はないが、今のように心の休まる時間はなかった。

密閉された変化のない空間で人間が正気を保っていられるのは、約三ヶ月だと言われている。しかし幽世はすべての記憶が存在する空間であり、刻々と変化する変化する現世の様子を、水晶玉を通じて伺うことができた。

そして何よりも、仁実には海人という待ち人がいた。海人のことを思えば、何百年の年月を耐えることができたのだ。

海人が帰ってきた今でも、自分に課した『海人の帰る場所を守る』という使命は終わっていない。

これから何世紀も後まで海人が戻ってこれる場所を守る、それには現世で手足となって働いてくれる組織が必要だ。組織のトップには私に従順な安東の者を据える。そのためには綾花を使って……。

そこまで思考を巡らせたところで、仁実の頭をブンブンと振って考えを振り払った。

「考えないようになっているのに……」

仁実には、海人以外をどうしても道具のように考えてしまうのだ。それは遠い子孫の綾花も含まれている。道具に看做さぬよう努力はしているのだが、家の存続を思案すると浮かんできってしまう。

兎に角、これは一時の休息だ。仁実の心配事はまだある。

特に大きいのが、仁実の思い人の精神状態についてだ。

「ん……う？」

その時、室内の水晶玉に反応があった。水晶玉は現世との窓の役割を果たしている。

仁実が室内に戻ると、通信に応答した。すると水晶玉に綾花の顔が映った。

『おはようございます、仁実様』

「おはよう、綾花。……傍に誰もいないなら、そんな仰々しい呼び方をしないでいいわ」

『はい、お母様』

どうやら仁実は知らずのうちに夜を越してしまったようだ。

その後二言三言、他愛も無い会話を交わし、仁実は今一番気になっていることを聞いた。

「兄様は、まだ調子が戻らないのかしら？」

『はい、残念ながら、まだ……』

「そう。私達に出来ることはないから、時間が解決してくれるかどうか……」

ヴオバンに囚われた弟子の魂を解放し、海人はそれを嬉しそうに語っていた。その時は気分も良かったのだが、しかし段々と落ち込んできていた。原因もわかっているが故に、仁実も心配していた。

仁実達に出来ることもあるにはあるが、それは一時しのぎにしかないことだ。

「引き続き、兄様の傍にいてあげて。あの人を引き止められるのは、多分あなただけだから」

『はい、承知しました。……それともうひとつ。お伝えしたいことが』
「何かしら」

『正史編纂委員会から連絡があり、お父様と話がしたい、と』
「兄様に？」

海人に伝えたいことがあれば綾花に言伝を、と何年も前から取り決めがあつたはずだ。

綾花を挟まずに直接会話がしたい訳とは……。仁実は何しんだ。

『内容は知りません。けどお父様と話したがっている相手は、草薙護堂様だと言っていました』

『草薙護堂！　ますます分からないわね……』

仁実の名前を聞いて驚いたが、すぐに眉をひそめた。

草薙王は戦を好まない性格だと聞く。いまさら同胞の先達に挨拶に来るわけでもあるまい。

しかし只の人間なら突っぱねることもできたが、カンピオーネの頼みならば易々と断ることもできない。

『如何いたしましたよう、お母様』

「……」

しばらく考え込んだ後に、仁実は口を開いた。



「はあ……」

海人の神獣達がいつも集まる、海に突き出た堤防の先。そこで海人は大きなため息を吐いていた。

何もやる気が起きない。

東京から帰ってきてから数日間は達成感に満たされていたが、それも日に日に冷めていき、ここ数日は怠惰な日々が続いている。

海の中を海人の神獣が泳ぎまわっている。それを海人は眺めると、座っている堤防の近くの水面からデルピノスが顔を出した。

『海人様、次は何処に行くつすか？　西つすか、南つすか。それとも東つすか？』

「そうだな……」

海人は上の空で返答した。デルピノスは他の神獣とは違い、戦闘能力ではなく脳が発達している。人間の様に考え行動できるデルピノスは海人と会話もでき、海人の造った神獣の指令塔でもある。

二人が話し合っているのは、次の旅の行き先だ。海人は神獣を連れて、見たこともない世界を船ひとつで冒険してきた。

デルピノスは海人を元気付けようと話題をふったのだが、海人の反応は芳しくない。めげずにデルピノスは続けた。

『アメリカには自由の女神も、ハリウッドも見に行つたつす。イギリスのロンドン塔も、フランスのエッフェル塔とモンサンミッシェルも、エジプトのピラミッドとサハラ砂漠も、エルサレムの岩のドームも、インドのタージ・マハールも、中国の万里の長城も、北極でのオーロラも、南極での白夜も、どれも楽しい思い出つす。皆魚だから表情は変わらないつすけど、ウキウキして身を弾ませてるつすよ!』

「そうか……。そうだな……」

海人は若干乗り気になり、デルピノスはほつと胸をなでおろした。だが、その後の話し合いは難航した。目的地が決まらなかったのだ。

神獣達を目立たせないために海沿いであることが条件なのだが、何も見ないのでは海人の知識にも限りがある。

決定は難航し、遅々として進まなかった。そのため海人の行きたい場所の候補を決めてから、再び話し合おうという事になった。

その時、海人を呼ぶ声が響いた。

「海人様——」

声のした陸の方角を、海人とデルピノスが揃って向いた。堤防の上を綾花が手を振りながら歩いてくるのが見えた。

「どうした、綾花!」

やがて綾花が二人の近くに着くと、持っていた者を海人に差し出した。

「携帯電話は持っていますか? 電池が切れていたら、この携帯充電器で充電してください」

「ああ、携帯か。持っているぞ。デルピノス、出してくれ」
『了解つす』

海人に言われ、デルピノスが口からぼろっと携帯電話を落とし、それを器用に口先で啣えて差し出してきた。

綾花はぎよつと驚き、海人は淡々と携帯電話を受け取った。

「ど、何処に携帯を持っているんですか!？」

「いいじゃないか。こいつの腹の中が、濡れないし、手が届きやすい。……立ち上がったが、電池が切れかけているか」

海人は充電器を受け取り携帯差し込むと、携帯の画面に視線を落とした。携帯の画面には不在着信が五件あった。

一ヶ月前に二件、三日前から一日おきに別の場所から三件。どちらも発信元は不明だった。海人の携帯の番号を知っている人間は限られており、それこそ仁実と綾花しか知らないはずだ。

横から綾花が画面を覗き込んできた。

「一ヶ月前の二件は、私が助けていただいた正史編纂委員会の方の携帯電話から連絡したものです」

「そうなのか。悪かったな。普段はこうしてデルピノスに預けているんだ」

「助けていただいたので気にはしていませんけど、すぐに取れなければ携帯電話の意味がないですよ。……それで、残りの着信ですけど」

その時、海人の携帯の着信音が鳴った。三日前から一日おきに連絡してくる、不通知の番号だった。

海人と綾花は一度見合わせると、綾花が頷いた。海人は通話のボタンを押した。

「……安東海人だ」

『あつ、ようやく繋がった。……お久しぶりです。草薙護堂です』

「草薙護堂？ ああ、後輩か。よくこの番号がわかったな」

『はい、甘粕さん……。正史編纂委員会の人に教えてもらったんですよ』

正史編纂委員会の人とは、おそらく綾花を助け出した者のことだろう。それなら知っていてもおかしくはない。

「タメ口でいいぞ。後輩とは言ったが、敬語で話す必要はねえ。いつかどうせ戦うことになるんだしよ」

『……あんたも、ドニのような事を言うんだな。もしもまたまつろわぬ神や他の神殺しがない場所に出合ったら、あんたともそうなるのか?』

「今はまだ、その時じゃない。お前に借りがある。綾花を助けてもらったという借りがな……。その借りを返したなら、そうなるかな」

『……じゃあ、今からその借りを返してもらうってのは、どうだ?』

「俺に何を要求するんだ? 言ってみろ」

『俺と、あと女子が一人。かくまってもらいたいんだ』